

て「永保の初に、國守の遠格に連坐して、筑紫へ左遷せられた平正氏云々」とある。安樂寺は太宰府の府外、今の太宰府神社の所にあつて、菅原道眞を葬つた寺である。

【おかあ様】 諸傳説いづれも御臺・北の方等とあつてその名を傳へない。

【岩代】 イハシロ 東山道十三國の一。現福島縣(磐城)の一部の地で、三市・十郡に分たれてゐる。

古昔は奥州を分つて陸奥・石城(岩城)・石背の三國とし、岩城はほゞ後の磐城國。石背は後の岩代國の地を占めてゐたが、奈良朝頃から、岩城も石背も陸奥國の中に包含せしめられた。山椒大夫物語では、姉弟の父正氏は館を信夫郡(即ち古昔の石背)に有して陸奥を領したことになつてゐる。併し姉弟に關する遺跡や口碑は却つて津輕に傳り、岩木山神社と安壽姫との關係以外にも、丹後の人が津輕の海に入ると波が荒れる等といふ言ひ傳へが諸書に見えてゐる。その由來は明かでない。

【恐しい人にばかり出逢つた】 主として山岡大夫及び山椒大夫親子をさす。

【運が開ける】 運命がよい方向に向ふ。

【運】 ウン 人の身にめぐり來る善惡の象。まはりあはせ。しあはせ。天命。天運。運命。因縁。

の靈驗によつて創は痕もなく癒えたといふ夢を、二人とも同じ時に同じに見たのである。

【烙印】 ヤキイン 金屬で作り、火中に熱して物に捺す印。又、これを用ひて捺した痕。やきはん。

【婢】 ハシタメ 召使ひの女。しもをんな。下女。みづしめ。下婢。

【六荷】 ロクカ 「荷」は一人の荷ふべき分量の荷物を數へるに用ひる語。

【物に憑かれたやうに】 何か靈的なものにのりうつられたやうに。「物」はこゝでは、形は見えないが不思議な作用をなすもの、即ち神佛・病魔・妖鬼等の類をいふ。

【憑く】 ツク よる。かゝる。のりうつる。

【聴く賢しく】 心の働が敏活で賢く。

【賢し】 サトイ (一)覺ることがはやい。さかし。かしこい。聰明である。(二)するどい。たけい。うちはやい。

【守本尊】 マモリホンゾン 身の守として信仰する佛。まもりぼとけ。

【これは大事なお守だが云々】

【善い入に出逢はぬとも限りません】 後で曇猛律師に逢ふ伏線。尙厨子王は後で關白師實にも逢ふことになつてゐる。

【逃げ延びて】 遠く逃げおほせる。逃げ去つて遂にまぬかれる。

【身の上】 ミのウへ (一)己が一身に關係すること。己が身の境遇。(二)一生の運命。こゝは(一)。

【標子】 カレヒケ 「餉筒」とも書く。古へ餉筒を入れて携へた容器。辨當箱の類で、かぶせ蓋があつた。和名抄に「標子、功禮比計、今按俗所謂破子是、破子讀和利古、標子中有障之器也」とある。

【餉筒】 「乾飯」の略。(一)干した飯。ほしいひ。ほしい。(二)昔、旅行などする時に携へた飯。辨當。

【筒】は、食物を入れる器。

【烙印をせられた恐しい夢】 山椒大夫のところに買はれて來て間もないある夜、安壽と厨子王とは、父母に逢ひたさの餘りの、逃亡の手段についての夢のやうな話を、見廻りに來た山椒大夫の息子三郎に立聞かれて、逃亡の企をしたものには烙印をするのがこの邸の掟であるとおどろかされた。そしてその夜、山椒大夫の前に引据ゑられて、炭火で眞赤に焼けた火箸で額に十文字の烙印を捺されたが、守本尊の地藏様

山岡大夫の爲に直江の海上につれ出された四人の中、母と姥竹は佐渡の二郎に、安壽と厨子王は宮崎の三郎に賣り渡され、船が南と北に漕ぎわかれる時、母が舷に手をかけて伸び上り遠ざかつてゆく安壽・厨子王の船に向かつて叫んだ言葉として、原文中、本文不採録の部分に「もう爲方がない。これが別れだよ。安壽は守本尊の地藏様を大切におし、厨子王はお父様の下さつた護刀を大切ににおし、どうぞ二人が離れぬやうに」とある。

【地藏様】 チザウサマ 原文には、安壽が守本尊として持つてゐた地藏様は、百濟國から渡つたもので、嘗て高見王が持佛にしてお出でなされた放光地藏菩薩の金像であるとしてゐる。

【地藏】 梵語。釋迦如來の付囑をうけ、二佛の間(釋迦滅後、未來佛たる彌勒の出世まで)無佛の世界に住し、六道の衆生を濟ひ盡くさぬ限り自ら成佛しないことを誓願とする、大乘慈悲の徹底を示す菩薩。地藏が民衆信仰の對象となつたのは、支那では六朝以降、我が國では平安朝以降らしく、鎌倉時代に入つて殊に盛になり、觀音の信仰と共に通俗信仰の主なるものとなつた。

【護刀】 マモリガタナ 護身用の小刀。婦女などが懐に携へて不慮の變に備へるもの。衣服にかゝらないやうに普通鞘の端を丸くしてある。まもりわきざし。懐劍。

【討手】 ウツテ 討手の音便。賊軍・罪人などを追捕する人。追手。追討兵。

【討手が掛ります】 「掛る」は進みて襲ふ意。こゝでは「討手が攻めて行きます」といふ意。

【和江】 ワエ 丹後國加佐郡和江。現京都府加佐郡八雲村和江。由良川の西岸にあつて、東岸の中山と相對する。

加佐郡誌には、和江の條に「茲に國分寺の址と稱へる所があるが廢頽して僅に當時の狀を想ふばかりで、村上天皇天曆十年九月祝融の災に罹つて、烏有に歸したのであると傳へられてゐる。三庄太夫の傳説中に白河天皇永保の頃津鹽丸が避難所であると見えたのは此處である。けれどもこれは火災後百廿年餘りを経過してゐる。故に當時はなほ幾分昔日の面影があつたものと見なければならぬか」とあり、丹後名所案内の「山庄太夫」の條にも「和江村國分寺」とし、且最後に「和江村國分寺は及三大破今礎石斗り残り」とある。

【首尾よく】 都合よく。具合よく。

【首尾】 シュビ (一)首と尾と。(二)はじめとをはりと。終始。(三)物事のなりゆき。結果。都合。(四)工夫。計畫。

【暗示】 アンシ・アンジ 自然的に、又は人爲的に與へられた刺戟が、或は感覺せられ、或は知覺せられた場合、

分寺は國分尼寺(法華寺)であらうか。或は往時燒失等の場合には他の定額寺等を以つて國分寺代とせられた實例もある事だからそれ等の後身でもあらうか、今俄かに之を斷ずる資料はない」とある。

【國分寺】 コクブンジ・コクブジ 聖武天皇の勅願により、國毎に設置せられた國立の僧寺及び尼寺。即ち聖武天皇は、その深甚な佛教御信仰に基づき、政教一致の理想的な佛教國家を建設せられんが爲に、天平十三年(一四〇一)三月(一説、天平十四年二月)國毎に僧・尼の二

寺を建て、僧寺を金光明四天王護國寺、尼寺を法華滅罪寺と名づけ、金光明最勝王經(この經が國土に流通するに當り、四天王が悉く來つてその國土を擁護するといふ)の功德によつて、天下泰平・國家安寧を致さしめんことを詔せられた。この僧寺を國分僧寺

又は單に國分寺、尼寺を國分尼寺又は法華寺と稱する。各寺々には、それ／＼金光明最勝王經及び妙法華經各十部を納め、金堂には丈六の釋迦像を安置し、また別に七重塔一基を造り、天皇御親寫に擬した金字金光明最勝王經一部を塔毎に安置せしめられた。併し諸國に於ける實際の造營工事は容易に進捗せず、百方促進の策を講ぜられたに拘らず、漸く寶龜元年(一四三〇)頃に至つては完備を見たものの如くである。しかもその完備を見た時には既に頽廢に傾いたものも尠くない

その結果、これと何等かの關係を有する一定の生理作用又は精神作用が惹起せられる時、その刺戟を後者に對して暗示といふ。又催眠狀態を誘導する刺戟のみをいふことがある。

【椀】 マリ 「鏡」とも書く。古、水・酒などをもるに用ひた器。もひ。

【差した】 サした 盃を向けて勸めること。

【飲み干した】 底の乾くほど飲みつくした。少しも残さずに飲んだ。

【街道】 カイダウ 國中の往來を通じ宿驛などのあつた大道。今の國道・縣道等がこれに當る。道中・往還ともいふ。又、單に大きな道のことにもいふ。

【樵る】 コル 木を伐る。きこる。

【同胞】 ハラカラ (原文振假名)同胞の兄弟姉妹。こゝでは安壽と廚子王とをいふ。

【中山の國分寺】

丹後の國の國分寺としては、一般に現京都府與謝郡府中村國分にある小堂(今成相寺に依屬する)がその遺址として知られてゐるが、それと中山又は和江の國分寺との關係は明らかでない。加佐郡誌には、和江の國分寺を述べた末尾に「舊記に丹後の國分寺(金光明寺)は與謝郡府中村字國分に建築せられたものであるのを見れば和江の所謂國

有様で、その盛時は意外に短かつたらしい。尙、國分寺創設の詔後まもなく、奈良に東大寺及び法華寺の建立があり、前者を總國分寺、後者を總國分尼寺として、それ／＼國分僧寺及び國分尼寺の總攝たらしめられた。

【三門】 サンモン 「山門」に同じ。寺院の總門。寺院は昔時俗塵を避けて閑寂な山中に建てられたので、山號を稱し、その門を山門と呼ぶ。左・右・中の三門を並列して一門をなす故に三門ともいふ。

【松明】 タイマツ 「たきまつ」(燒松)の音便。乾いた小竹又は葦を束ね、周りに松脂を挿んで造り、又は松の脂の多い部分を剥き束ねて造り、火を點じて、暗夜を照らすに用ひるもの。ついまつ。あかしまつ。うちまつ。さいまつ。松炬。松火。炬燵。

【火影】 ホカゲ (一)火の影。火のひかり。(二)燈火の光で出来る物の影。燈火の光にうつる影。こゝは(一)。

【白柄の薙刀】 シラツカのナギナタ 柄の白い薙刀。

【薙刀】 「長刀」とも書く。幅の廣い反つた長い刃に長い柄をつけた武器。

【手挟んだ】 タバサんだ 手に挟み持った。脇にかゝり持った。

【三郎】 サブラウ 山椒大夫の第三子。この時三十歳。原

文によれば、山椒大夫にはもと三人の男子があつたが、太郎は十九年前に家を出たきり未だ行方不明。二郎と三郎が家に居るが、二郎の慈悲のある性格に對して三郎は殘忍酷薄で、安壽・厨子王の姉弟にも、何かと不利な仕打をする。

【族】 ウカラ 血脈の人。みより。親族。

【本堂】 ホンダウ 寺院の一部で、本尊を安置する堂宇の俗稱。法相・華嚴・眞言の諸宗では金堂といひ、禪宗では佛殿といひ、天台宗では中堂といふ。

【石疊】 イシダタミ 「整」とも書く。

【手のもの】 その手に屬するもの。自ら率ゐるもの。隊のもの。配下のもの。手下。部下。

【僧俗】 ソウゾク 僧侶と俗人。「俗人」とは出家した僧侶に對して出家しない人を言ふ。

【簇る】 ムラがる 集ること。

【内陣】 ナイチン (一)神社の本殿の最奥の間で靈代を安置する所。(二)佛殿の内の、本尊を安置する一區劃。普通結界を以て外陣と區別し、中央の奥に須彌壇を設けて本尊を安置し、その前方は法要を行ふ道場で、この内には參拜者を入れないのを原則とする。こゝは(二)。

【庫裡】 クリ 「庫」は物を貯へる府藏、「裡」は「裏」で、屋裏の意。寺院の廚房(炊事)をいふ。近時は佛殿等に對

して、僧房・廚房の併稱とする。

【開けい】 アけい 「開けよ」といふ命令をもつと強く横柄に言つた形。

【住持】 チュウヂ 世に安住して法を保持する義で、一寺の主僧をいふ。

【曇猛律師】 ドンミヤウリツシ 厨子王をかくまつてくれたのは、和漢三才圖會には唯「庵主」とあり、説經淨瑠璃「さんせう太夫」には「ひじり」とあり、竹田出雲の「三莊太夫五人嬢」には「圓海阿闍梨」としてあつて、性格も曇猛律師とは著しく異なつてゐる。曇猛の名は、恐らくその性格と共に作者の創造であらう。

【律師】は(一)徳望高き持律の僧。(二)僧官の一。僧都に次ぐもの。正・權の二階に分れ、五位に準ずる。こゝは(二)。

【足踏をして】 アシブミをして 「ぢたんだ」踏むこと。焦燥を感じて怒る形。

【偏衫】 ヘンサン 三衣の下に、左肩を覆ふに用いた僧祇支(「掩腋衣」と譯す)と右肩を覆ふに用いた覆肩衣とが北魏に至り縫ひ合はせて一つにせられたもので、初めは襟のない襦袢のやうな物であつたが、後、襟をつけるに至つた。上半身を覆ふものである。我が國へは佛教渡來當時既に傳はつた。(今日の所謂こころもは、これに更に腰部)以下にまといふ裾の縫ひ合せられたもの)

【威儀】 キギ (一)禮の細かな法則。曲禮。(二)威あつて

容儀の則るべき状態。行儀正しい態度。おごそかな立居振舞。坐作進退。こゝは(二)。

【常燈明】 ジャウトウミヤウ 佛前に常に絶えず供する燈火。終夜とほす御燈。

【岩疊】 ガンデフ 「岩乘」「岩丈」「頑丈」とも書く。人體の極めて強く健かなること。物體の極めて堅固なることにもいふ。

【下人】 ゲニン 下々の者。身分低いもの。下部。僕隸。

【夜陰】 ヤイン 夜の暗い時。夜分。夜間。夜中。闇夜。

【劍戟】 ケンゲキ 「つるぎ」と「ほこ」轉じて武器のこと。

【詮議】 センギ (一)評議して理を明らかにすること。詮索して議すること。(二)犯罪のとりしらべ。又、罪人の搜索。こゝは(二)。

【勅願の寺院】 チョクグワンノジキン 天皇の御發願によつて創建又は供養せられた寺。勅願寺。御願寺。

【勅額】 チョクガク 天皇御宸筆の額面。また、勅賜の額面。宮殿・樓門等の正面の楣上に掲げ、その形は縦長のものが多い。

【宸翰】 シンカン 「宸」は天子の御事に冠して用ひる語。「翰」は「羽」の意から轉じて「筆」をさす。即ち「宸翰」は「宸筆」と同じく帝王の書かれた肉筆の文書をい

ふ。

【經文】 キヤウモン 佛教の文章。

【宸翰金字の經文】 天皇が御自ら金泥で書かれた經文。

【狼藉】 ラウゼキ (一)道具などの、とりちらしてあること。(二)亂暴。暴行。こゝは(二)。狼が草を藉いて寝た後の亂れ散ることからいふ。

【國守】 クニノカミ (原文振假名)、國司即ち地方政治の爲に諸國に置かれた職員の名官。

【檢校の責を問はれる】 檢校としての責任を問ひとがめられる。國司は國分寺を監督し、その佛事を檢校した。國分寺設置の詔勅に「國司等宜々恒加檢校」とある。

【檢校】 ケンゲウ 物事を點檢勘校すること。【總本山】 ソウホンザン 本山の一種。祖師の廟所がある意味で又祖廟ともいふ。但し、こゝでは、東大寺が總國分寺である意味でいつた。

【本山】 こゝでは、一宗又は一派の根本道場。【沙汰】 サタ こゝでは、官府の指令。命令。

【齒咬】 ハガミ 「齒きしり」、「切齒」等に同じ。齒をくひしばる義から轉じて激しく憤ること。

【小わつば】 コわつば 「わつば」は「わらは」の轉訛で、童子を罵り呼ぶ稱。

【築泥】 ツイヂ 「つひひぢ」の約。「筑地」とも書く。柱を立て、板を中心とし、泥土で塗り固め、屋根を瓦で葺いた垣。古くは、泥土を築き固めた今の土手の様な塙。ついちべい。ついがき。ついがい。

【取つて返した】 後へ引きかへした。後へもどつて来た。

【入水】 ジヌスキ 自ら水に入つて死ぬこと。投身。

本文では、安壽は弟を逃した後自ら入水してゐるが、和漢三才圖會や説經淨瑠璃の「さんせう大夫」では、弟の行方を問うて責め殺されてをり、又、加佐郡誌の傳説では、逃げる途中飢ゑて死ぬことになつてゐる。

【田邊】 タナベ 丹後國加佐郡田邊郷。今の京都府加佐郡舞鶴町を中心に、舞鶴港の西南岸に沿うた地の稱であつたらしい。今舞鶴町の東偏に田邊城址がある。

【受糧器】 ジュリヤウキ 「鉢」のこと。「鉢」は、梵語「鉢多羅」の略。普通には「應量器」と譯す。

2 文の構成

第一節 初—二七頁七行 厨子王の逃走と安壽の入水。

イ、柴刈に出た姉弟が外山の頂に著くまで。(一八頁初行—二二頁初行)

ロ、外山の頂で打開けられた、厨子王逃走についての安壽の計畫。(二二頁二行—二六頁九行)

ハ、厨子王の逃走—姉弟の離別と安壽の入水。(二六頁一〇行—二七頁七行)

第二節 二七頁八行—三二頁四行 厨子王をかくまつた中山の國分寺。

イ、三門に押寄せた山椒大夫の討手。(二七頁八行—二九頁六行)

ロ、本堂の階上に立つてその討手を警めた曇猛律師。(二九頁七行—三一頁四行)

ハ、鐘樓守の機智。(三一頁五行—三二頁四行)

第三節 三二頁五行—終 厨子王を連れて寺を出た曇猛律師。

3 文意

暗い運命のどん底に差して来た一道の微光を頼りに、必死の力で立上つた純真可憐な安壽と厨子王。

4 鑑賞批評

「あくる朝、二人の子供は背に籠を負ひ腰に鎌を挿して、手を引き合つて木戸を出た。山椒大夫の所に來てから、二人一しよに歩くのはこれが始である。」—母と姥竹とに連れられて、岩代から筑紫へ父を尋ねてゆく途中、去年の秋、越後國直江の浦で山岡大夫に誘拐せられ、人買船に賣拂はれて、海上で思ひもかけず母と姥竹に引離された安壽と厨子王の二人は、遂に由良の山椒大夫の奴に賣られ、そこで新參小屋に入れられてあらゆる苦患を嘗めた末、更に夢の中で、焼火箸で額に烙印をせられる。そして思はず守本尊の地藏様を呼び求めそれを枕元に据ゑて伏拜む。この時から安壽は物に憑かれたやうに黙つて物を言はなくなる。正月が來て、やがて仕事が始らうとした前日、小屋をおとづれ歩く山椒大夫の息の二郎に二人一しよに山へ行きたいといひ出し、その爲、禿にせられた安壽は、さびしい顔をしてゐる弟と二人で山へゆかうとしてゐるのである。

「安壽はけさも毫光のさすやうな喜を額に湛へて、大きい目を赫かしてゐる。」—精神状態が變つた後の安壽について、作者は、その顔と目との赫きでその内面世界を象徴してゐるのであるが、これは原文からいへば既にその四度目の描出で

【錫杖】 シヤクヂヤウ 梵語「隙棄羅」の譯語。又「有聲杖」「聲杖」「智杖」「德杖」「金錫」等と譯し、單に杖とも稱する。比丘十八物の一。上部は錫、中部は木、下部は牙又は角から成り、頭部は塔姿の形に象どり、數箇の鐺を掛け、地に引く時に錫が音を立てる。顯教では乞食の時、家人の覺醒又は害蟲驅除の具とし、密教では、五大所成の法界塔姿として、地藏尊・觀世音の三昧耶形とする。

【剃りこくつて】 くり／＼に剃つて。

【三衣】 サンエ (サンネと發音す) 佛語。僧伽梨(衆集時衣衆が集つて授戒・説戒等の嚴儀を修する時に着するもの)・鬱多羅僧(上衣と譯し、安陀會(中着衣とも譯し、身)の三をいふ。何れも數多の小片を縫綴した長方形のもので、後には袈裟と稱するに至つた。

ある。そしてまさに全生命を賭けた場面が現出せられようとする前の安壽の相貌である。

〔丁度岩の面に朝日が一面に差ししてゐる。安壽は、疊り合つた岩の風化した間に根を卸して、小さい草の咲いてゐるのを見つけた。そしてそれを指さして廚子王に見せて云つた。「御覽。もう春になるのね。」——風化した岩の間に根を卸し、朝日を受けて咲いてゐる草の小さい花。二人の運命を象徴してゐるやうな場面である。長い沈黙を破つて言はれた一語であるだけに、印象が強く、含蓄が深い。季節感であると共に、裏に萌し來つた光明の豫感である。〕

〔安壽はそこに立つて、南の方をじつと見てゐる。目は、石浦を経て、由良の港に注ぐ大雲川の上流を辿つて、一里ばかり隔たつた川向ひに、こんもりと茂つた木立の中から塔の見える中山に止つた。〕——久しい沈黙の間に養はれた神聖な計畫が今實現の緒につかうとして來たのである。今朝の安壽の喜の顔、赫かしい目は、その故に外ならなかつたのである。

〔わたしの事は構はないで、お前一人でする事を、わたしと一しよにする積りでしておくれ。〕——安壽の計畫がいかに必死的なものであるか、随つてそれがいかに唯一のものであるかを思ふ時、この一語には無量の感慨が罩められてゐる。

〔木立の所まで下りて、二人は籠と鎌とを落葉の上に置いた。姉は守本尊を取り出して、それを弟の手に渡した。「これは大事なお守だが、今度逢ふまでお前に預けます。此の地藏様をわたしだと思つて、護刀と一しよにして、大事に持つてゐておくれ。〕——廚子王の今後の行動に自己の全生命を託し、それで一切の運命を拓いてゆかうとする安壽の覺悟が深く感銘せられて來る。

〔さあ、それが運だめしだよ。開ける運なら坊さんがお前を隠してくれませう。〕——一切を盡くした上に、人力の限りを盡くした上に、天命を俟つ人の信念と従順とがある。

〔廚子王の目が姉と同じやうに赫いて來た。〕——簡単な一語だけれど、重要な契機である。安壽の裏に發展して來たものが、今は廚子王の裏なる力になつて來たことを示すものである。

〔安壽は泉の畔に立つて、竝木の松に隠れては又現れる後影を、小さくなるまで見送つた。そして日は漸く午に近づくのに、山に登らうともしない。幸にけふは此の方角の山で木を樵る人が無いと見えて、坂道に立つて時を過す安壽を見咎めるものもなかつた。〕——守本尊と共に自分の全生命をも預けてしまつた安壽である。馴れない山上の柴刈は一人で出來さうにも思はれない。弟と一緒にあつた山椒大夫の奴小屋へ今一人で歸つて行かれさうにも思はれない。弟の姿の見える限り見送つて立ちつくしてゐた安壽の姿こそ、貴くもまた傷ましい限りである。

〔後に同胞を捜しに出た山椒大夫一家の討手が、此の坂の下の沼の端で、小さい藁履を一足拾つた。それは安壽の履であつた。〕——何んといふ清らかな、そして又可憐な安壽の最後であらう。わづかに沼の端に見出された一足の藁履で安壽の最後を象徴してゐる作者の筆の冴えには感歎を禁じ得ない。

〔本堂は戸を閉ぢたまま、暫くの間ひつそりとしてゐる。〕——群衆の動搖や三郎の喚聲の前に、本堂は磐石の如く靜ましかへつてゐるのである。このひつそりとした本堂こそ住持曇孟律師の力を示現する事實そのものに外ならぬ。

〔やうやうの事で本堂の戸が靜かに開いた。〕——そこに偏衫一つ身に纏ひ常燈明の薄明りを背にして立つた、曇孟律師の姿が照らし出されたのである。前には、本堂の戸が開かない事實から受けた印象が、今は本堂の戸が開かれた事實によつて益々鮮明になつて來る。

〔逃げた下人を捜しに來られたのぢやな。當山では住持のわしに言はずに人は留めぬ。わしが知らぬから、そのものは當山にゐぬ。〕——最初の一句、簡單で有力だ。相手の弱點を突いて刺す所がない。當山にはゐないといふ斷言ぶりにも、威力が充ち満ちてゐる。常燈明を背に立つた姿が既に頼もしい印象を與へた。こゝに至つていよいよその實力を示してゐる。

〔かう云つて、律師は徐かに戸を締めた。〕——三度、本堂の戸を描いてゐる。そして如何にもどつしりとした殿堂の威容を、否それを守る律師の無限なといひたいほどな力を示し得てゐる。説經淨瑠璃以下屢々改作せられてゐる淨瑠璃のこの

場面が、唯騒々しい寺内の搜索や守本尊の地藏菩薩の靈驗によつて助かつた筋になつてゐると異なつて、如何にも充實してゐる。作者の創作力の鮮かに發揮せられてゐる箇所である。

〔松明の行列が寺の門を出て、築泥の外を南へ行くのを、鐘樓守は鐘樓から見て、大聲で笑つた。近い木立の中で、やうやう落著いて寝ようとした鴉が二三羽、また驚いて飛び立つた。〕——曇孟律師の創造といひ、この鐘樓守の點出といひ、誠に驚嘆すべき場面である。長い間、暗い運命の下に屈し來つた姉弟——安壽なき廚子王は考へられぬ——が、愈々明るい日の目に會はうとしてゐる分岐點を描くとして、これ以上有力的確な場面があらうとも思はれない。鐘樓守の笑には何んだか超自然的なものひびきさへ感じられる。

〔中二日置いて、曇孟律師が田邊の方へ向いて寺を出た。盥ほどある鐵の受糧器を持つて、腕の太さの錫杖を衝いてゐる。あとからは頭を剃りこくつて三衣を著た廚子王が附いて行く。〕——先の夜の情景を承けたこの省筆の簡勁さ。今度はその持物で律師の頼もしさを描いてゐる。「頭を剃りこくつて」といふ一句にも、作者の廚子王に對する愛情がこぼれてゐる。筋の運びも、場面の展開も、人物の言動も、總べてが簡勁で立體的に描かれてゐる。安壽の自己を捨てた犠牲によつて開けて來る姉弟の運命は、守本尊の靈驗にも通つてゐる。

三 備 考

1 指導研究

筋の興味からいつても、語義、語法の平易さからいつても、讀みの問題は少いであらう。併しそれはまだ一通りの讀みの程度のことである。眞の讀みが成立するまでには、幾多の段階のある文章と思はれる。とにかく解釋の作業に入る前に各自に於ては讀みで解釋が出來てゐなければならぬ。

併し實際の教室作業としては、それは理想であつて、現實にすることは困難と思はれる。解釋的作業に入つて讀みの不備を補ひ、眞の讀みに徹しさせてゆくのが一般的方法かと思はれる。といふのは、解釋に於ける敘述にしても、主題展開の極限としての語句を過不及なく指摘すれば足りるし、構想にしても、筋の發展が主題の發展過程をなし、それが場面場面を形成してゐるので、唯場面と場面とを關係的に理解させればよく、それは又その場面々々に確立してゐる。更にその主題にしても、あらゆる場面、あらゆる事象の上に浸潤し、反映してゐるのだから、これ亦どこでもその指摘を可能ならしめる。唯、最後にそれを體系的な理解として組織化することが、解釋本來の作業としてのこされるであらう。

併しそれは教材として與へられた本文を對象とした考察であるが、本課の如きにあつては、少くとも本文の前後が筋だけでなくも補説せられなくてはならないし、出來得るならば、自習教材として全文が與へられ、それを背景とした上に、教室に於ける學習指導としては本文だけを取扱ふことが望ましい。

さうなると、解釋の發展としての批評に於ては、全篇のもつ世界觀的機構やそれ々の人物の性格が考へられなくてはならなくなるが、それは精しい必要はないであらう。本文に於ける場面描寫の簡勁的確と、人物性格の立體的彫刻的表現とを通して、作風の特色が明らかにせられ、ば足るであらう。これ亦方法としては、讀みとしての本文指導に盡きるものではないからうか。

2 參考

(イ) 原文に關する概念的批評を「現代文學鑑賞」(岩波講座、日本文學)から抄出する。

この短篇は安壽・廚子王の苦患と、わけても安壽の犠牲によつて展開し來る守本尊の靈驗を主題とした作品である。併し古い型の單なる有難話でもなければ、また近代的解釋による心理解剖でもない。傳説を傳説として生かしつゝ、そこに新しいのちを見出した作者の、默契の深さから生み成された、作者の所謂歴史小説の一つである。隨つてそこに見出される神祕的な事實も超自然的な力

も、いかにも必然的な事實として、自然的な動きとして感銘され、作品の世界として少しの誇張も無駄も介在しない。靈驗とはいっても、父は既になく、安壽は一命を捧げてゐる。その犠牲の大きいことも、この種の物語に見られないところである。おそらく、ここに作者の解釋が存するであらう。即ち人間が自己を捧げつくして無私の至誠に立つ時、平常不可能とされてゐた事をも可能とし、人力以上とされた事をも實現せしめる如き異常な力が發現し來るものであり、更に之に應じて人間のはからひを超えた不可思議な力が加へられた如くに、光明に向かつて運命の展開が行はれるといふ人生の事實に立つことによつて、有り得べからざるやうな傳説の難點が止揚されたものである。(中略)

鷗外の作品を一見すれば、その特色は、作者の人生に對する態度が著しく傍觀的であり、その手法が客觀的であつて、容易に作者の自己を出さぬ所にあるやうに思はれる。併しそれは未だ作の真相ではない。傍觀的立場をとればとる程、客觀的になればなる程、益々作者鷗外の全人がそこに生かされて來るのが、鷗外作品の特色である。この傾向は特に晩年の作品に於て著しい。鷗外晩年の小説は、筋が確實に緊密に運んでゐる點で、又人物の性格なり、事件の發展なりが如何にも簡潔に、いかにも明白に描かれてゆく點に於て、たしかに腕のさえを示してゐる。併し親しく讀みかへして見れば、それは單なる腕のさえではなくて、作者その人の觀照のさへであり、人間の冴えである。その結果、作中の人物の行動が、風事が、性格が、單純化せられて、しかも立體的に描かれ、内面的なもの表示として、發展として、作中に生き動いてゐる。この點に於て、鷗外の作品は繪畫的であるよりも、彫刻的である。のみならず、さういふ人物や事件の背景として描かれてゐる叙景にしても、簡單な一句が主人公の運命を暗示し、讀者の心を作の世界に同化させて連れてゆく如き特質を持つてゐる點に於て、そこには寫實の精しさよりも象徴の深さがある。安壽・麴子王の二人が始めて山椒大夫の奴婢にされて新參小屋に入れられたと讀んだ後「翌日の朝はひどく寒かつた」とあると、讀者には直ちに寒さを慄へて立つ二人の寂しい姿が見えて來る。「水が温み、草が萌える頃になつた」と讀めば、何んとなく二人の運命が明るみに出されさうにさへ感じられて來る。そして沈黙して考へ事に専らであつた安壽の口から、「御覽、もう春になるのね」の一語をきけば、それは既に季節感としてよりも、安壽の内面に萌して來た光明希望の響きとして、深く心の底に刻まれる。また母親と姥竹との對照に於て、又山

椒大夫一家の人々の性格と、結末に於て示された家運との關聯に於て深い必然さが暗示されてゐることは上敍した如くである。かくて自然の推移と主人公との運命の間に、また人物の性格とその運命との間に、必然的關聯を成立させ、すべてが偉大な調和の中に融合して、一つの世界を具現してゐる。この性質はその彫刻的表現及び象徴的描出と相俟つて、著しく戲曲的な作品をなしてゐる。

(ロ) 山椒大夫の傳説は、早く所謂五説經の一として説經淨瑠璃に謳はれて巷間に傳はつたが、今日その正本として知られてゐる最も古いものに、大阪興七郎の「さんせう太夫」があり、これは、柳亭種彦の「用捨箱」によれば、既に寛永中に印行されたものがあつた由で、徳川文藝類聚(圖書刊)第八卷には、その享和の複刻本が收められてゐる。左にその梗概を紹介する。鷗外の「山椒大夫」は、これを主な典據として書かれたものらしく想はれる。

初段、奥州五十四郡の主岩城の判官正うち(正氏)は勅勅を蒙つてつくしあんらくじに流人となり、その御臺は、あんじゆ・つし王姉弟の子と共にしのぶのこほりに残されたが、つし王の切なる願に、姉弟及び乳母のうば竹を伴ひ、筑紫を志して旅に出る。漸く越後國なをいの浦に辿り著き、一夜の宿を求めらるうち、かどわかしの名人山おかの太夫の手にかゝり、欺かれて船に乗せられた末、御臺と乳母は佐渡の二郎へ、あんじゆ・つし王は宮崎の三郎へ、離れくゞに賣り渡される。乳母は途中身を投げて果て、御臺は佐渡へ運ばれた上、足の筋を斷つて粟の鳥を逐はせられ、兩眼泣きつぶれて盲目となる。

二段目、宮崎の三郎に伴はれた姉弟は、丹後國ゆらのみなとさんせう太夫の許に賣られ、姉はしのぶと名づけられて日に三荷の潮を汲み、弟はわすれぐさと名づけられて日に三荷の柴を刈る。初日は朋輩の情に救はれ辛うじて勤めを果したが、太夫の末子三郎に妨げられて途方に暮れ、諸共に自害を圖つていせのこはぎといふ女に助けられる。

三段目、その年の暮、姉弟は逃亡の相談を三郎に立ち聞かれ、額に十文字の焼印を捺される。姉は弟と同じ勤めを願ひ、童髪を切られて弟と共に山に行くが、傳來所持の肌守りである地藏の尊像を拜すると焼印が消える。姉は強ひて弟を促し、尊像を與へて落ちさせる。

四段目、太夫はつし王の逐電を怒り、あんじゆを責めて責め殺し、三郎につし王の後を追はせる。つし王は國分寺に逃れ入つて、

住持の情に、かはごの裡に匿まはれる。三郎は寺を家探しした上、住持に誓文を迫り、長い誓文の條がある。とゞ三郎はかはごを開くが地藏の尊藏の光に打たれ、兄に諫止されて歸る。三郎の兄の太郎・次郎は共に慈悲心のある性格に語られてある。

五段目、住持はつし王の身の上を憐れみ、かはごのままこれを買つて京へ伴なふ。こゝに道行の文がある。やがて、しゅじやかごんげんだう(朱雀權)に着き、こゝでつし王は住持と別れる。

六段目、權現堂に一夜を明したつし王は、東山せいすゐじ(清水寺)に參籠して大悲觀世音に祈誓をかける。偶々都のむめづのゐん

(梅津院)なる貴人が老いて子無きを悲しんで同じ御堂に參籠せられ、夢のお告げを蒙つてつし王を養子と定め、御所に參内してこの由を奏聞する。その席上、つし王は家の系圖を奉り、帝觀感あつて父の本領奥州五十四郡を賜はり、更につし王の望に任せて、丹後の五郡をも加賜せらる。つし王はまづ佐渡へ渡つて、鳥追ひの母御臺を見出して再會の喜を遂げ、系圖の巻物の靈驗によつて母の眼を開いて都へ送る。次いで三千餘騎を従へて丹後の國分寺を訪ひ、恐れて落ちた住持を召し戻して禮を述べ、さんせう大夫父子を呼び出し、三郎をして大夫の首を鋸引きにさせ、續いて三郎の首を打ち、又いせのこはぎを編ふ。そして、母もろ共に本國に歸り、そま(相馬)の郡に御所を立てて再び富貴の家と榮える。

(ハ) 現在丹後地方に傳はつてゐる山椒大夫の口碑傳説としては、加佐郡誌に、左の如き記載がある。

由良ヶ嶽の麓石浦の里に三庄大夫の遺趾といふがある。三庄大夫は丹波水上郡の産で世々蜀椒を賣ぐのが家業であつたが丹後の由良に來て住むやうになつてからこの家が贖る富み榮え附近三ヶ莊の代官をつとめるやうになり終には千軒長者の綽名をさへ得るに至つた。村上天皇の天曆年間奥州の太守岩城判官將氏冤罪を以て筑紫に謫謫せられたところその二子姉安壽姫、弟津塩丸(津子丸)も云ふ)父を慕ひ遂に母を促がして郷里を出で筑紫に下らうとした。山を越え川を渡りやう／＼越後の國直江の浦の逢岐橋まで辿りついたが折りあしく姦賊山岡大夫といふものために奪はれ母は佐渡が島に售られ、安壽・津塩の姉弟は宮崎の三郎といふ者の舟に乗せられて由良湊に來り彼の三庄大夫に售られて奴隸になつた。それからは父を慕ひ母を戀ひ知る人ともない他國に毎日々々姉は海に水を汲み、弟は山に薪を採り手なれぬわざに名狀すべからざる辛酸を嘗めた。しかも大夫の三男、三郎は勇悍強戾で鬼の如く

使苛責至らざるなき有様で姉弟は堪へ得ることが來ず、遂に相謀つて窺かに逃れ津塩丸は和江の國分寺に隠れ住僧の義侠によつて經篋に匿れて辛じて追手の難を逃れることが出來た。住僧は大いに津塩を憐み窺かに之を經篋に入れ自ら背負つて洛陽に到り清水寺の大悲閣に送つた。その時上卿中に梅津院といふものがあつて年老いて子の無きを惑ひ、大悲閣に祈願を始めて居たが一夜大悲梅津院に「汝が子は堂の裡にある」と告げられた。夢から覺めて津塩丸に逢ひ喜んで父子の契りをなし相伴うて家に歸り顛末を帝に奏上した。やがて津塩丸の家譜が天聽に達すると共に特に舊國を賜ひ更に丹後に知府たらしめられた。こゝに於て津塩丸は先づ母を佐渡に省み丹後の國分寺の僧を訪うて舊恩を謝し三庄大夫の一族を誅戮した。これより前安壽姫は大夫の家を遁れ京に上らうとする途中中山から下東へ出る間の坂で飢餓に堪へず敢なき最後を遂げたと云ふ。今存する「三庄大夫の首挽松」といふ遺跡は大夫が誅戮せられた時竹鋸で道行く人が松の下に首から下は地中に埋められた大夫の首を一遍づつ掘いた處であると傳へられ、安壽姫の最後を遂げたといふ坂は「餓阪」と名づけられ今も「姫塚」と稱する墳墓(下東村字建部山の麓に)が遺つて居る。

五 聖德太子

高島米峰

一 解 題

1 作者

高島米峰 タカシマベイホウ 本名は大圓、通稱高島圓。越後の國の人。明治八年一月十五日新潟縣中頸城郡吉川村竹直に生まれた。東洋大學の前身たる哲學館出身である。卒業後は、いはゆる東洋的な思想家乃至は論客として、明治の論壇に活躍したもので、口と筆と揃つて達者な人である。又一面に於ては、氏のいはゆる理想的商業を實際に行ふを本旨として、出版業を営み、現に、小石川原町に於て丙午社出版社主として、出版界に雄飛してゐる。勿論、その經營振は一種色彩の異なつたものとして知られてゐる。全く氏の如きは知識の人であり、又實際の人である。氏の代表著としては「悪戦」「長廣告」「理想的商業」「一休和尚」等がある。而して氏の文章はいかにも堂々としたもので、その論旨に於ても、表示に於ても、毫もせまじいといふ感じのないもので、眞に「男性的」などでもないひたい文章である。しかも氏のいふ所はどこまでも、東洋的であつて、少しも歐洲思想が混じらず、その思想が統一を保つてゐる點に於ても文章に確固たる信念が表れてゐるので、その男性的表示法と相俟つて一種冒し難い勁さを有つ文章である。

2 出典

本文は著者が教科書の爲に執筆せられたものであるが、今回新たに本書の爲に訂補を加へられたものである。

3 主眼及び採擇の趣旨

天皇中心主義の徹底、佛教の興隆、日隋對等の國交等の、偉大な御事業によつて拜し奉る哲人聖德太子の御悌を偲びまつつたものである。筆者は當時の國狀を深く考察して、その時代を率ゐて立たせ給うた若き皇太子の御心と、御成業とを歎賞すると共に、延いては大正天皇の御代に於ける今上陛下の御攝政に筆を及ぼして、我が光輝ある國體の、前途の進展を祝福してゐる。第二の國民たる青年學生にとつてその覺悟を促す示唆に富む國民的教材である。

二 解 釋

1 語 釋

【聖德太子】 シヤウトクタイシ (五七三—六二二) 用明天皇第一皇子。御母は穴穗部間人皇后 (欽明天皇皇女、用明天皇異母妹)。敏達天皇第三年に御降誕、御名既戸豐聰耳皇子と稱され、また厩子皇子、八耳皇子、上宮太子等の御稱呼もある。後世その徳を稱へて聖德太子と呼び奉る。御母皇后、偶々禁中を御巡行、馬官厩戸に至り、勞なくして御分婉あらせられたのが太子であつた。これ厩戸皇子の御名ある所以である。太子睿悟、生まれながらにしてよく言ひ、稍長ぜらるるや好みて書を読み、また一時に十人の訴を聴いて、能くこれを辨別して誤ることがなかつた。これ豊聰耳皇子、八耳皇子の御稱ある所以、父皇乃ち太子を愛して宮南上殿に住ましめ給うた。これ御名に上宮を以て呼ぶ所以である。太子早くより心

を佛教に傾け給ひ、これを信すること頗る深く、用明天皇の御不豫に當り、太子側に侍して三寶に祈誓し晝夜怠り給ふところがなかつた。天皇感激し、親しく佛を拜せんとして可否を群臣に御下問、大連物部守屋、中臣勝海等は否としたが、獨り蘇我馬子はただ詔に従はんのみと稱し、乃ち豊國法師を宮中に延いて御惱を祈らしめたので、太子は馬子の手を把つてその功を賞せられた。これより先、敏達天皇の崩御、馬子はその妹堅鹽媛生むところの大兄皇子 (用明天皇) を立てんとし、守屋は穴穗部皇子を立てんとして争うたが、用明天皇崩御の際にも、馬子と守屋の政權争奪に絡んで皇位繼承の争が起り、馬子は軍を派して穴穗部、宅部の二皇子を害し、更に守屋を攻めてこれを殺した。ときに太子は御年十五、戦勝を四天王に祈りて軍に従ひ、事定つて後、四天王寺を攝津

玉造に創立し、守屋の遺領をその田庄に寄進し、馬子の妹小姉君の生むところの泊瀬部皇子（崇峻天皇）を位に即け奉つた。馬子の専横目を逐うて甚しく遂に大逆を敢てするに至つたが、太子も権臣の暴戻を如何ともする能はざりしは千載の恨事であつた。かくて敏達天皇の皇后炊屋媛（馬子の妹堅鹽媛所生）天位に即き（推古天皇）、太子はその皇太子となつて萬機を攝見せらるるに至り、元年には四天王寺を荒陵の地に移轉し、また二年には三寶興隆の詔書を發し、法興寺、法隆寺、熊凝寺（後、大安寺）等の諸大寺を順次御造立、就中法隆寺は太子の父用明天皇の御本願であつたので、多年の日子を費して推古天皇十五年に竣工し、その他山城の蜂岡寺（廣隆寺）坂田寺、中宮寺、法輪寺等みな太子の力によつて興り、佛教の流通ここに至つて最も盛んであつた。太子の奉佛はただに寺院の興隆に止まらず、推古天皇の初年高麗より渡來した僧慧慈に從うて釋教の玄底を極め、また博士覺智に就いて儒教を學び、博く内外の經典に通曉せられたが、終に慧慈に就いて戒を受け、自ら勝鬘と名乗り給うたのみならず「法華」「維摩」「勝鬘」等の諸經の精義に通達し、或は勅を受けて經を講じ、また「法華經」以下三經の疏をも製作せられて、現今にまで傳へられてゐる。太子の佛教興隆は自ら工藝美術の發達を促したること

は論ずるまでもなく、寺工、鏡盤工、瓦工、畫工等を韓土より招來し、本邦藝術の基礎を打立てたのは洵に太子の鴻業の一といはなければならぬ。太子は推古天皇の攝政として政治、法制、曆法等の上にも偉績を垂れさせられた。即ち天皇の十一年には始めて冠位十二階を定めて從來の濫階を矯正し、貴賤尊卑の次第を設け、人材登用の途を開かれたのであつた。往古我國には曆法の行はるるものがなく、欽明天皇の十四年、百濟に命じて卜書曆本を貢獻せしめたが、推古天皇十年、僧觀勒渡來して後王陳をしてその法を習はせ、十二年正月より始めて曆日を用ひることとなつたのもまた太子の功業である。更に太子は、天皇の十二年に十七條の憲法を製作して諸臣に賜はつたが、これ實に我國に成文律のある最初のもので、今日より見れば法制たるの體をなさぬといふものもあるが、太子はこれを以て政治の根本とし、道德の準繩とせんと試みられたものである。また支那には早くより歴史編修の事があつたが、本邦の上古には單に語部があつて歴代の事蹟を傳へたのみであつたが、太子は修史の必要なるを知り、天皇の二十七年この大事業を起し、天皇紀を始めとして、國記、臣、連、伴造、國造の百八十部、竝に公民等の本記を記録せしめられ、ここに始めて國史の編修が竣成したが、惜しくも後年蘇我氏の覆滅と

共に殆ど火中に滅びて後世に傳はらない。更に外交上の一大進展もまた太子攝政中の壯舉で、推古天皇十五年に鞍作福利を通事として小野妹子を隋に遣はしたことは、實に本邦に於ける遣外使臣の始まりで、而も「日出處天子致書日沒處天子」との國書を煬帝に呈して日東帝國の國威を海外に輝かし、難波に新館を營造して外客の優遇を圖り、爾後、使節の來往することに幾多の留學生や、學問僧を派遣し、彼の國人の藝學に秀でたものを招聘して本邦文化發達の大基礎を樹立せられた。其他音樂を奨め、池溝を修築して灌漑を圖り、四天王寺には施藥、悲田、療病、敬田の四院を創立して四民の病老遺孤を憐み、物質的精神的の二方面に亘つて日本開發のために盡さるるところ、實に枚擧に遑なきほどで、後に大化の革新の斷行せられたのも、天平文華の盛時を現出したのも、皆その基礎は太子の立てられたところであるといふべきである。推古天皇三十年壬午（或は二十九年ともいふ）二月二日太子斑鳩宮に薨去、御年四十九。河内磯長陵に奉葬。この時、諸王、諸臣、天下の百姓、老者は愛兒を失ふが如く、鹽酢の味口にあれども嘗めず、幼者は慈父母を亡ぶが如く、泣哭の聲行路に滿ち、耕夫は耕を止め、春婦は杵を棄て、日月輝を失ひ、天地崩るるが如き有様であつたと「日本書紀」に見えてゐる。

【哲人】 テツジン 智徳が勝れてゐて事理に明らかに通じた人。哲とは事理に明らかなこと。
 【偉徳鴻業】 キトクウゲフ 偉大なる御徳や大きな御事業。鴻とは洪と通じ大いなるの意。
 【憲法十七條】 聖徳太子は推古天皇の十二年四月自ら憲法十七條を制定せられた。その案文起草は太子の師であつた高麗僧の慧慈及び博士覺智が參與したものであらうといはれてゐる。とにかく他の憲法が君臣の權利義務を規定したのに比すれば、その性質が全く異なつてゐる。この憲法は我が國古來の習慣を本として、文化の先進國たる三韓支那等の長所を加へ、佛教や儒教の道德を基本として臣民の守るべき禮法を定めたものである。その大要は（一）和を以て尊となし忤ふことなきやうにせよ。（二）篤く佛法を敬へ。（三）詔を承けては必ず謹め。（四）群臣百官は禮を以て本とせよ。（五）貪慾を捨てて明らかに訴訟を戒めよ。（六）人の善を匿すことなく惡を見ては必ず匿せ。（七）人の爲に官を求めぬ。（八）群臣百官は早く參朝し遅く退出せよ。（九）信は義の本。事毎に信を顯せ。（十）忿を絶てよ。人の違ふのを怒つてはならぬ。（十一）賞罰を明らかにし、正しくせよ。（十二）國司たるものは私に民の物を奪ふな。（十三）諸官吏は皆責任を重んぜよ（十四）群臣互に嫉妬するな。（十五）私を捨てて公に就く

は臣の道である。(十六)民を使ふには時を以てせよ。(十七)萬事獨斷せず衆と共に議つて定めよ。といふのである。この憲法のうちには敬神のことを述べてないから、後世これを非難する者があるが、敬神のことはいはずとも當然のことであるから、特に擧げられなかつたものであらう。何となれば聖徳太子は佛教も儒學も深くはめられ、御才智を輝かし給うたのみならず、神祇をも深く尊崇せられたことは、推古天皇の十五年に太子が百官と共に神祇を祭拜せられたことによつても知ることが出来るのである。

【肇作】 テウサク はじめてつくる。

【平和の理想】 治國上に理想とする所の平和。理想は「理想」の譯語。一番高い望、現在の立場に於て、實現の可能性を有つた最高最善美の境地をいふ。實現の可能性のない空想と區別すべきである。

【宣言】 センゲン (一)のべいふこと。(二)世上に普くいひふれること。

【佛教】 ブツケウ 佛陀所説の教法。佛陀とは誰か、一般的に言へば、佛教は成佛せる釋迦の三業を教範として信順するから佛陀即釋迦とせられるが、嚴密にいふ時は佛陀は悉達多が出家修道の結果佛陀となつた釋迦に限らず、三世に諸佛があるから、その所説と諸佛は佛教とせ

られる。佛陀とは覺者の意で、その教は成佛得脱を旨とするもの、即ち内には覺醒進歩息まざる眞生であり、外には覺他的に現はるる教化力である。これは佛法僧の三寶としてあらはれる。即ち佛それ自身の徳と、證果とに歸依するもの、その法、即ち經、律、論と發展した大乘教によるもの、これらを弘通する僧の三者である。即ち正信正見の正命であり、堅實なる信仰生活である。別てば三寶であるが、合すれば正信正命これ佛教である。要するに佛教とは歸依三寶である。

【信仰】 シンカウ 所謂信念の對象は我々の現實的經驗の中に來るものであるが、なほ我々は超感覺的なるもの、即ちこの性質上吾人の經驗、従つてまた知識をも超越せざるがときものを信ずることがある。かかる信念は、その性質に於ても一般的の信念とは多少趣を異にしてをり特に制限して信仰と稱せられてゐる。その心理的性質についてはリューバが「信仰とは個人と理想的な力との關係一致の感じを生ぜしめる内部的順應」といつてゐるが比較的適切な説明であるやうに思はれる。しかし、既成宗教の各々はその歴史及び教義の傾向と相俟つて、特殊の信仰の様式を有してゐる。例へば、基督教に於ては、信仰は人の力または徳より出づるにあらず、神が基督を通じて、聖靈によりて與へ給ふところの賜なりと教へてを

り、佛教は二種の信を説き、自ら明かに理を見て心に疑慮なきを信解または解信となし、人によりてその言を信するを深信若しくは信仰といふと教へてゐる。

【精神生活】 セインセイクロツ 思想感情等いはゆる精神的方面に於ける活動の道程、過程の意。即ち日常生活の中思想感情等精神方面の生活。生活とは生存し活動してゆくこと。

【基調】 キテウ Key-note の譯。(一)或音階の第一音。

(二)思想の根柢。こゝは(一)。

【切要】 セツエウ どうしてもなくてはならない切實な必要。「佛教の信仰を以て國民の精神生活の根本基調とする事の切要なるを認め」は憲法第二條をさす。

【天皇中心主義】 一に天皇を中心にして國に忠を致すことで、當時皇室貴族の間に紛擾が多く、穴穂部皇子、炊屋姫を中心に物部連家、蘇我臣家の間に大紛亂を起す等天皇の尊位も權門勢家の勢力争ひの餌となる如き觀があつたので、ここに太子は至上の尊嚴を示されたのである。即ち憲法第三條がそれである。

【闡明】 ゼンメイ 隠れたる意義又は道理を明かにあらはすこと。闡はひらくの意。

【建國の精神】 天孫降臨の際の大國主神の歸順は大義名分の前には何人も反抗し得ざることを示し、神勅は皇位の

基礎を確言遊ばしたものである。尙三種神器は國民の理想、治國の要諦を示すものである。これらによつて見ると我建國の理想は(一)平和を愛好する高明な心。(二)大義名分を正しうすること。(三)萬機公論に決すること(四)君臣同治四民平等、に要約することが出来る。

【振作】 シンサ ふるひおこすこと。

【冠位十二階】 推古天皇即位十一年十二月に太子は始めて冠位を定め、翌年の元旦にこれを諸臣に賜うて用ひしめられた。冠位の制定は新智識あり手腕ある者を登用するためであつた。冠位は大徳、小徳、大仁、小仁、大禮、小禮、大信、小信、大義、小義、大智、小智の十二階あつて、各當色の施を以てこれを縫ひ頂は撮り總べて囊の如くし縁を著け、たゞ元日に鬢華をさした。當色とは仁義禮智信の五常を木火土金水の五行に配したのをいふのである。徳は五常を總べるのでこれを頭首として紫とした。次に仁は木に當り春の色即ち青、禮は火に當り夏の色即ち赤、信は土に當り四季土用の色即ち黄、義は金に當り秋の色即ち白、智は水に當り冬の色即ち黒とした。

【人材登用】 ジンザイトウヨウ 才能のある人物、又ははたらきのある人をあげ用ひること。こゝは即ち當時の民族的偏見よりせず、各自その手腕によつてそれ相當の官位に拔擢するをいふ。

【閩族跳梁】 バツゾクテウリヤウ 名門の輩の專横のふるまひ。「閩族」は名門。貴い家柄。「跳梁」は魚のはねまはることで、延いてあれ廻つて亂暴すること。こゝは勝手氣儘に振舞ふこと。

【内政を充實す】 國內の政治を完備させること。

【文化】 プンクワ (一)世の中のひらけすすむこと。(二)自然を純化して理想を實現せんとする人生の過程、其の成果の産物は學問、藝術、道德、宗教乃至法律、經濟等すべてこれである。こゝは(一)。

【偉大性】 偉大なもちまへ。うまれつき偉大な人柄。

【推古天皇】 第三十三代の天皇。御名は額田部又は豊御食炊屋姫命といふ。欽明天皇の第三皇女にあたり、敏達天皇の皇后にあらせられた。御母は蘇我馬子の姉堅鹽媛であるから、崇峻天皇崩御後馬子に擁立されて我が國第一代の女帝として即位し給うた。即ち御在位中は御甥聖德太子を皇太子として御功績が多い。都は大和國高市郡小墾田宮で、御在位三十六年で崩ぜられた。時に御年七十五歳。

【遣隋使】 ケンズキン 支那の文化は從來三韓を通じてのみ我が國に傳はつてゐたのであるが、推古天皇十五年遣隋使を送るやうになつた。これは支那の文明を直接に輸入し、佛敎の興隆を謀るためにされたものである。第一

回の遣隋使並に隋からの使者については教科書に出てゐるから第二回のそれについて述べよう。第二回遣隋使は同じく小野妹子であるが、これに従つた留學生は八人あつた。大化改新に力のあつた高向玄理、僧旻、及び中大兄皇子の師であらうといふ南淵請安の如き人々である。遣隋使が大化改新にあづかつて力のあつた事もしられるであらう。隋は間もなく亡び唐が興つたので次の用明天皇の朝には遣唐使が派遣された。

【小野妹子】 近江國滋賀郡小野村に代々住してゐたので小野姓を名のつた。推古天皇の十五年に始めて遣隋使となつた。隋人は呼んで蘇因高と稱した。翌年歸朝し再度の渡航があつた。その後大徳冠に敍せられた。一説に聖德太子が山城の某池畔に觀音像を祀られた際、妹子は薙髮して専務と號し、その堂(今の六角堂)を守り池の坊といひ、太子に供佛の挿花法を受けたので、後世の池の坊立花はこれに始まるといはれてゐる。

【使節】 天子から賜はつた節(てがた)を持つた使者をいふ。轉じては、單に君命を以て遣される使者の意に用ひる。

【隋の煬帝】 ズキのヤウダイ 北周靜帝の開皇九年(一一四八年)に帝の外戚楊堅が帝に迫つて禪を受け隋の文帝と稱し、南北朝を一統し大いに制度法律を改定し、國運

隆盛であつた。然るに二代煬帝は豪奢を極め、民を虐使し一方には又突厥、吐谷渾を入貢せしめ、更に再三高麗を征伐する等、民力を竭盡したので天下は騷擾し、武徳元年(一二七八年)唐に滅ぼされた。煬帝については迷樓記や開河記、皇帝艷史(支那小説)に記されてゐるがそれによると、帝は延長二千五百里といふ世界第一の大運河を開鑿し、その堤には萬株の楊柳を植ゑさせ、十里毎に一亭を作らせ、數千の麗姬を畫舫にのせてこの運河に浮かべ日夜佚樂に耽つたことが見える。

【大業三年】 大業といふ年號は十二年續いた。この三年には帝は北巡して突厥、吐谷渾の諸胡を降して入貢せしめた。

【冒頭】 バウトウ 文章の書き出し。事の初め。

【日出づる所の天子云々】 このことは北史や隋書には見えてゐるが、我が日本書紀には見えてゐない。隋書を見ると「大業三年其王多利思比孤(天皇の御名ではない。聞き誤りであらう)遣使朝貢云々。其國書曰、日出處天子致書日沒處天子。無恙云々。帝覽不悅。謂鴻臚卿曰、蠻夷書有無禮者。勿復以聞。明年上遣文林郎裴世清使倭國云々」と出てゐる。

【堂々】 ダウダウ いかめしくりつばなさま。盛大、嚴肅公正等の形容に用ひる。

【中國】 チユウゴク 四隣の國々に立ち勝つて文明の發達した優秀の國といふ意。今日の中華民國といふも同意。中とは不偏不黨過不及なきの謂である。

【恙】 ツツガ (一)病などの禍難。(二)病。(三)恙蟲の略。こゝは(一)の意。

【東夷、南蠻、西戎、北狄】 トウイ、ナンバン、セイジュウ、ホクテキキ 皆えびす。野蠻な國といふ意であるが、それを單に東西南北に分けて名を換へたのみである。

【裴世清】 ハイセイセイ 詳しい傳記はわからない。北史には文林郎裴世清と出てゐる。書紀には裴世清とある。文林郎といふのは文林館に文學の士を徴したものをいふのであるが、隋の世には機務にあづからない名譽職としてこの官名を置いてゐる。後世もこの例によつてゐるといふ。

【難波】 ナニハ 今の大阪。古くから重要な港として知られてゐる。

【屬國】 ゾクゴク 屬領、自國に従屬する國。

【飾船三十艘】 カザリブネ……次に飾騎とあり、又飾車といふことも今昔物語に見えてゐる。これもそれらに類したものであらうが、その様式は何等文献に見えてはゐない。

【江口】 エグチ 舒明紀には「唐國使人高表仁等、難波津

に到る。大伴連馬養を遣して江口に迎ふ云々」とある。江口は淀川の海に入るほとりであつて、難波の一部と考へて良い。但し、昔の淀川は現在の如くではなく、も少し大阪灣の西北の方に注いでゐたものである。

【難波の新館】この「新館」は日本書紀には「ニヒシキムロツミ」と讀ましてある。書紀の文を引くと「唐客の爲に、更に新館を難波の高麗館の上に造る」と出てゐる。この高麗館は攝津志によると「東成郡三韓館、安國坂上に在り」とある。

【優遇にさらざるなし】かゆい所に手がとどくやうに、非常に立派にもてなした。

【飾騎】カザリウマ 今昔物語に「賀茂の祭の使しける云云。若き殿上人の車數並立て、物見ける前を渡る間に、元輔が乗たる莊馬大躡して云々」とある莊馬と同意で、後世、御禊日や、祭の時に、馬具を飾りたて物々しい行列をなして練り廻つたのとは違ふらしい。單に通常騎りある馬を、さつぱりと美しく粧はしめたのに過ぎないらしい。書紀には「銕馬」といふ字が出てゐる。

【大和の海榴石市の衝】ヤマトのツバイチのマチ 今は三輪村大字金屋の中である。海柘榴市宮といふ推古天皇の別業のあつたところ。萬葉集にも「むらさきは灰さすものを海柘榴府の八十の衝にあひし兒や誰」といふ歌を見

てもわかるとほり相當の繁華な所であつたらしい。「つばきいち」とも讀む。衝とはミチ。チマタ。

【謁】エツ 貴人におまみえすること。

【有司百官】イウシヒヤクワン 諸々の官職にある凡ての役人。

【冠位】冠の色によつて表章した位階。推古天皇の十一年支那の制に倣つて十二階の冠位、徳、仁、禮、信、義、智、（各に大小の二種あり）を定め翌年正月に實施された。氏姓の尊卑に拘らず人材を登用せんがために設けられた制度。こゝにいふのはこの制定によるものである。後大化三年には七色十三階、織、紫、錦、青、黒、

（各に大小の二種あり）建武、大化五年に十九階、織、

繡、紫（各に大小の二種あり）大錦、小錦、大山、小山大乙、小乙（各に上中下の三種あり）建（大小の二種）に改定され、同十年に新律令を定めて、冠位を規定せられたが、新律令が傳はらないので、制度の詳細は判明してゐない。ついで天武天皇の十四年に四十八階の位階に改められ、冠の代りに位記を授けることとなつて冠位の制は廢せられた。

【綺羅星の如く】キラホシのゴトク「綺羅」とは美しいうすぎぬの事で、美服をいふ。即ち美服をつけて、きら／＼と空に多く輝く星のやうに列んでゐるさま。

【流石】サスガ（一）さうは思ふもの、さうではあるが

（二）すぐれたもの程あつて、音に聞えた程あつて。こゝは（一）。晋の孫楚「漱流枕石」を「漱石枕流」と誤つたが、齒を磨くなり、耳を洗ふなりといつたのでさすがに善く牽強したといふ故事から起つたといふ。

【第二回遣隋使】次に裴世清が持参した煬帝の國書と、妹子が二回目に持参した日本の國書とを日本書紀から引用して見ると、「皇帝、倭皇に問ふ。使人の長吏大禮蘇因高等、至て懐を具す。朕、欽みて寶命を承く。區宇を臨御し、徳化を弘め、含靈に覃被せんと思ひ、愛育情遐邇に隔つる無し。知る皇、海表に介居して民遮を撫寧じ、境内安樂風俗融和がんことを深氣至誠遠く朝貢を脩す。丹欸の美、朕嘉するあり。稍々喧かなり。比、常の如けん。故、鴻爐寺掌客裴世清を遣はし、往の意を指宣ぶ。併せて物を送ること、別の如し。」といふ文章である。これに對して第二回渡隋の時妹子に托された國書は「東天皇 敬て西皇帝に白す。使人鴻爐寺掌客裴世清等至て、久しき憶、方に解けたり。季秋薄冷じ。尊候如何。想ふに清念ならん。此にも即ち常の如し。今、大禮蘇因高、大禮乎那利等をして往でしめ、謹みて白す。不具。」といふのである。（訓は書紀の訓に依る）

【否應なしに】イヤオウなしに どうかうと文句なしに。

【金甌無缺】キンオウムケツ 黄金製の瓶のむきづもの。延いて外侮もうけたことのない完全無缺な我が國を喻へていふ。

【天壤】テンジャウ 天と地と。こゝに天照大神が瓊々杵尊に賜はつた神勅にも「當與天壤無窮者矣」とある。

【淵源する】エンゲンする 源を發する。

【美術工藝の奨勵】當時佛教の興隆と共に、朝鮮半島から寺工、佛工、畫工、石工等の技術家が相續いて渡來したので、我が美術工藝はとみに發達し、法隆寺の大建築物も當時出來たもので、頗る精妙の域に達してゐる。木造建築物として最古のものといふばかりでなく、その建て方の巧みさは人を三數せしめるものがある。その金堂の如きは千五百年の齡を保ちながらも、獨立派な藝術品として存在し、内部には有名な壁畫があり、安置してある釋迦三尊、また藥師三尊は當時の名彫刻家鳥佛師の作である。又繪畫には黃書畫師、山背書師等が有名で諸寺の佛像を多く描いてゐる。又高麗僧の曇徴は有名で、法隆寺の壁畫はこの人の手になつたものだといふ。曇徴は他の工藝にも詳しく、紙、墨、色彩等をも傳へてゐる。又刺繡としては聖徳太子の薨後推古天皇が、その遺族を慰めようと、采女等に命じて太子の淨土に往生せられる

さまを刺繡せしめられたといふ天壽國曼陀羅といふ帷帳が、大和の中宮寺に残つてゐる。

【歴史の編纂】 推古天皇の二十八年二月聖德太子は、蘇我馬子とともに、天皇紀、國記、臣連伴造百八十部並びに公民等の本記を録せられた。これが本邦國史編輯の初だといふ。その歴史は、その後蘇我氏の邸に置かれてゐたが、皇極天皇四年に入鹿が誅せられた時、蝦夷が他の珍寶とともに邸に火をつけたので災燼に歸せんとしたのを、船史恵尺が火中から燼餘を持ち出して中大兄皇子に奉つた。天智天皇の時に出來た庚午年譜はこれを基としたものだといふ。

【外國文明の輸入】 遣唐使の派遣される時、留學生、留學僧が伴に送られ、彼の文明を輸入したのは大なるものであつた。

即ち學生倭、漢、福因、奈羅譯語惠明、高向漢玄理(明法學)新漢、大國の四人と學問僧新漢、旻、南淵漢請安、志賀漢惠隱、新漢、廣、齋の四人がこれである。又漢文學を傳へ、儒學も興り、百濟人味摩之が吳から伎樂舞を傳へて歸化し、學問僧惠日が醫道を修めて歸つた。又美術工藝方面では寺工は印度流の建築を教へ、鑄盤工は鋼の鑄造を教へ、瓦工は甄瓦を教へ、佛畫師は倭畫を改良し、佛師鞍作鳥の如き名工は鑄像塑像の技を進め

た。又高麗からの僧曇徴は法定を貢したが彼は五經に通じ、又よく色彩、紙墨を作つた。

【憲法の創制】 憲法十七條参照

【冠位の制定】 冠位十二階参照

【曆法の研究】 すでに欽明天皇十四年に百濟に勅して、曆博士に曆本を奉らしめたことがある。その頃は未だ曆法を頒布することはなかつたが、推古天皇の四年に建てられた伊豫道後温泉の碑に、法興六年十月歲在丙辰とあるのを見ると、支那や朝鮮に倣つて干支や年號を私には用ひたことが想像される。推古天皇の十年に百濟から僧の觀勒といふものが來朝して曆本を奉り、又陽胡史の祖玉陳に曆法を傳へたといふ。かくて十二年正月に頒布されこれから漸次曆法が用ひられるやうになつたのである。

【意義あるもの】 意義とは(一)わけ。(二)重要な意味、役割。こゝは(一)。

【惟ふに】 考へて見ると。意見を述べる際最初にいふ言葉。

【攝政】 セツシヤウ 今日の法的觀念に於ていふ攝政とは、天皇の名に於て大權を行ふ者で、天皇の未成年なる場合、又は天皇久しきに亘る故障に由り、大政を親らすること能はざる場合、皇族會議及び樞密顧問の議を経て特置され成年に達した皇太子又は皇太孫これに任ぜられる。皇太子皇太孫あらざるか又は未だ成年に達しない時

は、(第一)親王及び王、(第二)皇后、(第三)皇太后、(第四)(大皇太后)、(第五)内親王及び女王の順序に依つて、攝政に任ぜられる。攝政は天皇と同一範圍の國家行爲を行ふことを得、その行つた國家行爲は天皇の行つたものと同一效力を有する。然しながら、攝政は天皇の如き統治の主體でなく、一種の憲法上の機關であつて、所謂中繼君主、又は不完全な王位繼承ではない。攝政の制度は古代ドイツに於ても認められるところであつたが、古代ドイツに於ては君主が未成年にして即位した場合、これが後見者として君主直近のアグナードが、その職に任じたものであつた。國法上の攝政と、私法上の後見とが明白に區別されたのは、實に近世諸國の憲法に始つてゐる。

我が國に於ては仲哀天皇の崩御後、應神天皇が未だ御幼沖にましました時、母后神功皇后が攝政し給うたのに始まり、次いで推古天皇の時、厩戸王子、齊明天皇の時、中大兄皇子が攝政となられ、この時までは皇族を以て攝政の任に當てられたが、後、清和天皇の九歳にして即位せられるや、外祖太政大臣藤原良房代つて天下の政を攝行するに及んで、人民攝政の例を開き、次いで陽成天皇亦御幼沖を以て即位せられ給うた時、右大臣基經が前代の例を趁うて攝政となつて以來、攝政の任は自ら職名の如くなり、幼冲天皇即位の初は必ず攝政を置く例となり、

藤原氏の一族専らその任を私した。慶應三年十二月大政の復古するに及んで、攝政の制度は一たび廢せられたが、その後憲法に於て改めて攝政の制度を規定するとともに、明治二十二年十二月皇室典範を發布して攝政に關する大小の諸件を定め、私法上の後見と攝政とを明確に區別し、その第二十八條に於て、攝政及びその子孫は大傳なることを得ざる旨を規定した。そしてこの條例ははしなくも先帝陛下の場合に適用されたのである。

【開闢】 カイビヤク (一)世界のひらけはじめ、又ひらくこと。(二)僧家で儀式の開始。闢もひらく。こゝは(一)の意。

【龜鑑】 キカン 手本。かがみ。模範の意、龜はその甲を灼いて吉凶を占ひ、鑑はものの形を何の紛飾もなく赤裸裸に照し出すものであるからかくいふのである。

【齊明天皇】 第三十七代の天皇で、第三十五代皇極天皇の重祚された方である。七年間御在位になつた。御名は實皇女。敏達天皇の曾孫にあたらせられ茅渟王の王女である。はじめ用明天皇の孫高向王のもとにゆかれたが、後用明天皇の皇后となられ中大兄皇子、大海人皇子を生まされた。天皇崩御後二皇子が未だ御幼少であつたから、即位せられた。即ち皇極天皇である。後又紀元一三三五年に再び即位せられて齊明天皇になられたのである。御在

位中は皇太子中大兄皇子が攝政として専ら政を掌られたのである。筑紫に下り朝倉宮にのみましたが、いくばくもなく崩御された。

【中大兄皇子】 ナカノオホエノワウジ 皇子は用明天皇の皇子にあたる。御即位されて第三十八代天智天皇と申す。未だ御母が皇極天皇であつた當時蘇我入鹿の専横を憎み、中臣鎌足と共に皇極天皇四年六月三韓進貢の日を期して蘇我一族を討亡された。次に孝徳天皇が即位され皇子はなほ皇太子として、有名な大化の改新をなされたのである。再び御母が齊明天皇として即位されるに及んでも、又皇太子として蝦夷の平定をされ、新羅征伐に筑紫に下られたが、事なかばにして天皇が崩御になつたので素服して六年間位に即かれなかつた。阿部比羅夫を遣して百濟を援けられたが遂に唐・新羅の聯合軍の爲に破られたのである。かくて全く朝鮮は我が手を離れた。皇子は、そこで近江の大津に御歸りになり御即位になつたのである。御即位の後も朝廷の禮儀を定め、又は庚午年籍を作つて戸籍を定められ、鎌足に命じて近江令を制せられるなど御事蹟が多い。即ち御即位になつて十年御年

四十四歳で崩御になつた。山城國宇治郡山科陵に葬られた。

【裕仁親王殿下】 今上陛下。御稱號は廼宮。大正天皇第一皇子、明治三十四年四月二十九日御誕生。同四十一年四月學習院御入學、大正元年九月九日陸海軍少尉御任官、同三年四月二日學習院初等科御卒業、同年十一月三日立太子禮御舉行。大正八年五月七日御成年式、同九年十月三十一日少佐に御陞任、同十年三月三日御渡歐、同年九月三日御歸朝。大正十年十一月二十五日攝政御就任。大正十二年十一月三十一日中佐に御昇任。大正十三年一月二十六日久邇宮良子女王殿下と御成婚。大正十四年十月三十一日大佐に御昇任。同年十二月六日照宮成子内親王御降誕、同十五年十二月二十五日先帝崩御と共に葉山にて御踐祚遊ばされ、元を昭和と改元し給ふ。

【聰明英邁】 ソウメイエイマイ 聰は耳のさときことをいひ、明は見る目の明らかなことで、即ち心のかしこいこと。又「英邁」は秀でて賢い性質である。

【わたらせられる】 あらせられる、いらつしやる。

2 文の構成

第一節 初—三三頁三行 頭括、最も崇敬する偉大な哲人を過去に求めて聖徳太子を擧げる。

第二節 三三頁四行—三四頁三行 聖徳太子御偉業の概要。

第三節 三四頁四行—三七頁八行 隋と對等な交際を結ばれるまでの太子の御苦心とその効果。

第四節 三七頁九行—三八頁四行 哲人として崇敬し奉る所以。

第五節 三八頁五行一終 皇太子にして攝政となられた時代の國威に、文化に、一段の躍進を見た例をあげ、昭和の御代を祝福して文を結ぶ。

3 文意

哲人聖徳太子の偉大性は到底筆紙の盡くすところでない。

歴史を編纂して國體の由來を明らかにし、憲法を制定して平和の理想を實現し、冠位を制定して人材登用の途を開き、曆法を定め、佛教を弘通し、美術工藝を奨励し、我が國文化史上注目すべき一時代を劃したのである。殊に當時我が國を屬國視してゐた隋と對等の國交を結ばれたその御苦心の程、哲人として推稱する所以のもの、實に枚擧に遑ない。古來、皇太子で攝政につかれたのはたゞ御三方—聖徳太子、中大兄皇子(後の天智天皇)、裕仁親王殿下(今上天皇)だけである。そしてその中の御二方は二十代の青年で攝政の印を帯び給うたことを述べ、その時代が文化に、皇威に目ざましい躍進を示した歴史から推して、昭和の大御代を祝福してゐる。

4 鑑賞批評

本文のよさは先づ太子の偉徳鴻業を敘述し、更に哲人として崇敬讚歎し奉り、更に皇太子攝政御三方をあげて昭和の大御代の躍進を暗示祝福し奉つた構想の上にあると思ふ。そしてこの文を読む昭和の青年が最も考ふべき點、血を湧かす點は最後の段階にあるのである。現代を理解し、歴史が示す現代の持つ意義を把握し、今上陛下の御偉業を翼賛し奉る意氣を生ぜしめるだけの力をこの段階は受持つてゐると思ふ。そして、聖徳太子の御偉業をのべ、哲人として讚歎し奉る所以

のものは皆この段階への前奏曲として讀まれるのである。

只氣になるのは冒頭の二行である。これは全文の頭括らしく置かれてゐるのであるが、實は哲人としての敘述は四行にわたる部分だけでこれを頭括とするを要しないのである。しかも哲人として讃仰し奉る作者の氣持は相當に強いものである事を思はせられるのである。この間の消息が題目の選定にあらはれてゐるのであらう。即ち同教材を他の教科書には、「哲人聖徳太子」となし本教科書には單に「聖徳太子」としてゐるのである。この點は本文に於ける難點であらう。

ともあれこの前奏曲が大なれば大なるだけ最後に來る効果は大きいのである。この前奏曲の大いさを讀みとる事は、深い歴史的な智識と相俟つて太子の偉徳鴻業を詳しく深く讀むことにかゝり、哲人として讃歎し奉る所以のものを熟讀玩味するにある。次に文を逐うて鑑賞を進めて見よう。

〔平和の理想を宣言し〕 十七條憲法第一條がそれである。大憲法の第一、最初に當つて國家の大本、在るべき日本の理想的相を打出し、聲高く叫ばれたのである。日本は古來「和國」といひ或は「大和」といふ。この國名の上に國家の大本が、在るべき日本の相が明かに標示されてゐる。それゆゑに「和をもつて貴しとなし、忤ふことなきを宗となせ」とある。こゝに太子が和を持出されたのは、太子の理念せられた國家が抽象的國家でなくて、現實日本に即した具體的國家であつたことを示すものである。

〔佛教の信仰を以て……切要なのを認め〕 平和理想宣言の後に必然的に要請されなければならぬのは「和國」をして「和國」たらしめるところの、和を可能ならしめるところの、和を實現せしめるところの根本原理でなければならぬ。而してこの根本原理を提示されたのが第二條である。二に曰く、「篤く三寶を敬へ。三寶は佛寶僧なり。すなはち四生の終歸、萬國の極宗なり。何の世、何の人か、この法を貴ばざらむ。云々」とまで強調せられたのである。この三寶の信仰を國民精神生活の根本基調とする事が何故切要であつたか。それがこゝに考へらるべきであらう。これは二つの方面から考察する

必要がある。即ち當時の社會狀勢と、佛教それ自身の思想的根據である。憲法第一條に於て「人みな黨あり、また達れるもの少し。こゝを以て或は君父に順はず、また隣里にたがふ」とは悲しむべき當時日本の赤裸々な相であつた。太子時代の蘇我閥と物部閥との血みどろな權勢の争奪戰を觀るが可い。それは當時に始つた現象でなくて遠く神代のむかしに脈を引く氏族制度に隨伴するところの歴史的現象であつた。地方では土地の兼併問題で國造、縣主、豪族等が互に攻めあひ、睨み合つてゐる。こゝに佛教信仰を強調すべき第一の理由があつた。第二は、佛教信仰それ自身が平和の理想を實現すべき精神的根據として有力且妥當である事に原因する。即ち當時我が國にあつた思想としては神道、儒教、佛教の三者であつた。この中神道は思想以前の思想であり、儒教は斷片的思想であつた。これに比し獨り佛教は組織的體系的思想であつた。理想的新日本の土臺として羅針盤としてこの組織的思想を求められた事は蓋し當然であつたらう。

次に太子はこの佛教の何處に和の原理を求められたかを検討しよう。けれど和の成立は和すべき二個以上の存在を豫想する。對立の世界、差別の世界である。この世界を無くするには我執を捨てることである。言ひかへれば、眞實永遠の和を實現するためには自己の對立を超え、彼此の差別を否定した絶對の境地——佛教の所謂「空」の自覺に立脚しなければならぬ。空を外にして和をして和たらしめる究竟の原理は絶對に求められないのである。これらの點に「佛教の信仰を以て國民の精神生活の根本基調とする事の切要なのを認め」られた所以があると拜察する。

〔これによつて〕 「これ」とは十七條の憲法をさす。

〔天皇中心主義を闡明して〕 憲法第三條をさしたものである。「詔を承けては必ず謹め。君は則ち天也。臣は則ち地也……」と宣はせられてゐる。佛教思想を以て指導精神となしつつ、一君萬民の國體の眞義、建國の精神を以て導き給うた點、單に新しきに急であつたのでない事が拜察されるのである。氏族制度の末期に於て氏族に對する土地人民の關係が固定化して、一君としての天皇の位置、および權力が甚だ不徹底なものになつてゐた當時に於て、この國家的信念に立ち給

うた事は太子御自身全身に意識的自發的新日本の歩調を體得され、堂々その進軍の先頭に立ち給うたものである。

〔人材登用の門を開き……〕冠位十二階を定めた事が、人材登用、閥族跳梁の弊一掃、内政の充實といふ三つの目的を有する事であり、これが「日本の面目一新」なる結果を將來したのである。前項にも述べた如く當時は氏族制度が極度に硬化して動きが取れなくなつて居た時代で、身分も職掌も世襲化し、朝廷にこれが決定権もなければ任命権もなく、また民間にいかにも有能の材があつても適處を得て適材を伸ばすべき上達の一路が絶対に梗塞されてゐたのである。しかるに冠位制度はその本義から見れば、一先づ萬民を白紙の状態に還元し、改めて朝廷の思召しによつて身分を決定し職掌を任命することになるのだから、それは一つには失はれた朝廷の権能を回収して君臣の大義を確立し、二つには百姓をして自由に適處を得しめて内政を充實することであつた。かくて氏族制度に對する根本的改革が斷行され従つて人材を登用し、閥族の跳梁を一掃したのである。

〔日本の面目は茲に全く一變するに至つた〕思想的根本を新來の佛教思想におき、建國の精神に基づき氏族制度が生み出した弊害に對して徹底的メスを振はれた事が日本の面目一變でなくて何であらう。

〔たゞにそればかりでなく……實に、聖徳太子の偉大性のいかに驚くべきもので……〕氏族制度の包圍の中にあつて、殊に土地・人民・富において遙かに朝廷を凌駕した蘇我馬子のごとき氏族の長者を前にして、堂々反氏族制度の冠位制度を創定し且つ實施された太子の識見・英斷・勇氣はまことに驚歎すべきものである。崇峻天皇を弑逆して恬然たる馬子である、その馬子の暴逆と權力とを以てして、太子を左右する如きは朝飯まへの業でしかなかつたであらう。しかも太子はこの事を成就された。偉大でなくて何であらう。しかもそればかりではないのである。支那の不面目極まる認識不足に對する太子の凜然たる自主的態度こそは、眞に神國日本のために萬丈の氣焰を吐き、千年の宿冤を一舉に蹴飛ばしたところの歴史的「大快舉」でなくて何であらう。皇國日本の面目を矜持して、高邁果敢な自主的態度が偉大でなくて何であらう。

〔日本の如きもいはゆる東表のうちの一つ……〕日支關係に關する文献は支那の相當古いものに少々見えるが何れも日本を屬國としてゐる。山海經には「倭は燕に屬す」とあり、燕は支那の一地方名である。「漢書」地理誌には「樂浪海中に倭人あり、分けて百餘國と爲す。歳時をもつて來獻す」とあり、更に「後漢書」の光武帝紀元中元二年の條には「倭奴國、貢朝を奉つて賀す、使人みづから大夫と稱す、光武賜ふに印綬を以てす」、更に同書の安帝紀永初二年の條には「倭國王師升等、生口百六十人を獻じ請見を願ふ」とある。又江戸時代に筑前で發見された「漢委奴國王印」とある金印によれば、日本人の誰人かが漢の皇帝から日本の國王に任ぜられたことを遺憾ながら事實として認める外はない。

〔我が聰明英邁にわたらせられる今上陛下〕 參考欄參照。

三 備 考

1 指導研究

本課の指導に當つては生徒の日本歴史に關する既習知識を明瞭にし、それを土臺として解釋作業を進めなければならぬ。尙讀破後の整理としては日本歴史上に於ける太子の地位に就いて考慮せしめ、又は説明すべきである。尙皇太子が英明にましました時は、常に國史は鮮かな光を放つてゐる點に思ひ到らせ、中大兄皇子の御事蹟を思考させ、昭和時代に對する暗示を力あらしめたい。ついでには今上陛下攝政御在職時代を是非話されたいと思ふ。

2 参 考

今上陛下攝政の御時代

半載に渡る御渡歐御視察をへ給ひ大正十年九月御歸朝、同十一月二十五日攝政をおかせられる大詔が煥發され翌二十
六日より攝政の御政務をみそなはした。御年二十一歳。十二年九月の關東大震災に於ては殊の外の御軫念あり、内外政務

御多端の際、御自身被害地の視察を遊ばされ復興に關する諸法令を總覽あらせられ、二十二歳の御若さにも似ず、御勵精の程に何れも感泣せぬ者はなかつた。

憲法十七條本文

- 一曰、以和爲貴。無忤爲宗。人皆有黨、亦少達者。是以或不順君父、乍違于隣里。然上和和睦、諧於論事、則專理自通。何事不成。
- 二曰、篤敬三寶。三寶者佛法僧也。則四生之終歸、萬國之極宗。何世何人、非貴此法。人鮮尤惡。能教從之其不歸三寶、何以直枉。
- 三曰、承詔必謹。君則天也。臣則地也。天覆地載。四時順行。萬氣得通。地欲覆天、則致壞耳。是以君言臣承、上行下靡。故承詔必慎。不謹自敗。
- 四曰、群卿百寮、以禮爲本。其治民之本、要在乎禮。上不禮下不齊。下無禮必有罪。是以君臣有禮。位次不亂。百姓有禮、國家自治。
- 五曰、絕養棄慾、明辨訴訟。其百姓之訟、一日千事。一日尙爾、況乎累歲。頃治訟者、得利爲常、見賄聽讞、便有財之訟、如石投水。乏者之訟、似水於投石。是以貧民則不知所由。臣道亦於焉闕。
- 六曰、懲惡勸善、古之良典、是以無匪人善、見惡必匡。其詔詐者、則爲覆國家之利器、爲絕人民之鋒劍。亦佞媚者、對上則好說下過、逢下則誹謗上失。其如此人、皆無忠於君、無仁於民、是大亂之本也。
- 七曰、人各有任。掌宜不濫、其賢哲任官、頌音則起、奸者有官、禍亂則繁。世少生知、尅念作聖、事無大小得人必治、時無急緩遇賢自寬。因此國家永久、社稷勿危。故古聖王、爲官以求人、爲人不求官。
- 八曰、群卿百寮、早朝晏退。公事靡曠、終日難盡。是以遲朝、不逮于急。早退必事不盡。

九曰、信是義本。每事有信。其善惡成敗、要在乎信。君臣共信、何事不成。群臣無信萬事悉敗。

十曰、絕忿棄瞋、不怒人違。人皆有心。心各有執。彼是則我非。我足則彼非。我必非聖、彼必非愚、共是凡夫耳。是非之理能可定。相共賢愚、如環無端、是以彼人雖瞋、還恐我失。我獨雖得、從衆同舉。

十一曰、明察功過、賞罰必當。日者賞不在功、罰不在罪。執事群卿、宜明賞罰。

十二曰、國司國造、勿斂百姓、國靡二君、民無兩主。率土兆民、以王爲主。所任官司、皆是王臣。何敢與公賦斂百姓。

十三曰、諸任官者、同知職掌、或病或使、有闕於事、然得知之日、和如會識、其以非與聞、無妨公務。

十四曰、群卿百官、無有嫉妬、我既嫉人、人亦嫉我、嫉妬之患、不知其極。所以知勝於己則不悅。方優於己則是以五百歲之後、乃令遇賢、千載以難待一聖。不得賢聖何以治國。

十五曰、背私向公、是臣之道矣。凡人有私必有恨。有憾必非同。非同則以私妨公。憾起則違制害法。故初章云、上下和諧、其亦是情歟。

十六曰、使民以時、古之良典、故冬月有間以可使民。從春至秋、農桑之節、不可使民。其不農何食、不桑何服。

十七曰、大事不可獨斷。必與衆宜論。小事是輕、不可必衆、唯速論大事、若疑有失、故與衆相辨、辭則得理。

(附記。補材、第三行「壞るる」は「壊るる」の誤植。)

六 正 倉 院

藤代 禎 輔

一 解 題

1 作 者

藤代禎輔 フヂシロテイスケ 獨逸文學者、文學博士。千葉縣の人、龍造の長男。明治元年七月生。二十四年東京文科大學獨文科卒業。東京高師・一高教授を経て、京都帝大講師となり、約三ヶ年獨逸留學の後、四十年同大學教授となり、四十一年文學博士となり、大正五年より八年まで文學部長となる。九年再び歐米へ出張、同大學で獨逸文學を講ずること約二十年、昭和二年四月十八日歿す。享年六十。

2 出 典

「文藝と人生」大正三年四月、不老閣書店發行。四六判四八二頁。「文藝と人生」以下二十五篇の感想隨筆が收められてゐる。序文には次の如くある。「文藝が人生の精華であり、文化の髓であることは疑もない。然るに世の中には没分曉漢があつて、或は文藝亡國論を唱へ、之を無用の長物視する。……趣味の人が多ければ多い程社會は益々健全な發達を遂げる。而して趣味の養成には文藝が最上乘の方途であることを知らば、文藝趣味の鼓吹は一日も忽にすべからざることである。本書發行の微意も之に外ならぬ。」

尙原文の題目は「正倉院拜觀記」となつてゐて、文中に次のやうな見出しがある。「夜の奈良」「春日の森」「親子の情愛」「春日神社」「景清門」「雷名四海に轟く某將軍」「聖武天皇御使用の仕込杖」「惠美押勝の亂」「將軍の用意周到」「東羅馬

帝國の遺物」「汽車の中で辨當」「奈良朝の夢」等。採用に當つては適當に取捨した。

3 主眼及び採擇の趣旨

宇内に誇り得る一大寶庫としての正倉院を會得せしめ、國民としての文化的自覺を促すことが本課の主眼點である。前課に於て、飛鳥時代の代表する古代日本の政治的・思想的・外交的發展をしり得た後を承けて、奈良時代を代表するこの寶庫に關して學習することは、美術・工藝方面の古代日本の相と價値を認識し、單に文化史的智識を増すばかりでなく、かくの如き寶庫を持ち、之を保存し來つた事に於て、國民としての自覺を促すに力があると思ふ。この事は、本學年最後の課に於ける「國民的自覺」に相呼應するものである。

二 解 釋

1 語 釋

【正倉院】 シヤウサウキン 正倉とは最も主要なる倉の意。主として正税を收める。舊時大藏省を始め、官衙、諸國、諸寺に設けられ、正倉多數の設けある一區域を指して正倉院または正藏院といつた。こゝは東大寺に設けられた正倉院である。現在皇室の特別な一寶庫。奈良市舊東大寺境内、大佛殿の西北にある。全體が、北・中・南の三倉に區劃せられてゐる。初めは北、中の二倉を勅封として、南倉は綱封(東大寺の封)であつたが、明治の御代に至つて三倉とも勅封となり、全く帝室の直轄とな

つた。正倉院は一箇の木材建築に過ぎないが、勅封の効果で、よく千二百年前の收藏品がその目録と共に現存してゐるのは、世界の驚異とするところである。收藏品の主要な部分は、聖武天皇の御遺物で、天平勝寶八年、天皇崩御あらせられると、その七々の忌日に當る六月二十一日、光明皇太后は、太上皇の御遺物を擧げて東大寺に奉獻せられた。このことは「東大寺獻物帳」に具さに記載されてゐる。これを主とし、その他、後の君臣の獻品を收藏せるもので、この種類は鏡及び鏡箱、樂器、伎樂面、遊戯具、衣冠服飾、文房具、御寢具、屏風、櫃及び

厨子、箱、合子、飲食器、佛像、佛具、武器、馬具、農具、工具、にまで及び、當代の工藝品全般を網羅し、これによつて當時の我が國萬般の文化及び外國との交通を知るべき唯一無二の貴重なる寶庫である。毎年秋季御物曝涼に際しては、特に宮中より勅使を差遣せられ、曝涼期間内に於て有資格者に拜觀を許可せられる。毎年大抵十一月一日から二週間位で、拜觀許可せらるべき者は(一)高等官及び待遇を受ける者、(二)有爵者、(三)貴衆兩院議員、(四)功五級從六位、勳六等以上を有するもの、(五)學位を有するもの、(六)帝室技藝員、國寶保存會委員、工藝展委員、(七)以上の配偶者、(八)以上の外宮内大臣に於て學術技藝に關し相當の經歷ありと認めたるもの。出願手續は宮内大臣宛拜觀願書を東京帝室博物館に差し拜觀許可證を受くべきものとせられてゐる。

【御蟲干】 オンムシボン 毎年大抵十一月一日から二週間位の期間行はれる曝涼。この年は十年末に行はれたららし。

【御物】 ギョブツ・ギョモツ 帝室御所藏品。

【對山樓】 タイザンロウ 三笠山麓轉害門横今小路町にある旅館。こゝから猿澤池畔までゆくには、東大寺の境内を抜け、博物館前の芝生をぬけて、興福寺の境内へかゝるので十町位もあらう。

【興福寺】 コウフクジ 法相宗の本山。奈良市登大路町にある。南都七大寺の一。又十五大寺の一。藤原氏の氏寺。昔の堂舎は大部分なくなつたが、講堂、五重塔、南圓堂、北圓堂、三重塔などの建築があり、猿澤池と共に奈良の美景をつくつてゐる。

【猿澤の池】 サルサハのイケ 奈良市興福寺の南、三條通を距てて崖下にある池。奈良公園に屬す。奈良八景の一で觀月の名所。池は東西約百米。南北約八〇米。往昔平城天皇の御時、宮仕へした采女が入水したのを憐みたまうて池の畔に行幸、侍臣に歌を詠ませられたと傳へられる。「拾遺集」に「わぎもこがねくたれ髪を猿澤の池の玉藻と見るぞかなしき」と柿本人麿の歌がみえてゐる。

【鹿】 古來春日神社の神使として飼育せられて來た。これは八幡のハト、山王のサルの如く語音の關係から來たものでもあらうが、春日社傳では、鹿島明神が神鹿に乗つて、この土地に來給ひ、鎮座せられた所より、鹿を大切にするといつてゐる。現在尙八百頭に及び、境内の名物となつてゐる。

【朝餉】 アサゲ 朝の食事。餉はカレヒ(カレイヒ)であるが、單にケ(食)の意に用ひられてゐる。

【平城舊都】 ヘイヤウキウト 平城京。奈良朝七十餘年間の帝都。その範圍は今の奈良市から西南郡山町の北方

にまで及んでゐた。これを「平城」と書くことは、ナラは「平す」の義で、昔崇神天皇の御代武埴安彦の叛に當り、皇軍これを大和山城國境の丘陵に攻めて、軍士その山を踏み平らしたのために、ナラ山といふと「日本紀」に見えた傳説から「平の都城」の義を以て當てた文字である。當時の「大寶令」所定の尺度の制に基づいて東西八里、南北九里の域を占め、その中央を南北に貫通する朱雀大路によつて、京は左右の二つに分たれ、兩京は左右の二つに分たれ、兩京とも各一里毎の距離を以て縦横に大路を開き、南北各九條、東西各四坊に分れてゐた。蓋しその各坊はもと一里四方を以て單位として設計せられたのである。また各大路の間には、更に三條づつの小路を開いて各坊を十六坪に分つ。その各坪を町といふ。かくて京内の位置を示すには、北は一條から數へて南は九條に至り、またその各條は左右兩京とも各朱雀大路に接する坊を起點として、左右に數へて一坊より四坊に至る。

【一條大路】 イチデウオホヂ 平城舊都を南北に九に分ち、その最北の大路である。

【轉害門】 テンガイモン 一に碾礮に作る。手貝門、景清門、佐保路門ともいふ、八脚門で三間一戸、屋根切妻造、本瓦葺、虹梁墓股等は天平の様式を帯び、天平以來

災害を免れて残つてゐるものと思はれる。

【景清門】 カゲキョモン 賴朝の大佛供養の際平景清この門にかくれて賴朝をねらつたといふ傳説によりこの名を得たものである。これは謡曲「大佛供養」あたりから出た傳説であらう。

【悪七兵衛景清】 アクヒチビヤウエカゲキョ 平氏の侍大將平景清である。軀幹長大にして勇力なるを以て聞えた。壽永二年平維盛に従つて源義仲追討の軍に従つて敗退し、また平知盛に従つて源行家を室山に撃つて敗北した。同年七月平氏一族が相率ゐて西海に落つるや、景清もまた行を共にして都を落ちた。四年二月屋島の戦に源氏の武將美尾屋十郎國俊と力闘し、國俊の遁走するを逐うて兜鍬を掴み、兩人相引いて之を切斷したといふ。また壇浦の戦に、平盛嗣が敵後藤範綱と舟中に相搏撃するや、景清は盛嗣を援けて傍より範綱を斃した。平氏滅亡の後、景清は逃亡したが、平知忠が法性寺に兵を擧げるや、景清は赴いて之に屬したが、知忠破るゝに及び、また遁走した。其の後建久六年東大寺大佛供養に源賴朝上洛するや景清は降参したので、賴朝は之を和田義盛に預けさせた。景清は傲岸にして、なほ平氏に従つてゐた頃の如く振舞ひ、義盛は堪へられなくして之を辭したので、賴朝は止むを得ず更に八田知家に預けた。然るに景

清は大佛供養當時より飲食を断つて死んだ。景清の勇武は後世に及んで益々世に喧傳せられ、文藝演劇上の好適な素材となつて種々の作品を生み、傳説を生じた。

【傳説】デンセツ (一) いひつたへ。古く言ひ傳へ來れる話、口碑。(二) ころはさ、風聞。ころは(一)。

【雷名】ライメイ (一) とどろき聞ゆる名。(二) 他人の名聲の敬稱。ころは(一)。

【四海】シカイ (一) 四方の海。(二) 世界。天下。(三) 四方の夷狄。ころは(二)。

【名のりを揚げる】名を告げることを、武士が合戦の場に於て名を名乗るといふ表現を用ひた。對者が武人であることからかうした言ひ廻しをしたものと思ふ。

【吉日】キチニチ (一) 物事をするに吉き日。(二) めでたさ日。ころは(一)。

【世界的偉人】世界に名の知れ渡つてゐる偉人。

【驥尾】キビ 駿馬の尾。轉じてすぐれたる人のしりへの義。

【螺鈿】ラデン 鸚鵡貝・屋久貝・鮑等の裏面を花蝶人物などの形に切つて、種々の器物殊に、漆器の面に嵌め込んで飾とするもの、色白く紫緑を帯びて美しい。

【琵琶】ビバ 日本及び支那に於て用ひられる絃樂器。琵琶はもと西アジアに於て發生し、エジプトに於て原始の

形態をなしたもので、以來ベルシャ、印度、支那を経て、日本に傳はつたのは奈良朝時代である。これが正倉院に保存されてゐるものである。絃は四絃のものが多いが五絃のものも保存されてゐる。北倉階下にあるものは献物帳に龜甲細捍撥とあるもので、撥を受ける所に龜甲即ち瑤瑁を以て裝飾を施したもので、全部紫檀製で螺鈿を施し五絃である。五絃のものは他の四絃のものに比べて形制が古式に屬すると稱せられてゐる。蓋し其の形状の細長い所が印度式の原形に似てゐるからであらう。背面の螺鈿花文は頗る潤達に且つ優美に、所謂正倉院風の文様の特長を最もよく表してゐる。

【阮咸】ゲンカン 支那の絃樂器、古代のものゝ近代のものゝその製を異にしてゐる。古代のものは形月琴に似て棹長く、絃は四絃又は五絃を用ひるが、近代のものは胴は八角をなし、棹極めて長く、絃は四本を用ひ、これを月琴の如く左右二本づつに分けて調律する。正倉院に保存されてゐる阮咸は其の形後世の明樂の月琴に似て居り紫檀材に螺鈿を施せるもので、四絃である。阮咸は普の阮咸これを創作せるより此の名があると稱せられるもので、我が正倉院を措いては他に求むべからざる世界唯一の古器である。其の螺鈿文様は教科書挿繪に見るが如く頗る潤達で、表と背側の各面に同系統の文様を配し頗る

精巧で且優美なものである。

【一驚を喫し】イツケイをキツシ 一驚きし、の意。

【聖武天皇】シャウムテンワウ 第四十五代の天皇、御名を首といひ御父は文武天皇、御母は尺人宮子、藤原不比等の女である。大寶元年御降誕、神龜元年二月、元正天皇の禪を受けて位に即かれた。天平元年八月夫人藤原安宿媛を立てて皇后とせられた。これよりさき立皇は皇族に限る慣例であり「大寶令」の制もまたこれを規定してゐたが、茲に至つてその制は壞れた。天皇御在位二十五年にして天平感應元年七月位を皇太子に譲り、太上天皇と稱し、天平勝寶八年五月三日崩御、寶算五十六。大和佐保山に葬り奉つた。いま佐保山南陵といふ。天皇深く佛法を信じ、諸國に國分僧寺・國分尼寺を建て、親ら經文を書寫して各僧尼寺に納め、また東大寺を奈良に建立して總國分寺となし、丈六の盧舍那佛を鑄造せしめられた。その成るや佛前に北面して、自ら三寶奴と稱し給うた。後、出家入道して沙彌勝滿と號せられた。天皇佛法に歸依せられることかくの如く、皇后もまたこれを尊信せられたから、寺塔の建立甚だ多く寺院に領地を寄附せらるゝことも少くなかつたから、國家の財政もために大いに亂れた。然しながら佛教の興隆に伴ひ、美術工藝の發達著しく、所謂天平時代の文化を現出するに至つた。

天皇崩御後諡號を上つて聖武天皇と申す。

【仕込杖】シヨミツエ 細身の直刀を仕込んだ杖。明治年間には護身用として用ひられたが、今日では兇器として一般の携帯を禁ぜられてゐる。

【石突】インツキ 杖のついて地につく部分。槍、薙刀では柄の端で、立てた時土につく部分。多く鐵で包む。

【諸刃】モロハ 刀身の兩方に刃のあるもの。

【片刃】カタハ 刀身の一方にのみ刃のついたもの。

【銘】メイ (一) 漢文に功を識し稱する文の一體。金石器物などに刻む。多くは四字一句づつで韻を踏む。特に墓誌の終りに記す四字句の文の稱。(二) 製造せる物に格段につける名。(三) 製作者が其の器に己の名を刻みつけること。(四) 自ら誠めとする語。ころは(三)。刀の銘は多く中子につけるが、阿波の海部郡の鍛冶のみは柄につける。

【目貫】メヌキ (一) 鐵柱を穴へ貫くこと。(二) 刀の刀心の穴。目釘穴でありオサへである。(三) 轉じて目釘をいふ。即ち太刀の刀心の穴を柄の上から貫く釘。(四) 目貫の穴の上の飾。目釘の釘隠し。ころは(二)。

【鮫皮】サメカハ 鮫の皮に沙の如き、米粒の如きもの附いてゐるのをとり、乾して洗ひ、磨いて白くし、種々の用とするもの。刀の柄又は鞘に用ひる。その大粒のもの

のは舶來である。

【工藝】 コウゲイ 美術的につくられた工業品。彫物、金物、鑄物、塗物、焼物、織物、染物、縫物、其の他すべての細工物についていふ。

【蒔繪】 マキエ 末金繪であらう。正倉院文書、太刀鞘、「末金鏤」と見えてゐる。泥と金銀粉とで器物に畫を作る伎。又その繪。器の面に先づ漆で畫をかき、其の漆の乾かぬ間に、金銀の粉を蒔きつけ、後に磨いて光を生ぜしめる。金粉を用いたものを金蒔繪、銀粉を用いたものを銀蒔繪といふ。又文を高くつくるのをたか蒔繪といひ、器全體に作るのをひた蒔繪といふ。泥金畫漆其の他研出、梨子地、金貝など種々の稱がある。

【碁盤】 ゴバン 圍碁に用ひる盤。今用ひるものは白木で作る。用材は榎を最良とし、檜これに次ぎ、桂を下とす。縦一尺四寸横一尺三寸八分、厚さ六寸、下に四脚あり。上面に黒漆で縦横各十九線の罫を引き三百六十一の方形のものをつくる。方形の内方七分であり、十文字になつてゐる點を碁目又は單にめといひ又は目といふ。圍む時、そこに碁石を置く。碁盤の四脚は各榎子の實の形の如く、六角にして上下窄まれるやうに作る。くちなしあしといふ。口無しに寄せて助言を戒める意であるといふ。正倉院御物は碁局と稱し、木畫紫檀製である。木畫

とは牙角木竹等の異なつた色彩の材料を用いた、今日の寄木又は木象嵌の如き技法であつて、碁局の周邊に駱駝文、狩獵文等を嵌入れたものを云ふのである。碁局は所謂碁盤で、表面の界線は象牙で入れてある。此の碁局の左右の對角端に各々一個の引出しがあつて、中に龜形の器があつて碁子を入れてある。此の引出しの一方を開けば、必ず片方開く様に製作せられてゐる。此の木畫の技巧と其の文様等は、何れも最もよく正倉院風を表現してゐる。(世界美術全集第八卷一三四圖参照)

【硬玉】 カウギョク ソヂウム及びアルミニウムの硫酸鹽類。微晶質で細かき纖維狀である。可成り硬く、白色又は綠色で、吹管で熱すれば熔けて玻璃となる。

【鳥毛屏風】 トリゲビヤウブ 天平勝寶八年六月二十一日、聖武天皇の御一周忌に光明皇后は天皇の御遺物を大佛に献納せられた。其の目錄は東大寺献物帳と稱せられ、今に傳へられてゐる。帳中「御屏風壹百疊」とあり、其の内譯に「鳥毛立女屏風、六」と記され、現に御品は北倉、階下東棚に尙藏せられてゐる。粉地の紙本に流暢な墨線を以て、樹下に竹み寶珠を手まさぐる美人を描き、之に奇石芳草を配してゐる。而して顔と手とはほんのり臙脂を彩り、口唇には濃く紅をさし、蛾眉の間に四、兩頬に各一の綠點を施し、寶珠には白線を着け、尙頭髮、

著衣、領布等には鳥毛を貼つて美觀を添へてゐたのである。「鳥毛立女」の名稱も斯る特徴を指して言つたのであらう。斯の如く衣裝を飾るのに鳥毛を以てする意匠は唐の中宗の女、安樂公主の華奢に始り盛唐時代に大に流行した風俗から得たとも言はれるが、兎に角、天平人が金銀珠玉のみならず、鴨の毛や玉虫の羽の如き自然物の美をも採り入れて藝術に光あらしめた事は嘆賞に値すると思ふ。惜しい哉、今は鳥毛殆ど剝落し盡くし、僅かに第三扇の女の右肩及び領布の末端に極微の殘存を止めるに過ぎない。然し鳥毛の貼り方は同じく正倉院御物である鳥毛篆書屏風に依つて大體想像出来る。洵に此の屏風繪は因果經に次ぐ本邦古畫の貴重なる遺品であつて、美人の面貌を始め流暢なる衣褶の流れ、さては樹幹の錯節、石皴の筆致等には唐畫の趣致と相通するものと共に從來の倭繪の濫觴を思はせる。(世界美術全集第八卷九〇圖参照)

【珠玉】 シュギョク 珠とは眞珠の玉、轉じて圓き玉。玉とは石の最も美しいもの。

【七寶】 シツパウ (一)七種の寶玉、「法華經」授記品によれば金、銀、瑠璃、砮磈、碼瑙、眞珠、玫瑰」とあり、「無量壽經」には「金、銀、瑠璃、玻瓈、珊瑚、碼瑙、砮磈」をいふ。(一)七寶燒。こゝは(二)七寶燒とは、

瑠璃製品。西歐のエナメルと同じ技法による美術的金工品。普通は銅胎、稀には黄金製などもある。その製法は金銀銅等で素地を製し、これに畫紋を描き、金屬の線で畫紋に植まつけ第一回の入窯をする。次に色の原料及び玻璃質の釉藥を塗布して入窯する。これを一番燒といふ。かくして四回まで燒き、「砥石磨」をかけて仕上げ

【鏡】 カガミ 鏡は支那を中心とする系統のものと、エジプト・ギリシヤ・エトルスキ等の地中海沿岸を中心とするものがある。前者は多く圓形及びこれに類したもので背面に紐をつけ、後者は柄を有し、今のところでは後者の方が一段古いとされてゐる。前者は日本・支那・朝鮮の三種型となる。正倉院御物は多く支那の唐式鏡であつて質は多く白銅で、文様は葡萄・禽獸・草樹・山水等である。これらの文様を薄肉で表はしたのもあれば、また瑠璃質を充鎮した七寶鏡、螺鈿鏡、文様を銀板で透し彫にしたものを漆で埋めた平脫文鏡などがある。

【逸品】 イツピン 逸はすぐれたる意。特にすぐれた作品。逸才、逸美、等は逸の同義に用ひられたものである。【御寢臺】 ゴシンドイ 献物帳に「御床二帳、並塗三胡粉」とある。長二米三七、幅一米一八、高三八厘五、檜材長方形四脚の臺で、上面は八本の材を縦に簀子打に渡し置

き、それを縁の面よりは一段低くして鐵の圓鋌で止めてある。脚その外處々に胡粉の痕が残つてゐる。四隅の裏側に鐵の金具が打つてある。御床二張は同形同大同作で、獻物帳の注記によれば、この御床に附屬して、黒地錦の端をつけた疊、褐色地錦の褥一張、緑絨衾覆一條とがあつた。褥は廣さ長さ兩床に亘るとあるから、二張の床を並べずゑて用ひられたものと見える。疊と褥とは今之を佚し、覆は別に之を保存してある。淡緑の繩を衿とし、一面に施三巾を縫合させたもので、長二米七三、幅一米五二。

【中倉】ナカグラ 正倉院の中央の部分。正倉院は中央左右の三個所に入口がついてゐるが、この左右の校倉造の部分先づ建てられ、之を雙倉と稱し、後に中央は増築して三倉と稱されたと傳へてゐるが、種々の理由から最初に中央部も作られたものと考へられる。中央は合の間で、構造の異なるのは、目的の上から、又材料の上から當然と思はれ、雙倉と言ふ名は左右の主な倉である所からつけられたのである。

中倉納物に大刀四十九口を藏し、うち二十六口は莊の添うたもの、二十三口は無莊刀で、いづれも獻物帳に載つてゐるものの外である。もと悉く腐鏽してゐたものを明治十七年十八年廿八年に研磨を経たものである。

【刀劍】タウケン 劍はもと兩刃で直なるものをいひ刀と古くは區別されたいが、既に正倉院御物にはこの區別がない。すべてカタナの事を刀劍といふ。

【槍戟】サウゲキ、ヤリとホコ。戟は三鋒の矛であるがここでは鉞と同様に用ひられてゐる。鉞は矛と同義である。さてヤリとホコとは異名同物である。古に「ホコ」と呼び、後世に「ヤリ」と稱した。「ヤリ」は「ホコ」なる名に於て最も古い武器である。上古盛んに用ひられた「ホコ」は鎌倉時代に至つて殆んど使用されなくなつた。それが鎌倉時代の末の頃より再び使用されることになつた。併し今度は「ホコ」と稱せられず「ヤリ」といふ名で呼ばれた。刺殺の用に供せられる長柄の武器である。

【澤山ある】 刀劍の類は小は長さ五、六分の小形刀子の類から大は三尺を超える堂々たる無莊刀に至るまで、合計百七十餘點、槍戟の類は素鏹型のもの二十口と單鉤型即ち側方に鉤の突出したもの十三口ある。

金銀銅莊唐大刀 杖刀二口 漆鞘杖刀
吳刀鞘杖刀 黃金莊大刀 金銀莊橫刀
金銅銅莊大刀 黒作橫刀 銅漆作大刀
黒作大刀 無莊刀
【惠美押勝の亂】 エミノオシカツのラン 惠美押勝とは藤

原仲膺（七〇六―七六四）左大臣武智麻呂の二男。母は安倍朝臣貞吉の女。性質聰敏で略書記に涉り、阿部小黒麻呂に従つて算を學び最もその術に精しかつた。内舍人から大學允に遷り、天平六年に従五位下に叙せられ、民部卿を経て、孝謙天皇の天平勝寶元年に大納言に任じ、紫微令、中衛大將を兼ね、ついで従二位に進んだ。天皇の寵幸を蒙ること厚く常に左右に近侍した。同九年に皇太子道祖王が廢せられ、皇嗣の議の起つた時に、豫て自第に迎へ亡息眞從の寡婦粟田諸姉を妻せた大炊王を推して東宮となし、ついで紫微内相の任に就き、内外の兵事を統べ大勢力を占めた。よつて天平寶字元年に左大辨參議橋奈良麻呂等これが排斥を企てたが、密告者が出たためにその一味を退けることを得た。翌二年大炊王が踐祚せられるに及び官制を改正して大保に任ぜられ、姓名を藤原惠美朝臣押勝と賜はり字を尙舅と稱した。功封三千戸功田一百町を賜はり、別に鑄錢舉稻及び惠美家の印を用ひるを聽され、帶刀資人を加賜された。同四年自第に行幸を迎へて従一位大師に進み、同六年には正一位に進んだ。寵幸日に加はり、一族悉く顯要の地位を占めた。同七年に藤原宿奈麻呂等から排斥の計畫をなされたが、密告者があつて未然に防ぎ宿奈麻呂等を處分した。この頃に僧道鏡が上皇の寵幸を得たので私かにこれを除かう

とし、天平寶字八年に上皇に諷し奉つて都督四畿内、三關、近江、丹波、播磨等國々の兵事使となり、管内の兵士を毎國に更番させ武藝を檢閲した。やがて私かに兵の數を倍加し、乾政官の印を用ひた。大外記高丘比良麻呂に密告され官位を削られ姓字を除かれ、職分田、功封田を沒收された。押勝は宇治から近江に走つたが勢多橋が既に焼き拂はれたので越前に向ひ、水上鹽燒を擁立して天子とし愛符關に入つたが、物部廣成に攻められて近江三尾崎に遁れ、更に船に乗つて走つたが水陸から追跡されて終に殺された。時に年五十九。妻子徒黨みな斬られ六男刷雄は隱岐國に流された。

【職掌がら】 職業に相應して。「がら」は接尾辭。

【槍の柄の巻方】 槍は鉞の意であつて御物には鉞とある。その柄は黒漆塗のものもあるが木の上に竹を伏せ之に糸纏きして漆をかけたものが寧ろ多い。糸纏の技法には所謂平纏と段纏きとの二種が殊に多く用ひられてゐる。平纏きとは同じ糸を隙間なく纏いたもの、段纏きとは或る間隔に段をつけて纏いたものを言ふが、纏糸の性質によつて平纏段纏ともに更に數種の別を生ず。平纏の最も普通なもの、その稍荒きもの、特に鎖編の糸で巻いたもの、段纏の最も荒いもので銅線を用ひ後世の巻卷と稱するもの、右振左振の二糸を並べて巻いたもの、太い一線を中

にして細き二線を其の兩側に配した三線を間隔的に纏いたもの、その間隔を詰めて巻いたもの等がある。

【點檢】 テンケン 一つ／＼にしらべること。

【刀劍類の細部】 刀劍の切先、双文、錠子、地肌、中心、中心尻等である。

【逐一】 チクイチ 一々順を逐うて。一つ毎に。

【天平時代】 奈良時代七代七十餘年中聖武天皇の天平年間が最も盛であつたので美術史上之を天平時代といふ。

【箭矢】 カヅラヤ 箭のついた矢。箭は鹿の角や格を丸く練り、中を空にして、多くは孔を三箇穿ち、その尻へ雁股を添へて使用する。射れば箭の空氣を通じて響のあるものである。

【雁股】 カリマタ 鏃(矢の根)の一種。「貞丈雜記」によれば、雁股は雁の股でなくて、蛙の股の「かへる」を中略してかるといひ、雁の字を假りて用ひたものであるとしてゐる。形に大小があつて、その大なるものを大雁股といふ。

【故實上】 コジツジャウ 「故實」とは(一)故例、舊例、先例。(二)後世朝家の儀式の法則の稱即ち有職の學である。こゝは(一)。

【錠前】 チャウマヘ 物の開閉する箇所にさし固めて締をする金具。之に附屬した錠を用ひて開閉する。

る。十九世紀に至るまでこの樂器はディートニックの樂器で、演奏に非常な制限があつた。今日では二重アクトンのペダルでこの制限から或點まで開放されてゐる。

【玉】 ギョク 寶石の一種、光澤があり、透明性を帯び色彩の美しいもので、その種類多く、支那の太古帝舜の時代から服飾として用ひ、或は天地四方を祀るための玉器として用ひられる。周禮の冬官考工記によると、當時政府直轄の玉府に玉人彫人の各専門工があつて、冠飾に用ひる服玉、天子以下諸侯の佩する佩玉、尸に用ひる含玉、會盟飲血のための玉敦等を造つた。こゝには玉長坏、玉器等があり、乳白色の玉で出来てゐる。

【玻璃】 ハリ (一)水晶。(二)今のガラス。こゝは(二)。玻璃は瑠璃と同種、同じくガラスであつて、正倉院には白瑠璃碗、碧瑠璃杯、綠瑠璃十二曲長坏などがあり、何れも硝子製である。

【東羅馬帝國】 ヒガシローマテイコク ギリシヤ帝國またビザンチン帝國と稱す。三九五年テオドシウス一世ローマ帝國を東西に二分し、東部を長子アルカヂウスに與へしに始まり、一四五三年オスマントルコのムハメッド二世の爲に滅された。國都はコンスタンチノープル。アルカヂウス時代の領土はエヂプト、小アジア、シリヤ、ギリシヤ、諸島、バルカン半島に跨がつてゐた。ユスチニヤ

【唐櫃】 カラビツ 櫃に脚のあるもの。被蓋があつて脚は前後に二本づつ左右に一本づつある。運送の時地上に置く必要からであらう。長唐櫃は長持の如く二人で棒で擔ひ、荷唐櫃は小さくて一人で二箇を枋で擔ぐ。

【經筒】 キヤウヅツ 祈願のために手寫した經卷を納める筒。多くは青銅製であり、稀に鐵製、土製のものあり、圓筒形で蓋があり、大抵高さ一尺内外、外面に銘文を鑄出し、或は刻畫する。これを土中に埋め塚を築いたものを經塚といふ。

【老練家】 ラウレンカ 永年經驗の結果、物事になれて巧みな人。

【筵篋】 タゴ 北部朝鮮から西藏・ペルシヤ等に於て用ひられた樂器で、駱駝の腸を以つて絃としたもの。西藏・ペルシヤ等に於ては繪畫等にその原形が残されてゐるが實物は正倉院御物以外にはない。

【豎琴】 タテゴト Harp と稱す。大型の豎琴。絃は羊腸。低音部は絹または金屬絃。演奏は兩手、但し小指は使用出来ないから、片手四つまでの音より演奏出来ない。音色は低音部は弱くて力がなく、最高音部はキンキンいふ。中音部は玉をころがすやうに美しい。表情が單調なので、獨奏樂器としての能力は少ないが、何物にもかへ難い音色は合奏用として重要なものの一つである。

ヌス一世の頃はアフリカ、イタリヤ、イスパニヤに達した。

【唐櫃】 カラビツ からうど、からうづ等とも稱する。型は支那風に造られ、普通は我が國の長櫃の型を採る。ただ唐櫃の特異とするところは、必ず四箇又は六箇の脚を附してゐる點である。足を附けたのは通風の爲らしく、初は衣裳類を納めるに専用されたが、型も種々と變化し、寸法も大小を生じ來り、従つてその用途も擴大せられた。即ち經文、圖書を納め或は具足を入れるにも用ひた。正倉院の唐櫃は、多くは四脚直線式の構造で、赤漆または黒漆の上に油色の彩繪(密陀繪)が施されてゐる。

【密陀繪】 ミツダエ 裝飾油繪である。いつの頃からか此の飾畫を密陀繪と言つて傳へられてあるが、密陀繪の名稱は東大寺獻物帳にも見當らない。併し、支那で古くから言ふ油漆と同様のものと考へられる。密陀は密陀僧とも呼び、酸化鉛即ち油の乾燥劑である。之を油中に混じて煮たる乾燥性油を用ひて、各種の繪具を練つて畫いたものであるから、全く今の所謂油繪である。此の種のものは唐櫃以外に花鳥模様の筥もあり、單に美術工藝品の逸品であるばかりでなく、油繪の紀元が東洋にある事を立證すべき歴史の上に於ける貴重品である。

【星霜】 セイサウ 年月の意。

【料紙】 レウシ 經文等に用ひた紙。

【漉き上げ】 スキアゲ 紙を作ることをいふ。紙は楮の皮を剥ぎ、粗皮を去り、煮て細かに打碎き、黄蜀葵トクソウの根の粘液と水を加へて簧の上に甚だ薄く敷き、乾して作る。簧で漉き上げるのである。

【奇蹟】 キセキ (一)不思議な出来事の蹟。(二)神の力に

よる不思議なわざ。こゝは(一)。

【御稜威】 ミイツ イツは嚴靈なる威光。

【彌高き】 イヤタカキ 「いや」は(一)いよ／＼。(二)最も
の意。こゝは(二)。

【字内】 ウダイ 天下、世界。

2 文の構成

第一節 初―四〇頁一〇行 奈良の夜と朝。

第二節 四〇頁終―四三頁一行 奈良時代工藝美術進歩の様。

第三節 四三頁二行―四五頁一行 乃木將軍の觀察の細密さと係官の名答辯。

第四節 四五頁二行―終 保存のよさとその原因。

3 文意

夜奈良の町を歩くと對山樓から興福寺を抜けて猿澤の池まで人一人にも出遇はない。朝は鹿の聲がうるさい程聞える奈良である。

御物拜觀に出かけるとまことに幸な事に乃木將軍と同時に拜觀する事になつた。琵琶・阮咸等樂器の精巧さ、聖武天皇の仕込杖の装置の優秀さには千二百年前の工藝の進歩に驚かされる。蒔繪の碁盤、硬玉及び赤珊瑚の碁石、鳥毛屏風の下繪、金銀珠玉を鏤めた鏡類、特に一面七寶の裝飾を加へた鏡等何れも目を驚かさぬものなく世界の逸品とさへいはれる。將軍は聖武天皇の御寢臺、刀劍、弓矢、槍戟の類に對する綿密な注意を拂はれ、ひいては錠前、唐櫃、經筒に至るまで

細密な觀察を遂げられ細密な質問をされた。老練な係官は見事な答辯をする。

筥笈、玉、水晶、玻璃、唐櫃の密陀繪等の世界の逸品は實によく保存されてゐる。特に矢竹、筆の軸にも毫も蟲喰の跡なく、料紙も天平時代のものが今新しく漉き上げたばかりと思ふやうである。これ等は奈良の土地の乾燥と校倉の構造と、手入の行届とによるのであるが、皇室の御稜威によるものが大である。かく考へると正倉院は實に世界に誇り得る寶庫である。

4 鑑賞批評

對山樓から興福寺を抜けて猿澤の池へ出るまで人一人に出あはぬ程靜かな奈良、鹿の聲のうるさい程聞える朝の奈良を敘べて世界に誇り得る正倉院を描く序とした事は、奈良の京の寶庫であるだけに當を得たものである。

更に御物の拜觀に當つて乃木將軍の興味と注意を描き乍ら御物そのものを説明する行き方は讀者の興味を自ら引づつて行くに便利な手法である。

最後に支那人すら感歎する筥笈を持來り、更に全世界の逸品玉、水晶、玻璃の器具或は唐櫃の外部の密陀繪の新鮮さ、蟲喰のない矢竹、筆軸、眞新しい料紙をあげた點は驚くべき保存成績を示すに充分である。そしてその由つて來る所以の最も大なるものを皇室の御稜威に歸し奉つた手法は、正倉院の價値を充分に表現すると共に驚異をさへ感ぜさせる力がある。

三 備 考

1 指導研究

美術工藝方面に於ける古代日本の相を眞に理解する爲には「一驚を喫し」「再驚を喫し」「驚かれる様であつた」「何れ目を驚かさぬ物は無いが」「立派さ、見事さ」「外國人が垂涎を禁ずる能はざる世界の逸品」等、かうした表現の持つ内容を

眞に把握する事が必要である。この爲には圖版や説明が必要であらう。

2 参考

御物の圖版及び説明として参考となるものをあげれば、

イ、正倉院御物圖錄 第一輯より第十輯まで、帝室博物館編

ロ、世界美術全集 第八卷第九卷 平凡社發行

等がその主なものである。

挿繪説明

正倉院東面。所謂校倉造で、桁行十八間餘、梁間五間餘、單層、屋根四注造、本瓦葺。東面して建ち、南北に長く三倉連結して一棟とした形で、古來雙倉若しくは三倉、三つ藏などと呼ばれてゐる。南北の兩倉は共に斷面三角形の校木を井籠組にしたものであるが、中倉はこれとその手法を異にし間柱を立てて厚板の落嵌めとなつてゐる。床下は各倉とも桁行三間づつに圓柱を建て、吹抜きとなつてゐる。軒は二重檼、各層毎に前面中央に一戸の戸口を開き、内開き二枚の板戸を釣る。内部は三層に分れ、上層は即ち小屋裏である。天井は張らず化粧屋根裏を露はし小屋組はもと和小屋であつたが大正二年修理の際すべて西洋合掌に改めた。以上の事實から歸納して、從來は初め離れてゐた二倉を、後にその間を建て續けて三倉一棟としたものといふ説が信ぜられてゐた。しかし天平時代には屋根と床を共通にし、左右に倉あり、中間を空虚にした雙倉なるものがあつたことは天平寶字四年十一月の「安宿王家地倉賣買券」「西大寺資財帳」「太子傳私記」等の記事によつて明かである。現在の正倉院寶庫は礎石、床下、天井等は全然三倉とも同時、同趣のものであると認められるから、これも上記の天平時代雙倉の一例であることが判り、それに後になつて、中倉に藥を置く必要がありなどとして、中倉の外側に壁體を附加することになつたのであらう。

七 旅

一 解 題

1 作者

佐佐木信綱 ササキノブツナ 明治五年六月三日、伊勢國鈴鹿郡石薬師村佐佐木家の長男として生まれた。父弘綱は足代弘訓門下、明治初期の歌人・國文學者で、後帝國大學の講師となつた。明治八年(四歳)父から萬葉・古今等の古歌の誦を授けられ、十年初めて歌を詠んだといふ。十一年湊町小學校入學。十五年一家上京の後は、高崎正風の門に入り、又諸家の歌會に出席した。十七年、東京大學文學部古典科に入學、二十一年七月卒業、この年二月(十七歳)女學雜誌に「詠歌論」を發表した。二十二年、高崎正風から御歌所に入る事を慫慂されたが辭退し、民間にあつて歌道の普及を終世の事業とする決心を固めてゐた。翌二十三年父と共に「日本歌學全書」を刊行し始め二十四年十二月、十二卷を刊行し終へたが、父はその完了を見ず、六月に亡くなつた。其の以後多くの校註書編著等を出版、日清戦役前後から新體詩・軍歌を多く發表し、又漸次新様の短歌に轉向し、二十九年には雜誌「いささ川」を創刊、その廢刊のあとをうけて三十一年二月、石樽千亦等と「心の華」を創刊した。「續歌學全書」を刊行し始めたのもこの年である。三十六年第一歌集「思草」出版、三十七年には軍歌集數冊を刊行した。三十八年、東京帝國大學講師となり和歌史を講じた。四十一年には「歌學論叢」出版。四十三年には「日本歌學史」を出版、翌年、文學博士の學位を授けられた。大正元年第二歌集「新月」出版、大正四年「和歌史の研究」出版、六年、帝國學士院恩賜賞を受けた。この年、御歌所寄人となつたが、十一年、明治天皇御集昭

憲皇太后御集編纂終了を期として辭職、第三歌集「常磐木」を出版した。十二年「近世和歌史」出版。九月大震災のため明治四十五年來盡瘁した「校本萬葉集」の製本、原稿共に焼失したが、十四年再刊本二十五冊を出版完成した。昭和四年第四歌集「豊旗雲」出版。昭和六年帝大講師を辭し、「扶桑珠寶」三十八種の刊行を期し、第五歌集「鶯」出版。七年には知友門下によつて盛大な還曆記念の會が行はれ、現在益々學界歌壇のため盡くされてゐる。

上記の外、編著・校註書・註釋書・文集・論集等の刊行は甚だ多く、歌學特に萬葉の研究家としては最も重んずべく、貴重なる古寫本の覆刻等によつて學界に貢獻した所も甚大なものがある。むしろその本領は學究の仕事にあつたと言つてよいのであるが、明治の文學界特に短歌の歴史に於ては最も大きな足跡を残した一人である事は明白である。雜誌「心の花」は三十餘年間繼續し、大正三年、心の華叢書第一卷「藤むすめ」を刊行して以來、門下の歌集五十有餘を刊行した。門人には川田順・新井洗・木下利玄・石樽千亦・三浦守治・齋藤瀏・片山廣子・大塚楠緒子・橋系重子・九條武子等がある。

木下利玄 キノシタトシハル 明治十九年一月一日、岡山縣賀陽郡足守町に木下利永の次男として生まれた。二十三年伯父木下利恭の養嗣子となり東京の子爵家に入る。學習院初等科、中等科、高等科を経て、三十九年(二十一歳)東京帝大文科に入學、四十四年卒業した。歌は三十一年(十三歳)佐佐木信綱の門に入り竹柏園集第一編第二編及び竹柏園選集「玉川集」等にも載せられ、四十一年の選集「玉琴」には五十三首掲げられた。「心の花」以外四十二年武者小路實篤等の「白樺」の同人となり、そこにも歌を發表した。大正元年目白中學國文講師となり、五年辭職。大正三年第一歌集「銀」出版。四年「萱山」一聯の作を得た。五年六月から妻と共に大旅行を始め、京畿・但馬・出雲・岩見・周防・九州に至り越年、南九州に遊び翌年十月歸京した。年末兵庫縣住吉に假寓、翌八年鎌倉に移住した。八年「紅玉」出版。十一年肺結核に罹り、以來病臥を續けた。十三年「日光」同人となる。「一路」を心の華叢書として出版。自選歌集「立春」の編纂に

着手したが、十四年一月末危篤となり、大正十四年二月十五日逝去。享年四十。五月「立春」、七月改訂版「紅玉」、十二年歌文集「李青集」が夫々出版された。十五年七月「木下利玄全歌集」を石樽茂が編輯して出版した。

利玄は年少から竹柏園の門に入り明星派風の歌を作つたが、窪田空穂の歌に教へらるゝ處あり、又北原白秋の「桐の花」の影響を受けた。程經て大正四年箱根に遊び「萱山」一聯を得て悟入し、本道に出でたと自任し、アララギ調を多く加味して來た。この頃から客觀寫生、繪畫的立體描寫風の歌を作り、口語脈的發想の破調を伴ひ、世に利玄調と稱せられるに至つた。更に晩年には、自由な童謠的格調に進み、独自の素朴調といふのを創めた。利玄は橘曙覽を好んだといふが、後年の作はそれに相近似してゐる。

彼の晩年の歌はかなり獨自性の著しいもので、昭和年代に入つても、多くの模倣者を生ぜしめてゐる。たゞ歌をたのみ歌にくるしんだ利玄は、大正期の代表的歌人として永久にのこるであらう。

川田 順 カハダジュン 明治十五年一月十五日、東京市下谷區三味線堀に文學博士川田夔江の子として生まれた。同十九年(五歳)寺小屋式學校に入つて習字と讀書を習ひ、翌年、根岸小學校に入學、二十六年愛日小學校に轉じ、二十八年城北中學校に入つた。歌は十三の時、小學校の教師に課題せられて一首作つたといふが、二十九年(十五歳)竹柏園の高足安藤直方につき添削をうけ、新古今集の講義をきき、翌三十年直方の紹介で佐佐木信綱の門に入つた。藤村・泣菫に做つて新體詩もつくつた。三十四年「竹柏園集第一編」に短歌六十七首、翌年發行の「竹柏園集第二編」に五十三首收載。三十五年東京帝大文科(英文科)に入學。小泉八雲や夏目漱石の講義を聞いた。翌年、小山内薫・武林無想庵等と同人雜誌「七人」を創刊。又この年、法科に轉じた。主として作歌に精進し「心の花」に多くの歌を發表した。四十年帝大法科を卒へ住友に入社して大阪に移住。大正五年四月から六月に亘り支那・滿洲・朝鮮を歴巡。大正六年「阿部野のほとりに住みて」の作を得て浪漫主義に告別、七年歌集「伎藝天」を出版。八年窪田空穂と交り寫實の歌風を進めた。十年歌集「陽炎」を

十一年「山海經」を出版。このころから新古今流を唱道し、萬葉萬能の歌壇に異を樹て、又翌年良寛の歌盲拜の歌壇に抗議を發した。十三年「日光」創刊、同人となつた。十四年初夏滿鮮旅行以後、數回滿鮮に旅行して多數の歌をつくつた。昭和四年十二月「陽炎」及び「伎藝天」の各改訂本を出版。昭和五年五月、歌集「青淵」出版。同六年歌集「鵲」出版。七年「新古今集の鑑賞」を、八年三月歌集「立秋」を刊行した。現在「心の花」の同人、往年住友合資會社理事を辭し、作歌並に研究に没頭してゐる。最近に至り、「利玄と憲吉」「俊成・定家・西行」「吉野朝の悲歌」「吉野朝の柱石宗良親王」等の著がある。

川田順は年少既に竹柏園門下の逸足として出發し、「陽炎」「伎藝天」では華麗な夢を逐うたものが多いが「山海經」の頃から浪漫、感傷の響を低うして實相を直敘せんとする傾向に移り、「青淵」に於ては滋味の佛がある。一般に用語の範圍が廣く口語的發想で、後年は連作體直敘の旅行歌が多い。長く繁忙な實務に携りつつも、絶えず歌を發表して居り、現代歌壇に於ける重要な一存在である。

2 出典

佐佐木信綱氏の歌は何れも改造社發行の自選歌集「天地人」から採つた。その中第一のものは「遊清吟藻」に、第二のものは「北海吟藻」に、第三のものは、旅の歌の部にある。第二のものには「汽車中作」といふ割註が入つてゐる。

木下利玄の歌は「紅玉」「一路」の中から採つた。第一の歌は「一路」大正七年の作、第二は「紅玉」、第三は「一路」何れも大正五年の作である。全部改造文庫自選歌集「立秋」に收められてゐる。

川田順氏の歌は氏の第四歌集「青淵」から採つた。青淵は大正末期の作三百九十五首を收め作者四十一歳から四十五歳までの作で、皆自然觀照の歌である。第一の歌は「大和の一日」と題した一聯中のものであつて、前後の歌によつて、長谷寺附近での作であることが推定される。第二の歌は大正十三年の「日光山の歌」一聯中のもので、中禪寺湖鱒釣の歌で

ある。第三の歌は「壇の浦の夕」と題した一聯中のものである。

3 主眼及び採擇の趣旨

前課に於て古の奈良の都に向けられた心は、本課に至り古典的な抒情詩のリズムとなつて旅に誘はれる。

旅は人の心を淨め、なべての人を歌人とする。そして歌よまほしい清純な心とする。こゝに旅の歌をとほしてさうした「うたびどころ」に觸れさせたいと思ふ。本課には現代の歌壇に於て一つの流派を形成してゐる「心の花」から代表的な三人の歌を掲げた。

二 解 釋

紺青の海にいささかの波たてて船は五島のかたはらを過ぐ

【紺青】 ヨンジヤウ (一)鮮青色の顔料。乾燥したものは金屬光澤を有し、稀酸に溶解し、アルカリに反應する。長く日光に曝せば稍褪色するが、暫時暗所に置けば恢復する。黄血鹽に鐵鹽を作用せしめて製する。天然に産す

るものは岩紺青といふ。(二)紺青の如き色。こゝは(一)【五島】 ゴタウ 東支那海中に散在する列島にして長崎縣に屬する。

鑑賞批評

佐佐木信綱氏の旅行中大きなものは明治三十六七年の氏の三十二、三歳の時の支那旅行である。十月出版せる「思草」を携へて揚子江を溯つて、湖北・湖南の兩省にわたり、蘇州・杭州に至つてゐるが、その間、南支の名勝舊蹟を心ゆくばかり見めぐり、

眞白帆によき風滿つてて月の夜を夜すがら越ゆる洞庭の湖

青草湖あしが花散る夕風に心かなしく人をおもへり

等の作があり、こゝに出した歌も此の旅からの歸りに詠まれた歌である。これ等はすべて「遊清吟藻」に出てゐる。

波靜かな五島沖を外國航路の大神がスイ〜と速やかなその速度のまゝに進みゆく胸のすくやうな晴々とした光景が、その歌調の上によく出てゐると思ふ。「紺青の海」といひ、「いささかの波」といひ、第三句で「て」の助詞でつないで最後までいひつゞけた句法といひ、すべてこれになつてゐる。内容と形式との妙なる諧調が聞かれるやうに思ふ。長い旅を終へて「日本に歸つた」懐しい思ひも、五島列島の浮かんでゐるのを見た時に呼びさまされた想ひであらう。

今宵とまる旭川の驛いまだ遠しあかがね色の月いでてをり

【旭川】旭川市は北海道の中央部、天産豊かな上川盆地の西部、牛朱別・忠別・美瑛の諸川が石狩川本流に合する所にある。函館市を距る鐵路四二五・一、人口八二、五一四。本道第四の都會で、而も本道第一の壯年都市。市街の町割規則正しく縦横に走るは京都市に似、また都市計畫の整美なる點は札幌と並び稱せられる。旭川驛は忠別川岸に沿うて設けられ、商業區は驛前から眞直に常盤橋に至る師團通である。本市發達の原因はその四通八達

の交通線である。函館本線は本市と札幌・小樽・函館を連ね、中央山地の中を南北に貫く縦谷に沿うて走る。宗谷本線は北方稚内に通じ、富良野線は南方富良野に通じ更に根室本線によつては釧路・根室に達し、また石北線開通の上は北見との交通も便利となる。
【あかがね色】鋼色。山上に上る月でなくて平野の果、地平線近くに出る月であるから空中の汚濁の爲にこの色をなしてゐるのである。旭川の地勢を表現した色である。

鑑賞批評

時は秋の初である。即ち北海遊吟中に

一面の大雪原にならむ日をおもひつつ手折るをみなへしの花

北の海るぶりの國の此の野らにえにしありて折るいたどりの花

家をめぐる雪よけぼぶら一やうにたけ高くして片靡きせり

等があり、をみなへしやいたどりの咲く頃、そしてポプラの散らぬ頃であるから晩夏或は初秋の頃と思はれる。「いまだ遠し」といふから旭川驛まで相當の距離ではあるが、さまで遠くない事がうなづかれよう。神居古潭あたりを過ぎて兩岸にせまる八百米程の山裾を過ぎて上川盆地に歩を入れたあたりではあるまいか。そこに、はるか彼方地平線上にあらはれたのはあかがね色をもつた月である。盆地のはるか彼方、行手に向つて低く月が出てゐる。「あかがね色の月いでてをり」に驚きの思ひが聞かれるやうに思ふ。北海道では石狩平野であつてもこのあかがね色の月があるといふことである。

初秋の夕方はもう相當に冷える。寒い程の風をうけ乍ら旭川市の燈をはるか彼方に眺め乍らあかがね色の月を見る。旅の寂しさが物凄いままでにおしかぶさつてくる思ひのする歌境である。敘景と共に濃厚に出た主觀をくみとらせたい。

奈良の京老木の杉の秋雨に牡鹿も我もぬれにけるかな

鑑賞批評

老木の杉があり、鹿があるとすればそれは春日神社の境内である。奈良の京とわざ／＼「京」を用ひた處に古京としての奈良をなつかしむ思ひが出てゐる。しかもものを思はせる老杉であり秋雨である。古往今來の相を懐うて寂しい思ひに立去りかねる時、ふと見れば傍に居る角たぐましい牡鹿も自分も、寂しい秋雨にぬれてしまつてゐる。物憂げに眼をしばたたく牡鹿の相が思ひ出される浪漫的な思ひの漲つた歌である。

汽車のろく裾山ぞひを行くなべに手の届く處にも丹躰躑咲ける

【裾山ぞひ】 大きな山の裾にある小山にそうて。

【なべに】 に連れて、と共に。

【丹躰躰】 ニツツジ ヤマツツジである。四月から五月初

にかけて山地に自生し、赤色縁邊五深裂の漏斗状花を開く。

鑑賞批評

葉櫻雨一聯中の第一の歌であつて詞書に「四月吉野山に遊ぶ、中千本のあたり已に葉櫻なり、翌日雨、同行二人」とある。大正七年の作で利玄三十三歳の時である。五年六月以來妻と二人での大旅行中の一の旅吉野行である。吉野口近くの山麓らしい。ゴトリ／＼ゆつくりした汽車である。妻と二人のひそかな、静かな旅にはふさはしい動きである。しかも近い山々に赤いつゝじが咲いてゐる。新緑も萌えてゐる。ふと手の届くほど近い窓邊にも赤いつゝじが咲いてゐた。一気に詠下したすらしとした歌詞であるが、第四句が口語調で三字あまりである點、最後を連體形で結んだ點がこの歌をひきしめてをり、新しくしてゐる。客觀寫生の歌である。

人里のいやはての家の戸の前も過ぎ行きにけり持つ灯さびしも

【いやはて】 最後。

【も】 感動助詞。

鑑賞批評

大正五年（三十一歳）因幡岩井温泉での作である。作者は提灯を手にしてとぼ／＼と馴れぬ夜道をしてゐる。人里の最後の家の前、それも道路に向つてすぐに戸を開いてゐるやうな家を過ぎてもうすつかり物さびしい處になつた。とう／＼人家のないところに来てしまつたといふ感慨が「にけり」に出てゐると思ふ。即ちこの感動を含んだ完了形の助動詞と、この語で言ひ切つた點とにそれが出てゐる。そして改めて第五句を据ゑた點に一層のさびしさが出てゐる。人里を離れて

しまつては灯が唯一のたよりであるが、その灯によつて又一層さびしさが湧くのである。行く先は自分一人、小さな灯をもつた自分一人である。この間のこまかな感懐が表現されてゐる。

漁師等が夜深く船を出す聲に眼覺めしこは出雲美保の關

【美保の關】 ミホのセキ 島根半島の先端に近く美保灣に 臨む。事代主神を祀る三保神社があり古來漁師町である。

鑑賞批評

詞書に「十一月初美保關に遊ぶ。同行二人」とある。大正六年の旅であらう。深夜漁師等の船よそほひをする、或は出發の合圖をし乍ら出て行く、元氣に充ちた聞きなれぬ高い聲々に眼をさまして見ると、あゝこゝは出雲の國美保の關であつた。故郷遠い旅にある身の寂しさ懐しさが遠い昔の神話の世界にまでつながつて行く。

以上利玄の歌は何れも素朴清新な純情の歌である。

汽笛鳴らして輕便鐵道可愛らし麥の島の向うを行くも

【輕便鐵道】 ケイベンテツダウ 軌道が狭く構造簡單な鐵道の總稱。地方の一局部に限られた交通機關として、時に工事の際に石材や砂礫等の運搬用に敷設する。我が國では軌道三呎六吋以下の鐵道を輕便鐵道と呼び、特に蒸

汽機關車によつて牽引されるものをいふ場合が多い。即ちこの軌道の鐵道でも電車を運轉するものは普通に輕便鐵道とはいはない。

鑑賞批評

南大和の和やかな春の風景の中を小さい汽車が走つてゐる。青々とした麥畑がある。菜の花も咲いてゐよう。桃の花も

美しからう。多武峰も、金剛・葛城も霞んでゐよう。その中を玩具のやうな汽車が走るのである。「汽笛ならして」といひ「可愛らし」といひ、自ら微笑まれる程の表現である。口語的發想法の尤なるものではあるまいか。

同じ聯作の中に次のやうな歌もある。

長谷寺の牡丹見頃の今日なれば輕便鐵道たえず上るも
さびしきは鱒つり小舟ここに一つかしここに一つ離れて釣りゐる

【鱒つり】 マスつり 我が國で鱒釣といふと、すぐ奥日光を想像する。この方面の河川や湖水には、紅鱒・河鱒・および姫鱒が棲息してゐる。これは宮内省林野局所管の菖蒲ヶ濱鱒養魚場や農林省所管の梅屋敷の日光鱒養殖場

で養魚したものを、中禪寺湖や、湯の湖、或は湯の川・丸沼・菅沼・大谷川等に放流してゐるからである。そして一定の期間を限り、鑑札を下げ一般に公開してゐる。六月から八月までが解禁期である。

鑑賞批評

第二句で切れる。さびしいものは鱒つり小舟であると先づ主題を提示し、次に、離れ〜になつて彼方此方に一つ〜黙つて釣つてゐる景觀を描寫した。深緑に包まれた處の中禪寺湖である。靜寂の湖は紺碧の空をうつして深くひそまつてゐる。その湖上のあなたに一つこなたに一つと、鱒つり小舟が離れ〜になつて釣つてゐる。天も水も靜まつて只はるか華嚴の瀧の音が聞えるだけである。第五句の字餘りが寂しさの表現に力を與へてゐる。

俾して長門の國府よわが來れば壇の浦曲に寒し夕日は

【俾】 クルマ 最近に出來た國字で、會音文字。人力車の こと。「俾して」は「人力車に乗つて」の意。

【長門の國府】 ナガトのヨフ(ゴ) 現在の長府町。國府とは王朝時代に諸國國司の政をとつた役所をいひ、こゝでは長門の國司の政廳のあつた所の意。
【よ】 「ゆ」と同じ。よりの意。
【壇の浦曲】 ダンのウラワ 曲はめぐり。壇の浦は長門國長府から西方約四軒の地點で、早瀬瀬戸の東口から干

珠、滿珠の二島に到る間の西北岸で、今は下關市の東端の海上に相當する。源平の古戰場である。文治元年三月二十四日午後三時頃兩軍の勝敗決し、二位尼は安徳天皇を奉じて神器を抱いてこの海に投じ、平氏の一門教盛・知盛・經盛・有盛・行盛・敦盛等何れもこゝに最期を遂げた。

鑑賞批評

昔國司の役所があつたといふ長門の國府から人力車に乗つて海邊づたひに來ると、源平の古戰場壇の浦に出た。丁度夕日は沈まうとして海面を染めてゐる。七十五十年前の悲しい歴史の跡を弔ふかの如く寒い夕の風が吹く。第五句中に到置法を用ひた點は最後にはりを持たせてゐる。

花やかな、或は悲しい歴史の世界に向ふ情感と、寂しい旅情とが結合して、それが冷たい夕陽の中に象徴されてゐる。

三 備 考

1 指導研究

一見平凡に見える風物も旅に於ては旅人の心に強く迫つて來る。この詩情を短歌形式といふ三十一字形に盛つてゆく、この間の消息を傳へるによい課であると思ふ。敘景にしても抒情にしても題材に鋭さや深刻さやがないために少年達にはかへつて親しみ易いであらう。

2 参 考

改造社版現代短歌全集中第十四卷卷末に掲げられた石樽茂氏の編纂後記中から木下利玄氏の作品に關する部分を抄出す

る。

木下利玄の作品は大正中期以後殊に後期の歌壇に於て惑星的光芒の度を強めて發展した。

大正後半期は傳統的短歌の諸矛盾は所在に露呈し、近代主義短歌の大同團結、口語歌運動等々若干の波も生滅しながらいづれも遂に傳統短歌域内の痛ましい「苦悶の爪跡」にとどまり、變革にまで昂揚しえなかつた。併し泥沼のやうな歌壇のひろがりにも變革への摸索は漸次深刻化しつゝあつた。利玄の作品群の登場はかゝる情勢に於てであつた。

利玄の作品群。その展開する獨自多彩の世界、生き生きと肉體と血を持つた自然、人間のそれへの交歡、それを貫くねばりづよい力と氣稟に充ちた韻律構成、ほのあたたかたにたゞよふ爽やかな雰圍氣の何ともいへぬ新鮮さ。かゝる作品群が當時の變革への摸索へ力を以て働きかけたのは當然であらう。

しかもかゝる作品群は復古的な歌壇主潮に對し一應のアンティテーゼのすがたを以て登場したので。利玄は白樺的ヒューマニズムに打貫かれてゐた。資本主義イデオロギーがその上向期において示す改良への積極的役割を反映して文壇に一つの思潮を渦巻かしてゐた白樺精神の歌壇への進出であつたのだ。たゞ利玄はそれを對自然感情へ集中して導入した。(千家元麿の詩よりはるかに狭くはるかに古典的に。)利玄は自然對象へ妥協なく肉迫してそこに盛りあがる感情を創作した。しかも注意せよ。利玄の對自然への迫り方は人間と自然との親和的交流・情趣深き諧和を基調としてゐる。自然の逼力の壓倒を詠じた秀作「波浪」の如きすら、決して自然と人間の關係を鬭争・生産の過程に於て見るものではない。客觀的・現實的手法を以て臨みながらも「詠歌の驅逐」は若干も敢行されてゐないのである。

客觀的・現實的手法といつた。このレアリスティックな表現技巧が如上の精神を具體化し、その技巧の自由な驅使によつて、古典的な言葉が息をふきこまれ、現代語特に白樺獨特の言葉清ひが濺瀾と出沒してゐるのが利玄の作品であつたのである。乍併、その表現技巧の多面變化はいづれも三十一音定型律の制約内でのそれにすぎなかつた。利玄の作品が歌壇の主潮のアンティテーゼとしてあらはれながら最初にその一群から認められたのはこの爲であらう。

然るに病臥期に入つて利玄の作品群は重大な飛躍を經驗し輝き始めた。定型律はもはや固定したものではなく單なる基本的制約の標準を示す基準律として流動せられ始めた。そこに現はれた所謂「破調」は「破調」としてとらへるよりも、むしろ新しきダイナミックな構成的リズムへの先驅徴候として敏感に觸手さるべきものであつた。明朗・直截な作品・新らしきリズム・詠歌の驅逐が全く萌芽的にはあつたが、徐々現はれはじめ、傳統短歌域内の「改良」は漸く埒を越えて變革へ動き始める。現實社會生活との隔離と死への直面とは、生活安定によつてひたすら藝術精進へ驅つた。やがてあらあらしい冴え、深さ、鋭さを。とおもふと草土社風のタツチ。それらが現實に、或はいづこともなく立單める牧歌的な霧のなかにひびく。「折にふれて」「室内花卉」「曼珠沙華の歌」の傑作があらはれた。新しい展開が見え隠れする。そしてすべてそのまゝ死の中斷だ。

右と同じ書に於ける川田順氏の後記を抄出する。

「十六歳竹柏園に入つて以來浪漫主義の匂ひ深い相聞歌「かたみぐさ」百四十九首を唯一の遺産として、此の大切な二十年は過ぎ去つてしまつた。やがて浪漫主義に告別する日が到來した。大正六年(三十六歳)の秋大阪南郊の借家住居の時「阿部野のほとりに住みて」十八首の作が出來た。予は利玄の「萱山」に於けるが如き大覺は獲なかつたが、阿部野の作によつて人知れぬ喜びを感じた。大正七年春「伎藝天」出版の前後から、漸く他流の主要歌人等と交通しはじめ、新に歌の眼界が展けて來た。さうして次の山海經・青淵時代(三十七歳―四十五歳)に歩み入つた。大正八年九月窪田空穂氏と知るに及び、直接間接に氏の感化を受けて、事象の實相を掴み、これを適切に表現する道を學び得た。「山海經」卷一の古寺巡禮歌は氏の感化を裏書するものである。「木津の河原」「天神祭」「海豚の群」などもその頃に於ける練磨の汗の結晶である。かうしてだん／＼予みづからの觀察力と手法とを築き上げて行つた。大正十一年(四十一歳)の八月伊吹登山、琵琶湖周遊の旅行歌五十六首を作り得た時、兎も角寫實歌壇に於ける予といふ一個性の存在を自信するに至つた。翌十三年夏の「熊野歌」七十一首には力の限りを盡くし、十四年六月の「印幡沼のほとり」四十五首には力と共に多少の自在の加味されて來た事を自覺する。要するに山海經・青淵時代は予に取つて歌道への精神向上への努力の十年であつた。息詰まるほど苦しい時も多かつたけれども、作家としての予の爲め生涯の記憶に値する貴い十年であつた。」

次に本課の補材ともなるやうな旅の歌をあげて見よう。

にぎはしく人住みにけり はるかなる木むらの中ゆ 人わらふ聲

青々と 山の梢のまだ昏れず 遠きこだまは、岩たゞくらし

山深く われは來にけり 山深き木々のとよみは、音やみにけり

大き渦を廻りきりし船おほらかに真帆おし張れり外海に向けて

うしほ波巖立ちくづれ幾つらねこの狭まりをひた落ちゆくも

速水の瀬戸を騒ねつつ西風ふきて船かしげるに覺めて驚く

ふるぐにの國府の松原冬ながらうららうららと照る日あたたか

奈裏へゆく道白々とあたたかき日曬なれば學童も來ず

奥山の谷間の榊の木がくりり水泡飛ばして行く水の音

わが馬の歩みおのづから止まりて野中の萩の花喰ひにけり

ささやかなる湖をめぐりて日あたる芝山の道いく筋も見ゆ

(以上 釋道空)

(以上 川田順)

(以上 尾山篤二郎)

(以上 島木赤彦)

八 蜜 柑

芥川龍之介

一 解 題

1 作者

芥川龍之介 アクタガハリユウノスケ 大正時代の文學者。明治二十五年三月一日、東京市京橋區入船町に生まれた。父は新原敏三。幼時母の實兄芥川道章の養子となり芥川姓を名乗る。柳川隆之助・夜來花庵・了中庵・我鬼・澄江堂等の文名・俳號がある。本所江東小學校卒業後、明治三十八年十四歳で東京府立第三中學に入學、在學中夏目漱石・泉鏡花・森鷗外等の著書を耽讀した。四十三年第一高等學校に入學、同級に久米正雄・菊池寛・山本有三・松岡讓・成瀬正一・土屋文明があつた。大正二年文科大學英文科に入り、翌年二月前記の友人及び一年先輩の豊島與志雄・山宮允とで同人雜誌第三次「新思潮」を發刊して文壇出發への覺悟を決心した。大正四年「ひよつとこ」「羅生門」を「帝國文學」に發表したが未だ反響はなかつた。翌年二月再び久米・菊池・松岡・成瀬と共に第四次「新思潮」を發刊、「鼻」「煙草」等を出して好評を得た。七月英文科を卒業、論文は「ウイリヤム・モリス」である。十二年海軍機關學校囑託となり三ヶ年英語を教へたが、大正八年三月同校を辭し大阪毎日新聞社に入り創作に専念した。元來芥川家は舊家であり、彼の少年時の文學的教養は近世文學書によつたが、のち泰西・支那の文學に親しみ、その學殖の豊富なことは當代文學者にその比なしと稱せられた。又創作の方面では小學校時代から回覽雜誌などを作つてゐたが文才が發揮されたのは大學時代からである。卒業後、短篇小説集「羅生門」(大正六年)、「傀儡師」(大正八年)を發刊して、その文壇的地位が確保され、發表する作品は一

作毎にその評價を高めた。「袈裟と盛遠」「地獄變」「奉教人の死」「枯野抄」(以上七年)「きりしとほろ上人傳」(八年)などは、題材を或は平安朝時代に、或は近世初頭にとり、文學史上不朽の珠玉であり、彫琢の文字と警拔の思想とは自然主義末期の文壇を睥睨して颯爽とした香氣を人々に與へた。是よりさき大正二年に瀧野川田端に居を構へたが一時鎌倉に移り、大正七年二十七歳のとき塚本文と結婚し、機關學校を辭するに及び田端に歸つた。大正八九年には「葱」「蜜柑」「秋」等の如く、題材を現實生活から採つた作品をかいいた。普通この期を彼の轉換期といふ。苦惱する自己を現實の翳から見出さうとした時期である。大正十二年から健康は損はれ、作も寡作となつた。一方努力的な「近代日本文藝讀本」五冊を編纂したりして俗事に追はれるやうになつた。大正十五年五月より鶴沼に滞在して心身の安靜に努めたが抄しからず、翌年一月歸京した。しかしこの時代には彼の最後の展開を示すに足る傑作多く「大導寺信輔の半生」「點鬼簿」「河童」などを發表し、且つ谷崎潤一郎と活潑な文藝論争を交はした。また「西方の人」「齒車」「或阿呆の一生」なども書いた。これ等のものの中にはかの「保吉物」と同じく自傳的傾向のものが多い。しかし健康の衰弱と虚無的孤獨感との極、遂に昭和二年七月二十四日田端の自邸において睡眠劑を飲んで自殺した。享年三十六。未亡人及び遺兒比呂志以下三男がある。彼は多藝多才、所謂文人の資質を多分に具へ、短歌、俳句、殊に後者は一家を成してゐた。「水漬や鼻の先だけ暮れ残る」はその最後に残した句である。文學史上に於ける彼の主知的リアリズムの功績は改めていふまでもない。大正時代のインテリゲンチヤの最高峯を行くものとして不朽のものである。著作は、「羅生門」「傀儡師」「影燈籠」「夜來の花」「點心」「沙羅の花」「邪宗門」「春服」「黃雀風」「百艸」「支那遊記」「梅・馬・鶯」「湖南の扇」等。總べて「芥川龍之介全集」八卷に收められてゐる。墓所は東京市下谷區染井墓地。

2 出典

短篇集「沙羅の花」中に收められた短篇「蜜柑」である。大正八年四月作。「沙羅の花」には次の如き自序がついてゐる。

「これは大正五年から大正十一年に至る間の、わたくしの作品の選集である。選の標準は必ずしも、作品の佳否にのみによつたのではない。一卷の中に出来る限り、種々の企圖のもとに書かれた作品を集めたいと思つたのである。沙羅の花は和漢三才圖繪に據れば「白軍瓣狀似山茶花而易凋」と言ふ事である。是等の作品も沙羅の花のやうに凋落し易いものかも知れぬ。かたがたふと思ひついた通り、この選集の名前にする事とした。」

收められてゐる作品は、「羅生門」「鼻」「運」「藪の中」「奉教人の死」「きりしとほろ上人傳」「るしへる」「枯野抄」或日の大石内藏之助」「南京の基督」「秋山圖」「開化の殺人」「舞踏會」「秋」「將軍」「葱」「蜜柑」「魔術」「杜子春」「蜘蛛の糸」「槍ヶ嶽紀行」「南國の美人」「尾生の信」「東洋の秋」「沼」「澄江堂雜記」である。大正十一年改造社發行、四六版四百七十八頁である。

3 主眼及び採擇の趣旨

旅に於ける人生些事のスケッチである。田舎の小驛などによくある出來事を作者の心のカメラに焼きつけられた相として、すつきり寫生した表現力を學ばせたい。前課に於て旅の印象を短歌に表現したのに對し、これは散文とした點に注意がある。而もこの文章の中には人生の憂鬱を救ふものが何であるかといふ問題が取扱はれてゐる。謂はば人生の意義に關する問題である。さういふ問題に對する反省の資料ともしたい。

二 解 釋

1 語 釋

【横須賀】 ヨコスカ 横須賀市。神奈川県三浦半島の東岸に位置し、千葉縣富津洲と相對して東京灣口を扼す。我

が國最古の軍港で、横須賀鎮守府並びに東京灣要塞司令部があり、帝都守護の要領である。文字通りの軍事都市で、市内には海軍工廠・海軍工機學校・砲術學校・海軍

軍法會議所を初め、軍事上の施設が多い。

【檻】 ヲリ (一)猛獸・狂人・罪人などを籠め置くために堅固に造つた圍。(二)駒などを籠めおく埒又柵。こゝは(一)。

【これ等は】 車中には外に一人も乗客のゐないこと、うす暗いプラットフォームには見送りの人影さへ見えないこと、檻の中の小犬が悲しさうに吠え立ててゐることの三つをさす。

【その時の私の心もち】 この心もちは、次に「私の頭の中には言ひやうのない疲労と倦怠とが、まるで雪曇りの空のやうなどんよりした影を落してゐた。」と説明されてゐる。自分の心もちと不思議な位似つかはしい光景を先づ最初に具體的に描き、その環境の中に自分の心境を浮かび出させるのである。

【疲労】 ヒラウ こゝでは肉體的な疲れでなく精神的なそれである。

【倦怠】 ケンタイ 物事に倦き怠る氣持。

【影を落してゐた】 何とはなしに疲労と倦怠の氣持で憂鬱になつてゐる有様。

【日和下駄】 ヒヨリゲタ 足駄の齒の低いもの。雨天ばかりでなく晴天にも用ひるのでこの名がある。

【車掌】 シヤシヤウ 鐵道で列車に乗務する職員並びに電

車・乗合自動車等に乘込み、客扱をする職員。國有鐵道としてはその職務を次のやうに指定してゐる。(一)運轉車掌、列車に乗務し旅客荷物の輸送、列車内の秩序保持、列車の運轉、旅客の指導、風紀の取締等に注意する。

(二)客扱專務車掌、列車に乗務し客扱に従事し、列車内の營業監督、並びに特に指定された時は列車の運轉に關する仕事をもする。(三)荷扱專務車掌、列車に乗務し専ら荷物扱に従事するもので、特に指定された場合は列車の運轉に關する仕事もする。こゝは(二)であらう。

【何か言ひ罵る聲】 遅く來たので乗車の危険を知らせ、早く乗るやうにうながしたものであらう。

【銀杏返し】 イテフガヘシ 中年増の結髪の種類。髪を束ねて、上を二分し、左右に曲げて輪形に結ぶ。

【横なで】 漢汁を手甲で横なでにして拭ふこと。

【輝】 ヒビ 手足面などの皮が寒さに凍え荒れて微かに裂けて疼ぐもの。あかがりの細かいもの。

【萌黄色】 モエギイロ 萌葱色の意。葱の萌え出る色をいふ。即ち黄と青との間色、淺緑。

【霜焼け】 シモヤケ 凍傷に同じ。寒冷が人體に作用せるために起る傷害。濕潤せる寒冷は乾燥せる寒冷に比してその傷害作用が大である。また老人・小兒・虚弱者等には、高度の傷害を來すものである。全身性凍傷と局部性

凍傷とがあり、こゝでは局部性凍傷である。即ち寒冷のため組織液の結晶のため細胞原形質が輝裂し筋肉及び神經組織が甚しく傷害される。血管は初め擴張し流血の増加を來すが次いで血管は收縮し、皮膚は蒼白となる。後には血管の麻痺を來し鬱血を起し、組織内に滲出が起る。最後には血液まで凍結し血行杜絶、組織の壊死を起す。組織の凍結は零下五度で起るが濕潤性寒冷によつては既に八度で起るものである。初め紅斑性凍傷を生じ次いで水疱性となり最後に壊死性となる。

【漫然と】 マンゼンと 何となしに。しまりなく。ぼんやりと。

【凍】 ハナ はなみづ、はなしる。

【せはしなく】 せはしく。いそがしく。

【隧道】 スキダウ (一)鐵道・道路・水路等の交通のため地中に穿つた通路。トンネルの譯語。「隧」とは穴の道。

(二)墓の道。こゝは(一)。

【合點が行く】 ガテンがユク うなづかれる。譯が分る。

【險しい感情】 荒々しい氣持。この感情は五二頁に「私はこの小娘の品な顔だちを好まなかつた。それから、彼女の服装が不潔なものやはり不快だつた。最後に、その二等と三等との區別さへも辨へない愚かな心が腹立たしかつた。」と述べられてゐる。この「不快な」「腹立たし

い」氣持を「險しい」といつたのである。

【頭ごなし】 アタマごなし 人の言ふことをよくも聞き入れず、最初から言ひつぶすこと。

【一旒】 イチリウ 「旒」は旗のたれ。一ながれの旗。

【蕭索】 セウサク 物寂しいこと。

【目白押】 メジロオン 眼白鳥が枝に並び止つて押合ふこと。中のものが押出されると端に行つて止り、又中のものを押出すので、轉じて、小兒がこれを學んで戯れとするもの。

【押しすくめる】 おし屈める。おし縮める。

【いたいけな】 幼くして小さい様。

【喉を高く反らす】 ノドをタカクソらす 仰向く時の姿を具體的に敘した語。

【喊聲】 カンセイ 叫びごゑ、ときのこゑ。「喊」はさけぶ意。

【利那】 セツナ 極めて短少の時間、一分の四千五百分の一。

【幾顆】 イクツブ 「顆」は音「クワ」、訓「つぶ」。

【せつない】 くるしい、衝なし。些かの刺激にも疲労を覺える程の神経であつたので、かうした強いはつきりとした印象は苦しく感ずるのである。

【えたい】 爲體の轉。正體、本性。

【昂然と頭を擧げて】 カウゼンとは自負する貌。今迄冷酷さと腹立たしさでうつむいてゐたのである。それが或朝らかさを得て顔をあげるやうにはなつたが、この田舎娘に對する自負の念を持つた作者の心情を表現したのである。

【まるで別人を見るやうに】 今までは單に下品な顔だちを

持つた、不快にも不潔な服装を着けた、愚かな腹立たしい心を持つた、いやしむべき田舎娘であつた。然し、見送る弟達の勞に報いるために蜜柑を投げた彼女を見た今は、この小娘の優しい心情を考へるやうになつた。單に卑しむべき人ではなくなつたのである。

2 文の構成

第一節 初―五一頁一行 作者が乗車した時の四邊の情景と自身の氣分。

第二節 五一頁二行―五一頁九行 發車の笛が鳴つてから汽車の動き出すまでの間の出來事。

第三節 五一頁一〇行―五二頁八行 入り來つた小娘の風采とそれについての作者の感じ。

第四節 五二頁九行―五五頁二行 作者の隣へ移つて來て隧道口で窓をあけた小娘の動作とその時の情景。

第五節 五五頁三行―五七頁二行 踏切の柵の向うに並んだ男の子と小娘の動作。

第六節 五七頁三行―終 小娘が蜜柑を投げた後の作者の氣持と小娘の様子。

3 文意

曇つた冬の日暮、横須賀發二等客車の隅に腰を下すと疲労と倦怠とに全く力を失つた孤獨の心もちと似つかはしいあたるの情景であつた。發車の笛がなると、けたまほしい日和下駄を響かせて十三四の小娘がかけて來て二等室に入つた。小娘の下品な顔だちを好まず、不潔な服装が不快で、二等三等の區別も辨へぬ愚かな心が腹立たしいのが作者の氣持であつた。

しかも小娘は隧道に入らうとする入口で窓を開けようとする。そして列車が隧道になだれこむと同時に戸は落ちて煤煙は車内にながれ込んだ。この動作を小娘の氣まぐれと思つてゐる作者、元來咽喉を害してゐて息もつけない程咳き込まなければならぬ作者には頭ごなしに叱りつけるに價するものであつた。

しかもそれは奉公に出る姉を送らうとして出かけて來た弟たちへの別れの一時を持たうとするものであつた。踏切の柵の向うに並んだ三人の弟に五つ六つの蜜柑は投げ與へられた。

一切の事を了解した作者、この情景を印象づけられた作者は、別人を見るやうな思ひで小娘を注視するのであつた。そして憂鬱だつた作者の心にはえたいの知れない朗らかさが湧き上つて來た。

4 鑑賞批評

この作品は芥川氏の轉換期を示すものであつて（參考欄參照）作者の心境がかなり濃厚に出てゐる珍しい作品である。さうした心理描寫の緻密さと、氏獨特の無駄のない表現様式とを探つて鑑賞批評を進めて見よう。

第一節に於て作者の心境と四邊の情景との一致の様を説明するのに如何にもよく道具を描へてゐる。「曇つた」「冬の」「日暮」である。私の外に「一人も乗客はゐなかつた。」うす暗いプラットフォームにも「見送りの人影さへ跡を絶」つてゐる。唯「檻に入れられた小犬一匹、時々悲しうに吠え立ててゐた。」孤獨の寂寥と、陰鬱とに隈どられたところは充分にこれらの材料から浮かび上つてくる。その繼ぎとして「これ等は、その時の私の心もちと不思議な位似つかはしい景色だつた」といつた。更に作者は主人公の心境に一層説明を加へてゆく。その説明の仕方を比喩の方法に求め、それが如何にも適切である。「疲労と倦怠とが、まるで雪曇りの空のやうなどんよりとした影を落してゐた」ものうさの極り、徒らに神經だけが高ぶらうとするやうな、さうした氣分をよく表現してゐると思ふ。

第二節は、發車の笛から汽車の動き出すまでの間の極く短い間の出來事であるが、少しの緩みも見せず、必要にして

缺くべからざる條件ばかりを彫り出した様な描寫である。發車の笛の後の作者の心を「かすかな心の寛き」を感じたといつてゐるあたり緻密な心理描寫である。尙「眼の前の停車場がするすると後すざりを始めるのを待つともなく待ちかまへてゐた」といふあたり印象的な鋭い表現である。

第三節には小娘の風采の描寫について作者の心持の表現がある。「好まなかつた」「不快だつた」「腹立たしかつた」と漸層法を用ひてその都會人らしい神經を彫り出して見せた。

第四節に至つては小娘の動作によつて一層感情は冷酷になる。「腹の底に依然として險しい感情を蓄へてゐたのであるが、それが冷酷な眼になつて表れてくる。戸が落ちて煤煙が流れ込むと頭ごなしに叱りつけたいやうな感情になる。事件の進みに従つて激しい感情が次第につのつてゆく様を手際よく描き上げてゆく技巧が巧に用ひられてゐる。

然るに第五節に至つて事件は急に感激的な場面をあらはして来る。先づ第一に踏切のあたりの風景描寫である。「みすばらしい」「ごみごみと狭苦しく」「ものうげに暮色を揺つて」「蕭索とした踏切」「曇天に押しすくめられた」「陰惨な風物と同じ様な色の著物」何れも陰惨な光景でぬりつぶされてゐる。そこへ心を躍らすばかり暖かな日の色に染まつてゐる蜜柑が五つ六つ空から降つて来るのである。この鮮やかな蜜柑の色は、陰惨なる世界の輝かしい點景であるばかりでなく、憂鬱な人生を救ふ光でもある。

第六節には芥川氏その人が明に顔を出してゐる。踏切と、小鳥の様に聲をあげた子供らと、鮮やかな蜜柑の色と、さうした印象が「せつない程はつきりと」焼きつけられ「えたいの知れない朗らかな心もちが湧き上つてくる」のを意識しつつ、尙作者は「昂然と頭を擧げて」ゐる。どこまでも冷たい作者の心である。

この作品は濃かに作者の心が頭を出してゐる。朗らかな心もちが湧き上つて來ても、それをじつと押へて昂然と頭をあげて小娘を注視する作者の心である。

三 備 考

1 指導研究

一節毎に鮮かに事件を展開させてゆく筆致と、全體の氣分を醸し出す爲に用ひられた用意、それから作者の心理描寫等を明瞭につかませたい。そこに芥川氏獨特の冴えた筆力を會得する事が出来るであらう。

尙この文章は、不快に腹立たしく思はれた小娘が何故に別人のやうに見えて來たか、又疲勞と倦怠とに包まれてゐた作者が何故に朗らかな心持を感じるに到つたかといふ點に主題があるのであるから、これを指導の手がかりとして、文意の中心に肉迫して行くやうにしたい。

2 參 考

芥川氏の作品並びに人物に關する論説は

龍之介とチエホフ	文章世界 十四卷 四號	岡野陽吉
芥川龍之介論	文章世界 十四卷 四號	石坂養平
芥川龍之介君の事	文藝春秋 五卷 十一號	島崎藤村
作家としての芥川氏	文藝春秋 五卷 九號	片岡鐵兵
芥川龍之介氏の作品	國語と國文學二卷 六號	片岡良一
芥川龍之介	改 造 九卷 九號	恒藤恭
芥川龍之介論	早稻田文學 二二八	宮島新三郎
芥川龍之介の人と作	新潮 二四年中、七	室生犀星

等その數は多いが、その中一、二を惹いて参考としよう。先づ片岡良一氏の論旨を抄出する。

「藝術その他」といふ断片的な感想文の一節に、芥川氏は、すべての藝術活動の意識的なものであることを力説してゐる。此の主張は、藝者としての氏の態度をはつきりと物語つてゐるものでなければならなかつた。氏の作品の大半のものには一絲亂れぬ均整と、何處にも過不足のない彫琢と洗煉とが行き渡つてゐた。作品全體として見ればそこに取扱はれた材料に對する作者の把握と支配とが十分過ぎる程十分に感ぜられ、部分的に言へば、抜け目のない確實な材料の布置と、一語一語にも作者の意識の張りきつた文字の使用とが感じられた。

のみならず、さういふ正確主義——一點の胡魔化しをも自ら許すまいとする精進の氣持は、無論その作品に扱はれた材料の諸視の中にも現れてゐた。人間の心理や事件の推移を描かうとする時の氏は、「人間でも事件でもその本來の動き方はたつた一つしかない。その一つしかないものをそれからそれへと見つけながら書いてゆく」といふ氣持を忘れなかつた。全體としても部分としても常に徹底的に完成された藝術品である事、この點芥川氏は確にわが文壇で獨歩の位置を占めてゐる。

氏が花々しく文壇に現れたのはあながち氏一流の洗煉された技巧や完成された作品の立派さなどのためばかりでも無かつた。普通に歴史物と呼ばれてゐる數多くの作品に於て、此の作者が取扱つた古典的な材料と、その材料に對する輕快にして機智的な作者の取扱ひ方が、その頃一様に陰慘な人生記録となり了せた自然主義文學にそろ／＼退屈しかけた當時の讀者階級に、變に好奇的な興味と、清新な感觸とを與へたからでもあつたのだ。

然し芥川氏の所謂歴史物に於ける成功は、素よりその材料關係から來たものばかりではなかつた。作家としての天稟も、その作品の到るところに輝いてゐた。そこには如何にも氣の利いた主題の選擇があつた。さういふ主題に相應しい縱横の機智と輕妙さがあつた。捉へ得た材料を粗上にして、心理解剖のメスを振る場合などには、かなりの鋭さを示しました。純粹の都會人として洗煉された神經と、鋭い頭との所有者であつた氏は、人間の心の微妙な動きに對する驚くべく細かな感受性と、緻密な觀察力とを示した。複雑な人間の氣持に對する正しい理解をも有つてゐた。極僅かな刺戟に對する人間の心の反應をも見逃さない鋭さと敏感さとを具へて

ゐた。だから或時の氏の作品は、どうかすると人間の心の照魔鏡のやうにも思はれた。或時は才に走り過ぎたと思はれる缺點のある場合もあるが、その才には大抵都會人的な輕快なユーモラスが絡み、細い感受性と巧緻を極めた描寫とがあつた。然し惜しいことにさういふところにも水々しさと自然の匂ひとは感ぜられなかつた。自然の匂ひと肌懐しいやうな温かさは感じられなかつた。何處か死んだ、冷い概念を、細かく細かく説明してゐるやうな感じを餘儀なくされずにはゐなかつた。これは純粹な都會人がよく持つやうに、その微妙な神經の動きが、藝者としての氏をして容易にその心を外界からの觀觀に任すまいとさせ、そこに自ら理知的な思考と巧緻を極めた技巧との陰に、自分自身の心の影をくらまさうとするやうなこともなつて來る。そこには一種の窮屈さも生じ、澄み切つた冷たさ——と言ふよりも寧ろ裏打ちされたものの頼りなさもそこから生れた。

氏は又何物の權威をも認めず、何等の思想をも熱意を以て振翳しもしなかつた。それは一面こちたい思想に執着する田舎漢らしい感激性や、權威を認めて景仰する素朴さやのなことを意味するものだと思ふが——さうした氏の鋭い感受性と理知とが、すべての物の真相を一目で見抜いて了ふ以上、さういふ感激性や素朴さが無くなるのも無理もないと思ふが、兎に角氏は、西郷隆盛を描いても、大石内藏之助を描いても、芭蕉を描いても、乃木將軍を描いても、トルストイやツルゲネフを描いても決して彼等の偉大さや深刻さに或る感銘を感じて、之を描き生かさうとはしなかつた。何時でもさういふ人々に普通の評價では忘れられてゐる或人間的な卑小さを見出さうとしてゐるのだ。

かうした芥川氏の態度は所謂歴史物の場合はまだよかつた。しかし一度氏自身の生活に即した或一面を材料とした作品をものしよとするとする場合になつては、氏はその態度の當然の結果として、暢達さと自在さとを失つた。そこでは當然作者自身の心の端的なる表現が要求された。作者としての素朴さが要求された。が芥川氏は、さういふ要求に直面して却て、一種の困惑と狼狽とを感じたらしい。自ら氏のさういふ方面の作——所謂現實物に於ては歴史物には殆ど無かつた觀照の不熟さと、一種の濁濁とが認められた。無論歴史物程數に於て多くはなかつたけれども、兎に角氏の藝術の二分野の一つである現實物は、かくてその大部分が失敗の作とならねばならなかつた。「毛利先生の話」「ひよつとこ」「手巾」「片戀」「猿」はそれである。

然し芥川氏は素より聰明な、然も自意識の強い作家だった。自分の作品のもつさういふ缺陷に素より鈍感ではあり得なかつた。そこに氏の心の動搖と解脱のための闘ひとがあつた。氏は氏自身の殻に反抗した。「みかん」が書かれた。「疑惑」「秋」が書かれた。南部修太郎氏がその頃の芥川氏の作品を評して「轉換期にある藝術」と呼んだ。文壇は芥川氏の藝術の動搖を問題にして多少賑はつた。「みかん」の如きは、極めて小さな作品であるにも係らず、かなりの注目と好評とを喚び起した。氏の第五創作集「影燈籠」には、南部氏も言つてゐるやうに、大體此の動搖に於ける作品が収録されてゐた。裸にならうとしてもがいてゐる作者の懺み——そんなものが感じられた。

が結局、芥川氏は氏自身の殻を乗り越えることが出来なかつた。が、ただ氏の作品が、その初期時代にかなり驚異に充ちた印象を文壇全體に與へたのと同様に、後進文壇に殊にその人生的價値よりも寧ろ美的價値に重きを置いた作風の故に、かなり深い影響を及ぼしてゐること、その文章の細い金縷線のやうに冴えた美しさとは氏の作品を論じた文章の最後には是非とも忘れずに附け加へて言つて置かなければならぬものだらうと思ふ。

島崎藤村氏が「飯倉だより」の中に「芥川龍之介君のこと」と題して書かれたものを抄出しよう。(文藝春秋・昭和五年十一月)

芥川君が分け入つた道の薄暗さを知るには「ある阿呆の一生」にまさるものはなからう。あの中に感知せらるるやうな作者の悲愴な激情も、何人の假面をも剃いで見ようとしたやうなあの勇氣も、病人のやうに繊細なあの感覺も、世紀末的な詩人を思ひ出させる。それにしても日頃私の想像してゐた芥川君はもつと別の人で、あれほど君が所謂「世紀末の惡鬼」にさいなまれてゐようとは思ひがけなかつた。

X X X X X X

正宗君は芥川君の「孤獨地獄」や「往生繪卷」などを引いて、早くから芥川君の内部に潛んでゐた孤獨感を指摘し、さういふ意味での、芥川君が單なる藝術至上主義者でなかつたことを言ひ、芥川君が孤獨を痛感した人達に無關心ではゐられない人であつたと言

ひ、それあるが故に以前から芥川君の作品に共鳴を感じたと言つてゐるのは成程と思つて讀んだ。

X X X X X X

芥川君はボオヤボオドレエルの闇黒とギョエテの日光との間を往來した人のやうに見える。そのいづれへ行くにも君はあまりに聰明であり過ぎたかとも思ふ。

X X X X X X

慧敏であることは、もとより多くの人が芥川君に許したところである。もつと君が心の貧しい人であつたなら、と思はれないでもない。

X X X X X X

春陽堂の明治大正文學全集には室生犀星氏が次の如く評してゐる。

「蜜柑」愛すべき小品であり田舎の小驛によくある來事である。此のなかの少女は無邪氣さを傷められてゐるに拘らず、自分には興味深く見られる少女である。

當時この小品「蜜柑」の評判のよかつたのは、スツキリした人生些事のスケッチであり、何時もの龍君の物々しい用意手法が隠されてゐたためであらう。

九文鳥

夏目漱石

一 解 題

1 作者

夏目漱石 ナツメソウセキ 英文學者・小説家。本名は金之助。慶應三年正月、江戸馬場下（現在牛込區喜久井町一番地）に、名主小兵衛直克の末子として生まれた。三歳の時養子にやられたが、數年後實家に歸つた。一つ橋中學校（東京府立第一中學校の前身）を半途退學後、二松學舎・成立學舎に學び、明治十七年東京大學豫備門豫科（第一高等學校の前身）に入り、途中一回原級に留つて、二十一年本科に入り、二十三年卒業。帝國大學文科大學に入學、英文學專攻。特待生となり、また學費補給のため早稻田專門學校に教鞭をとつた。二十六年英文科卒業。更に大學院に入學。高等師範學校（東京高等師範學校の前身）。松山中學校・第五高等學校に教へ、三十三年文部省の命により英語研究の爲英國へ留學。三十六年歸朝、第一高等學校教授に任じ、東京帝國大學講師となり、三十七年から明治大學にも講義したが、四十年一切の教職を辭し、朝日新聞社員となり、出勤せずして文藝的述作を掲載することとなつた。四十二年滿洲遊行、翌年胃潰瘍の爲吐血して重態に陥つたが、この大患によつて人及び藝術上に一轉機を來した。四十四年博士號辭退。大正五年十一月胃潰瘍の爲大出血二回、十二年永眠した。享年五十。明治二十五年頃から句作に専念して子規と交遊が厚く、俳壇にも地位を占めてゐた。三十八年一月から雜誌「ホトトギス」に「吾輩は猫である」を掲載して一躍文名を轟かした。三十六年頃からは繪筆を弄び、壯年なる大正五年頃も頻りに書畫をものしてゐる。又五年夏から秋にかけては漢詩を作ることが多

かつた。著作には「吾輩は猫である」を始め「倫敦塔」「薙露行」「坊ちゃん」「草枕」「虞美人草」「三四郎」「それから」「門」「彼岸過迄」「行人」「心」「硝子戸の中」「道草」等があり、絶筆「明暗」は未完のまま遺された。小説・俳句・書簡・紀行・文學論・文學評論・隨筆等總べて漱石全集に收められてゐる。

2 出典

「文鳥」の中から、文鳥を始めて世話した日の觀察に成つた部分を抄出したものである。「文鳥」は明治四十一年六月十三日から二十一日まで九回に亘つて大阪朝日新聞に掲載せられたもので、後、明治四十一年十月の雜誌「ホトトギス」にも再録せられ、更に四十三年單行せられた隨筆・紀行集「四篇」にも收められてゐる。漱石全集第九卷・同普及版第十三卷所收。（漱石全集、全十四卷。漱石全集（普及版）全二十卷、漱石全集刊行會發行）

3 主眼及び採擇の趣旨

本課では禽鳥美の繪畫的描寫を讀ませようとする。文藝的教材である。

二 解 釋

1 語 釋

【文鳥】 プンテウ 燕雀目、金腹科に屬する鳴禽。體は蒼黒色で、首と上尾筒とは黒色、頬及び下尾筒は白色。腹部は少しく葡萄酒色を帯び、嘴・圍眼部及び脚は淡紅色。【大儀】 タイギ（一）重大な儀式。大典。（二）輕々しくないこと。骨の折れること。倦みつかれてものういこと。おつくうなこと。くたびれ。疲労。（三）他人に對し骨折

を慰勞するにいふ語。御苦勞。こゝは（二）。

【明るみ】 アかるみ 明るい所。

「み」（接尾）形容詞の語幹に添へてこれを名詞化し、その状態・氣味を表し、又はその状態の場所を表す。

【淡紅色】 トキイロ（原文振假名）一般には「鶉色」「鶉色」「鶉色」等と書く。染色の色。鶉（涉禽類の一種）の翼羽の色のやうな灰色を帯びた薄紅。とき。水紅色。

【踏まへた】 フまへた 「踏まへる」は「踏む」の延音「踏まふ」の口語。(一)たしかに踏む。踏みつけて抑へる。ふんまへる。(二)據として手放さないやうにする。根據に構へる。(三)ふみわけける。思案する。思慮する。こは(一)。

【華奢】 キヤンヤ (一)よわ／＼しく姿のよいこと。様子のよいこと。かほそくしなやかなこと。(二)器物のよわよわしくがんじようでないこと。(三)風流。みやび。こは(一)。

【工合】 グアヒ 「具合」とも書く。(一)ありさま。かつかう。やうす。調子。(二)適合すること。あんばい。かげん。(三)健康状態。あんばい。かげん。こは(一)。

【處置に窮した】 始末に困つた。やり場に困つた。

【羽搏】 ハバタキ 「羽撃」とも書く。鳥が翼をひろげてうつこと。はたゞき。はぶき。はぶり。

【伽藍】 ガラン 梵語「僧伽藍摩」の略。衆僧の集合する

2 文の構成

第一節 初一六〇頁一行 朝起きて箱から出してやつた文鳥の眼と足。

第二節 六〇頁二行―六一頁末行 顔を洗つた後で餌と水を入れてやつた時の文鳥の羽搏。

第三節 六二頁一行―六五頁一行 執筆の合間に見た、粟をつゝく文鳥。

園林の義であるが、後にはその建築をも含めていふに至つた。寺院。

【筆と紙とが一緒にならない】 筆が下せない。想が文になつて来ない。

【擱いて】 オいて さしおく。手に持つたものを下におく。

【淡雪の精】 淡雪の淡雪たる所が具體的な形となつて現れたもの。「精」セイ 靈。精靈。精魂。すべて、ものたましひをさす語で、森羅萬象は、その中に籠る靈力の顯れであると思ふ原始人的な思想に基づくものであるが、普通には、その靈が種々の姿に權化・化身して現れたものをさす場合が多く、随つてその姿は殆ど常にその物の性質を具象化してゐる。

【草程な小さい人】 草ほど小さき人に生れたし 漱石

【寂然】 セキゼン しづかなさま。さびしいさま。寂々。

第四節 六五頁二行―終 夕方見た、水を飲む文鳥。

3 文意

文鳥の可憐さ、美しさ。

4 鑑賞批評

〔目が覺めると硝子戸に日が射してゐる。忽ち文鳥に餌をやらなければならぬと思つた。けれども起きるのが大儀であつた〕—文鳥の籠が鈴木三重吉氏・小宮豊隆氏によつて運び込まれた翌朝のことである。いかにも無造作な、それでゐて眞を傳へる筆致の輕妙さが基調をなしてゐる。僅かな章句の間に、時の背景と共に、微妙に描かれてゐる。

〔今に遣らう、今に遣らうと考へてゐるうちに、とうとう八時過になつた。仕方がないから顔を洗ふ序に、冷たい縁を素足で踏みながら、箱の蓋を取つて鳥籠を明るみへ出した〕—二つの氣持のからみ合ひが解けてゆく解け具合が「仕方がないから顔を洗ふ序に」に示されてゐる。さういふことに馴れない人の億劫さであると共に、何事にも向きにならない都會人的な、教養のある人らしい餘裕が示されてゐる。何よりもさういふ作者の姿が浮かんで来る。

〔文鳥は眼をばちつかせてゐる。もつと早く起きたかつたらうと思つたら氣の毒になつた〕—二つの氣持のからみ合ひが解けて、文鳥のことだけになりきつた、なり方が如實に描かれてゐる。「仕方がないから」といつた人が「氣の毒になつた」といふまでになつた轉化はいふまでもなく、「眼をばちつかせてゐる」文鳥の可憐さから來てゐる。一語一句照應の緊密さと發展の鮮かさに驚かされる。

〔文鳥の眼は眞黒である。臉の周圍に細い淡紅色の絹絲を縫ひつけた様な筋が入つてゐる。眼をばちつかせる度に、絹絲が急に寄つて一本となる。と思ふと、又丸くなる〕—前節の「文鳥は眼をばちつかせてゐる」の展開である。寫生の妙、觀照的確さ、驚歎に堪へない。

〔籠を箱から出すや否や、文鳥は白い首を一寸傾けながら、此の黒い眼を移して始めて自分の顔を見た。さうしてちちと鳴いた〕——その可憐な文鳥がその可憐さを作者に向けた瞬間がよく把へられてゐる。白い首を一寸傾けながら顔を見て、ちちと鳴いたのは、初對面の朝の挨拶にも適つてゐて微笑ましい。「此の黒い眼を」が、前の章句の描寫を承けてよく利いてゐることはいふまでもない。

〔其の一本を軽く踏まへた足を見ると、如何にも華奢に出來てゐる。細長い薄紅の端に眞珠を削つた様な爪がついて、手頃な留り木をうまく抱へ込んでゐる〕——いよいよ文鳥の動く姿を描く前提として、留り木を踏まへた、足を寫生してゐるのであるが、それが一箇の生きた藝術品に變化されて來る。

〔すると、ひらりと目先が動いた。文鳥は既に留り木の上で方向を換へてゐた。しきりに首を左右に傾ける。傾けかけた首をふと持ち直して、心もち前へ伸ばしたかと思つたら、白い羽根が又ちらりと動いた。文鳥の足は向うの留り木の眞中あたりに工合よく落ちた。ちちと鳴く。さうして、遠くから自分の顔を覗き込んだ〕——文鳥の動きぶりの輕快さ、最後に留り木に留つたのを、「文鳥の足は向うの留り木の眞中あたりに工合よく落ちた」といふあたり、生き動く畫として見てゐるかのやうである。再びちちと鳴き、作者の顔を見る動作で留めてゐる照應もいゝが、今度は「遠くから」といひ、「覗き込んだ」といふ變化にも用意が見える。

〔同時に左の手で開いた口をすぐ塞いだ。鳥は一寸振返つた。さうして、ちちと鳴いた。自分は出口を塞いだ左の手の處置に窮した〕——小鳥に餌をやる時の心得を忘れずに、左手で出口を塞いだのであるが、この文鳥の可憐さは、この心得が間違つたことであるかのやうに感じさせたのである。「左手の處置に窮した」といふ言葉は、作者の感じてゐる文鳥がどんなに無心な美はしい存在であるかが、對照法で示されてゐると共に、そこに作者の道德的美的潔癖性が窺はれる。

〔自分は急に自分の大きな手が厭になつた。粟の壺と水の壺を留り木の間に漸く置くや否や手を引込みました〕——對比に

よつて益々文鳥のさゝやかさ可憐さはつきりして來る。

〔やがて一團の白い體が、ぼいと留り木の上を抜け出した。と思ふと、綺麗な足の爪が、半分程餌壺の縁から後へ出た、小指を掛けても、すぐ引繰返りさうな餌壺は、釣鐘の様に靜かである。流石に文鳥は輕いものだ。何だか淡雪の精の様な氣がした〕——「一團の白い體」といひ、「淡雪の精の様な」といつてゐる上に、作者の文鳥が髣髴せられる。更にそれが「ぼいと……抜け出した」はよくその動作を生かしてゐる。「半分程……後へ出た」もよく見てゐる。餌壺の重さを「釣鐘の様」といひ、文鳥の輕さを「淡雪の精の様な」といつてゐる對照的誇張法の適切さはいふまでもない。

〔文鳥は、つと嘴を餌壺の眞中に落した〕——この「眞中に」といふ所が、何といふことなしに心を惹く。さすがに文鳥だとしても言ひたい氣持だ。以下の粟の食べ方の寫生もうまい。譬喩も利いてゐて美しい。

〔嘴の色を見ると、紫を薄く混ぜた紅の様である。其の紅が次第に流れて、粟をつつく口さきの邊は白い。象牙を半透明にした白さである〕——かういふ靜的な説明も前後の文に應じて生動してくる所がやはり巨匠の筆である。

〔それでも餌壺だけは寂然として靜かである。重いものである。餌壺の直徑は一寸五分程だと思ふ〕——餌壺の動搖しないことをかくまで念を入れていつてゐる所に、作者が如何に文鳥の輕快さに愛著の眼を向けてゐるかが示されてゐる。ありあまる心で一羽の文鳥に對してゐる。何か盛り上り、充ち溢れて來るものを感じさせられる。表現の俳句的な簡潔さと寫生的な適確さが新鮮な文致を成果してゐる。文鳥に深い愛著を寄せつゝ、しかも文鳥をもその心をも冷靜な心で眺めてこの具體的表現に達してゐる力量は感歎の外はない。

三 備 考

1 指導研究

讀みに於て、少し心を集中して讀み進めると、一語一句、皆新しい陰影をもつて生かされてゐることに感歎を禁じ得ない。しかも一語一句が互に結び合ひ、一章が他の一章へ展開してゆく緊密さには企及すべからざるものがある。さういふ點に心を潜めて讀み味ははせることが指導の根幹であらう。

解釋に於ては、敘述の問題としての寫生や譬喩のうまさを一々あげることには始まつて、——恐らく全文どこもあげられてしまふのが當然であらう。——更にその應用の至過程たる構想が統覺せられて來るかと思はれる。が構想は時間的・生動的發展で、しかも各段が靜止的觀察から活動的觀察へ、全體的直觀から部分的觀察へといふ方向を辿つてゐる。主題は一語一句の末々までよく浸透し、浸潤してゐるといつてよいであらう。

尙、本課は、文鳥を手に入れて翌日始めて餌をやる時のことであるから、解釋に際してはこの事を忘れてはなるまい。殊に籠の戸をあけて左手で出口を塞いで、文鳥に對して氣の毒に思ひ、左手をもてあます所は、教へられたまゝにやつた仕種であるだけに面はゆい感じを持たせられたのであつて、作者の人間の敏感さが働いてゐる。作者自身が受身で、餘所餘所しい、いつもの態度から始まつて、段々關心を深くし、全心を打込んでゆく過程も注意すべきであらう。

2 参考

本課に先立つ部分を原文から左に引用する。

十月早稻田に移る。伽藍の様な書齋に只一人、片附けた頬を頬杖で支へて居ると、三重吉が來て、鳥をお飼ひなさいと云ふ。飼つてもいいと答へた。然し念の爲だから、何を飼ふのかねと聞いたら、文鳥ですと云ふ返事であつた。

文鳥は三重吉の小説に出て來る位だから奇麗な鳥に違ひなからうと思つて、ぢや買つて呉れ玉へと頼んだ。所が三重吉は是非御飼ひなさいと、同じ様な事を繰り返してゐる。うむ買ふよと矢張り頬杖を突いた儘で、むにやと云つてうちに三重吉は黙つて仕舞つた。大方頬杖に愛想を盡かしたんだらうと、此時始めて氣が附いた。(中略)

何しろ言ひ出したものに責任を負はせるのは當然の事だから、早速萬事を三重吉に依頼することにした。すると、すぐ金を出せといふ。金は儘に出した。三重吉はどこで買つたか、七子の三つ折の紙入を懐中してゐて、人の金でも自分の金でも悉皆此の紙入の中に入れる癖がある。自分は三重吉が五圓札を儘に此紙入の底に押し込んだのを目撃した。

斯様にして金は儘に三重吉の手に落ちた。然し鳥と籠とは容易にやつて來ない。(中略)

そのうち霜が降り出した。自分は毎日伽藍の様な書齋に、寒い顔を片付けて見たり、取亂して見たり、頬杖を突いたり已めたりして暮してゐた。戸は二重に締め切つた。火鉢に炭ばかり繼いでゐる。文鳥は遂に忘れた。

所へ三重吉が門口から威勢よく這入つて來た。時は宵の口であつた。寒いから火鉢の上へ胸から上を翳して、浮かぬ顔をわざとぼてらして居たのが、急に陽氣になつた。三重吉は豊隆を従へてゐる。豊隆はいゝ迷惑である。二人が籠を一つ宛持つてゐる。其の上三重吉が大きな箱を見き分に抱へてゐる。五圓札が文鳥と籠と箱になつたのは此の初冬の晩であつた。(中略)

成程立派な籠が出來た。臺が漆で塗つてある。竹は細く削つた上に、色が染けてある。それで三圓だと云ふ。安いなあ豊隆と云つてゐる。豊隆はうん安いと云つてゐる。自分は安いか高いか判然と判らないが、まあ安いなあと云つてゐる。好いになると二十圓もするさうですと云ふ。二十圓は是で二返目である。二十圓に比べて安いのは無論である。(中略)

寒いだらうねと聞いて見ると、其の爲に箱を作つたんだと云ふ。夜になれば此の箱に入れてやるんだと云ふ。籠が二つあるのはどうするんだと聞くと、此粗末な方へ入れて時々行水を使はせるのだと云ふ。是は少し手数が掛るなと思つてゐると、夫から糞をして籠を汚しますから、時々掃除をして御遣りなさいとつけ加へた。三重吉は文鳥の爲には中々強硬である。

それはいゝ引受けると、今度は三重吉は袂から粟を一袋出した。是を毎朝食はせなくつちや不可ません。もし餌をかへてやらなければ、餌壺を出して穀丈吹いて御遣りなさい。さうしないと文鳥が買のある粟を一々拾ひ出さなくつちやなりませんから。水も毎朝かへて御遣りなさい。先生は寢坊だから丁度いゝでせうと大變文鳥に親切を極めてゐる。そこで自分もよろしいと萬事受合つた。

所へ豊隆が袂から餌壺と水入を出して行儀よく自分の前に並べた。かう一切萬事を調べて置いて、實行を逼られると、義理にも文鳥

の世話をしなければならなくなる。内心では餘程覺束なかつたが、まづやつて見ようとまでは決心した。もし出来なければ家のものが、どうかするだらうと思つた。

やがて三重吉は鳥籠を叮嚀に箱の中へ入れて、縁側へ持ち出して、此所へ置きますからと云つて歸つた。自分は伽藍の様な書齋の真中に床を展べて冷かに寝た。夢に文鳥を背負ひ込んだ心持は、少し寒かつたが眠つて見れば不眠の夜の如く穩かである。

一〇 柿 二 一 つ

高 濱 虚 子

一 解 題

1 作者

高濱虚子 タカハマキョシ 本名は清。俳人・小説家。明治七年二月松山市に生まれた。池内庄四郎の末子。祖母の家系を嗣いで高濱姓を名告つた。二十四年松山中學在學中、同學の河東碧梧桐を介し、東京なる正岡子規を知り、俳句の教を受けた。二十五年第三高等中學校（第三高等學校の前身）に入り、二十七年碧梧桐と共に第二高等學校に轉じたが、同年共に退學して上京、親しく子規に就くに至り、相携へて文學並びに俳句の研究に専念した。殊に新聞「日本」による子規の俳壇革新の業を助けて盡くす所多く、創刊當時より關係してゐた雑誌「ホトトギス」が三十一年八月休刊し、同年十月再刊に際してその編輯に當り、三十五年九月子規病歿の後はその衣鉢をつぎ、名實共にこれを主宰經營して今日に至つてゐる。尙、四十年前後に、俳壇に新傾向運動が起つた當時は寫生文に没頭し、夏目漱石に親近するに至つて力を小説に伸ばし、代表作「俳諧師」を出して文壇に地位を確保した。大正に入り、再び俳壇に戻り、爾來その勢力を挽回し、その流風の普及・擴張を加へて今日に至つた。その主張するところは子規の紹述で、主として客觀寫生を唱道し、近時は花鳥風詠論を掲げて、今日以後の俳句に對し、あるがまゝに自然を觀照すべき所以の道を指示してゐるが、要するに客觀寫生論の延長に外ならぬ。また俳句の形式については、「古壺新酒論」等を出し、自由律の主張に反對して、十七字の定型律を把持すべきことを説いてゐる。他に、明治三十七年には「連句論」を發表して、子規以來の連句を俳文學とする説に反對

し、つゞいて「俳體詩論」を出して俳體詩を試みた。また、彼の小説は寫生文に近く、その描寫法に一種清新な特色を持つてゐる。著書は「柿二つ」の外、小説集に「俳諧師」「鶏頭」「朝鮮」「十五代將軍」「風流懺法」等、俳句集に「俳句入門」「虚子句集」「俳諧馬の糞」「虚子雜詠選集」「進むべき俳句の道」等、文集に「寸紅集」「帆立貝」「新寫生文」等がある。

2 出典

「柿二つ」第一回中、四の全部と五の全部とを抄録したものである。「柿二つ」は正岡子規を主人公とし、著者との交渉を中心として、子規の文學的活動の最も目撃ましかつた數年間を描いた小説で、全篇二十回に分れ、初め大正四年二月から東京朝日新聞に連載され、後單行せられたものである。(「柿二つ」、一冊、大正四年五月、新橋堂發行。)

3 主眼及び採擇の趣旨

文人として偉れた子規の爲人に取材した小説の一節を掲げ、人間觀を豊かにし深くして人間の教養に資しようとした。文化的教材であり、文藝的教材である。

二 解 釋

1 語 釋

【上野の森】 ウヘノモリ 東京市下谷區上野公園の森。もとは松・杉・樅等の巨木が鬱蒼として茂り、又都下有數の櫻の名所であつたが、近來は次第にその面目を改めつゝある。上野公園は、明治六年に公園として指定せら

れ、引續き宮内省の管轄となつてゐたが、大正十三年東京市に賜與。爾來上野恩賜公園と呼ばれてゐる。東京市最大の公園で、西南に不忍池を擁し、寛永寺・東照宮・動物園・帝室博物館・科學博物館・帝國圖書館・東京府美術館・東京美術學校・東京音樂學校等がある。

【根岸】 ネギシ 東京市下谷區上野公園北方の臺下に在る地名。江戸時代には閑靜・風流な土地として著れ、又鶯の名所として初音の里の雅稱まで與へられてゐた。今でも毎年四月、こゝで鶯の啼合會が行はれる。

子規は、明治二十七年二月以來、東京市下谷區上根岸町八十二番地に住んで、その家を獺祭書屋又は根岸庵と稱した。現在は子規庵と稱してゐる。

【この頃】 明治三十年十月。

【彼】 「柿二つ」の主人公。正岡子規。

【彼の熱は云々】 子規は、明治二十二年五月九日始めて咯血した。「子規」の號はこの時から始つたといふ。二十八年滿洲からの歸途更に甚だしく咯血して病勢が進み、二十九年から腰部に疼痛を感じ、遂に脊椎カリエスに冒されるに至つた。以後病は日を追うて重り、カリエスは開口して漏膿し、非常な苦痛を伴ひ、體温は常に三十七度二三分から三十九度位の間を上下したといふ。

【彼は自分を神かと疑ふばかりの云々】 當時子規は新聞「日本」の俳句欄の選をしてゐた。明治二十五年六月「日本」に「獺祭書屋俳話」を寄せ、十一月には日本新聞社に入り、俳論を發表して俳句革新の事業に猛進した。一方には句作も盛にやり、自作並びに同人の句を「日本」に掲げて世に問うた。日本派の名稱が起つたのもこれに

因る。後、一時「小日本」の編輯主任となつたこともあつた。再び「日本」に歸り、以て俳句革新の舞臺となした。子規の「病牀六尺」に「日本」へ掲載の俳句は敢て募集するとはあらねど篤志の人は投書あるべし。投書は紙一枚一題に限る。一枚毎に雅號を記し置くべし。題は其季のもの何にてもよろし。斯く横著にも敢て募集せずなどといふは投書を排斥するの意に非ず。若し募集せず。場合によりては善き句も見落す事あるべく、又初め四五句讀みて其出來加減を試み其儘外の句は目も通さず棄つる事もあるべし。斯かる無責任の見様にてもかまはぬ人は俳句を寄せられたし」とある。

【句】 ク こゝでは、俳句「俳諧の句」の約の意。五七五、三句十七音の律格を有する短い形態の詩。もと長連歌の第一句であつたが、足利末期から獨立した一形態となるに至つたもの。

元來連句の各句及び發句の何れにも用ひた語で、江戸時代を通じて用ひられたが、一般的な用語となるには至らなかつた。明治時代に入つて子規が日本派を起して、この語を専ら發句のみを意味する語として用ひるやうになつてから一般的用語となり、發句といふ語は用ひられなくなつた。

【數限りない句】新聞「日本」の俳句欄の爲に應募せられた句。病主人はその選者なのである。後で「三千の俳句」といつてゐる。

【黑白】コクビヤク (一)黒と白と。(二)是非。善惡。正邪。直。こゝは(一)。

【六十を過ぎた老母】子規の母をさす。子規の母は、名は八重といひ、伊豫松山久松侯の藩儒大原觀山の長女で、八十二歳で歿した。

【二十七になつてまだ嫁がない妹】子規の妹、律をさす。子規の「仰臥漫録」に「律ハ強情ナリ人間ニ向ツテ冷淡ナリ特ニ男ニ向ツテシカモ其事ガ原因トナリテ彼ハ終ニ立ツ能ハザルナリシカモ其事ガ原因トナリテ彼ハ終ニ兄ノ看病人トナリ了レリ(中略)律ハ看護婦デアルト同時ニオ三ドンナリオ三ドンデアルト同時ニ一家ノ整理役ナリ一家ノ整理役デアルト同時ニ余ノ秘書ナリ書籍ノ出納原稿ノ淨書モ不完全ナガラ爲シ居ルナリ(中略)若シ一日ニテモ彼ナクバ一家ノ車ハ其運轉ヲトメルト同時ニ余ハ殆下生キテ居ラザルナリ(中略)彼ガ再ビ嫁シテ再ビ戻リ其配偶者トシテ世ニ立ツコト能ハザルヲ證明セシハ暗ニ兄ノ看病人トナルベキ運命ヲ持チシ爲ニヤアラシ」とある。

【耳を敬てながら…】「敬」は「ソバダツ」と訓む。傾ける

こと。即ち耳を敬てるとは、耳を傾けて熱心にきくこと。

【針を運ぶ】裁縫すること。

【膝の絲屑】裁縫をしてゐる中、いつの間にか膝にたまつた絲屑。

【ながし目】顔をその方向に向けずに、ひとみを斜にして見ることを。横目。

【健啖】ケンタン よく多量に物を食べることを。盛に食ふこと。おほぐひ。大食。

「健」したゝか。ひどく。甚だ。澤山。

「啖」くらふ。食する。

【食指が動いた】シヨクシがウゴいた 今すぐにも食べたいと思つた。食欲がきざした。

「食指が動く」(一)饑應にあづかる前兆にいふ。鄭の子公(公子宋)が食指の動いたのを見て美味を得る前兆としたといふ故事による。(二)轉じて、欲望を遂げようとする念が起る。ほしがる。

「食指」ひとさしゆび。

【慰藉の料】キシヤのレウ なくさめの種。

【底の見えて來た句稿】選が進むに従つて残りの句稿が少くなり、投書函の底が見えて來たのである。

【帝王のやうな威】六六頁にある「神かと疑ふばかりの明

快な判断」といふ語に應ずる。

【念のため】ネンのため 尙一層注意するため。「念」は氣をつけ、注意すること。

【病牀六尺の天地】子規の「病牀六尺」に「病牀六尺、これが我世界である。しかも此六尺の病牀が余には廣過ぎるのである。僅かに手を延ばして疊に觸れる事はあるが、蒲團の外へまで足を延ばして體をくつろぐ事も出来ない。甚しい時は極端の苦痛に苦しめられて五分も一寸も體の動けない事がある。云々」とある。

【京都伏見の桃山に云々】當時愚庵は實際には京都市東山五條の清水坂に近い産寧坂のほとりに庵を結んでゐた。伏見桃山の南麓江戸町に庵を移したのは明治三十三年であつた。

【愚庵】グアン 禪僧。俗名天田五郎。鐵眼と號した。安政元年(二五一四)七月、磐城國平藩(安藤)の藩士甘田平太夫の次男として平城下(現福島縣石城郡平市)に生まれ、幼名を久五郎といつた。明治元年(十五)奥羽二十四藩の同盟が成つて官軍に抗し、六月官軍が平城を包圍するに及び、父母及び妹を近郷に残し兄善藏の後を追つて入城したが、間もなく城が陥つて仙臺に走り、十一月亂が平いで歸郷した時は、父母と妹はすでに行方不明であつた。

四年姓を天田、名を五郎と改め、上京してニコライ神學校に入り、翌年退學して落合直亮に國學を學び、山岡鐵舟に禪を問うた。六年仙臺志波彦神社の權禰宣となり、又石油會社の株券募集に従事し、七年には武官の従者として臺灣平定の軍に従つたが、凱旋の途次鹿児島に赴き桐野利秋の許に寄食した爲、八年歸京と共に政府の嫌疑を受け禁獄三十日に及んだ。この間にも父母及び妹の事は夢寐にも念頭を去らず、九年歸郷して奥羽諸州を探索し、更に北海道に渡り、又北陸に尋ね山陰に求めたが、杳として消息がなかつた。十一年山岡鐵舟によつて靜岡縣清水港の俠客山本長五郎(通稱清水)の許に預けられ、後にはその養子となつて山本五郎と稱したが、十七年舊姓天田に復し、鐵眉の號を以て東海遊俠傳(次郎長)の傳記を著した。十八年大阪内外新報社に入り、鐵舟に介せられて京都林丘寺の滴水禪師に參し、二十年その得度を受けて削髮、鐵眼と號し林丘寺に入つて禪師に事へた。二十五年京都清水に庵室を營み、師より賜はつた偈(打破八識、勿認小智)の中の文字をとつて愚庵と稱するに至り、爾來各地に旅して父母の菩提を弔ひ、又當代の詩人と交つて風月を友とした。三十二年師滴水の示寂に遭ひ、翌年伏見桃山に移庵、三十七年一月こゝに寂した。享年五十一。東海遊俠傳・巡禮日記・血寫經等の著があり、詩稿

和歌等と共に收めて愚庵全集にある。子規と愚庵との文交は、清水庵居の頃から始つたらしく、子規の松蘿玉液に據れば、二十五年には子規は虚子と携へて親しく愚庵を訪ね二十九年には愚庵みづから上京して根岸庵を訪れてゐる。尙、愚庵は明治時代に於ける和歌革新の先驅者の一人であつて、子規の和歌も愚庵に啓發されるところが多かつた。

【維新の戦亂に云々】 愚庵の父平太夫(當時六)は病妻(當時七)・少女延(當時十)を伴つて城南の中山村に避難し、落城の後妻子とともに六部姿となつて立去つたまゝ、消息を絶ち、戦後愚庵の兄善藏が直ちに探索の旅に出た時所得る所がなかつた。爾來愚庵の半生は殆ど全くこの探索に費され、その旅は日本全國に亘つた。明治十二年兄から家祿奉還金の内二百圓の分與を受けた際は、百圓をかけて都下の諸新聞に搜索廣告を出し、翌年は寫眞術を學んで旅寫眞師となつて諸國を巡り、十七年には巫女の言に惑はされてわざ／＼山形まで出掛けたりしてゐる。併し滴水禪師によつて一旦大悟した後の彼は、翩然執着の旅をやめ、二十六年には、父母の冥福を祈る爲に巡禮の旅に出た。

【天龍寺】 テンリュウジ 臨濟宗天龍寺派の本山。京都市左京區嵯峨町にある。足利尊氏が、後醍醐天皇の御冥福

を祈るために建てた寺。貞和元年工成り、天龍資聖禪寺と稱し、疎石を開山とする。現今のは明治三十三年の建築。

【峨山和尚】 ガザンヲシヤウ 臨濟宗の高僧。諱は昌禎。俗姓橋本。嘉永六年(二五二三)京都烏丸四條の町家に生まれ、五歳の時下嵯峨の鹿王院に送られて義堂の薰陶の下に僧侶生活に入つた。義堂の寂後、美濃の正眼寺の滴水に就いて日夜苦修、その徳漸く聞えるに至つた。後しばらく攝津の南宗寺に入り、また鹿王院に歸り雲居僧堂を董したが、明治三十二年滴水の寂に遭つて天龍寺を嗣ぎ、道聲天下に高かつた。翌三十三年十月寂。享年四十九。但し、愚庵が鉗鎚を受けたのは、實は峨山ではなく、その師滴水和尚である。山岡鐵舟も滴水の鉗鎚を受けた一人として名高い。

【鉗鎚】 ケンツキ 「鉗」は金を挟むやつとこ。「鎚」は金槌。鍛冶屋で鍛へるには、焼いた鐵を鉗で挟み鎚で打つ。これを禪宗では師家が學人を鍛鍊する手段に譬へる。

愚庵の師滴水和尚は、機鋒の峻嚴辛辣を以て鳴り、劍客鐵舟でさへ撲たれること屢々であつた位で、その僧堂の制も嚴格を極めたものであつた。愚庵の如きは文字通りにその鉗鎚を受けて苦修したのである。

【此の禪僧も云々】 愚庵は、明治九年(三三)以來肺を病み、十七年再發して重患に陥り、その後一時小康を得たが、二十七年三たび發病して、爾來屢々牀に臥した。二十九年鳴門の觀潮の旅を試みた歸途の如き、咯血七八合に及んだといふ。

【萬葉調】 マンエフテウ 古今調・新古今調と共に和歌史上に於ける三歌調の一。萬葉集の歌の一般的特色をなしてゐる形・響・節奏等を總稱していふ語。

等しく萬葉集の歌といつても、その年代は仁徳天皇から淳仁天皇に至る凡そ四百年間に亘り、その間には歌風の變遷が認められ、且個々の歌人に就いてもそれ／＼異なるが、總體的にその本質的なものとして認められてゐる點は、素樸・眞實な感動を直接的に表現して率直な力強い感を與へるといふことである。賀茂眞淵は萬葉集のかゝる特色を「ますらをぶりと稱して、古今調以後の「たをやめぶり」に對比せしめてゐる。随つて歌體の上からは、五七調が韻律的構成の基礎となつて二句切・四句切等が比較的多い、終止形止めが多い、主格の表れることが多い、「かな」が用ひられないで「も」または「かも」が用ひられる、等種々の特質が擧げられるが、要するに素樸な調子を持つてゐるといひ得る。萬葉調の歌は平安時代を通じて幾分歌人の注意を惹いたことはある

が、全體として殆ど影をひそめ、鎌倉時代の初め源實朝が萬葉調歌人として著れ、徳川時代には古學の復興に伴なつて萬葉精神が著しく復活し、賀茂眞淵・田安宗武・梶取魚彦・良寛和尚・平賀元義・橋曙賢等幾多の萬葉調歌人が輩出した。明治時代に入つてからは丸山作樂・愚庵和尚等があるが、就中正岡子規は萬葉調寫生主義を唱へて和歌革新の先頭に立ち、ついでそれを傳へたアララギ派の活躍となり、やがて萬葉調は殆ど全歌壇を風靡するに至つた。

【推重】 スキチヨウ おしおもんずること。たふとび重んずること。推尊。

【禪師を訪ねた人が云々】 明治三十年十月二十八日、子規から愚庵宛の書翰(子規全集第九卷收載)に「先日は湖村氏歸京の節佳葉御惠授にあづかり奉萬謝候多年の思ひ今日に果し申候」とある。

【むしやぶりつく】 力をこめて一心にとりつく。

【薔】 ヘタ 茄子・瓜又は柿などの萼。

【擧める】 シカめる 皺をよせること。

【展べて】 ノべて こゝでは、ひろげて、のばして。

【状袋】 ジャウブクロ 書狀を封入する袋。封筒。

【彷彿つて】 サマヨつて(原文の振假名による)。

【三千の俳句を閲し柿二つ】 三千にも餘る俳句を見終つて

ほとと安心し、楽しみにとつておいた柿を二つ食べた、といふ意である。

子規全集卷三收載、「秋」の部の中、「ある日夜にかけて俳句の底を叩いて」といふ詞書のある二句の一。もう一句は「文賣らん柿買ふ錢の足らぬ勝」といふのである。

尙、青木月斗氏の子規名句評釋に「月斗曰、日本の俳句欄は十八行の日本新聞の原稿紙（唐紙に赤罫）に題が一行あつて十七句のものが、毎日、一面の下の左の端に掲載されてゐた。全国からの投句は、募集もしないが子規庵へ送る。子規庵ではお律さんが開封して、函の下へ下へと入れられる。居士は、丹念に選をされ、分類され

て、一枚に満ちると、社へ送られるのである。一年も二年もして入選掲載を見るのが常である。この句は、たまり／＼してくる句稿を精力を傾けて閲された時の事である。三千の句を見る事はえらい。そして幾句の入選を得られた事か。そゞろに選句に携はるものの勞を知る人は稀である。作句の苦勞とは又別である。それに對して勞を慰めるものは柿二つである。といふのである。この時は柿は二つしか残つてゐなかつた。居士は大不平であつた。」とある。

「閲す」ケミス あらためみる。しらべてみる。たゞしみる。

2 文の構成

第一節 初―六九頁一行 さびしい根岸の夜を、熱の下つたのを幸に、二つの柿を楽しみつゝ選句に取掛つた病人。

第二節 六九頁二行―七一頁五行 選句三昧に入つて選し終つた満足感と柿の誘惑。

第三節 七一頁六行―七四頁二行 その柿の由來と子規の賞味ぶり。

第四節 七四頁三行―終 柿の贈主愚庵へ禮狀を書いて床に入つたけれどもまだ收りさうもない興奮。

3 文意

柿二つをめぐる子規の生活。

4 鑑賞批評

「ランプの光は靜かに更けて行つた。時々上野の森に反響して轟き過ぎる汽車の音があるばかりで、根岸の夜は沈んだやうに淋しかつた」――書齋であり、病室である子規庵のある夜の一角が浮かんで來る。

「病人の頭はさういふ時に一層透明になるのであつた。彼は自分を神かと疑ふばかりの明快な判断を數限りない句の上に下すことが出來た」――この病人の生活の一斷面をこゝに寫したのである。彼はかくの如き病間の寸刻を生かして、あの文學的偉業を成し遂げたのである。

「やがて妹は膝の絲屑を拂つて立ち上つた。それは病人の枕許に、盆に載せた柿を運ぶためであつた」――何んといふ靜かな描寫であらう。前後をつなぐ上に破綻がなく、科白なき名優の仕種でも見るやうな効果を擧げてゐる。「もうこれきりかい」といふ主人の言葉もいかにも自然に響いて來る。

「燈火は主人の心を知るかのやうに、瞬もせずには消え渡つた」――もう一度燈火を出して夜の更けてゆく經過を暗示すると共に、病人の選句に集中してゐる専念ぶりを示さうとしてゐる。

「靜かな沈んだ夜の呼吸が聞えた。彼の眼は燈火に光り輝いて、此の夜の色の中にひとり帝王のやうな威を示してゐた」――夜は靜かに沈み、燈火は消え、その中に生き動いてゐるものは、彼の眼のみである。今や天地は唯彼の眼となつて存在するといつた趣がよく出てゐる。

「燈火を中心とした此の「病牀六尺」の天地は、今は何者にも煩はされることのない極めて自由な、希望に充ちた世界のやうに思はれた」――病苦を忘れ、時を忘れて一つの仕事を完成したといふ安心と、天地間で今日醒めてゐるものは自分一個のみであるといふ一種の優越感とが自由と希望とを感じさせるもののやうである。

「彼は樂しげに盆の上の柿を見遣つた。柿の赤い色は媚びるやうに輝いてゐた」――仕事に没頭してゐる間、絶えず側から勵ましてゐた二つの柿である。仕事を片付けて満足の情にひたりながら、最後の樂しみを味ははうとして見やつた主人

の眼には、どんなに美しいものに映じたらうか。

「それは昨日の事であつた。其の人がまだ枕頭に在る間に、彼はもう辛抱が出来なくなつて、其の柿を三つ続けさまに食つた。其の人が歸つて後も、夜寝る迄に十ばかり平げた。今夜枕頭に運ばれたのは、其の残りの只の二つであつた」——贈つてくれた愚庵への手紙に「御佛に供へあまりの柿十五」といふ句がある。又「愚庵和尚より其庭になりたる柿なりとて十五ばかりおくられるに」といふ詞書の和歌六首のうちに、「みほとけにそなへし柿ののこれをを我にぞたびし十まりいつつ」といふ作もある。こゝには果物好き、柿好きの子規の面目がよく現されてゐる。

「さういへば、昨日食つたのも大方は少しづつ澁かつたのであつた。けれども彼はそれに頓著せず、其の帯の帯の少しも残さずに食つてしまつた」——「さういへば」が彼の無我夢中な食べぶりを示してゐる。澁いと知りつゝも、尙且その帯のところまで食べ盡くさなくては承知が出来ない。それが子規である。

「此の時彼は、畢竟澁い位の柿でなければ旨くないのだといふ結論に達した。此の澁くない柿よりも澁い柿の方が旨いといふ結論が又彼を喜ばせた」——「柿の實のあまきもありぬ柿の實のしぶきもありぬしぶきぞうまき」といふ歌はかくして詠まれたものである。いかにも子規らしい徹底ぶりである。

「しまひには其の皮をも少しばかり食つて見た。それは餘り旨くはなかつた」——果物に對する餓鬼ぶりが現れてゐると同時に、子規の徹底癖が躍如として示されてゐる。

「三千の俳句を閲し柿二つ」——實景そのまゝに違ひないが、「三千の俳句」と「柿二つ」とが對照せられて一種の氣分がわいて来る。

病牀で文學革新の偉業を成した正岡子規の風采がよく描出されてゐる。子規を眞に知つた作者の筆であることを思はせる。客觀描寫が物の核心に觸れてその生命を輝き出させてゐる。愚庵への禮狀と明治三十年の作「愚庵和尚に」の六首によ

つたものであることはいふまでもない。

三 備 考

1 指導研究

主觀的詠歎の代りに、客觀的描寫がある。その描寫の奥に潜む詠歎が聞えて来るまで讀ませるに足る名篇である。解釋に於ても、根岸子規庵の一夜熱の下つた一刻を幸に選句に没頭してゐる病主人、唯その病を看取る爲に生きてゐるといつてもよいやうな老母と嫁期を失つた妹から成る家庭の空氣や愚庵の爲人と病主人との交遊關係を背景に、その愚庵から贈られた柿の残り二つを中心とした子規の生活が、そしてその面目が浮彫りにせられてゐる點を讀みとらせることによつて子規が短い一生を以て、しかも病牀六尺に釘付けにせられながら、異常な心熱を以て俳句革新・和歌革新の大事業を遂げ散文に於ける寫生的手法を基礎づけた非凡さを理解せしめなくてはならない。

更に作者が子規門の一人として、寫生文によつて鍛へられた筆力を小説の上に遺憾なく發揮して成功してゐる點も亦見逃してはならないであらう。尙、このことに關聯しては、「參考」に引用した作者の自序に於て、「正しく子規居士を書かうと思つて書いたもので、少しも虚構を加へずに事實其の儘を寫生したものである」といつてゐる如き用意に成つたものであることが考へられなくてはならない。

唯、かくしてこの文に表現せられてゐる子規の生活なり句境なりが中學二年の生徒にどう理解せられ、どの程度に追體験せられるであらうかといふことについては、後日を期さなくてはならぬものがあるであらう。柿二つをめぐり一夜の選句三昧と果物に對する貪婪とに發揮せられてゐる子規の性格そのものを理解させ得たならば、後日の基礎も描かれたものと云つてよさであらう。

2 参考

(イ) 原文から本文に先立つ部分を左に引用する。

一昨年の暮迄はまだ時々社に出勤する事も出来たし、さうでなくつても机に凭れて仕事する位には差支なかつたのである。自然俳句の投書も、来るに従つて見、見るに従つて選句を原稿紙に書留めて置く位の事を其程勞苦とは思はなかつたのであるが、昨年になつてから腰部の疼痛がだん／＼激しくなつて来て、固より出勤は思ひもよらず、家にあつて仕事するのは大方は寢床の上にあつて、まだ布團の上に机を置いて其に凭れる位の事は出来ないにしても、どちらかといへば仰臥してゐる事を一番樂に感ずるやうになつたのである。

「斯んなに散らかつてゐてはしようがない。」と言つて老いた母親が大きなカステイラの空箱を持出して来て、其に俳句の投稿を纏めて入れたのは其頃からであつた。其空箱にはふじむらと烙印がしてあつた。(中略)俳句の投稿を散らかさない爲に纏めて一つの箱に入れて置くといふ事には異存の唱へやうがないのであつたが、唯其が自分の意志から出たので無く又自分の手で爲されたのでも無く他人の手で容易に取り運ばれていつの間にか取り澄まして枕頭に置かれてゐるといふ事がじり／＼と痼癢に障つた。彼は何も言はずに唯ぢつと其箱を見詰めてゐた。ふじむらといふ變體假名の烙印と暫く睨めつくらしをしてゐた。(中略)

其以來此ふじむら氏は長く投書函の役目を勤めて今日に來つてゐるのである。(中略)
今度も蓋が持上る位嵩高になつて來てゐる事がもう何日か病人の眼をなやましたのであつた。其を愈々決心して朱筆を取上げたのは今日の午過からであつた。初めは机を布團の上に置かせて坐つて見たが、其も長くは續かなかつた。横臥したり、體をねぢるやうにして上半身だけを俯向けたりして種々の姿勢を取つて見たが矢張り仰臥が一番長く續いた。

左右の手を布團と疊の上に投げ出して暫く天井を睨めながら心は選句の事から外に飛んでゐた。(中略)
彼は無意識に、布團の上に草稿を棄てた左手で枕許に在つた體溫器を取上げて脇に挟んだ。

少し酒にでも酔つたかといふやうな興奮した斯ういふ状態は此頃少しも珍しくなかつた。さういふ場合に體溫器を挟んで見ると意外にも九度以上に昇つてゐることもあるが、其でも左程に苦痛は覺えなかつた。かと思ふと又僅かに七度臺のこともあつて、さういふ時は何故斯んなにほつたやうに感じるものであらうかと却つて其を不審に思ふ位であつた。(中略)

暮れやすい秋の夕日が病室の障子に庭の隅の大きな椎の樹の影法師を落した事も、瞬く間に其影法師が西から東に推し移つた事もラムプの點つた事も、其等の事には全く意をとめずに病人は唯選句にいそしんだのであつた。

晩飯が運ばれると初めて筆を置いて病人とは思はれぬ許りによく食つた。肺を患つてからはもう十年になり腰痛を覺えて横臥してからも、もう二年近くなるのであるが、其でゐてまだ今日の健康が保ててゐるのは全く消化器が强健で病人としては驚くべく健やかあるのに因るのである。彼は體をねぢるやうにして上半身を俯向けながら二椀餘の飯と赤い身の刺身と小芋の煮つころがしとを殘さず食つた。暫くの間同じ姿勢を保つて時々げ／＼とげ／＼を出しながら病床の唯一の慰樂であるところの食欲の満足に凡ての事を忘れてうつとりしてゐた。

(ロ) 原文のうち、本文の七四頁四行目「手紙を認めた」に續く省略部分を左に引用する。

「拜啓。御起居如何に御座候哉。好便に任せ佳菓御惠投に預り奉萬謝候。多年の思ひ今日に果し申候。

右御禮旁。敬白。

十月二十八日

根岸 病庵主

愚庵禪師御もと

御佛に供へあまりの柿十五

柿熟す愚庵に猿も弟子も無し

釣鐘といふ柿の名をかしく聞捨がたくて

釣鐘の帯のところか濫かりき

出たらめと御叱正可被下候。

又、本文の結末に續いて左の省略がある。

博文館發行の常用日記に彼は毎日の出來事を句にして十句宛書くことを日課にしてゐた。明日になつて今日の部を認める時に忘れぬやうに此句を加へねばならぬと思つた。疲勞が一時に出て來るやうに思はれて頭がぐらぐらした。彼は初めて熱の高いことを覺えたのであつた。

病人人は其夜眠れたのか眠れなかつたのか、其咳の響は夜もすがら聞えてゐた。

(ハ) 明治三十年頃愚庵と子規との間に往復された書簡を愚庵全集及び子規全集第十五卷(アルス版)から左に引用する。

今日碧梧桐來り承候得ば君には猶御平臥の由歎息之至り也我輩近來稍々宜敷候得共御同然既に膏肓に入りたる病根は人間奈何とも致がたく候但入りし物は出る時無かるべからず其出る處の方向に於ては今更喋々するにも及ばず安心して其時を待つが上策也と存候園中の柿秋になり候はゞ一筐蒸上可申と今より待居候事に候緩々御保養可被成候御見舞迄 頓首

五月十八日

愚庵

子規詞兄 床下

王進か馬曳く門の柳かな (句になるや)

御手紙拜見仕候近日愈御健勝の趣奉賀候

小生先月末又々やられ申候處昨今快方再び娑婆の厄介に相成居申候擬十二勝已外にうまさ柿の木も御庭に有之候趣にて此秋は御送被下候との事待居申候小生もそれ迄決して死申間敷柿の實は烏に落させぬやうくれくれも御願申上置候 以上

子規

愚庵和上

王進かゝるの句妙此呼吸ならば千萬句何かあらんと存候

病中無聊時々水滸を讀む今や僅々末三四卷を餘すのみに有之候

(ニ) 明治三十年の作「愚庵和尚より其庭になりたる柿なりとて十五ばかりおくられけるに」といふ詞書を有する子規の和歌六首を子規全集第六卷(アルス版)から左に採録する。

御佛にそなへし柿ののこれるを我にぞたびし十まりいつゝ

籠にもりて柿おくりきぬ故里の高尾の楓色づきにけん

柿の實のあまきもありぬ柿の實の濫きもありぬ濫きぞうまき

世の人はさかしらをすと酒のみぬあれは柿くひて猿にかも似る

おるかちふ庵のあるじのあれにたびし柿のうまさの忘らえなくに

あまりうまきに文書くことぞわすれつる心あるごとな思ひ吾師

(ホ) 明治三十年作の子規の俳句中、愚庵和尚から贈られた柿をよんだものを子規全集第三卷(アルス版)から左に採録する。

つりがねといふ柿をもらひて

つりがねの帯のところか濫かりき

和尚病んで柿猶濫き恨哉

濫柿や高尾の紅葉猶早し

禪寺の濫柿くへば濫かりき

講堂や濫柿くうた顔や誰

一〇 柿 二 つ

一三五

柿熟す愚庵に猿も弟子もなし
 稍澁き佛の柿をもらひけり
 故郷や祭も過ぎて柿の味
 愚庵より柿をおくられて
 御佛に供へあまりの柿十五
 柿に思ふ奈良の旅籠の下女の顔

二 鷹が渡る

野村 傳 四

一 解 題

1 作者

野村傳四 ノムラデンシ 明治十三年鹿兒島縣大隅郡に生まれた。東京帝國大學英文科を卒業し、永く教育界にあり、奈良縣立五條中學校長を経て奈良縣立圖書館長となり今日に及んでゐる。かつて夏目漱石に師事した事のある人である。

2 出典

明治三十八年頃の雑誌「ホトトギス」にはじめて掲載され、後「さしゑ」に再度載せられたこともある文で、本書には「帝國讀本」から轉載した。

3 主眼及び採擇の趣旨

故郷大隅國に在る時見た渡鷹の壯觀を、追憶の絲を手繰りながら書いた文章である。特異にして雄壯な南國風景の寫生文的な表現を鑑賞させ、内にこもる思郷の純情を味はせたいと思ふ。前課に於ては秋夜一點に集注して行く人間精神の姿を見たが、この課に至つては、高く廣い秋の空のやうな潤達な景觀が開けて來る。

二 解 釋

1 語 釋

一一 鷹が渡る

【鷹】 タカ 猛禽類中鷲鷹科の鳥。頭はひらたく、喙は曲

り、爪は鋭く、脚は剛い。強い翼をもつてゐる。飛翔は頗る迅速である。よく諸鳥を捕へるので昔は鳥狩に使用された。蒼鷹、鶴はづか・すずめだか・はやぶさ・ちやうげんほう・さしば等の種類がある。すべて性質は勇猛で、争鬪を好み群棲を好まず、常に他の動物を襲撃してこれを常食する。食物としては獸類・鳥類は勿論魚類・爬蟲類その他昆蟲をも食し、不消化物はこれを丸として吐出する。飛翔時は多く中空或は上空に舞ひ、多くの鳥類の如くはばたきをなさず滑走的飛方をする。營巢場所は區區であるが、巢材は多くは樹枝を用ひて極めて粗大な巢を造る。

【秋の空氣を突き抜けて】 秋の大氣の靜寂さを破つての意。

【稻の穂波云々】 「からも起る」をいくつも重ねてゐるが、それでほぼ村の風物、地勢の想像が出来る。ここに文の妙味がある。穂波は稻、麥などの穂の、波の如く風に戦ぐのをいふ。

【愁人】 シウジン 物のあはれを感じ易い人の意。又感傷に耽ける人の意。

【そぞろに寒い】 何といふこともなく、うそ寒さを感じることに。「そぞろ」は「すすろ」に同じ。何となく心のすゝむさまにいふ。

は長さ八九寸、徑四五寸許、内は空虚で、綺麗な液が入つてゐる。それは美味で椰子の漿といはれる。

【風薫し】 風かをる。唐太宗の詩「薰風自南生、殿角生微涼」の句より出た語。夏の風の東南の草木を渡つて薫の快いのをいふ。

【南洋】 南洋の諸島をいふ。大洋洲の西北部に位し、小笠原諸島の南方に散在してゐる數多の島嶼であつて、マリヤナ・カロリン・マーシャル・パラウの諸島がある。諸島は珊瑚島又は火山島で全部熱帯に位してゐる。

【潮流】 テウリウ 海洋中で一定の方向に流れる海水。海流ともいふ。

【空に吸ひこまれる云々】 吸ひこまれるやうに空の中に消えて見えなくなることを。

【日本晴】 ニツボンバレ 快晴で一點の雲もないこと。

【天上には秘密な隠家云々】 隈なく晴れわたつた大空には身を潜める隠家とするほどの一抹の雲もない。即ち朗かに晴れた大空の形容。

【雙翼を伸ばす】 サウヨクをノばす 兩翼を擴げて鳥が飛翔する意。「伸ばす」といふ表現に鷹の飛び様が寫生されてゐる。

【避寒客】 ヒカンキヤク 渡鳥である鷹の形容。寒さを避けて暖い南方へ渡るから、かういつたのである。この擬

【渡鷹】 トヨウ トオウ。ワタリタカ。

【偉觀】 キクワン 偉大な觀もの。立派ながめ。大觀。壯觀。

【大隅】 オホスミ 九州の東南部、鹿兒島縣に屬す。大隅國。

【黒潮】 クロシホ 赤道直下に起つて、我が國の南方を流れてゆく潮流。瀬が早く、水暖で、その上色が特に黒い（深碧）からこの名がある。フィリッピン群島の東部あたりから起り、臺灣の東部を経て、四國・紀伊の南を過ぎ、遠州灘から伊豆七島と八丈島との間を更に東北に流れるもの。別に黒瀬川・日本海流等の稱もある。

【海峡】 カイケフ 海水が陸地にはさまれた狭いところ。瀬戸。海峡はどこでも潮の流が早いものである。鳴門・來島くろしほ、等はその最たるものであらう。

【深碧】 シンベキ 濃い青綠色。

【一大圈を劃して】 大きな曲線の圓形をつくつて。「圈」は輪、まる。曲線で圓形をつくつたもの。「劃す」はすぢをつける意。

【湖北】 サクホク 北方の地。もと支那北方寒外の地をいつた。書經堯典の註に「北稱朔」とある。

【やし】 椰子。棕櫚科に屬する植物で、熱帯地方に生ずる。形は棕櫚に似て直立し、高さ五六丈にもなる。果實

入法の中に鷹に對する懐しさが表されてゐる。

【はた】 あるひは。もしくは。又。

【鴨】 ヒヨドリ 又はヒヨ。燕雀類の一種。ツグミに似た小鳥。尾は灰白色で長く、頭上の毛は亂れて起ち、眼の邊は赤く、體は灰色である。翼は黒くしてするどく、脚は短い。常に群飛して啼き、好んで草木の實を食ふ。夏北海道や内地で蕃殖し、冬になると内地の暖いところに來て冬をすごす。古名ヒエドリ。白頭鳥。「鴨のこぼし去にぬる實の赤き」(蕪村)

【障害物】 シヤウガイブツ さはりとなるもの。邪魔物。障碍物。

【夢の様にすうつと飛ぶ】 翼をつかはずに、流れるやうに輕快に飛ぶ形容。

【はやぶさ】 隼。鷹の一種。鷹よりも小さく、背は蒼黒で腹部は灰色で赤みがある。腹部には斑紋がある。足短くよく鴻雁・鷺等を捕へる。雌は隼といひ雄はハコツ、たか)とよばれる。

【糠蟲】 ヌカムシ 粕蟲、糠の中に生じる蟲。

【青絹】 青い絹布。こゝは青空を絹布に見たてたのである。

【墨痕】 ボクコン (一)すみのあと。(二)かいた書畫。こ

こは(一)。

【天の川】 アマのカハ 秋の晴れた夜、天空の南から北に

白く光つて大河の流れるやうに見える無数の恒星。支那の傳説に漢水の精氣が發して天上に河をなしたものだといはれる。又、七夕星の相逢ふ時渡る河ともいはれる。天河。銀河。天漢。河漢。星漢。雲漢。星河。縫河。【星の影を掠めて】 ホシのカゲをカスめて 星の光を奪ひとつてしまつて。「星の影」の影は「光」「すがた」等の意があるが、こゝは光。

【逆に流れる】 天の河は南から北に奔つてゐるが、渡鷹は北から南へ飛び行くから、逆に流れるやうに形容したのである。天の川の雄大な趣と、鷹群の雄大な趣と、趣に於て相等しい。

【師】 シ 周代の軍制で二千五百人の隊。轉じて軍隊のこと。

【隊伍】 タイゴ 隊列の組。「伍」は五人組、又は單に組。こゝは組。

【肅々として】 シュクシュクとして 靜々と。おごそかさ。又つゝしみぶかいさま。

【萬里】 バンリ 道の遠いことのとへ。遠隔の地。

【遠征の途】 エンセイのト 遠い地を征伐に出かける途上。

【神韻縹渺】 シンオンヘウベウ 「神韻」は詩や文のすぐれたおもむき。「縹渺」は奥深くてはかり知れぬこと。「神

し、淋しい心を抱く人もあらうし、また何となくうれしく思はれる人もあらう。自分の境遇々々によつて、大空を仰いで鷹を見る人の心の千差萬別なのをいふのである。

【穂を摘む雞】 穂を啄んでゐる雞。

【けげんな顔】 不思議さうな、合點のゆかない顔。

【火の附いた様に騒ぐ】 あわただしく、急なさまにいふ語。

【群雀】 ムラスズメ 群をなした雀。未木集に「色々に門内の稻穂吹きみだる風に驚くむら雀かな」

【鳴りを靜む】 鳴り音をしづめる。即ちかしましく鳴いてゐたのが、ばつたり鳴きやんで靜かになつたこと。

【ひれ伏す】 「ひら伏す」の轉。身を平め伏せること。ひらく下にはひふす。平伏すること。雀が小さくなつて身を屈める意。

【茅ぶき】 カヤぶき 屋根を茅で葺いたものをいふ。茅はちがや、すすきなどの總稱。

【家鳩】 イヘバト 鳩の一種。嘴は短くて少し膨れ、末端のみ角質である。翼は長大で飛力強く、足は短小で赤みを帯んでゐる。多く家に飼ふ。

【大奇隊】 ダイキタイ 不思議な大群、こゝでは軍隊に譬へてゐる。後で大軍・殿軍などといつてゐる。

韻縹渺たる云々」はけだかく奥深い氣韻に満ちた大詩人の詩集を読む時のやうな深い感銘を與へるといふ意。鷹群の詩的な趣を形容したのである。「詩をよむ様な心地」「繪を見るやうな心地」といふ語から推して解せばよい。【繙く】 ヒモトク 紐解く。紐で結んだものを解きひらく。即ち書物をひらき讀む意。繙讀。

【ちんだんだ】 ちただら (地踏鞠)の訛。はげしく地を踏むこと。子供など母親に何かねだるときによくする。

【一行】 イツカウ 同行者の一くみ。こゝは勿論群鷹である。

【首途】 カドデ 門出、旅立ち、出立。

【もみ】 糶。外皮のついたままの米。

【滑りおる】 あわてて下りる形容。老人であるから駆けだすわけにはいかない。そこで「滑る」といふ語が一層よく利いてゐる。

【過去幾十年の秋の云々】 幾十年間、秋ごとに仰いで見た鷹群の記憶を新にする意。

【更に笑顔に云々】 一度空を仰ぎ、それからお互に顔を見合はせて「いいなあ」といふ心持で笑ひ、笑ひあつた後に再び大空を見上げる。

【見送る人の心は云々】 鷹は旅を急いでどん／＼南に去る——その鷹を見送る人々は、悲しい思のする人もあらう

【蠢々】 シュンシュン 蟲などのうごめくさま。うようよ。【地上の影】 こゝでは人間、群雀、雞、鳩などを指す。影は物象の意。

【悠々として】 ゆつくりとして。ゆつたりとして。【殿軍】 デンゴン 軍の最後にあつて、敵の逆襲に備へる一隊。しんがり。

【時餘】 一時間あまり。【蜿蜒】 エンエン うねうねとして、長く曲りくねつてゐるさまにいふ。

【南方の空を壓する】 南方の空を威壓する。「壓する」は威力で壓迫する意。【佐多岬】 サタノミサキ 鹿児島縣大隅國大隅半島の尖端。九州の最南端、長く海中に突出して燒岩から成つてゐる。岩上には蘇鐵樹が繁茂して、内地では異様の風景をなしてゐる。近來岬端に燈臺を設けてゐる。岬邊の潮流は急激で、平日でも激浪がある。

【燈臺】 トウダイ 航路標識のために、海岸又は島嶼などの便宜の地に高く築き、上に光力多き燈火を點する塔である。一等乃至六等に分つてゐる。この等級以外に位する等外燈臺といふものもある。いづれも平時は暗中航路の目標とする。

【兒戲と觀て】 ジギとミテ 兒戲くらゐに眺めながらの意。兒戲は子供のたはむれの義で、取るに足らぬ仕方、一顧の價値もない物事の意にいふ。

【洋々】 ヤウヤウ かぎりなく廣いさま。海などのひろびろとしたさま。

【フィリップピン】 マレイ島の北にある米領の大なる群島。總面積一七五三方哩。もとイスパニヤ領であつたが、一八九八年米國領となつた。煙草の産地。

【但しは】 若しくは、或は。

【南洋の島々】 既出「南洋」の項参照。

【弱冠】 ジャククワン 年二十歳のこと。「弱」は若の借字で、「冠」とは男子の元服のこと。昔は男子が二十歳になると元服の式を行つたことから出たのである。禮記、曲禮に「人生十年曰幼、學、二十曰弱、冠、三十曰壯、有室、四十曰強、而仕。」

【故郷の秋に背く】 故郷の秋に背を向ける。即ち故郷を出

でてしまつて、故郷で秋を迎へない意。

【嶽】 ガク 「岳」は嶽の古字。たけ。山の高大なもの。「近嶽」はたゞ近い山と解すればよい。

【山村水郭】 サンソンセクワク 「山村」は山にある村。山間にある村邑。「水郭」は水のほとりの村。水村。水郷。杜牧の詩に「水村山郭酒旗風」とある。

【背景】 ハイケイ (一)うしろの景色。背後の風景。(二)舞臺の後壁に描いた景色(かきわり、後景)。こゝは(一)普通にバックといつてゐる。

【パノラマ】 中央を觀覽場とし、適當の空地を隔てた周囲の側壁に、全面一幅の大繪畫を掲げ、その空地には繪畫の下部に接して、畫中の形象にまぎれるやうな假設物を設け、屋上から光線を利用して、觀覽者に實景を目撃する感あらしめる装置のもの。

【腦裏】 ナウリ 腦のうち。頭の中。「裏」はうら、内部の意。

2 文の構成

第一節 初―七五頁七行 渡鷹の壯觀は大隅南端特殊のものであること。

第二節 七五頁八行―七六頁三行 渡鷹の總括的偉容について。

第三節 七六頁四行―七八頁一行 渡鷹の動的描寫。

第四節 七八頁二行―七八頁一行 渡鷹を送る村人。

第五節 七八頁二行―八〇頁二行 渡鷹の進行と戦く小鳥。

第六節 八〇頁三行―終 渡鷹と作者の懷郷。

3 文意

秋晴れの空を南を指して渡つて行く鷹群の壯觀は獨り大隅の南端にのみ見られるものである。全く晴れきつた大空に一廻轉しては流れ、流れては一廻轉して、次第に遠ざかり行く一群、一群遠ざかつたと思ふと又一群、一羽の後れるものなぐ一聲もあげるものはないのは、百萬の師が隊伍肅々として百里遠征の途に上るさまを想像させる。そしてこの鷹群を見送る村の人、小學校の兒童、目の衰へた老人、田畑の若い夫婦、さては竹藪に鳴をひそめる群雀、軒にかくれた鳩、さうした地上の有象無象に關せず、悠々と南を指して流れる鷹群。――稀有にして誠に雄大なこの南國風景は作者の張り切つた思郷の心と幼時追想の感情とを以て刻明に描かれてゐる。

4 鑑賞批評

この文には感情の緊張がある。それがこの文に打てば響くやうな餘韻をもたせてゐるのである。これがこの文の持つ特別な深みである。

「音を發する間もなく……」から以下の渡鷹の描寫は全く眞に迫つてゐる。寫生文の特徴はかうした所にあるのである。次の「鷹が渡る」といふ聲が……以下村人の渡鷹を送る姿を描いた所は、殊にいゝ文章と思ふ。單に寫生ばかりではない。寫生の裏に潜む作者の懷郷の心が惻々として讀者に迫る思がある。最後の作者の述懐は、前の壯大な景觀を裏打して、餘韻嫻々たらしめて餘りがある。

要するにこの文は、靜かに大きく秋空を飛翔する渡鷹の動的描寫として、一筆もぬきさしの出来ない筆致であつて、そ

れは一に作者の感情の緊張によるのである。寫生文を單に淺薄なものとして見てゐる人にとつては驚異的な一文であらう。

三 備 考

1 指導研究

第一節、第四節、第六節の最初におかれた「鷹が渡る」の語が全文を引しめてゆく力をのみこませたい。更に各節の味の變化をその内容の上からも形式の上からも指導してゆくところに文全體のよさが明になつて行きはすまいか。尙最後の「それと共に」以下は黒潮と渡鷹とを巧に結んでしかも懷郷の情の切々たるものを表して餘韻を持たせてゐる點を味はせたいものである。

尙本課の指導に當つては卷二の「渡り鳥」(松本亦太郎)の文章を回想させたい。

補 材

勇み立つ鷹引きすうる風かな (里 圃)

「蕉門諸生全傳曰人稿」(俳書大系第十五卷)に沾圃嫡俳名里圃、立圃ノ近親甥カ、孫ナリト云ヘリ」とある。暮柳舎後川の「言葉の露」及び「續猿蓑」の發句に出てゐる句である。

たけり狂ふ嵐である。もみにもむ嵐である。巖上の鷹は今しもこの嵐に向つて驅らうとして天空をにらんで身構へてゐる。しかしあまりにもはげしい嵐の狂亂である。さすがの鷹も引据ゑられた形だ。

鷹一つ見つけてうれしいらこ崎 (芭 蕉)

芳野紀行に出てゐる句である。芭蕉四十四歳、故郷をたづね吉野へ旅しようとした途中三河國保美村の伊良古崎に立寄つた時の句である。こゝには愛弟子杜國がゐたのを訪ねたのであつて、前書として「南の海のはてにて鷹のはしめてわた

る所と云へりいら古鷹など歌にもよめりけりと思へは猶あはれなる折ふし」とある。「鷹一つ」とは實景であると同時に杜國その人をもさしてゐると思はれる。左に遠江灘、右に伊勢海を眺めるこのいらこ崎に立つて見ると、古來の歌枕としての地であるから一層なつかしまれ鷹の羽ばたいて渡つて來る様などが思はれるのである。丁度其の時海上遙かに見えた黒點が近づくにつれて鷹である事が明になつた。鷹だ。鷹だ。さながら戦使でもあるかの如く悠々羽搏つて海と空との間を驅つてくる。壯觀である。歌枕の地に來て思ひがけずこの景觀を眼にして嬉しくてたまらない。それはさながらはるばる道を引かへしてたづねて來た秀才の若弟子をその流瀆の地に發見した喜びである。

挿 圖

○鷹(七九頁)京都愛殊院藏

鷹を畫くことは戰國時代尙武の氣象に投じて武人畫家の間に殊に流行し土岐派・曾我派など何れも畫鷹を以て著はれてゐる。雪村は特に畫鷹を得意としたことでもあるまいが、其の筆になる曼殊院の双幅などは此の種専門家以上に一段と筆才の鮮かな作である。いづれも紙本水墨畫、松樹に鷹を配したもので一は樹間の獲物をねらつて正に飛ばんず勢で身を俯し、他は昂然と首をあげて睥睨するところで、動と靜とを相對せしめたものらしい。掲出の圖は即ち後者である。その鷹の描寫は緻密ではないが、よく姿態の要を得たものである。割筆で揮灑した松の葉には牧溪風の餘影も看取されるが、しかも葉といひ幹といひ水墨濃淡の妙に加へて運筆の雋秀なことは毅然たる鷹の形容と相應じてさすがに雪村得意の筆墨の冴えを示してゐる。門弟に教へて山水人物を生涯の骨目として修行すべしと言つたといふ彼がひとり山水人物のみならずてもその専門家をしのぐ一見識のあつたことは此の圖でよく察知されよう。

二 野口英世

橘輝政

一 解題

1 作者

橘輝政 タチバナテルマサ 野口英世博士と同郷の新聞記者。

2 出典

「野口英世博士傳」から採る。橘輝政著、東京第一出版社発行の四六版一九九頁の書である。本書は野口博士と同郷の新聞記者橘氏が博士の一週忌に當り追慕の念やみ難く筆をとつたものである。一、博士の故郷を訪ふ。二、博士の幼年時代三、博士の少年時代 四、博士の青年時代 五、醫師と成つた當時の博士 六、渡米當時の博士 七、ロックフェラー研究所時代 八、博士の終焉 九、博士の業績 十、博士の餘影と印象 十一、博士の逸話 十二、野口英世博士年譜等第十二章から成つてゐる。平易な文章の中に熱血のもられてゐる本書は青年の指導書として好適のものであらう。本書採録の部は六、渡米當時の博士からとつたものであるが、文章には相當の改變もあり、省略もある。

3 主眼及び採擇の趣旨

日本人が學術的に世界を壓倒し得ることの實證として野口英世博士の輝かしい研究業績をしらせ、讀者たる少年達に、この先輩の跡を襲はうとする希望と熱意とを喚起させたい文化的教材である。尙第六課に於て現代に於ける日本の偉大性を認識させ、本課に於て現代に於ける日本人の科學研究力をしらせる事によつて文化人としての民族的自信を培養し、更

に二一「我が文化の將來」二二「國民的自覺」等に聯關を持つ國民的教材でもある。

二 解釋

1 語釋

【野口英世】 ノグチヒデオ (二五三六一—二五八八)細菌學者。明治九年十一月九日福島縣猪苗代湖畔翁島村の小農家に生まれた。幼名清作。明治二十九年七月東京に出て、翌年濟生學舎に入學して醫學を修め、二十二歳の時醫術開業試験に及第した。明治三十一年傳染病研究所に入つて北里柴三郎に師事し、ついで海港檢疫官となり、横濱に於て初めてペスト患者を發見した。同年十一月清國牛莊國際ベスト豫防委員會中央醫院に勤務、翌年七月歸朝東京齒科醫學院講師となり、同年十二月渡米、フレキシナーの厚意によりペンシルヴァニア大學において研鑽すること三年、蛇毒に關する業績を發表して學才を認められ、カーネギー研究所より奨勵金を受けた。明治三十六年デンマルク國立血清研究所に入り、マドセン博士について約一年間細菌學を研究して名を揚げ、歸米後、新設のロックフェラー醫學研究所員に擧げられた。同四十年ペンシルヴァニア大學よりマスター・オブ・サイエンスの學位を受け、四十四年京都帝國大學より醫學博士の學

位を授けられた。大正二年九月ドイツ國萬有科學大會並に醫學總會に招待されてウィーンに赴き、翌年ロックフェラー研究所部長に昇進し、七月東京帝國大學より理學博士の學位を授けられ、同四年七月帝國學士院より恩賜賞を受けた。同年九月歸朝、勳四等に叙せられ旭日小綬章を授けられ、十一月再びアメリカに戻つた。大正七年エクアドル國に赴き、黃熱病研究に従事し、功によりて同共和國陸軍軍醫監に任ぜられ、また同國醫學協會及び公共團體より金牌を贈與された。昭和二年アメリカに赴き黃熱病源研究に盡力し、遂にこれに感染し、同三年五月二十一日アクラ病院に於て五十三歳で歿した。學術上の顯著なる業績頗る多く、蛇毒、狂犬病、小兒麻痺、および痘瘡病源に關する研究、微毒スピロヘータ純粹培養、痲痺狂及び脊髓癆の原因確定等の外、發表論文百八十六篇に達した。計報至るの日勳二等に叙せられ旭日重光章を授けられた。

【博士】 ハクシ ハカセと訓めば官職名であつて國博士・明經博士・音博士・書博士等がこれである。ハクシは學

位であつて或一定の學術を専攻してその蕙奥を究めたものに對して學位令に従つて授與する榮稱である。學位令によれば學位は博士とし、大學學部研究科に於て二年以上研究に従事し、論文を提出して學部教員會の審査に合格したるもの、または論文を提出して學位を請求し學部教員會に於てこれと同等以上の學力ありと認めたるものに對して文部大臣の認可を経て授與することとなつてゐる。學位を授與せられたものは、授與の日から六ヶ月内にその提出に係る論文を印刷公表しなければならぬ。

【米國】 アメリカ合衆國をいふ。北アメリカ大陸の中部にある大國で大西、太平洋の間に挟まり、北はカナダに接し、南はメキシコ及びメキシコ灣に連なつてゐる。氣候快適な北緯四〇度の線を中心としてほぼ長方形に横たはり、産業上能率の高い好位置を占めてゐる。以上の米本國の他にアラスカ・ハワイの二地方があり、別にポルトリコ、フィリッピン・サモアの二群島、グアム島等が領地として附屬する。本國の面積は七七〇萬方呎で我が國の十二倍に近く、人口は一億千八百六十萬。

【留學】 リウガク 他國に在留して修學すること。
【横濱】 ヨコハマ 横濱市、神奈川縣の東端部に位する都市。東京灣に面し、川崎市を挟んで東京市の南方に當り、東京市の海上に於ける門戸をなす。嘗に我が國貿易

上世界有数の港灣たるのみならず、その内國商業に於ても阪神兩港と相對立して主要な使命を果しつゝある。横濱港内の水深は世界の巨船を碇泊せしめるに足り、海底地質は多くは泥土で、鶴見川尻附近には細砂を交へいづれも繫錨に最も適する。本港出港船舶隻数は總數五九、一一三隻（以下昭和七年）でうち汽船外航二三五三隻、汽船内航二六七三隻。外國航路としてはアメリカ航路が噸數が最大でヨーロッパ航路これに次ぎ、更に支那及び南洋これに次ぐ。

【母堂】 ボダウ 他人の母の敬稱、母御、北堂、萱堂。
【會釋】 エシヤク (一)會得して心の中に釋然と解き得ること。又相會ひて打ちとけ語らふこと。(二)佛教にては法門の難義を會得解釋すること。(三)うなづくこと。(四)轉じて禮すること。あいさつ。おじぎ。(五)あしらひ、もてなし。こゝでは(四)

【感慨無量】 カンガイムリヤウ 深く心に感ずること量り知れぬ程である。故國日本を去り、知友と別れ、老いませる母を思い、いつかへるともしれぬ異國の旅に出で立つ別離の情と、新天地に大いなる研究業績を打立つべく大抱負に燃ゆる心との交錯である。

【會津】 アヒツ 今日福島縣における南會津・北會津・河沼・大沼・耶麻の五郡、主として若松市を中心とする

地方の總稱。「古事記」に四道將軍の建沼河別命が東國から來て、越の國から來た父大彥命と會つたので相津なる地名が生じたとある。後、専ら會津と書き、明治維新前には松平氏の藩地であつた。

【ドクトル】 (一)醫者、醫學博士。(二)博士。(三)神學の大家。こゝでは(二)
【今日しも】 「し」は強意の助詞、「も」は咏歎の助詞。今日といふ今日。

【埠頭】 フトウ 港灣の内港設備の一。海岸の一部を凸字形に築出し、水陸の連絡を便利にし繫船岸を延長するための構造物。

【體軀】 タイク 身體。體も軀も身體。

【恙なかれ】 ツツガなかれ 障なかれ。無事であれ。恙は

(一)病などの禍難。(二)病氣。こゝは(一)

【シャトル港】 合衆國ワシントン州の港市。ピニーゼットサウンドの東岸に位し、タコマの北北東三七呎。我が横濱を距る六八〇九呎の地にあり、北太平洋鐵道・大北鐵道・コロンビア・ピニーゼットサウンド鐵道等に沿ひ、後にはカスケード山脈の連峰及びレーニヤ火山が峙ち、前面の灣を隔ててオリンプス山が聳え、風景絶佳である。港はエリオット灣と稱し、ジュアン・デ・フカ海峽から六四呎で、大洋航行の大船舶も安全に碇泊することが出來

る。ホノルル・日本・支那・フィリッピン等に對する東洋航路、アラスカ・カナダ北部の金産地に對する航路を有し、サンフランシスコに次ぐアメリカ太平洋岸の重要な港である。學術上にはワシントン大學の所在地である。日本人の在住するものは九千人に及び、貿易商・旅館業・雜貨商等に從ふものが多い。

【誇りかな】 (一)自慢ぶつた。(二)得意さうな。こゝは(二)副詞である。

【衝動】 ショウドウ 本能活動や習慣的動作等に於て見られる如き、先天的或は後天的な身體的若しくは精神的傾向が意識的強迫的に吾人の動作を促すことをいふ。而してこの傾向の發動に際しては何等かの知覺或は表象の動因が存するところであり、不安の感情が伴ふのが一般である。活動の結果不安が除去される時は衝動は終止する。

【北米】 ホクベイ 北アメリカ洲である。即ちコロンブスの發見した新世界の北部で、パナマ地峡で南米と別たれ、西北はベーリング海峽を隔てて近くアジア大陸に對し、東北はヨーロッパとも遠くない。南部は熱帯に入り、北は北極圏を越えてゐるが、大部分は温帯にある。

【フィラデルフィヤ市】 アメリカ合衆國大西洋岸のペンシルヴァニア州の中心都會で、合衆國の三大都市の一。デ

ラウニヤ河の西岸にある。一六三八年既にスウェーデン人がここに聚落を創め、ヴィガコと呼ばれ、ついで一六八二年ウィリヤム・ベンによつてペンシルヴァニア植民地の首都に選ばれ、「兄弟愛」の意なるフィラデルフィアと改稱された。有名なベンジ、ミン・フランクリンがこの町に居住して大なる影響を及ぼした。一七七六年七月四日の合衆國の獨立宣言もこで行はれ、獨立會堂で有名な「自由の鐘」をならしたのであつた。ために一七七七年イギリス軍に占領されてゐたが、一七九〇—一八〇〇年まで合衆國の首府であつた。従つて一時は合衆國第一の大都會であつたが、間もなくニューヨークに凌駕され、ついで新興のシカゴに追越されたが、世界的大都市の一たるを失はない。街衢は規則正しい碁盤目状をなし、市場街チエストナット街は最も繁華な商業街で、大商店が軒を並べてゐる。フィヤマウント公園は知られ、ペンシルヴァニア大學を始め各種の學校が多く、また商品博物館・圖書館等の壯大なものがある。海岸を距る一九〇軒の上流にあるが、大船の廻行が可能で、ペンシルヴァニア、バルチモア、オハイオ等の鐵道で後背地とよく連絡されて一大貿易港となり、一九三〇年の貿易額は輸出二〇、四億圓、輸入三、三三億圓に達してゐてその他沿岸貿易も盛んである。従つて河岸には船

渠・倉庫等が並んでゐる。後背地に石炭・石油の大産地を有するため、石油の取引は世界第一で、市の工業も亦發達し、諸機械・機關車・造船等の機械工業、綿及び毛の織維工業、革皮、製靴、藥品等の化學工業がその主なものである。人口は一七九〇年に二八、五二二、一八六〇年に五六五、五二九(市域擴張)一九三〇年に一、九五〇九六一。

【一身を託す】「託す」とは言を寄せ頼むこと。身のなりゆきを依頼すること。

【知己】チキ 己をよく知つてゐる人。知は是非善惡を識別しうること。詞に聞き心に覺ること矢の速なるが如き意で、矢と口とを合す、後智の字を作り明に物をしる義とした。知は本で智はこれから成つたチエである。知は智に通じて用ひるが智はシルとは訓まず。名詞に限る。ここでは單に知人位の意に用ひたと見なければ事實と相違する。後に知己となつた人の意ならばそれでもいい。

【一刻】イツコク (一)極めて短い時間。(二)支那では十五分間をいふ。こゝは(一)

【夢寐にも忘れなかつた】ムビにもワスレなかつた 夢寐とはいねて夢をみること。夢にさへ見てゐた。

【温顔】ワンガン (一)おとなしいかほ。(二)親しみを持つた顔。こゝは(二)

【二別】イチベツ 一度別れること。明治三十二年四月中旬、フレキシナー博士來朝の際、野口博士は通譯者となり遠來の學者を案内した。くはしくは鑑賞欄参照。

【交、至る萬感】コモゴモイタるバンカン かはるがはる起つてくる萬づのおもひ。

【總長】ソウチャウ 全體を管理する長官。大學には各學部があるのでそれ等を總べをさめる長官である。

【雰圍氣】フンキキ (一)地球又は他の天體を圍繞する瓦斯體。(二)空氣、物理學の語。(三)或部内のあたりの氣分。情緒などの稱。こゝでは(三)

【當惹】タウワク いたし方にまよふこと。

【押詰つた三十一日の夜】當年は西曆一九〇〇年であつたが同年も最後となつた十二月三十一日の夜である。

【蛇毒】ダドク マムシ、アカヘビ、ハブ、ハイイ等毒腺を有する蛇の毒液。その成分は蛇の種類によつて違ふが、一般に淡黄色の透明粘稠な液である。その分泌量は前回の分泌よりの経過時間、咬傷度、温度、食物等によつて差があるが、大型のハブでは一回〇・二—〇・五瓦、稀に一・五瓦に及ぶ。新鮮な毒液を乾燥すれば水分を失ひ、透明な乾燥毒が得られる。その毒性は蛇の種類によつて違ふが、大體は出血毒と神經毒との二つに考へられる。アマガサヘビやタイワンコブラ等の溝牙蛇の毒には

出血毒はないが強烈な神經毒があり、ハブやマムシ等の溝牙蛇の毒液には多量の出血毒を含む。これを更に細別すれば、血液凝固成分、血液凝固障害成分、赤血球凝集成分、溶血成分、出血毒、神經毒、白血球毒、溶菌成分、蛋白質溶解成分、脂肪溶解成分及び沈降元の諸成分に區別出来る。但しその含有量比は前述の通り種類によつて異なる。蛋白や脂肪等を溶かすから蛇自身にとつては一種の體外消化用とも見做される。毒性は一般に強く、ハブ毒の乾燥粉末〇・一二瓦で馬一頭、一瓦ではウサギ一千匹、モルモット一萬匹をたふし、コブラ毒は一瓦でよくモルモット一萬一千、鳩三十三萬を殺す。

【傳染病研究所】明治二十五年十一月大日本私立衛生會が北里柴三郎を擁して傳染病研究所を設置したるに起原し、福澤諭吉・森村市左衛門は野より、長與專齋は朝よりこれを輔け、國庫の補助金を受けて事業を經營してゐた。明治三十二年四月政府が國立傳染病研究所を置くに當り、私立衛生會は從來の家屋備品を擧げて寄附した。明治三十八年別に官業として經營の痘苗製造所及び血清藥院を併合した。大正三年十月官制改正の結果内務省の管理より文部省に移され、同五年三月、勅令を以て東京帝國大學附置となつた。所長及び所員は東京帝國大學教授及び助教にして他に専任技師、技手、書記等が多數

あつて任務に服してゐる。本所は病源の検索、豫防治療方法の研究、豫防消毒治療材料の検査、傳染病研究方法の講習並びに痘苗血清ワクチン等細菌學的豫防治療品の製造及び検定に關する一切の事業を掌る。細菌血清學部は本所の中樞をなし、チブス、赤痢、コレラ、狂犬病等より初め結核、癩、チフテリ、天然痘等より一切の傳染病の病原の研究に従事し、化學部、検査部、痘苗製造部、ワクチン室等を初め、動物部は傳染病媒介に關係する動物の研究に任じ、病理學、寄生蟲病學等の研究も重要な一部をなしてゐる。勿論傳染病患者及び一般内科の治療を行ふ故に附屬病院が設けてある。芝區白金臺町の傳染病研究所は過去現在に亙り數多の偉大なる研究業績の故に、世界の醫學界に貢獻せるの故に、近傍に存在する北里研究所と相共に日本醫學界の誇りとして斯學研究所の最大なるもの一つとして世界に君臨し重きをなしてゐる。

【はぶ】 蝮蛇科、ハブ屬の毒蛇の總稱。體は太短く、頭部は毒腺の大きいため三角形を呈し一見マムシに似てゐるが、頭部背面に板狀鱗がなく數多の細鱗で覆はれてゐる。我が國では奄美大島より以南臺灣まで分布してをり、六種を算せられる。普通ハブといはれるものは大なるものは二米近くに達し、體色淡黄灰色で少しく青味を帯び

背中線の兩側に中空な木葉狀又は蝙蝠狀の斑紋が並列してゐる。これ等の斑紋は背面正中線を超えて互に愈着したり、前後の斑紋が喰ひ違ひに接觸したり、様々な形をなしてゐる。その斑紋の下方には不規則な雲形斑紋が散在してゐる。ハブの中で體色が黄色がかつてゐるのをキンハブ、色が淡くて白色味がかつてゐるのをギンハブといふ。これは簡體的の差で、何等形態的の相違はない。樹枝上に蟠屈して下を過ぎるものに咬みつき、家の中に侵入して來ることもあり、甚だ危険である。ハブが人を咬むのは六月から十一月で略、時季が定まつてをり、咬まれる局所は大抵下肢である。稀には頭や胸をやられることがあるが、かやうなときには治療が役立たず死を免れない。奄美大島で年々ハブに咬まれるものは統計によると二二五人で、その中三〇人の死亡率になつてゐる。甘蔗畑に徘徊し、野鼠を捕ふるので有益な方面もあるがその害の程度の方が遙に大である。

【助手】 ジョッシュ 大學教授の研究を助ける職員。ここでは單に教授の私設助手であつた。

【ペスト】 黒死病ともいふ。最も恐るべき急性傳染病の一種。我が國では時々襲はるゝに過ぎないが、然し萬一病毒の侵淫することあれば甚だ危険なる故、初發患者を出さぬやうまた出した場合には蔓延せしめぬやう鋭意防疫

が緊要である。ペストの病原はペスト菌で、これは明治二十七年香港に於ける流行の際我が政府から派遣された北里及び佛醫エールサンにより發見され、青山博士は病理を研究した。ペストはもと鼠類または同類動物の病原菌である。即ち人が本菌に感染發病するのは、本菌に感染してゐるこれ等動物、主として蚤を介して傳播せられるのである。これ等の感染動物の血液を吸血した蚤が感染動物の死に會つて、それから離れ、人に附着して吸血するとき、並びにその蚤の糞便の皮膚に附着してゐるものが搔かれて接種せられる時に感染する。

【桑港】 サンフランシスコ。アメリカ合衆國カリフォルニア州の一大港市。サンフランシスコ灣は同州唯一の溺谷地域で、背後にはカリフォルニア縦谷低地と、サンタクララ、サリナの縦谷を控へてゐる爲、同國太平洋岸の最大港市であり、同國太平洋艦隊の根據地であるサンフランシスコを始めとして多くの都會が發達した。一八四八年にはカリフォルニア州に金礦が発見され、世界の各國から多數の入移民が殺到し、サンフランシスコはその關門となり急激の發展をなし、ユニオン太平洋、南太平洋等の大陸横斷鐵道の起點となり、東洋及び濠洲との貿易振興と共に急速に人口増加し、一九〇〇年三四二、七八二人、一九二〇年五〇六、六七六人となつた。世界の

大都市であり、合衆國の裏門たる地位を失はない。

【撲滅】 ボクメツ うちほろぼすこと。「撲」は小撃である。「撲滅」は拳でたゞきけすこと。

【業績】 ゲフセキ 研究の成績。

【非凡な伎倆】 ヒボンナギリヤウ 凡人以上のうでまへ。

【報告論文】 ハウコクロンブン 研究結果を陳述する議論文。

【摘要】 テキエウ 要點をつまんだ書物。

【機關紙】 キクワンシ 其のもの機械となり、其の利益ある報告、言論をつとめ或はその言論研究發表をなす新聞紙又は雜誌。機關新聞、機關雜誌等。

【名譽總長】 俸給をうけることなく、他に本業を有し、大學總長の職務を專任することなき總長。

【幹旋】 アツセン (一)めぐるること。めぐらすこと。(二)世話すること。周旋。こゝは(二)

【二千弗】 「弗」は米國の貨幣單位。一九〇〇年三月の貨幣法に至つて金本位制の下に、品位九百の金二十五グレイン八(平價二圓六厘二毛)と定められた。現行のものはこれである。二千弗は約四千圓である。

【カーネギー研究所】 アメリカの實業家、社會事業家、カーネギーは英國スコットランドのダンファムリンに生まれながら一八四八年一家と共にアメリカのピッツバーグに移

住した。幼少にして綿紡工場に雇はれ労働生活に入った。後電信術を習得し、ペンシルヴァニア鐵道會社に勤務し、寢臺車設備により利益を擧げ、石油投資によりて産を興す端緒を得た。南北戰爭中は陸軍鐵道及び電信技監として従軍した。然し未だ畢生的事業を發見しなかつた。偶々橋梁が木造であるのを見これを鐵製にすることに着眼し、ここに生涯の方向を定めた。即ちキーストン橋梁製作所及びユニオン鐵工所をピッツバーグに起し一八六八年にはベッセマー法を採用する等意を經營に用ひたから、アメリカ資本主義の上昇期に乘じ、社運日に隆盛に赴き終に商敵ホームステッド製鋼所等を合併してカーネギー・スチール會社を成すに至つた(一八八九)一九〇一年同社をユーススチールに讓渡し、カーネギーは利潤分前十億圓を受けて實業界を退隱し、専ら社會事業に没頭するに至つた。彼は「事業經營の要諦は組織にある」との信念から縦横にその組織的才能を發揮し、また「富者は貧者の寄託者兼代理者である。集めたる富を社會に有効に用ふるはその任務である」として平和事業や文化事業の爲に金を惜しまなかつたから遺産は幾何もなかつた。ここに記された研究所もその文化事業の一であつてピッツバーグカーネギー研究所と稱され一八九六年設立、基金五千六百萬圓である。

止息、寂靜等と種々に譯す。心を一所に住せしめて不動の意で即ち心を正しうして妄念を離れる意である。さうした境地。

【満喫】 マンキツ 一杯に味はふこと。

【一張羅】 イツチャウラ ただ一かさねの外には持つてない晴衣。

【ベイント】 物體の表面に塗抹して着色、保護をなす目的に使用する塗料。精製せる乾燥性油と粉碎せる顔料とを煉り合せたもの。

【定收】 テインウ 一定してゐる收入。

【検討】 ケンタウ しらべきはめること。

【デンマーク】 北ヨーロッパの一王國。ユトランド半島及びバルト海の島嶼部を含み、氣候は溫和濕潤である。一九三〇年の人口三、五四二、二一〇。教育は普及し農業教育と體育とが重んぜられ特に民衆大學としての國民高等學校は有名である。

【コペンハーゲン】 デンマークの首府。古い都會であるが大火の爲に木造家屋は大部分近代式高層建築となり、北歐のバリと稱せられる。五十五萬卷の藏書を有する王立圖書館、トルヴァルセン博物館、大學圖書館、工藝博物館、民族博物館、等があり、その位置の優秀さと、國民の堅念持久性との故に幾度も戰禍にもめげず今日の美

【交付】 カウフ 交付に同じ。わたすこと。
【その後】 明治四十年六月。
【マスターオブサイエンス】 我が國の理學士に相當する。名譽學位である。

【特典】 トクテン (一)特別の儀式。(二)特別のあつかひ
こゝは(一)

【細菌學者】 サイキングクシヤ 細菌に關する學者。細菌とは微細な單一細胞からなる生物である。細菌學は生物學の一分科であつてそれには二つの方面がある。その一つは諸種の性状即ち形態、生物學的性状及び免疫學的性状等を究めて系統的分類をなす純自然科學の方面である。その二は應用方面であつて所謂應用細菌學ともいへる。それには多方面がある。病原細菌學、醱酵細菌學、農業細菌學等がそれである。

【生活苦】 セイクワツク 衣食住の活しを立ててゆく上にさしつかへを生ずる苦しみ。

【科學】 クワガク 科學とは若干の假定の上に立ち、一定の認識目的の下に合目的選擇を施しつつ、内外一切の經驗を、經驗的若しくは先驗的方法に従ひ、合理的に研究して得たる體系的知識である。科學は又自然科學の意にも用ひられる。こゝは寧ろ後者であらう。

【三味境】 サンマイキヤウ 三味とは、定、等持、正定、

をなしてゐる。

【血清藥】 ケツセイヤク 「血清」とは血液凝固の際、血餅から壓出された黄色透明の液體である。ヂフテリア菌、破傷風菌等の培養液中には、毒素が新陳代謝物として菌體外に産出せられる。この人及び動物に猛毒性を有する菌素を一定方式に據り、動物(主として馬)に注射して免疫操作を行ふ時は、その動物の血清中に抗毒素が現はれる。この抗毒素を相當する毒素に作用せしめると、毒性を中和し消失せしめる。血清療法の根據はここに起りペーリング及び北里博士の名を不朽にした。この抗毒素を含む血清を血清藥といふ。

【ロックフェラー】 アメリカの富豪。一八三九年七月八日、ニューヨーク州リッチフィールドに生まる。小學校を出ただけで小さな店で働き一八七〇年スタンダード石油會社を創り、一八八二年有名なスタンダード石油トラストを形成した。その後トラストの暴威がアメリカの輿論を刺戟し、一八九二年には同トラストの解體とまで發展したので、爾後一九一一年まではニューヨーク州法に據る會社とし、彼はこれが社長として活躍してゐたが、その後一切財界の表面に立たずロックフェラー財團をつくり、専ら慈善事業に没頭してゐた。この財團の表面に立つてゐるのはその息である。

【招聘】セウヘイ 禮を具してまねくこと。「聘」は禮を以て賢を徵す意。

【故國】ココク 母國即ち日本。

【研究所員】はじめ彼は一等助手であつた。

【確乎不拔の學者的地位】カクコフバツのガクシヤテキチキ シツかり立つてゐて退ける事の出来ない程の學者としての立場。

【獨逸國】ドイツコク 歐洲大陸の中央部を占める共和國で世界大戰後、その周邊の地と植民地とを失つたが昭和十三年四月オーストリアを併せ其の勢見るべきものがある。一九一三年には王國であつた。

【伯林】ベルリン プロシヤの主邑であり更に全國の首府で、市街は頗る壯麗で、政治・學術・商工業の大中心となして、その大學は世界學術の淵藪と稱せられる。人口四、二四二、五〇一。

【滔々と】タウタウト (一)水の盛に流れる貌。(二)廣大なる貌。(三)大水の貌。(四)水の流れて返らざる貌。ここでは(一)

【發表演説】研究發表の爲の演説。

【南阿】ナンア 南アフリカ聯邦で英國の自治領。ケープナタール・トランスヴァール・オレンジ自由州の四部から成り、英・蘭兩語を國語とし、行政府をプレトリアに、

兩院制の議會をケープタウンに置く。

【該博な】ガイハク 「該」はかねる。博く兼ね通じてゐること。博く各種類の方面の知識を含んでゐる研究。

【肅然】シュクゼン (一)ととのふる貌。(二)つつしむ貌。こゝは(二)

【明答】メイタフ はつきりした答。

【花形】ハナガタ (一)種々の花の形。(二)痘痕。(三)鏡の異名。(四)俳優などの若くして華やかに扮つものの稱。又その人氣があつて評判高きもの。こゝは最後の意。

【明星】ミヤウジヤウ (一)金星。(二)社會に於て最も傑出し、萬人の其の徳を仰ぐ程の人。こゝは(二)

【パリ】フランスの首府。西ヨーロッパに於ける經濟、文化及び政治の大中心で世界第一の藝術、娛樂市として流行の本源をなす。人口二、八九一、〇二〇。大阪市に次ぐ人口多き都會である。

【駐劄】チュウサツ 駐在に同じ。主として使臣に用ひる。

【三段抜き】サンダンヌキ 新聞活字の組方の名稱。即ち新聞紙の各面は數段に分たれてゐるがその段を三段とりはづして、其の場所に通して大きく記すこと。

【大標題】大きな見出し。

【驚愕】キヤウガク にはかにおどろくこと。「驚」は思ひ

けない事に恐るべきことがあるのをハツと思ひ心のしまること。「愕」は膽をつぶしておどろきあわてふためくこと。

【矜持】キンジ ほこりとしてたのみに思ふこと。
【晚餐】バンサン 夕食。
【壓倒】アツタウ おしたふす。

2 文の構成

第一節 初―八二頁六行 出發から到着まで。

1 横濱出帆の際の感慨と見送りの老母(初―八二頁一行目)

2 シヤトル到着と感激(八二頁二行―八二頁六行)

第二節 八二頁七行―八四頁一行 フレキシナー教授の斡旋と蛇毒研究。

1 大陸を横斷フレキシナー教授を訪問、その助力と指導を懇請(八二頁七行―八三頁四行)

2 ペンシルバニヤ大學に直ちに入る事を得ず當惑す(八三頁五行―八三頁八行)

3 フレキシナー教授のすゝめにより蛇毒の研究に従事(八三頁九行―八四頁八行)

4 一ヶ月間に於ける蛇毒研究業績とフレキシナー教授の賞讃(八四頁九行―八五頁一行)

5 蛇毒研究報告論文摘要發表とその結果(八五頁二行―八五頁一行)

第三節 八五頁二行―八七頁四行 生活苦。

第四節 八七頁五行―八八頁四行 カーネギー研究所海外研究員としてコペンハーゲン國立血清藥院に於ける研究。

第五節 八八頁五行―八九頁二行 ロックフェラー醫學研究所員となり三十九歳にして正員となる。

第六節 八九頁三行―八九頁六行 三十九歳迄十年間の驚くべき研究業績。

第七節 八九頁七行―八九頁一〇行 京都帝大に論文提出醫學博士となる。

第八節 八九頁一行―九〇頁三行 東京帝大に論文提出理學博士となる。

第九節 九〇頁四行―九一頁六行 伯林萬國醫學會に於ける發表演說とその評判。

第十節 九頁一七行―終 英佛學會に於ける講演と新聞紙の特報により石井大使の感謝訪問。

3 文意

二十歳の夏から帝都に苦學を續けた野口英世博士は二十五歳にして愈、多年の希望である米國留學に旅立つた。人々に送られ老母に送られて感慨無量で出發したが、シヤトルに着いた博士は、先づ異境の新天地に一歩を踏み入れた誇りかな衝動を満身に感じたのであつた。

直ちに米大陸を横斷ペンシルバニヤ大學にフレキシナー教授を訪問同大學入學の希望をのべたが同教授の斡旋によつても新學期を待たねばならなかつた。然し教授は蛇毒の研究を奨められた、博士は正月元日から研究室に閉ぢ籠り研究に没頭した。この一ヶ月の研究業績はフレキシナー教授を驚かせたばかりでなく、その摘要の報告論文はペンシルバニヤ大學は勿論、米國科學界の異常なる注目を惹き、米國科學研究會及びカーネギー研究所から研究費及び獎勵費を交附される事になつた。又同大學からは卒業生の受くべきマスターオブサイエンスの學位を與へられた。

細菌學者としての地位はめざましく高まつたが其の生活苦は甚しかつた。然し博士は一室を占領して朝から夜まで自由に研究の出来ることを何よりの楽しみとして科學の三昧境に浸る幸福を満喫して居た。

フレキシナー教授の助手として三年間を経過するうち世界に於ける蛇毒關係の研究は征服し盡くしてしまつた。カーネギー研究所はこの成績を認め海外研究員に推薦したので博士はコペンハーゲンの國立血清藥院に入り滿一ヶ年有益な研究を遂げた。

ロックフェラー醫學研究所が設立されると博士はその研究所員の一に加へられ、三十九歳にして研究所正員にあげられ

た。この十年間に博士は實に新研究百種以上もなしとげたのであつて人間業を絶したものであつた。

これより先三十六歳にして京都帝大に論文を提出して醫學博士となつたが、三十九歳では東京帝大に論文提出理學博士となつた。こゝに故國に於ても確乎不拔の學者的地位を占めることになつた。

一九一三年三十八歳の時には伯林の萬國醫學會に出席發表演說を行つたが、その名聲は一時に高く、英佛學會にも招かれて講演をなし新聞紙は大々的に之を報道した。

駐佛大使石井菊次郎氏はこの記事を見て感激ホテルに博士を訪ねて、日本人が學術的に世界を壓倒し得ることの實證を示してくれた博士に對し、最高の敬意を表した。

4 鑑賞批評

研究ととりくんで、すべてを忘れてそれにくひ入つて行く熱意と精力、その三昧境に浸る幸福が行間に脈搏つて行く。そして次々にあげられて行く業績・成果・成功は輝きに充ちてそれ自身學術日本の相を物語り實證して行くのである。時恰も日露戰爭後、武力的政治的日本の躍進を示した時である。この學術日本の相の象徴が如何に世界人を驚かしたか、そしてそれが後から來る同胞の胸に如何に大きな信念と激勵とを與へて行くかが讀みとられなければならない。

次に逐次鑑賞を進めて行かう。

〔明治三十三年十二月五日〕

北清事變のあつた年、四年後には日露戰爭が開かれるといふ微妙な國際情勢の中、そして留學生等もあまり多くない時である。しかも師走である。人情ならお正月でもして行かう、行かせようと思ふところである。しかし研究の前にはお正月など考へてはみられないのである。

〔母堂もはるばる郷里の翁島から出て來て、當分逢はれない博士の姿を見守つた〕

まことに「はるばる」であつた。しかしその事實的道程よりも母人その人の心にとつて見ればこの距離が如何に遠いものであつたらう。そして博士の姿を「見守つた」のである。背こそ低いががちりした二十五歳の青年、背廣の服に身をかためて潑刺として希望に輝いて居る息、そして當分逢はれない息、遠く／＼外國に出て行く息、それを見守る老の眼は息の一舉一動を見のがさなかつたであらう。然し事實は母堂が見送りをされる程の經濟的餘裕はなかつたのである。

〔さすがに感慨無量であつた〕

「さすがに」の内容を盛る詞は後の「今日しもその希望が叶つて云々」に出て居る。如何に年來の希望が叶つて歡びに溢れてゐるとはいへ、これで愈。この人々とも、母上とも故國ともしばらく別れるのだと思ふと一種離別の情も湧く。歡喜と、別れゆく淋しさと、これらが複雑に交つて無量の感慨が湧くのである。

〔今日しも多年の希望が……〕

今日といふ今日。即ち「しも」といふ助詞の意を明瞭にしたい。

〔母堂の兩眼には子の前途に恙なかれと念する涙が輝いた〕

困苦と缺乏に一家を支へ奮闘しぬいた五十歳半白の母の兩眼に光る涙。人一倍母を案じてゐる息に心配顔を見せまいとして氣丈にこらへてゐた母は息の姿が消えてゆく、今一時にせき上げる涙を止める事は出来なかつたであらう。

〔幾千哩彼方なる故國の空を眺めて……誇りかな衝動を満身に感じた〕

翁島の貧農の子は苦學に苦學を重ねて遂に多年の希望が叶つて渡米したのである。この境遇の前には故國を思うて淋しさを感じる餘裕はない。むしろ新天地に足を印した事に將來の勇躍が約束されて居るかの様に思へて満身に誇りかな衝動が感ぜられるのである。

〔一別以來一年半、交、至る萬感を抑へつつ、博士は同大學入學の希望を陳べて指導と助力とを懇請した〕

明治三十二年の四月中旬北米ジョン・ホプキンス大學病理學教授シモン・フレキシナー博士は數名の人々と共にフィリッピンに於ける、米國軍隊の保健衛生状態を視察のため派遣された途次、日本に上陸し「帝國ホテル」に宿泊した。フレキシナー博士は先づ世界的細菌學者たる北里博士に敬意を表すると共に、其の主幸する傳染病研究所視察を申込んだ。この時フ博士招待の使者となり通譯者となつたのが英世氏であつた。又フ博士一行の東京市内衛生施設状態視察に際しても數日間案内役を務めた。この時フレキシナー博士と會談中「私は是非渡米して、御地の優れた醫學を研究したいのです。それが私の多年の宿望ですが如何でせうか」といつて博士の脈をひいて見た。「それはいゝお考へです。その節はお力添へを致しませう」と博士は何氣なく答へた。然しこれこそ英世博士にフ教授を「夢寐にも忘れない」ものとさせたのである。「交、至る萬感を抑へつつ」全く一言の依頼状をよせることもなく、昨年の儀禮的一言を頼りにはる／＼渡米して來たのである。如何なる結果になるか不安であつたであらう。或は又この偉大な學者によつて學び得るかもしれない歡喜もあらう。或は又昨年は故國に於て自ら案内の役をつとめたが、今はかく異境の地に博士の温顔に面接してゐる。不思議といへば不思議である。かうした種々なる思ひを秘めて純眞なる青年野口は懇請したのである。まことに「懇ろなるお頼み」であつたらう。この眞實溢れる懇請あつたればこそ「何事も快く引受け」てもらへたのである。これ等の消息の間に野口英世博士が我が道を行かんとするに如何に熱心であり、如何に純一であつたかが窺はれるであらう。

〔その年も押詰つた三十一日の夜〕

シャトル港に着いたのが十二月二十四日、フィラデルフィア到着が二十九日、直ちにフ教授を訪れたのであるが、その翌日である三十一日の夜、しかも大晦日である。この時にすら、かく手早に事を運んでくれる事にもフ教授の好意と眞實及びその人物が窺はれる。

〔その翌日即ち千九百一年の元日から……朝から晩まで研究に従事した〕

「翌日」「元日から」「朝から晩まで」これらの句をよく味はへば博士が如何に熱烈に事に當つて行つたかが察せられよう。然し事實は四日からであつた。

〔不在中に研究した業績の幾つか〕

奥村鶴吉氏の野口英世傳によると「彼は教授の不在中ベンシルヴェニア大學の圖書館に籠つて僅かに「パン」と水で飢を凌ぎながら、蛇毒に關する英、佛、獨の原書を廣く撿ます涉獵した」「彼は自ら綴つた蛇毒に關する總ゆる文献の抄録を、二百五十頁の大冊にまとめて教授に捧げた」とある。

〔博士の細菌學者としての位置は、目ざましきまでに高まつて〕

當時博士から恩師血脇氏に送られた書翰に「小生は教授（フレキシナー）の無限の慈心より縁もゆかりもなき人々まで追々に、見續かるゝ有様になりかゝり申候。嗚呼實に懷舊の涙に不堪候」とある。この間の消息を物語つてゐるものである。成功の第一段階に立つての博士の感慨を行間に讀破すべきであらう。

〔その生活は質素極まるものであつた〕

與へられる研究費は生活に費消する事は出来ないから質素にせざるを得なかつたのであらう。

〔生活苦〕「一日に三度のパンさへとり得ないこともあつた」は之を示してゐる。

〔科學の三昧境に浸る幸福を満喫した〕

奥村鶴吉氏の野口英世傳には次の如く記してゐる。「渡米當時は唯功名心に驅られるが儘に、一意榮譽を求めて歇まなかつた。特に、生來極貧に虐げられてきた彼としては、他を見かへしてやらうといふ、功名心の熾烈さが彼を驅つて、益々精進させてゐたことは明かである。然るに彼が蛇毒及びそれに附隨した科學研究が進むにつれ、多大の興味を感じて、漸次、眞摯なる學究の三昧境に自己を没入するに至り『此の考へは全然消失して單に斯道の爲に一生を犠牲にすること』と

決意せしむるに至つたことである。」又その書翰に「爾來小生の業績は更に一層の佳境に入り、時々徹夜なども致し申候。實に愉快此上も無御座候」ともある。

〔毎年二千弗・三千弗の補助があつても、研究費としては、決して有り餘る金額ではなかつた〕

蛇毒の研究は毒蛇の購入、飼育、等に關し非常に費用の多くかゝるものである事は氏の書簡中にも印されてゐる。

〔世界に於ける蛇毒關係の研究は博士の檢討に依つて殆ど征服し盡くされた〕

明治三十五年三月血脇氏宛の書翰によつて見ると、當時世界で殆ど唯一の治療手段とされてゐた佛國製血清は他種の毒蛇の場合には有効であるが米國に最も害のある響尾蛇の場合には防禦力不完全なる事が發見されて居る。尙此の書中に於て「甚だ自畫自讚的口調にて御耳障りに候はんが實際今回小生の遂げたる蛇毒研究は慥かに從來の諸家の業績に見出すること能はず殆んど嶄新に候。且つ研究の方針が一層キハドク御座候」と報じてゐる。

〔カーネギー研究所は博士の成績を認め、これを海外研究員に推薦した〕

この報を得て博士は如何に歡んだ事であらう。この間の消息は同じく血脇氏に宛てた書翰に記されてゐる。その中に「今日まで外國大學より留學を命ぜられし日本人なし」と自ら得意の状を示し「全體如此境遇は自分より申出だして幾ら頼めばとて許可せらるゝものにあらず候。實に自から嬉敷御座候」とその歡喜の情を敍べてゐる。

〔コペンハーゲンなる國立血清藥院に入つた〕

何年來熱望してゐた獨逸行を止めて留學地として丁抹を擇んだのは意味があつた。それは彼が、砂丘樓上の名譽心を捨てて、冷徹の學究生活に生きようとする、心的變化が有力な理由であつたのであらう。未だ科學研究施設の完備してゐない「母國へは時々歸省位」にとゞめ學問の拘束のない自由の國「北米の天地に永くとゞまつて」思ふまま研究を遂げようとするには、獨逸醫學の冠をつけて、日本の醫學の大勢に順應する必要はない。只自分の性來の天分能力を信賴して、實

力の涵養に重きを置けばよい。さう考へたのであると思はれる。そこで閑靜で裕々研究をなし得られる、しかも彼が志望する血清學の研究には、當時世界的の權威として重きをなしてゐたこの藥院を擇んだのである。

〔同藥院に於て有益な研究をなし〕

響尾蛇に對する血清の研究を進めてこれを大成することが出來た。

〔滔々と發表演説を試みた〕

博士の特別講演は、彼の最近の業績に關するもので、微毒病原體の純粹培養、痲痺狂と微毒病原體、狂犬病原體の培養等がその主題であつた。

〔博士は實にこの醫學會に於ける唯一最大の花形であつた〕

「當日になると彼が未だ壇上に起たざる前から、會衆の熱狂的歡迎の拍手は、さしも廣い場内に怒濤の如くに湧き起つた。場内に入りきれぬものは、場外に溢れて人山を築き、せめて博士の風采だけでも一目見ようと、奔めき合つてゐた。」

「博士が入京された時は維納の新聞は博士の肖像を掲げ、博士の記事を滿載し、『日本の凱旋』といふ文字を使つて歡迎辭を掲げた。」

「さて會場へ行つたのであるが、會衆は一齊に野口々と探してゐるが、何しろ博士は小さいものだから見つからぬ。丁度日本から出席された田中館博士が野口さんと間違へられたりした。其の内に私に（眞鍋嘉一郎）に聞きに来る者があつて夫々紹介するといふ有様であつたが、ベルリンのヒス教授が『あれが野口か、なる程人相を見ても彼は偉い』と賞讃するから『どういふ人相が偉い處か』と尋ねたら『あの頭髮が巻き上つてゐるだらう、あそこが偉い處だ』と言つたものだ。」

と奥村鶴吉氏の英世傳にのせられてゐる。（因みに本書の伯林は維納であり萬國醫學會は萬有科學會である）

〔日本人が……實證を示してくれた博士〕

「おれはアメリカにゐて世界に日本人の研究を見せてやるんだ」とは博士自身が言はれた言葉である。まことにその詞の如く實際に實現したのである。

三 備 考

1 指導研究

あまりにも輝かしい博士の世界的業績であるが、それが如何に榮譽に充ちた、花々しいものであるかを十分に讀破させそこに少年達の憧憬の瞳を輝かさせる事が指導の第一着手ではなからうか。

しかし單に結果の花々しさのみを見て淺薄なる賞讃を送るに止めてはならぬ。すべて傳記のよさはそれが事實に根柢を持つからである。そしてその生活と讀者の生活それ自身との關係を見出す時に最も感銘深く讀まれ、生活の指導者として生きてはたらく力を持つて來るのである。その生活の共通性の發見こそ本課を生かす第一の鍵であらう。

「軍人や政治家のみが日本人を代表するものではない」と博士自身も言はれる。博士こそ文化日本、學術日本人を代表する偉人であるが、それは成るの日になつたのではない。必ず據つて來るところがある。博士の場合それはイ、母の教育口、精進勉強ハ、不具ニ、天來の頭腦、の四つである。本課に於ては手の不具であつた事は窺ひ得ないが、他の三者は讀みを深める事によつてつかみ得る事である。この點が力強く行はれたものである。

然しこの効果をもつと有意義にするには博士の研究ぶり、生活ぶりを敷衍する必要がある。そして遂に少年達が是非博士の傳記一冊を讀破して自ら發奮興起するまでに指導したいものである。

2 參考

博士の研究熱意其の他を立證する文を奥村鶴吉氏の書から左に列挙しよう。

イ、彼は、研究に着手すると「二十四時間、不眠主義」だといった。まるで氣狂ひである。荒木が夜學から遅く歸つて来て、十二時頃に眠る時分に、野口が眠つてゐたことはない。そして荒木が朝餉の支度に五時半頃起きてみても、彼が研究報告などを書き續けてゐることは珍しくない。「先生、それでよく御體が保てるものですね」「そりあ、僕だつて眠い時もあるよ。人は意氣で生きるんだ。なかに眠るものか——と頑張れば眠くないものだ。大體僕が眠るといふことは、明日の研究の爲めに、止むを得ないと思ふに過ぎないからだ」

ロ、血脇氏への書翰前略「一兩日前帝國學士院より恩賜賞授與議決の旨通知に接し小生も多少驚き申候。小生の業績は學界に多少の注意を喚起せしことこれありしも、恩賜賞の價値あることは疑はしき事に存候。菊池男爵の好意、緒方、兩三浦諸先生の直接又は間接の申請推輓によるならんと察し候。小生の光榮此上もなく候。

授與式には何卒小生の代理として、御出頭被成下度願上候。賞牌は一應渡部先生へも御示しの上、又々御面倒ながら小林榮氏を通じて愚母まで御廻送の上、御閑暇の節小生の許へ御郵送願上候。

要するに小生今日の境遇は漸く多年の苦境を脱し少くも最も敬慕する慈母の晩年を安寧に送らせ得るの日に達し申候。小生の過去に於て最も懸念し奮起せしものは母上なりき、且將來に於ける小生の光明と勇氣も一に母上の愛に有之申候。今回も一度歸朝し度きも旅程甚だ遠く小生目下の境遇之を許さず候。併し數年間にはドウカ都合して歸省可致候。右は小生が今日如何に幸福に感じ居るかを御知らせ申す爲叶露致候。是も悉く幼時は小林榮先生、少年時は渡部鼎先生、青壯時は恩師と奇妙にも一種變つた人物に親近するの機を得、其補助を仰ぎ其感化を受けて、進捗し來りしに因る事と存候。渡米後も非凡のフレキシナー氏、丁抹のマドセン氏等よりの感化に浴し候。下略」

博士の傳記の中本文を採録した橋輝政氏のは、昭和四年發行のもので興深く讀まれはするが調査が充分でなく傳説的誇張多く物語の風が認められる。昭和六年に至つて同氏は「野口英世書簡集と母の生涯」を著して先の不備を補はれた。

昭和八年に至つて奥村鶴吉氏は確實な資料に基づき博士の全貌を示され、益するところが多い。同書は岩波書店から發行される。尙少年の讀物としては大同館から奈良島知堂の「野口英世博士」が發行された。奥村氏のものには偉人の反面にある弱點等も擧げてゐるので少年には誤解されはしないかとおそれるのであるが、それだけに青壯年者には有難いものがある。

二三 歌と宗教

若山 牧水

一 解題

1 作者

若山牧水 ワカヤマボクスキ 明治十八年八月二十四日、宮崎縣東臼杵郡東鄉村坪谷の醫家の長男として生まれた。本名は繁。初め野百合と號し、二十歳の時牧水と改めた。三十二年縣立延岡中學校へ入學、在學中文學を愛好し「文庫」新聲」に投稿した。三十七年早稻田大學文學科高等豫科に入學、翌年尾上柴舟を訪ひ、又北原射水（白秋）等と交つた。翌三十九年柴舟の「車前草社」に加はり、夕暮・露風等と知り又哀果・勇等とも交つた。四十一年七月第一歌集「海の家」出版、同年早稻田大學英文科卒業。四十三年一月第二歌集「獨り歌へる」出版。三月詩歌雜誌「創作」を創刊。四月歌集「別離」出版。四十四年一月創作社を起し、九月解散。四月「路上」出版。四十五年三月歌書「牧水歌話」九月歌集「死か藝術か」を出版。この年五月太田喜志子と結婚した。大正二年八月「創作」を復活。九月「みなかみ」出版。大正三年四月「秋風の歌」出版、十月以後「創作」休刊。四年四月自選歌集「行人行歌」を、十月「砂丘」を出版。この年創刊された水穂の「潮音」に關與した。五年六月散文集「旅とふる郷」歌集「朝の歌」十一月自選歌集「若山牧水集」出版。「潮音」を離れた。六年二月「創作」を復活し「和歌講話」を出版した。八月「白梅集」（喜志子と合著）出版。七年五月「溪谷集」七月「さびしき樹木」散文集「海より山より」出版。八年九月紀行文集「比叡と熊野」出版。九年八月、年來希望してゐた田園生活に入らうと決心し靜岡縣沼津町在に一家移住。十二月評論集「批評と添削」出版。十年三月「くろ土」

を七月紀行文集「靜かなる旅を行きつつ」出版。十一年十二月「短歌作法」出版。十二年六月「山櫻の歌」出版。十三年六月紀行文集「みなかみ紀行」出版。十四年二月隨筆集「樹木とその葉」十二月自選歌集「野原の郭公」出版。大正十五年五月宿望だつた「詩歌時代」を創刊したが九月廢刊。昭和二年朝鮮に揮毫旅行をした。昭和三年九月初旬病起り十七日歿した。享年四十五歳。四年より翌年にかけて牧水全集十二卷が改造社から出版された。

牧水は明治の末期、自然主義の擡頭と共に現實に苦悶する寂寥と豊かなる抒情とを歌ひ、その哀韻は大正當時の青年を風靡した。後、多少の屈曲はあつたが「くろ土」「山櫻の歌」の東洋風な自然諷詠に至つて、所謂牧水調の完成を示してゐる。牧水の生涯は歌と酒と旅とであつた。

2 出典

「森の小徑」から採つた。本書は昭和十二年第一書房出版にかゝる三五四頁四六版の隨筆選集である。牧水三十二歳の大正五年から昭和三年四十五歳で長逝するまでの隨筆の代表的作品が集めてある。書名「森の小徑」は之を編するに當つて未亡人喜志子氏の名づけたもので、牧水氏が晩年好んで散歩をした千本松原中の靜かな小徑に因んだものである。「歌と宗教」は大正九年八月から同十三年八月に至る間にものされたもので、同書にも同題目の下に教科書採録のもの全部が載つてゐる。

3 主眼及び採擇の趣旨

ひたすらに歌の道を行く牧水氏の、こころの奥がに湛へられる法悦の境を味ははせたい。それは歌道に精進するものこのころの住かとして正しいものであり、深いものである。先に「落葉松」の詩に於て北原白秋が「ほそぼそと通ふ道なりさびさびといそぐ道なり。」といひ「世の中よ、あはれなりけり。常なけどうれしかりけり」と歌つた點に通ふものがあり、「七、旅」の課に於ける歌に於てもこの境地は味はつて來た筈である。更に次課學習に當つては準備的な役割を果すであ

らう。ここに本教材採擇の趣旨がある。

二 解 釋

1 語 釋

【宗教】 シユウケウ 種々の定義があるが主なるものを列挙すれば(一)己の有する超自然的な効果を目的とする社會的機能が宗教である。(二)種々の名稱と形相とを取る無限を了知する、感覺や理性以外の心的態度もしくは能力。(三)宗教の本質は神に對する絶對の歸依の感より成り、敬虔と呼ぶ純粹にして尊敬する心の状態。(四)宗教に於ける意識的經驗を度外視するのではないが、それを單に知情意等の心的活動に限定しないで、むしろそれと相俟つて現れる外部行動を中心とし、そこに宗教の當體を認めようとする見解。

【既成宗教】 キセイシユウケウ 既に教義及び團體組織などが完成されて社會に生きつつある宗教。

【概念】 ガイネン 箇別表象から抽象により導出された一般表象(經驗論に於ける心理學的立場の定義)

【漠たるもの】 バクたるもの ばつとしてとりとめのないもの。「漠」とは廣くはてしないこと。

【佛像】 ブツゾウ 佛・菩薩の形像を模したるもの。雕像畫

像の二種があつて佛像の語を前者に限らしめ、後者を特に圖像と稱することがある。佛像を作り之を殿堂に安置して供養するは佛の在世に值遇して嚴飾の色身を禮拜する想をなさんが爲である。佛は滅度に際して其の所説の教法・戒律を以て大師と尊むべき事を示したが一類の弟子は尙之に満足する事が出来ず、其の形像を堂塔に安置し、仰いで在世の洪恩を報謝し、俯して福德の増長する事を願つた。然し佛の相好は微妙端嚴にして之を彫刻し圖畫することは甚だ容易ならずとしてゐたので、佛像のつくられたのは佛入滅後三四百年後であつた。即ち歴山大王の印度征服によつて希臘彫刻の様式を移入したためであつた。

【殉教者】 ジュンケウシャ 自己の信仰する宗教のためにその生命を棄てたるものをいふ。殉教はいづれの傳道的宗教にも行はれたことで、殊にキリスト教に於て最も多く且つ華々しく行はれ、従つて殉教者に對する關心及び尊崇の念も、キリスト教に於て最も鮮明、且つ熾烈にあらはれてゐる。キリスト教に於ける最初の殉教者はステ

パノであつて、原殉教者といはれてゐるが、その後殉教者の數と華々しさを増すに従つて、殉教者に對する尊崇は次第に募つて來た。殉教者の祝節はカトリック教會に於て重要な位置を占め、教會建立もその墓所の上に建てる事が多い。かくキリスト教に於ける殉教は其の數と華々しさと、これに對する尊敬と關心とに於て遠く比較を絶するものであるが、しかしその精神と事實とに於ては佛教やイスラム教に於ても決して缺けてはゐなかつた。たゞその宗教の性情乃至環境によつてこのあらはれ方には色々相違があつた。例へばイスラム教にては、聖戰の戰場に喜び勇んで一命をすてた人々の數は幾萬にも及んだであらう。まだ佛教に於ても大法宣布のためには不惜身命との覺悟が常に存してをり、殉教の事實も必ずしもあげるに困難ではない。

【傳説】 デンセツ 物語の傳承形式。過去の事實若しくは事實と信ぜられる事件の傳承、即ち神話・民譚・口碑等を含めるもので、ゴムは傳説に含まれるその三つの分科を説明して、神話は人類思想の最も原始的な段階に屬し、或自然現象若しくは或人間の行爲を説明した遺物であり、民譚はこれより一步進んだ文化環境中に保存された殘物、口碑は歴史的な人物・土地・事件などに關するものであるとしてゐる。

【云々する】 ウンヌンする あれこれ言葉をさしはさむこと。

【自分を知らいたために】 自分は何を求め、何をよることであるか。自分の相はどんな有様であるか、そんなことを眞實につかみたいために。

【守り育てたいために】 弱い自分、もろい自分、それを他に寄せられたり、あらぬ道に誘はれたりする事のないやうに守り、一層濁りのないもの、美しいもの、深い大きいものに育てて行きたいために。

【惰性的】 ダセイテキ 「惰性」は慣性と同じく物體の外部より力を加へざる限り現在の靜止または運動状態を繼續しようとする性質。

【ある】 存在する。即ち現實にして虚無に非ず、事實或時間・空間及び因果の關係の中に在るといふこと。

【概念的に理窟つぼく聞える】 單に概念のみを並べてゐるやうに理窟つぼく聞える。

【合掌禮拜】 ガツシャウライハイ 合掌して禮拜すること。合掌とは印度の禮法で胸前で十指兩掌を合すること。佛教者が佛・菩薩等を禮拜するには専ら此の法に依る。

【法悦】 ホウエツ 佛法の深義を聞き喜悅するを云ふ。法喜と稱するのも同じである。

【信仰】 シンカウ 所謂信念の對象は我々の現實的經驗の

中に來るものであるが、なほ我々は超感覺的なもの即ちその性質上吾人の經驗、従つてまた知識をも超越せるが如きものを信ずることがある。かかる信念は、その性質に於ても一般的の信念とは多少趣を異にしてをり、特に制限して信仰と稱せられてゐる。その心理的性質についてはリューバが「信仰とは個人と理想的な力との關係一致の感じを生ぜしめる内部的調應」であるといつてゐるが、比較的適切な説明である。しかし既成宗教の各々は

その歴史及び教義の傾向と相まつて、特殊の信仰の様式を有してゐる。例へば、基督教に於ては、信仰は人の力または徳より出づるにあらず、神が基督を通じ、聖靈によりて與へ給ふところの賜なりと教へてをり、佛教は二種の信を説き、自ら明かに理を見て心に疑慮なきを信解シニクまたは解信シニクとなし、人によりその言を信ずるを深信若しくは仰信ウヤウシクといふと教へてゐる。

2 文の構成

第一節 初―九三頁六行 宗教を持たず、既成宗教に對する概念も漠としてゐる。

第二節 九三頁七行―九六頁七行 氏の歌に對する心情と、宗教との關係。

イ 歌に對する心情は宗教と關係がありはせぬかと思ふ（九三頁七行―九三頁九行）

ロ 歌に對する考へ（九三頁一〇行―九五頁末行）

ハ 歌に詠み入つてゐる瞬間の心情（九六頁初行―九六頁七行）

第三節 七六頁八行―終 歌の道に對する信念とその道の展望。

3 文意

自分は宗教を持たず、既成宗教に關する概念も不明瞭である。故に宗教に關して云々する事は出来ないが自分の歌に對する心情は宗教に通じてゐるものではないかと思ふ。歌は自分を知りたいために詠むもの、守り育てたいために詠むもの、慰め樂しませ勵ますために詠むものだと思つてゐる。

歌に詠み入つてゐる瞬間はまことに神佛に合掌する時以上の法悦を感じる。この道こそ我が行く道にして靜かに寂しく否かに續く道である。

4 鑑賞批評

牧水の生活は歌と旅と酒とであつた。そして純一に歌人の生活に終始した人である。その純眞にして強い感激性を以て自然の寂靜境に澄み入る靈を育んで行つた。ここにはその人の生命ともいふべき歌に、詠み入つてゐる時の心境を端的に説明してくれた、うれしくも、有難い一文である。文章は平易、簡潔、流暢に敘し去られてゐるが、その中に氏の深い體驗が素直に偽らず飾らず謙虚に、しかも潤達に物語られて行くのである。氏の文章中では最も思索的なものに屬する。次に逐次鑑賞を進めよう。

〔私は宗教といふものを持たない〕世にいふ宗教を持たないといふ意味である。それは「いふもの」といふ言葉遣に出てゐると思ふ。そしてそれは佛教徒であるとか基督教徒であるとかいふ以外に一般的に宗教そのものを持たないといふ意である。次に述べられる既成宗教に對する敘述と共に少しも巧まない素直な表現である。牧水氏その人のやうに誇張や、あてつけや、見せつけの少しもない、すつきりした文である。

〔歌は自分を知りたいために詠むもの〕

自分が生まれて來て、生きて行かうとしてゐること、その存在、眞の自分の姿、それを知りたいために詠むといふのである。「自分のうしろ姿が、いつでも見えてるやうに、生き度い」ともいふ。同書には「自己を感じる時」と題する一文等がある。（参考欄参照）

〔守り育てたいために詠むもの〕

萎びた機械人形の自分から解放されて、そのいのちが、たましひがまつたくわれにかへつて靜かに瞳をひらいてゐる時

それはたのしい一時である。その時に歌は詠まれる。その静かな、澄んだ瞳に映つてくるあらゆるもの、そのうちでも、自分自身の事、自分自身の相はみな胸に沁み入るやうな悔恨や寂寥やを伴なつてくる。その時に「もつとよくしたい」といふ願望が起つてくるのである。話は逆になつて来た。然しこの逆も亦真であると思へるのである。それは「わがころ」の歌によつても窺へるであらう。そしてそれはおのづとさうした傾向をとつてくるのであつて、作爲的なものではない。

〔慰め樂しませ勵ますために詠むもの〕

歌を詠む時は心の澄みわたる時、孤獨と寂寥のよろこびをたのしむ時である。こんな時にころは樂しまされ勵まされる。萎びた自分から解放される。この境地を求めて歌を詠むのである。

〔自分の生まれて來てゐること、生きて行かうとしてゐること……〕

誰でもわかり切つてゐる事に思ひやすい。しかしそれがわからないのである。「氣のついてゐる人」に意味がある。氣がつくとは今まで氣にもとめなかつた事にハツと思ひあたる事である。あゝさうかところの奥底からおどろき醒める事である。

〔自分の姿に對して眼を見張る人すらも少い様に思はれてならない〕

「すら」に注意したい。自分の姿に氣のつく人、眞實の自分はこのなものと思ひあたる人、それは第一着手である。それから自分を磨き育て上げることもなるのである。しかし、さうした第一歩を踏み出す人も少いやうに思はれるのである。

〔わがころ澄みゆく時に詠む歌か……〕

自分のころが、靜かに澄明になり、萬物を我自らをそのまゝの相にうつして來るとき、その時詠む歌であらうか、それとも歌を詠んでゐると澄んで來るのであらうか、とにかく歌に詠み入つてゐると、心は澄みに澄んで來るのである。

〔歌に詠み入つてゐる〕

歌を詠む事の中に入つてしまつてゐる。總べての思ひを夫つて澄んだころに映つて來た事をあやまたず歌といふ藝術にまで創り出さうとするはたらしき、その事と一枚になつてしまつてゐること。

〔法悦を感じてゐる〕

あたかも信仰ある者が、佛の御前にぬかづき佛法の教を聞いて悦ぶやうな或はそれ以上であらうと思ふ程尊くも深い生の悦びを感じてゐるのである。

〔この歌の道を自分の信仰として一生進んでゆくであらうとおもふ〕

信仰はそれによつて自己の生命が存するのであり、益、尊く深い發展を遂げて行く所以のものである。牧水氏によつて歌の道はこの様な道である。歌の道によつてのみ生き行く意味があり、歌によつて高められ、淨められ、深められてゆくのである。

〔いよいよ靜かに、いよいよ寂しく、そしていよいよ杳かに續いてゐるのを感じるのである〕

今も靜かな歌の道ではあるが尙一層靜かになり、一層寂しいであらう。心が靜かに澄んで歌を思ふ時自らのすがたがはつきりと見えて來る。獨りぼつちの自分、ひそけくもこの天地に生を託する自分のはつきりと見えて來る。われとわが寂しさを噛みしめるやうな心にひかれて、みなかみへ、みなかみへと急ぐころは、とりもなほさずこの歌の道に急ぐころである。まことに歌の道は進みゆく程に寂しい道である。

そして又杳なる道である。信仰の道、自らを磨き行く道に涯しはない。行くにつれて益、遠く杳かにのぞまれるのがかうした道の特色である。

三 備 考

1 指導研究

一見平易に見える文章の中に深い内容が盛られてゐるだけに、心を澄まして讀む用意が必要である。それにしても「自分を知る」といひ「こころ澄む」といひ「詠み入る」といひ、或は「法悦」といひ「信仰」といひ、「寂しさ」といひ、何れもこの時代の少年に深い理解は或はむつかしいかもしれない。しかしこれらは、こころの生活の進むにつれて深い味を見出して行くのであるから先づ彼等の精神年齢相應に指導して諦めなければならぬであらう。

此の際理解し難い言葉を多く用ひる事は却つて霧裏に引き込む事になり、むやみに長い説明を用ひると倦怠を感じさせるのみで効果がない。平易に簡潔にその眞髓をこころで把握させるやうに導きたいものである。それには例を擧げるのが手早く結果が得られはすまいか。

2 参 考

森の小徑の中から本課に關係のある文章を次に抄出する。

「生の觀びを感じる時は、つまり自己を感じる時だとおもふ。自己にびつたりと逢着するか、或はしみじみと自己を噛み味つてゐる時かだらうとおもふ。

さういふ意味に於て私にとつては矢張り歌の出来る時がそれに當る様である。それも、うまく出来て呉れる時である。

歌が思ふ様に出来る時は萬事萬物すべてが無意味でなくなつて来る。自分を初め、自分の周圍に在るすべてがいきいきと生きて来る。自分を中心としてめいめいが光を放つてゐる様な明るさを感じる。自分を中心として全てがなり立つてゐる様な力を感じる。初めて、我此處に在り、といふ歡びが五體の中に湧いて来るのを感じる。」（森の小徑一七五頁）

「山深いところなどで不圖聞きつけた松風の音や遠い谷川のひびきに我等はともすると自分の寄る邊ない心の姿を見るおもひのすることがある。然し、松風や水のひびきは終に餘りに冷たく、餘りに寄る邊ないおもひがしないではない。それに比べて私は遙かにこれらの鳥の啼く音に親しみを持つのである。カッコウ、カッコウと啼くあの静かな寂しい温かい聲を聞いてみると、どうしても私は眼を瞑ぢ頭を垂れ、其處に自分の心の迷ひ出でて居る寂しさ温かさを覺えずにはゐられないのだ。」（同上二四九頁）

一四 野火の烟

一 解 題

1 作者

尾上柴舟 ヲノヘサイシウ 本名八郎。明治九年八月二十日、岡山縣津山町に同藩士の子として生まれた。十五歳小學校を卒業。それより以前頻りに作歌慾が湧き直頼高翁の許に作歌を學んだ。五月上京、東京英語學校（日本中學校前身）に入り翌々年東京府尋常中學校（府立一中前身）に轉じた。此の頃尾上家に養子となつた。古今集を誦んじ、大口鯛二に師事した。二十七年（十九歳）の頃から佐佐木信綱・落合直文の新歌風に私淑して御歌所風に漸く離れた。二十八年一高に進み、落合直文に師事した。三十一年五月久保猪之吉・服部躬治・大伴來目雄・菊池駒治等と「いかづち會」を起した。六月東京帝國大學國文科に進み三十四年卒業の後も大學院に残つた。譯詩「ハイネの詩」出版。又哲學館（東洋大學前身）講師となつた。三十五年女子高等師範學校・早稻田大學講師となる。十一月第一歌集「銀鈴」出版。三十八年女子高等師範學校教授となる。これより前、若山牧水・前田夕暮・正富汪洋・三木露風等と車前草社を結び「新聲」に據り詩集「金帆」出版。四十年歌集「靜夜」出版。四十一年學習院教授、東京女子高等師範學校講師となる。四十二年八月歌集「永日」出版。四十三年「短歌滅亡私論」を書いた。四十四年、石井直三郎・岩谷莫哀等第二車前草社同人により「車前草」を創刊し主宰した。大正二年一月歌集「日記の端より」出版。三年四月、石井直三郎・岩谷莫哀・和氣朝庭等により「水甕」を創刊主宰して現在に及ぶ。十月歌集「白き路」十一月「日本文學新史」出版。四年四月「短歌新講」十一月歌集「遠樹」

出版。五年五月「短歌髓腦」出版。大正七年女子高等師範學校教授に復し、八年十月歌集「空の色」出版。十一年再び女子學習院教授となつた。四月「古今と新古今」出版。十二年論文通過して文學博士となつた。大正十四年三月「歌と草假名」五月歌集「朝ぐもり」七月博士論文「平安朝時代の草假名の研究」を夫々出版。六月から「日本文學大系」二十四巻の解題を書き初めた。昭和三年鮮滿旅行、四月歌集「御光のもとにて」（宮中參候の作を收む）出版。五年七月歌集「行きつゝ歌ひつゝ」（鮮滿驛旅の作）十一月歌集「間歩集」出版。上記の著書の外に、嘉祿本「古今和歌集」「校註新古今和歌集」等古歌に關する研究、校訂書等多く、書道書體に詳しく、假名書きは現代第一人者と稱せられる。現に日本書道會幹事・泰東書院理事である。

前田夕暮 マヘダユフグレ 明治十六年七月二十六日、神奈川縣中郡（當時大住郡）大根村南矢名の農家の長男に生まれた。本名洋造。三十一年中郡中學に入り神經衰弱の爲翌年退學。病弱と放浪の生活を経て三十七年上京、尾上柴舟の門に入り、國語傳習所及び三島中洲の二松學舎に學んだ。翌年柴舟を中心とした車前草社に加はつた。三十九年「白日社」を創立し、四十年若山牧水等と雜誌「向日葵」を出し、明星派の浪漫趣味を排撃した。又パンフレット「哀樂」を出し、歌壇に注目された。四十二年秀才文壇社の編輯に當つた。四十三年三月處女歌集「收穫」を出版、牧水と並稱せられ、その「創作」同人となる。四十四年雜誌「詩歌」創刊。大正元年九月第二歌集「陰影」出版。三年一月「歌話と評釋」九月第三歌集「生くる日に」出版。この頃後期印象派の影響を受けた。五年九月第四歌集「深林」十月「短歌雜誌」出版。六年十月選集「前田夕暮集」出版。七年「詩歌」九十二號にて休刊。八年亡父の山林事業を繼ぎ、奥秩父の原生林に入る。十三年三月「日光」創刊、同人となる。十四年一月詩文集「綠草心理」十月選集「原生林」出版。十五年詩文集「煙れる田園」出版。昭和三年四月再び「詩歌」を復活し、舊同人・社友を糾合し近代主義自由律短歌を主張した。三月歌集「虹」

四年三月第三詩文集「雪と野菜」出版。昭和七年歌集「水源地帯」刊行。その他散文集や数種の編著がある。夕暮・牧水の二人は共に柴舟門に出でて自然主義の潮流に乗り、生々しい現實感の別出を唱へ、遂に「明星」の浪漫主義を排撃して夕暮・牧水竝立時代を現出した。牧水は主觀を織り交せて哀韻深き抒情を歌ひ、夕暮は後期印象派の影響をうけて生新なる繪畫的色彩を帯び、主觀本位であつた。奔放素朴、無技巧の中に、なまなまとした感覺の描寫をし、潑刺とした動きがある。「虹」の歌風に至つて口語脈發想の歌が見え初め、昭和三年の頃から自由律短歌に轉じて行つた。同年四月「詩歌」を復活して、再び萬葉以前に還れ、意識的自然觀照を避けあるがまゝの生活を端的に歌へ、素朴に、單純に、率直に新鮮に。口語的發想なれ、自然發生的なれ、——等の信條を掲げ、現在なほ新興短歌の確立に努力してゐる。

金子薫園 カネコクンエン 明治九年十一月三十日、東京神田に生まれ雄太郎と命名。武山氏より出でて、外祖父の家をつぎ金子姓を名乗つた。神田小學校を経て、二十二年補充中學校（東京府立四中前身）に入り三年級から東京府尋常中學校に轉じ、病んで翌年退學。五六歳の頃、母の子守唄の如く古今集を口ずさんだのに冥々の感化をうけ、歌に志し、中學時代から學友會雜誌や「少年園」「少年文庫」等に投書、中學退學の頃から落合直文に私淑して、國文に志し、二十六年十月落合直文を訪ひ淺香社に加はり和歌改革運動に參じた。三十年「新聲」歌壇選者となり、「新聲」や「文學界」に歌を發表した。三十四年（二十六歳）一月第一歌集「片われ月」出版。三十五年四月「新聲」歌壇の青年歌人の歌を柴舟共選にて「絛景詩」と題し出版。三十六年「白菊會」を起した。三十七年五月「新聲」の後身「新潮」發刊と共に歌欄を擔任し編輯を助けた。三十八年三月「小詩國」出版。十月短歌研究會を起した。三十九年四月「伶人」出版。四十年三月「わがおもひ」出版。四十三年「覺めたる歌」出版。四十四年美術批評の筆をとり「讀賣」「新小説」「新潮」等に發表。十二月「山河」出版、大正三年二月「草の上」出版。四年三月「金子薫園集」出版。六年十二月「星空」出版。七年十月、短歌

研究會より機關誌「光」を創刊主宰した。九年三月「靜まれる樹」出版。十一年新潮社調査部長となつた。十二年二月第十歌集「濃藍の空」出版。十四年十一月、誕辰五十年記念を門下によつて催され又既刊十歌集及び最近二年間の作を自選輯録し、「金子薫園全集」を編み新潮社から出版した。その他著書としては「和歌入門」等数種の作法書、「和歌新辭典」小品文集等十餘種がある。昭和五年に至り自由律の短歌も併せ作り發表し、最近は「光」の殆ど全誌をあげて所謂新體短歌に轉向した。

2 出典

尾上柴舟のは「細風抄」から、前田夕暮のは「原生林」から、金子薫園のは新潮社の「金子薫園全集」からとつた。細風抄及び原生林は共に改造社出版の自選歌集である。

「金子薫園集」は明治三十四年の「片われ月」「小詩國」「わがおもひ」「覺めたる歌」「山河」「濃藍の空」「草の上」等から千二百二十六首を選抄したものである。

3 採擇の趣旨

牧水の歌道の心髓敘述の後をうけて、柴舟・夕暮・薫園三氏のそれ／＼特色ある自然諷詠をあげて、絛景歌の神髓を理解させたいと思ふ。更に自然觀照の態度を學ぶ事により、短歌創作への興味を喚起し得れば幸である。

二 解釋

つけすてし野火の烟のあかあか見えゆく頃ぞ山は悲しき

【日記の端より、旅の歌」といふ詞書がついてゐる。
【つけすてし】 火をつけて燃ゆるがまゝにしてゐる。

【野火】 ノビ 野間の畑に物の種を蒔かうとして冬の枯草を春の頃焼き拂ふこと。

【あかあかと見えゆく頃】 眞晝は白い烟もたそがれの頃に—— なるにあかあかと色づいて見え初める。そんな頃。「ひろびろと野の見渡される山である。ひたひたと夕闇がおしせまつてくると、曠野の中につけすてられた野火の烟があかあかと色づいて来る。さうなつてくるとき山人のころはものがない思ひに満たされるのである。」といふ意。一首澱みなく歌ひ終つて居り、哀調を帯びた風韻を持つて居る。つけすてられたまゝ次から次へと燃えひろごつて行く。細りつつ太りつつ、守る人なきまゝにチロチロと燃え續けて行くのである。消えるかに見えつつ尙續きゆくその火は晝間見てもわびしいものであるが、夕闇せまる山里で、烟さへあかあかと火照つて来るのを見ると一きは淋しい。あたりには聲なく野も山もとつぶり暮れて行かうとしてゐる。哀愁なきを得ないわけである。

小羊のしづけき夢やまもるらむ牧場にひくき夕づつのかげ

【夕づつ】 太白星即ち金星を暮天に稱する語。宵の明星。【かけ】 (一)陰。(二)すがた。(三)光。こゝは(三)

牧場の空ひくく宵の明星が光つてゐる。そのやさしく清い光は、牧場に眠る小羊のしづかな夢をも見まもつてゐるのであらうかの意。静かなおだやかな牧場の夜の敍景である。廣漠とした牧場は靜かに暮れてはや大分たつてしまつた。牧舎は一際静けさにねむつて音もない。中には小羊がどんな夢を見てゐよう、静かな美しい夢であらう。あちこちに羊の群が鳴いてゐた。走つてゐた。群つてゐた。そんな晝の幕がとちられて、すべては休息のしじまに入つてゐる。そのしづけさは身にしむばかりである。あたゝかい、清らかな静けさが感ぜられる歌である。小羊といひ、しづけき夢といひ、夕づつといふことばが、このあたゝかさ、清らかさをかもし出したものと思ふ。

冬ざれし離れ小島の崖の皺あらはに見ゆる夕あかりかな

【冬ざれし】 冬になつて荒涼としてゐる。「ざれし」はラ行連體形の添はつたもの。「さる」は「曝す」と言ふ語の自動詞の形で、久しく風雨にあたりて舊り壞れる意。

下二段の動詞「さる」の連用形に過去の助動詞「き」の冬の陽はいつしか沈んだが、急に暮れてしまはず、静かな夕明りの一時である。海を隔て、沖の方には一つの離れ小島が見える。その小島は冬の冷たい雨風にさらされて荒涼としてゐるのであるが、その島にも夕明りは残つてゐて、冷たく荒んだ岩壁にある皺の形まではつきりと見える。「冬ざれ」と言ひ、「離れ小島」といひ、「崖の皺」と言ひ、「夕あかり」と言ひ、すべて美しい寂しさの世界である。冬の日のその「寂しさ」が「夕明り」によつて統一され、「夕明り」によつて象徴されてゐる。

枯草にこやりてあれば空青し索道の線の太く横ぎる

【こやりて】 「こやる」はラ行四動、臥する古言。臥して。

【索道】 サクダウ 「索」はなは、架空索道である。運搬地品をこの鋼索を同一方向に同一速度で運轉させ、これに物品を入れた搬器を懸けて運搬するもので、山嶽地方には最も適當した運搬設備である。

枯草に臥て空を仰いでゐると空は青く澄んでゐる。そしてその大空を黒い太い索道の線が二本横ぎつてゐる。青空とこれを横切る索道、ここにも悠久の大空を走る近代文化の動脈がある。

大正九年奥秩父に於ける作である。氏は奥秩父の原生林に入つて樵夫等と森林生活を共にした。仕事の間に枯草にねて空を仰ぐのである。そこには肉體と精神と兩方の慰安があつた。そして體もこころも伸ばして呼吸をする。あゝそこには何と青々と澄み切つた大空がある事だらう。山の空は底まで青い。而も枯草の上になつて仰ぎ見る空である。立つたまゝ仰ぐ、見なれた空よりも、一層珍しく青々と見えたのであらう。「空青し」と言ひ切つたところにこの邊の消息があると思

ふ。見るとそこには太い索道の線が横きつて居るのである。みれば全く突然と、全く別のものがおどろかされる様に横切つてゐるのである。それは大自然と文化とがそこにかうした相を以て存在する。この全く別のものがかうした不思議な相で存在する相は先づ第三句で言ひ切つておいて、次に全く別に言ひはじめた表現によく一致してゐる。自然と文化との存在が最も單純に、最も純粹に表現されたすがたである。そこに我々はこの歌の把握の新鮮さを見る。

明日越ゆる山に光の赤くさし暮れゆくが見ゆ旅人の眼に

大正元年九月箱根に遊ぶといふ詞書がある。長い旅路険しい旅路をこの箱根にさしかゝつた。丁度秋の夕日は明日の豫定に入れてある彼方の山をあかあかと照らしてゐるが、それも次第に色うすれて暮色はやゝに濃くなつてゆく。旅人の眼にはそれは感慨深く眺められる風景である。氏の所謂繪畫的、外光派的表現であらう。

硝子戸の外は海なりくろぐるとうねりたかまる日の暮れ行けば

【うねり】 暴風雨の中心で起された波が洋上を傳はつて來る波。

すぐ大海に面した家である。硝子戸の外はすでに海である。冬の日が暮れてゆくとその海にはくろぐるとしたうねりが來る。しかも大きく高くなつてゆく。硝子戸越にそのくろぐるとしたうねりが高まつて眼に入る。鈍重にして壯大な描寫である。

鳥かけの窓にうつろふ小春日を木の實こぼるる音しづかき

【鳥かけ】 「かけ」にはいろいろな意味があるが、こゝでは委の意。

【うつろふ】 「映る」の延。ハ行四段活用の動詞の連體形である。教科書に「うつろう」とあるのは誤植。

【小春日】 (一)冬の初め日ざしうらゝかにつゞき、さながら春の趣をなす時。(二)陰曆十月の異名。こゝは(一)【を】 時を示した助詞。

靜かな部屋に坐して見るともなしに窓に視線をうつしてゐると丁度小鳥のかけが黒くうつつた。おだやかな小春日である。外では何の木の実か、栗か、榎の実か、ガサツと音たてて落ちてゐる。靜かな音だ、そしてあたりは一入靜かになつて行く。

窓は丸窓か或は障子でもしめられてゐる窓なら一層はつきり鳥かけの印象をつかむことが出來よう。和やかな靜けさがしみ出してゐる歌である。

野にちかく家居しをれば遠くより來る夜のしぐれさやかにきこゆる

【しぐれ】 秋冬の際に且降り、且晴るゝ小雨の稱。

【さやかに】 さやかに、はつきりと。

郊外の野邊近く居を占めてゐると、夜のしぐれが、遠くの方から移つて來る音がはつきりと聞えて來る。これは「十一年(大正)八月の末つ方新居成り移り住む。それより冬のはじめへかけての作」といふ「濃藍の空」に出てゐる作である。野にちかくとは學習院の森に對する高田町の小高い一廓である。しぐれは次々に場所を移して降るから、遠くに降つてゐる音、それが次第に近づいて來るのがはつきりと聞えるといふのである。土地がひらけて遠く野がつゞいてゐる事、あたりの靜かであること等がかうした感覺を與へたものであらう。

鐘が鳴る奈良の旅籠の春の夜のものゆかしさに寝ねすもあるかな

【鐘が鳴る】 東大寺の梵鐘でもあらう。

こゝは(三)

【旅籠】 ハタゴ (一)食物を入れる籠、竹の皮で編んだ籠

【ゆかしさ】 (一)何となく真相が知りたい。(二)懐かしさ。

(二)旅の茶屋で食物をとること。(三)旅籠屋の略。旅館。

こゝは(二)。ものゆかしさの「もの」は接頭語。

「梵鐘のひびいて来る奈良の宿の春の夜は何とはなしになつかしくて寝ねるにも惜しい思ひがするのでいつまでも眠りに入らないで居るよ」の意。

古都、春夜、梵鐘、何れ一つでも物ゆかしさを誘ふものであるのに、三つうちあつては寝ねがたいでもあらう。しみじみと春の夜を惜しみ味はふ歌人の心づかひがにじんである。「鐘」は東大寺初夜の鐘である。

三 備 考

1 指導研究

柴舟の繊細な感覺、夕暮の新鮮な色彩表現、薰園の音に對する感覺に注意して指導したい。歌を暗誦させる事は勿論である。

2 参 考

(イ) 改造社版現代短歌全集第七卷柴舟編の跋文を抄出しよう。

當時(明治二十七年)頃の著しい浪漫主義には随ふことが出来なかつた。これは、もとの自由な氣持で寫生主義と言はゞ言ふべきものに、依然として基礎を置いてゐたからであつた。この故に、同門で同傾向であつた金子薰園君と親しくなつた。で微力ながら浪漫主義に反抗するやうな氣分で「叙景詩」をも一緒に出した。そしてその序文は漢文調で小氣焔を擧げた。

しかし、遂にこの傾向に飽が來た。自然の見方に透徹したところがないのは、わたくしらの失であつたが、その他の人々にも、單に下手な寫生で、薄つべらで厚みがなく、重みがなく、深みがないやうに見える。これを趁うて行つたのでは、すぐに行きづまつてしかたがない、と思つたので、方向を轉換することにした。第一の歌集の「銀鈴」以後のものを集めて一卷とし、出版しなかつたのであつたが、この意味から、急いで殆んど全部を棄却して、大抵新作のみで「靜夜」を作り出した。

「靜夜」はかやうに努力の作であつたが、今から見ると厭味の多いものである。それに次いだ「永日」は、これとまた同様の傾向を行つたものであるか、これにも厭味が少くない。それに可なり理智的のところがあつて、今日から見ても懐しみが少い。刺々しいものである。これはわたくしの生活からも影響せられたのであつたと思ふ。

その頃のわたくしを思ふと、自然主義の流行の影響も多いのであるが、懐疑的で、自棄的で、著しく厭人的、厭世であつた。今日から見ると、驚くべく厭はしい傾向である。これがそのままは云はれないが、多分に現はされてゐるのであるから、勢刺々しい、厭味の多いものとならざるを得ない。友人は「君の歌は偽つてゐる」と云つたものであつた。厭世的、厭人的ながら、人との交際は極めて穩やかにと心がけてゐたから、さう思はれたのも、無理はなかつたかも知れぬ。

以上の傾向は「日記の端より」につき「白き路」で極まつてゐる。「白き路」は今日わたくしの一番好かない集である。いやに濕ひと温かさがなく、衝きつめてゐて、理智の句が多分にある。最初から、わたくしは、歌には骨を折つて來た。どんな時でも、一所懸命で詠んだ。決して、遊び半分ではなかつた。以上の傾向も、道樂氣で趁うて行つたのではなかつた。力の限りを盡くしての仕事であつた。自分が十分に現はれるまではと、語を選び、句を整へて行つたのである。従つて以上の事も、偽ではない。

しかし漸次以上の傾向の厭はしさが著しく目について來た。わたくしの氣分は、生活が安定して來ると、幾分の餘裕が出來た。ゆつくりと、自然が見えるやうになつた。衝きつめた心持が次第に薄らいで、温かい思ひが自づから湧くやうに思はれて來た。時間も出來たので、旅にも出られるやうになつた。この氣持が「朝ぐもり」を作らしめた。

この傾向は、今日まで續いてゐる。「行きつゝ歌ひつゝ」は旅行記でもあるが、歌集でもある。これらの歌は日常口頭のものである

から、わたくしには、極めて呑気に來た集であつた。どうせ、自己を表現するのが目的である。この後も、極めて氣樂に、これによつて進まうと思ふ。この心持を、これを「静夜」の時にくらべてみるとまた驚くべき變り方である。が、わたくしは、これを悪いと思つてゐない。

(ロ) 次に同書第十一卷から前田夕暮氏の卷末小言を抄出する。

私の少年中期から末期にかけての東海道及東北地方漂泊時代が、私の文學生活發芽準備時代であり、大磯寄宿生活時代が、その發芽期であつたことは事實である。そして、明治四十年一月、雑誌「向日葵」を發行した時代が第二期發芽期であり、處女歌集「收穫」を上梓した明治四十三年時代がその三期になる。

明治四十年雑誌「向日葵」を發行するや、吾等は極力「明星」の浪漫主義を排撃した。吾等の主張の根帯をなすものは現實感の顯出であつた。自己意識的であり、現實暴露的であつた。「向日葵」は僅かに二號にして仆れたが、當時の歌壇には異常なる衝動を與へた。そして、時代の流れは遂にその翌年「明星」をして廢刊せしむるに到つた。

私は、三十九年に創立した白日社といふ社名といひ、また「向日葵」といふ雑誌の名稱といひ、自分の好みからして命名したには違ひないが「明星」に對する幼い優越感からして白日をえらび、向日葵を撰んだといふ意識は働いてゐたのだ。「向日葵」休刊後、私はパンフレット「哀樂」を白日社から發行して世に問うた。處が、意外な反響があつたので、愈々私の行くべき道は決定された。そして、隱忍數年の後、明治四十四年四月に雑誌「詩歌」を發行した。此頃吾等の自然主義短歌が確立された觀があつた。

私は大正元年に歌集「陰影」を發行した。此頃から私は既に自然主義短歌には一種の嫌惡の念を抱いてゐた事は明かで、所謂平面描寫的な日常瑣事を歌ふべく餘りに多くの意義を感じなかつた。で、私は大正三年に歌集「生くる日」を出して、主として實體から放射せられたる音樂的色彩や明快なる外光派的功果を、生々しいタッチによりて繪畫的に生かさうとした。そして、第四歌集「深林」に到着し、大正七年十月「詩歌」を休刊し、秩父の原生林に入つて、樵夫等と生活をした。奥秩父の森林生活は私の世界觀をして更に展開せしめた。

大正十三年三月、私は糖尿病の爲に帝大三浦内科に入院して、ベットの上の生活を二ヶ月送つた。ベットの上の生活は私をして凝視的内觀的たらしめた。そして、新文體の散文「綠草心理」を書き初めた。私の内部形態は植物系態のなかに潛入して其處に人間と自然との交流を觀、自然より觸發せらるゝところの歡喜を高揚した。

昭和三年の四月に、私は雑誌「詩歌」を再刊して今日に及んでゐる。その時の信條として

一切豫備知識を捨てて白紙たれ。

萬葉以前に遡るべし

一枚の木の葉となれ

意識的なる自然觀照を避けて、あるがまゝなる草木土壤に同化し、努めて人事を生活を端的に歌ふべし

素朴に、單純に、卒直に、新鮮に、――

の數章をあげてゐるが、それに

原始復歸的精神を以て吾等の近代藝術を生かすべし

觀智を研き、新しき感情を高揚せよ

三十一首律を基礎としたる自由律形態によれ

主として口語的發想法によれ

自然發生的なれ

の言葉を補足してゐる。

私は今自由律短歌によつて、更に新しき時代性を附與せしむべく努めてゐる。

(ハ) 次に同書第八卷金子薫園集の卷末小記から抄出する。

明治二十六年、私の十八歳の秋であつた。先生に依つて唱道された新派和歌の黎明期に當り、私の歌の生涯は、その時から始まつ

たのである。さうして第一歌集「片われ月」を出すまで、私は自分の心持を偽らずに、素直に、素直にと歌に志して行つた。奥野氏等の明星派が戀愛至上主義で、歌壇を風靡するばかりであつた時に、私は亡き母を戀ひ、師を慕ひ、祖父母や妹を想ひ、友に親しみの情を寄する一方、自然に愛慕の心を捧げてゐた。「片われ月」一卷はこの心持の結晶であつた。

尾上柴舟君を知つたのは、その頃で、一見意氣相投じて、共に「叙景詩」を編し、戀愛歌にも狂ほしいばかりの歌壇に、この清純な天地のあることを示した。寂しい歌の曠野に、氏を知つて親しみあつたことは、孤獨な私を元氣づけさせた。

かくて私は情を抒べ、景を叙するに、平面的で、一本調子であることに、氣がついて來た。さうして聊か退屈を感じるやうになつた。何か絢爛な、華美なもの、神秘的なものに憧れ、厚みのある描寫を欲するやうになつて來た。それから繪畫に對する嗜好が作の中に著しく加はつて來た。「片われ月」の時は結城素明君等の新しい日本畫に共通した趣のあるのを見出して、その淡い自然味を喜んだが、その後は白馬會派の洋畫を鑑賞するやうになり、特に三宅克己氏が武藏野の自然を描いた水彩の匂ひを愛したものだ。第二歌集「小詩國」には、かうした私の心持の種々相が出てゐる。この集には私の生涯の著しい傷心の事であつた恩師落合先生と第二の慈母である祖母を失つたことが歌はれてゐる。美に憧れて、濃麗な世界に入つた作の多い集中、この哀悼の作が別の意味に於ける特色をなしてゐることは特殊の對照である。祖母を悼めるものに、金色の剥げた佛畫のやうな、あの莊嚴さを感じたものがあるのも、その頃の心持であつた。

さうして第三歌集「俗人」が出た。口繪に川村清雄氏の描けるオカリナを吹く伊太利の子供を出してあるやうに、私の繪畫の嗜好は白馬會派から川村氏のこつてりした作風に移つて來た。氏が色彩の明麗さは、私の作に影響した。この一卷は耽美的で、浪漫的な傾向をさへ呈して來た。今想ふと不思議なくらゐ、私の當時の作には眩ましいほどの華やかさがあつた。技巧の極を盡して、一字一句刻むやうなものもあつた。

私はその翌年第四歌集「わがおもひ」を世に問うた。前集の絢爛のあとを承けて、華やかさはあつたが、その中に眞實味が加はつて來た。浪漫的作風を脱して、自然に眼を向けかけて來た。新しく家庭をつくらうとする前の眞面目さが、この集に現はれてゐる。

祖父の愛の袖の蔭に何の苦もなく書を讀み歌を作つてゐた私は、遽かに一家の主人となつて、眞生活に携はらなければならなかつた。日々の勤めの暇に、武藏野の自然に親しむことを得た私の心境は目覺めたやうに開けて私の歌は生きて動いて來た。かうして第五歌集「覺めたる歌」は生れた。恰も自然主義勃興の時に際し、自己覺醒の眞實の聲として、この集は世に騒がれた。この一卷のどの頁にも私の力は漲つてゐた。

私の歌生涯の中に一時期を劃したこの集の次に出したのは「山河」であつた。八九月の交、京都に遊び、晩夏初秋の舊都の山河に嘯き、又初夏、常陸五浦を訪うて、月夜の濱の鯉の大漁に興じたりした。旅情の作が多い。前集の新興の意氣は、ここに靜寂な心の落ちつき場を得た。次の「草の上」にはつゞいて京都に遊び、奈良を訪ね、千曲川原に日本アルプスの六月の雪を望んだこと、長男廣兄が生れたこと、京都に歌作る一少女と知りてはかなき愛を覺えたことなど、自然にも人事にも觀照する事の多い時代であつた。

初めて人の子の父となり、兒の産聲を聞き、守唄をうたひつゝ抱き愛しんだ心の延長は、次の「星空」に及び兒の小きき世界を歌ひ、病兒に對する心盡しや、一人のはらからとして永く同じ道に生きた妹の死に會うて哀痛のおもひを歌ひ、新宿御苑の暮春と晩秋の風物を詠じ、或は春草のはてに低く見ゆる夕べの星空を望み、妹を失つて老いのさびしさを嘆く小日向臺の父の家に晩春初夏を傷み、病める京の少女に寄する愁思など、この集に至つて私の歌壇は、沈靜の中にある深みともいふべきものを得て來た。前集の明るさの後であるせむか、著しく沈鬱の氣が加はつて來た。日のくれの湖畔に一本立つ合歡の木を詠じた歌がこの中に出てゐるが、これが、この集の姿でなければならぬ。

鬱々むすぼるゝ心は、機關雜誌「光」の創刊に依つて慰められ、元氣づけられた。そして津田青楓氏を知つて、氏の畫室を訪はれては、その靜物の蔬菜を描く紙に繪の具のにじみ出づる新鮮さにそゝられ、久しく閉されてゐた私の歌壇は開けたやうに感じた。これより先私は、十數日といふもの、歌思に饑ゑてどうかしてそれを得たいと焦りぬいた。然るにかの蔬菜の繪を見て津田氏のアトリエから歸つて來た私は、夕ぐれの一室に、林檎のころがされてあるのを見て、次の歌集「靜まれる樹」の巻頭の一首を得た。私は新に私の歌を立て直すことが出來ると思つた。この集の私の心境はかなり複雑したものになつてゐる。さうして、一卷を貫く私の感

情は、かの青楓氏の蔬菜の繪の水々しさであつた。

私は目の學習院のうしろ、だら／＼坂の下の高田町に地を相して、秋、新居をこゝに構へてから、永く願うてゐた靜閑を味はひうる身になつた。近い森を渡つて庭を過ぎてゆく夜半の時雨を聞いたり、窓の外から直に心ゆくばかり晩秋の濃藍の空を仰いだりした。この新居の氣持を歌つたものを初めにして「濃藍の空」一巻は成つた。

私の心境はこの集に到つて、著しく自然に近づいて來た。靜思といふことが、深く徹するやうになつて來た。雨中の藤花を見て、その靜けさに浸つたり、萩之家忌に香を焚いて故人を偲び、その遺業を傳ふべき身であることを痛感したり、新居に近い野外の落葉のほひを嗅ぎ軒の山茶花の冷艶の色を愛でたりした。自然に、自然に、私はこの標語を捧げて、更に／＼私の往くべき道に邁進したいと思ふ。

一五 青木新兵衛

室 鳩 巢

一 解 題

1 作者

室鳩巢 ムロキウサウ 名は直清、字は師禮、通稱は新助。滄浪・駿臺等と號した。萬治元年(二三一八)二月江戸に生まれた。父は備中の人で醫を業とし、草庵と號した。始め木下順庵に就いて學び、後、加賀に仕へた。正徳元年新井白石の推薦によつて幕府の儒員となり、將軍吉宗の時殿中侍講となり厚遇された。享保十九年(二三九四)八月歿、享年七十七。明治四十二年九月從四位を追贈せられた。著書には「駿臺雜話」の外「赤穂義人録」「大學新疎」「中庸新疎」「鳩巢先生文集」「鳩巢逸話」がある。

2 出典

「駿臺雜話」卷三から採つたものである。「駿臺雜話」は作者が江戸駿河臺に居住して稿した隨筆集で、寛延三年に刊行せられてゐる。すべて五卷、仁・義・禮・智・信の五つに分つて見聞したことを書き記したもので、武士道を鼓吹し、齊家修身の資とするに足るものが多い。

3 主眼及び採擇の趣旨

ある時、ある場所で、ある人によつて示された武士道の神髓であつて、すぐれた人間性を描いた隨筆として掲げた。國民的教材である。

二 解 釋

1 語 釋

【青木新兵衛】 アヲキンベエ 詳傳未詳。はじめ上杉景勝に仕へ、關ヶ原の役に景勝が伊達政宗と會津口に戦つた時、岡野左内・永井善左衛門等と共に勇戦して驍名を馳せた。役後、上杉氏の米澤轉封と共に祿を離れ、後、徳川秀康に仕へた。秀康の子忠直が豊前に流され、その子光長が越前高田に轉封せられるに及び、去つて加賀の前田家(利常)に仕へたといふ。

原文には、本文のすぐ次につゞく部分に「其後一伯殿筑紫へ左遷の時、(中略)方齋は先祿にて加賀へ招かれ、それよりすぐに仕へて、子孫相續して今にあり」とある。直の法號

【封ぜられ給ひし後】 領地を與へられてその大名となられた後。「られ」は受身の助動詞。

【阿閉掃部】 アトヂカモン 傳未詳。

【召抱へられけり】 お召抱へになつた。「抱ふ」とは、家に雇つて使ふこと。「られ」は尊敬の助動詞。

【狛伊勢】 コマイセ 傳未詳。

【世祿】 セイロク 世襲の家祿。

【引き候ひしに】 自分の陣營の方へ歸りつゝあつた時に。

「引く」は自動詞にて「退く」意。

【かせぎ候へども】 奮戦しましたが。

「かせぐ」稼ぐ・持ぐ。(一)生業を勵む。精出して働く。骨折つて務める。(二)戦ふ。(三)盜を働く。

【よき敵】 不足のない相手。相當な相手。

【御人體】 ゴニンテイ。ゴジンテイ おひとがら。御人品。

【御不詳】 ゴフシヤウ 「御不詳」に同じ。「相手にとつて不吉な」の義で、謙遜の語。御迷惑。

【槍をあはせん】 槍を交へよう。

【雜兵】 ザフヒヤウ 身分の卑しい兵士、歩卒。

【あやめ】 文目。(一)織り出す模様の色目。布帛の文理。

(二)すぢ。あや。區別。差別。けぢめ。すぢみち。こゝは(一)。

【わりなく】 一通りでなく。大いに。

「わりなし」(一)理がない。分別がない。(二)餘儀ないよんどころない。是非ない。(三)一通りでない。殊の外である。

【入魂】 ジュツコン・ジュコン 殊に親しく交ること。懇意。親密。懇親。心交。

【浪士】 ラウシ 「浪人」に同じ。(一)郷土を離れて他所に漂浪する者。浮浪人。(二)武家時代に、主家を失ひ家祿

【歴々】 レキレキ 家門・地位・藝能等の勝れて名高い家柄。又、その人。名門。名家。

【鎧の著初】 ヨロヒのキゾメ 武家時代、男子十二三歳の頃になり、始めて甲冑を著けさせる儀式。吉日を選び、あやかる爲に、武功の高い人を頼んで鎧親(具足親ともいふ)とする。

まづ八幡神・摩利支天・氏神を祭り、鎧は鎧親と後見人二人で著せる。鎧を著ると、牀几或は唐櫃に腰を掛け、出陣の肴組で三献の祝がある。それから鎧を脱がせ、鎧直垂・烏帽子の姿となり、歸陣の時の肴組で、一座の人へ引渡の祝をする。更に廣間で、家臣に位の高下に随つて、歸陣の肴組で三献進める。鎧親・後見人には引出物を送る。

【招待しつゝ】 招待して。「つゝ」(助)完了の助動詞「つ」を重ねた語。こゝでは、「て」と同様に動作の経過を表してゐる。

【饗膳】 キヤウゼン 馳走の膳部。馳走の酒肴。

【某】 ソレガシ 自稱の代名詞。

【江州】 ガウシウ 近江國。

に離れた武士。浪人。こゝは(一)。

【にじりいで】 坐つたまゝ膝でにじるやうにして進み出る。ひざり出る。

【さても】 (感)「さて〜」に同じ。

【我等】 こゝでは「我」に同じ。

【うきたること】 根據のないいゝ加減な事。

【おぼすべく候】 お思ひになりませう。

【緘】 ヲドシ 「威」とも書く。「緘」は鎧の札を革・絲・絹等で綴ること。又綴つたもの。その綴つた革等の並んだ状が毛を伏せたやうであるから、緘毛又略して毛ともいふ。材料によつて絲緘・革緘・綾緘・練貫緘等、又綴方によつて荒目・毛引・素懸・數目等、色によつて緋緘・小櫻緘・黒革緘・卯花緘・紫下濃緘・萌黄白緘等の種類がある。

「緘す」は、「緒通す」の略といふ説と、「威す」の意で敵を威嚇する義とする説とあり、随つてヲドス・オドス兩様の假名遣がある。

【引きけり】 引出物とした。「引出物」は、饗宴の時、主人から來客へ贈る物。古くは馬を引き出して贈つた爲引出物といふ。現在は鯉節・蒲鉾など、饗應の膳に添へる土産物をいふ。ひき。ひきで。ひきもの。

【召出されけりとぞ】 召抱へられたといふことである。下

に「いふ(連體形)」の略された慣用形式。

2 文の構成

第一節 初—一〇〇頁末行 狛伊勢の嫡子の鎧の著初の祝宴に武功物語を所望された阿閉掃部。

第二節 一〇二頁初—一〇二頁九行 掃部の物語つた賤ヶ嶽合戦に出合った敵の勇士青木新兵衛の武者振。

第三節 一〇二頁一〇頁—終 青木新兵衛の名告り出でと掃部との再會。

3 文意

ある鎧の著初の祝宴で、阿閉掃部によつて物語られた青木新兵衛の武者振と兩人の再會。

4 鑑賞批評

「いや某が身の上に、御話し申すべき程の武功は覚え申さず候。されど、御望も黙しがたく候まま、某一生の中に武者振の見事なる士を一人見申して候、その事を話し申すべし」——滿座の視聽を集めるに十分な床しさが溢れてゐる。武功の物語を求められた點からいつても武功がないとは考へられぬ、それをかやうに謙遜して、この座で話すほどの武功は覚えぬといふ。そしてたつての望に嘗て見た他人の武功を語らうといふのである。そして忘れ得ぬ一勇士の話をしようとしてゐるのである。往時を思ひ起して感歎を新にしてゐる掃部の様子が思ひ浮かべられる。そして片唾をのんで聴き耳を立ててゐる人々の様子も亦。

「御人體を見うけ、幸とこそ存じ候へ」——幕方の戦場に適當な相手を見出した喜が實感として滲み出てゐる。尊敬の中にも自信を含んだ挑戦である。相手を刺戟するに十分な言葉である。而も挑戦の禮としてこの前後の言葉をのべてゐる。命をとるかと思われるかといふのに禮を忘れないのである。さういふ嚴肅な場合であるから、少しの弛緩も無駄もない。言葉が言葉として完全に生きてゐる。

「もはや槍先も見えず候。御残り多くは候へどもこれまでに候。御暇申べし」——その場の情景が如實に浮かぶ。達人の心境がちか感じられる。そして打てば響くやうな精一杯な力が言動の端々に充ち満ちてゐる。

「此の後又陣頭にて出合ひ候はば、互に入手にはかゝり申すまじく候。もし又身方にて候はば、わりなく入魂いたし候べし」——いかにも眞の好敵手を得たといふ感激が沈着な言動の底に動いてゐる。我が敵を得たといふ氣持は我が友を得たといふ氣持に等しいのが彼等である。彼等が相手を選ぶのは道を尊敬し、愛惜するからであり、彼と我とが互に敵となり身方となるは單なる偶然に過ぎないのである。武士道が道徳として發達し、時には藝術として發展した趣をさへ呈するのはこの故である。

「さても只今の御物語承り、今更昔を思ひ、涙を落してこそ候へ。其の時の御相手になり候青木新兵衛は、はづかしながら我等にて候」——青木の方でも懐しい思出として忘れられずにゐたのだ。この人にこそと思つた人がこの晴の座で、自分のことを、しかも尊敬の態度で話すのを聞いては、感涙を抑へ難かつたであらう。この物語にはかくて二重の興味が含まれて来る。

この文は達意の文である。しかも無駄なく不足なく、この劇的ともいふべき情景を描出し、心理的描寫の域にまで達してゐるといへよう。訓話としての主題の擇び方も適切であるが、それにかくの如き表現を與へて、單なる教訓譚のレベルを超え、鑑賞に堪へ得るものとしてゐる手腕が認められる。

三 備 考

1 指導研究

一五 青木新兵衛

我が國民性の一つの具現である武士道は無論現代にも存する。併し時代的に姿態の變化が著しい爲に、武士道の名を以て呼ばれることは多くはない。随つて武士道逸話は何んといつても中世から近世にかけて最も多く見出される。さういふ時代に成立した武士道の花ともいふべき事實を、人を、現代青年の眼近く照鑑せしめることも教育上大切な事である。讀みに於てその行文が地味で沈んでゐる點がこの年齢の生徒として取りつきにくい條件を成すであらう。併し少くが何力して讀み砕いた後には、その緊密で、底力のある文體のよさがわかつて来るであらう。解釋に於ては、生活の多くが何を問題としてゐるかを知ることが指導上緊要な手がかりである。それが表面的な理解を示し、又は主觀的な曲解に出るものであつたら、その根據を検討させて、一步々確實な理解を成立させる工夫が試みられなくてはならぬ。

部分問題としては、この二人の言動に眼をとどめねばならぬ。掃部が新兵衛のことを物語るのに如何にも尊敬し親愛してゐる態度が見える。物語の中に出て来る人物は自分と新兵衛二人であるが、新兵衛の言動を主にのべて、自分はたゞワキ役をしてゐるに過ぎない。たとひ事實がさうであつたにせよ、この態度には深く聞く者を打つものがあつたであらう。まして當の新兵衛はいかばかりこの掃部の態度に打たれて、今更に往時をゆかしく追懐したことであらう。武士道といふことを離れても立派な逸話である。

次に忘れてはならぬのは、當夜の主人公伊勢の嫡子の存在である。武士道の精神が生き動いてゐた時代に於て、まさにこれから武士としての生涯を出発しようとしてゐる青年が、自分の鎧の著初といふやうな重大な場合にかういふ場面に接して果してどんな感銘を受けたであらうかといふことである。そして現代と比較することによつて時代といふことに驚かざるを得なくなる事實である。

2 参考

(イ) 青木新兵衛の武功を、常山紀談卷十六「伊達上杉陸奥國松川合戦の事附永井善左衛門岡野左内が事」から引用する。

松川合戦は、慶長六年四月伊達政宗が上杉景勝の諸將を松川に攻め、進んで福島城に迫つた合戦。

されども大軍見る内に重り攻め寄せしかば、上杉勢は福島を指して引退く。政宗、何處までも剩すな、と馬煙を立てて追ひかけしかば、物具を道に捨つる事数を知らず。息切れて行倒れたる者も有り。持鎧の長き柄は持堪へ難くて、多くは捨てけるとぞ。青木新兵衛、永井善左衛門を始として、大剛の者共馬を返しては追散し、取つて返しては突拂ひ後殿しけり。青木は小丈なる馬に乗り、柄の短き鎧なりし故、殊に乗り退り幾度となく支へ戦ひけり。甘粕備後は上杉家にて勝れし勇將なるが、白石の城を守りしに、會津に行きたりし跡にて、登坂逆心して白石を敵に取られし事を口惜しく思ひしかば、今日取分きて引退り、取つて返して追退け、勇氣を顯しけり。福島の下川の川を渡る時、政宗の兵彌追詰めて、我先にと川に打入れたるが、永井を後より三刀切る。永井年度の軍に戦ひ被れ、大軍打渡す川音に紛れ此を知らず。青木は鳥毛の棒の出でしにて黒き母衣懸けたるが、乗寄せて敵を追拂ひ、川岸に打上りて永井に斯くといへば、驚き従者に見すれば、母衣に三刀、鞍にも刀の痕あり。永井、今日は助けられし、とて一禮をぞ述べたりける。小田切も敵に取圍れ、あはや討たれぬと見えしを、青木又斬寄せて追拂ふ。岡野は旗押立て靜に福島城に入り、甘粕、粟生も引入りければ、政宗馳押寄せたるに、殿の兵共柵を踰えて城に入りたりしに、青木は柵を越え兼ねて只一騎控へ居たる所に、政宗馬を斬寄せたり。青木十文字の鎧にて政宗の冑の立物三日月を突折りしかば、政宗馬に諸鎧を合せて斬通られぬ。青木後に政宗と聞きて今一鎧にて突殺すべきに、口惜しき事よ、とぞ言ひける。

(ロ) 前條の武功の後日譚ともいふべきものを、翁草卷三十三「諸録拔萃」中の「上杉の士永井善左衛門、青木新兵衛の事」から採掲する。

上杉景勝米澤へ所替の砌、家中の士過半暇出る。永井善左衛門、青木新兵衛は、越前の秀康卿へ召出さる、其の後京都にて加賀利勝卿へ、秀康卿茶の湯に御越、御相伴は伊達正宗、並町人今井宗薫、醫師松阪卜齋なり、數寄屋にて正宗の物語に、秀康卿には能者を被召抱の、今度奥にて骨折候や、青木新兵衛鳥毛の棒のだし黒繩十文字鎧にての働、中々鬼神を欺く計に候と譽らる。秀康卿は永井善左衛門事と間違給ひ、御歸宅後家臣歴々へ宣ひけるは、今日正宗の嘯に、永井善左衛門黒繩鳥毛の棒のだしにての働、鬼にも増る

べしと被譽たると嘯玉ふを、落合主膳聞て夫は青木新兵衛事にて候と申す、秀康卿不興有り、我儘に正宗の物語を聞り、奚ぞ間違んやと宣ふ、主膳云く、其の時一所にかせぎ候齋道仁唯今浪人にて、伏見森に居候間、永井青木の指物を尋に被潰候へば、相知申事に候と申す、仍て道仁方へ間に遣はさるゝに、岡野左門は角蟻蝶の胃狸々皮の羽織、永井善左衛門は金の抱半月赤纒、青木新兵衛は鳥毛の棒黒纒と言付來る、秀康卿是を御覽じ、永井青木は共に今我家人なれば、強く穿鑿に不及と被仰、新兵衛事後には芳齋と號す。

一六 蒲生君平と小澤蘆庵

瀧澤 馬 琴

一 解 題

1 作者

瀧澤馬琴 タキザハバキン 江戸時代の小説家。名は左五郎、諱は興邦、のち解と改めた。通稱甚左衛門、別號曲亭馬琴・簀笠翁・信天翁・傀儡子等。明和四年六月、深川高松通淨心寺側に生まれ、父興義は松平家に仕へ、馬琴は五男である。少年時代諸家に仕へたが永續せず、幕醫山本草洪の門に入り、のち龜田鵬齋の從僕となり、更に加藤千蔭に書道を尋ねたが、人に愛せられない性格が禍して常に續かず、深川仲町に筆耕を業とした。寛政二年山東京傳の援助を得、大榮山人と名のつて「盡用而二分狂言」(寛政三年)を發表し、爾來文壇に現はれ、寛政八年からは毎年七、八部の黄表紙を刊行するに至つた。享和三年讀本「月氷奇縁」を發表して以來、滑稽を主とした黄表紙から轉じて傳奇小説を眼目とする讀本の著作に努力した。これは山東京傳の創作態度に刺戟せられて同じ方面に進んだものと見られる。文化年間に至り「石言遺響」(文化元年)「椿説弓張月」(文化三十七年)「墨田川梅柳新書」(新累解説物語)「文化四年」(三七全傳南柯夢)「文化五十八年」(南總里見八犬傳)「文化十一年—天保十二年」等の大作を續々發表し、當時一流の大家として推賞された。二十七歳の時九段中坂下、飯田町三丁目下駄傘商伊勢屋の寡婦に入夫したが、家業は止め、附近の子に讀書習字を教へその傍ら賣藥業を営み、更に著作に従事した。一男二女あり、長女に婿をとつて飯田町の家株を譲り、自己は長男琴嶺と共に神田同朋町に住んだ。彼は天保五年から眼を病み同十一年正月に至り失明して筆を執り得ず、嫁お路に代筆せしむるに至つ

たが、孜孜として著作を中止せず、「八大傳」の如き實に前後二十八年を要して脱稿した。時に七十五歳であつた。嘉永元年十一月歿、享年八十二。彼は體軀強健、精力絶倫、而も博覽強記であつた。されば其の作品は規模の雄大と脚色の緻密な點に於て特色あり、當時の儒教思想を以て武家の精神生活を描かんとした點に長所を有し、理智に失し、活きた人間を描くことの出来なかつた點に缺點がある。彼は性質傲岸不屈、狷介人を容るることが出来なかつた。

2 出典

兎園小説中からとる。同書は文政八年乙酉に設立された兎園會員の著作を編輯したもので、二十卷ある。兎園會とは、馬琴の發起で成立し、其の趣旨は、互に新説舊話、異事奇説をもたらして席上に講話し、且相互に稿本を騰寫し、智識交換の資としたものである。會員は關思亮、山崎美成、屋代弘賢等十四名である。

3 主眼及び採擇の趣旨

俗事を厭ひ、ひたすら君のため國のために精根をうち込む心と心は如何に暖く結びつけられるか、その美しくも熱のこもる融合の状態の中に如何に尊ぶべきものがひそんでゐるかを知らしめ、更に、この心はひたすらに歌の道につくす心とも相通ふ所以を理解させたい。前課に於ける武士道精神と相俟つて、日本精神を知らしめ培ふ國民的教材である。

二 解 釋

1 語 釋

【蒲生君平】 ガマウクンベイ 江戸末期の先覺者、下野宇都宮の人。名は秀實、一名夷吉、通稱伊三郎、字を君藏又は君平といひ、江戸の假寓を修靜庵といふ。君平の字を以て世に行はれてゐる。本姓は福田氏。商家で燈油を

ひさいでゐた。又右衛門正榮の第四子。明和五年生。六歳のとき、宇都宮延命院の住職某につき、はじめて讀書習字を學び、やや長じて太平記を読み、楠木、新田等勤王諸將の事蹟に感動する所あり、皇室の式微を慨き、遂に古典研究の志をおこしたのが十三歳の時である。翌年

下野鹿沼の儒者鈴木石橋の門に入りて經史を學び、傍ら古代の制度律令に心を留めた。ついで黒羽藩士鈴木爲蝶軒からも益を得た事が多い。天明五年藤田幽谷とも交りを結び、爾來屢々水戸に往來して水戸學の感化をも受けた。幾くもなく、その五代の祖正嗣が、蒲生氏郷の庶族から出でて編戸の民と爲つたのを知り、奮然名門の名を辱しめざるを誓ひ、本姓福田を改めて、自から蒲生氏を名乗り、別に家を興した。寛政二年、二十三歳の時、高山彦九郎の東遊を聞き、その後を逐うて、奥州石巻に到るも、相逸して遂に合はず、歸途林子平を仙臺に尋ね、國事を談じたが、意見が合はなかつたやうに見える。此の時國防論よりも、君平の意圖する所は寧ろ大義名分を明かにする事であり、これがために九志の編纂が企てられた。九志とは、神祇、山陵、姓族、職官、禮儀、農、刑、兵の九編である。此の中、最初手を著けたのが名高い山陵志であつた。かくて寛政十一年の春、宇都宮を發して上京し、京畿の陵墓を探つた後、佐渡に渡り、順徳上皇の陵に謁してゐる。叡山に登つて遙かに皇居を拜して御衰微を慨嘆し、また等持院の足利高氏の墓に至り、其の罪を數へて鞭つたといふのも此の時の事であつた。旅から歸ると直ぐに山陵志の編纂に従ひ、翌享和九年の春には、ほゞ脱稿したのである。しかも心血を注ぐ所も、

一つには修正の爲に一つには窮乏の爲に出版の運びに至らなかつたが、後年知己友人の援助によつて出版した。彼は又不恤緯を書して露人擊攘の策を述べ、上は皇室を尊んで名分を明らかにし、下は諸侯を富まして仁政を施し、民の疾苦を除くと云に虜情を察して備へを設ける事の急を叫んだ。對外政策の第一歩は内政を整へるにある點を指摘した事は勝れた識見といはなければならぬ。彼は又本書に於て尊王思想と對外思想との一致を強調したが、これ亦卓論であつた。

【山陵】 サンリョウ みさゝぎ。喪葬令、義解に「帝王墳墓、如レ山如レ陵、故謂之山陵」とあり。

【訪求】 ハウキウ たづねもとめること。

【絶えて】 少しも、全く、一向に。

【小澤蘆庵】 ヲザハロアン 徳川中期の歌人。享保八年生。尾張の人、犬山の藩士。のち京都に移り住んだ。名は玄中、通稱帶刀、觀荷堂の別號がある。もと劍をよくし、武者修行に出て京都の某公に仕へ、その因みを以て和歌を堂上派冷泉爲村に學ぶ。三十五歳のとき、居を洛東岡崎村に求め、母をも尾張から迎へた。のち火災に遭ひ、洛西太秦に移りそこに永住した。皇學、漢學に精通し、また尊王の心を抱いてゐた。その和歌は才氣煥發、當時伴蒿蹊・澄月・慈延と並んで平安四天王と稱せられ、弟

子もまた少くなかつた。享和元年七月十一日歿、享年七十九。蘆庵はいはゆる「たゞごと歌」を唱道し、和歌は平易な言葉を用ひて眞情を述べることを中心とし殊更に技巧を用ひることを排した。貫之を崇敬し、また「古今和歌六帖」を愛誦した。歌集を「六帖詠草」といふ。著書に「袖中和歌六帖」「ふるの中道」「千首部類」「振わけ髪」「觀荷堂隨筆」「萬首部類」「玉霞難詞」などがある。【古學を好み】古學とは國學と同意義であつて古典や古文獻を對象として國家的精神もしくは古道を究明する學問である。

【萬葉風の詠歌に名高く】これは事實を誤つてゐる。彼は自然を尊重する點に於て萬葉派と一致してゐたが、その「たゞごと歌」の稱道は古語を用ひる萬葉派に反抗したものであつた。

【世をすねたる】「すねる」とは我意をはつて誰り憤つて他に従はぬこと。自動下一である。「すねる」が自動詞であるから「世を」のをは「に」に通ふ助詞である。即ち世に對してすねたの意。

【隱逸】インイツ (一) 世をのがれかくれること。(二) 又その人。ここは(二)。

【ばや】願望の助詞。

【やがて】(一) そのまゝに。すなはち。(二) すぐに。直

ん。

【つばらに】つまびらかにの意。詳しく。

【枉げて】マけて 無理ではあらうが強ひて。

【こたび】この度。

【俗ならぬ】ゾクならぬ 俗とは(一) 世俗、世のならはし。(二) 僧の境界から世の中の人を呼ぶ稱。(三) 文雅ならず鄙びてゐること。(四) 平凡、平凡人。ここは(四)

【ものから】もののものではあるが。

【長者】チャウシヤ 年上の人。目上の人。身分の高い人。徳の衆人にすぐれた人。

【實情】(一) 眞實の精神。(二) 偽りなき事情。ここは(一) 【肝膽を吐き】カンタンをハキ まごころをありのまゝ申し。

【かくても意にかなはずば、退けられんこと勿論たるべし】それでも先生の氣に入らなければ退けられることは當然であります。

【わどの】對稱の代名詞、對等なるものにいふ。

【さりとは】そんな事とは。

【志願の由】志し願つてゐるわけ。

【山陵志】二卷。歴代御陵の九十二所餘の考證をなした漢文の書。志とは誌と同じくシルス事で書物の意となる。

【足下】ソツカ 對等の代名詞。同等の人を敬ふに用ひる。

ちに。(三) 程なく。ここは(二)。

【言ひ寄る由もなきまに】由は(一) 理由。(二) 由縁。(三) 方法。ここは(一)。物をいひかけて近づく理由もないので。

【伴り】イツハリ 本心にないことを唯外面ばかり飾りいつはること。

【ならまくほりして】なりたく思つて。「まく」は未來の助動詞「む」の力行延言。「ほりす」は「欲す」の意。サ變動。即ち「ならむと欲して」の意。

【心得得て】君平の言葉の趣旨を了解して。

【云々と告げにけん】これこれと君平の言葉通りたしかに告げたのであらう。「けん」は過去の推量の助動詞、「に」は完了の助動詞「ね」の連用形。といへばとて「にけん」は過去完了の推量だとはいへない。「に」はたしかさを添へる爲についてゐるものである。

【無益にも】ムヤクにも 「むえき」と同じ。

【訪はるるものかな】「るる」は尊敬の助動詞。

【客を辭して】人の來訪を辭退(拒絕)して。

【親しうものせるは稀なり】「ものす」はすべて何かする意。「もの」は何事にも通ずる。こゝでは親しく「交はる」意。

【所望に従ふべくもあらず】御希望に従ふことも出来ませ

直接にその人を指すを避け、足下にある侍者、執事を呼びて取次を請ふ謙辭。

【學士】ガクシ (一) 學問に従事する人。學者。(二) 大學令による大學卒業者。ここは(一)。

【さる志ならんばは】そんな志を持つてゐるならば。

【杖を留めて】逗留して。

【こころわたり】このあたり。

【他事もなく】外の事を顧みずに。餘念なく。

【辭めども】イナめども 辭退するけれども。

【後々までもしかしてけり】後々まで、さういふ風にした。【更蘭けて】カウタけて 「更」は夜中の時刻。午後八時から二時間づつとして午前四時に至る。初更、二更、三更、四更、五更といふ。更が深くなつて、即ち夜更けて。

【子二つ】ネ二つ 午前一時頃、子は十二時。「二つ」は子から丑(午前二時)までを四つに分つて數へる稱呼。即ち一時は四刻、一晝夜は四十八刻である。これは漏刻の制に用ひた時間の切り方である。

【心得難し】譯(理由)が分らない。

【非を飾る】悪い點をかくして言ひわけをする。

【その天皇】某の天皇。

【思はずも】思ひがけなくも。

【等持院】トウヂキン 京都十利の一。足利氏の廟所。興

國二年尊氏の創建にかゝり、夢窓國師疎石がその中興の開山となつた。延文三年尊氏の歿するやこゝに葬り、院號を等持院と號し、爾來累代の廟所となつた。のち一旦衰頽せしも長祿元年尊氏の百年忌に當つて義政堂塔を修造した。應仁の兵火のために大半焼亡し、慶長十一年豊臣秀頼が再興したが幾度も大災にあつた。影堂には尊氏義詮以下累代の木像を列ねてある。うち、尊氏・義詮・義滿の三像は明治維新の際、勤王の浪士のために斬られ三條河原に梟首されたものである。なほ當寺の上方に尊氏の墓が存し、高さ五尺の寶篋印塔で、表に等持院殿贈大相國一品仁山大居士とあり、嘗て高山彦九郎が鞭つたのも、君平が罵つたのもこの墓である。所屬は臨濟宗。

【心頭】 シントウ ころのうへ。

【梟臣】 ケウシン あら／＼しき臣。「梟」はフクロフ。此の鳥は成長すれば母を食ふので不孝鳥と言はれる。

【建武中興】 後醍醐天皇が鎌倉幕府を仆して、公家政治を再興せられたことをいふ。公家政治の新制が建武年間に成立したのでこの稱がある。當時公家社會は、中興の治を自家の力によるものと誤信し、有力な武力の勢力を輕視したため、文武の調和が圓滑でなく、且つ久しく政治に慣れない公家が俄に局に當つたので、機宜を得ない大内裏造營の如き事業が多く、一般に新政は不評判であつた。

靈鷲山の略で、中腹に招塊場がある。この地はもと靈鷲山正法寺の境内に屬してゐた。

【さすがに宿恨なきにあらねば】 やはり前々からの恨がないわけではないから。次に説明してある通り、長嘯子が似而非歌を作つて世人を指導し、歌調を悪くして、今に尙直らぬことを宿恨と言つたのである。

【長嘯子】 チャウセウシ 豊臣秀吉の北政所の甥に當り本名は勝俊、幼少から秀吉に仕へ小濱の城主となつた。著書に「擧白集」あり。慶長五年關ヶ原の戦後封を沒收せられ、靈山に蟄居し、また洛西大原野に移つた。それより風月を楽しみ、茶道はかねてから千利休門に名高く、書は西三條の流を汲み、且つ藏書に富み藤原惺窩らも借書したと傳へられてゐる。和歌は造詣最も深く、年少の頃細川幽齋に添削や指導をうけ、遠く正徹のあとを追うて新風を工夫した。擧白集は全く無雜作な、そして新奇な表現によつて時流に超越してをり、それだけに時の人から非難され「異體俗語をよまれば破戒偷言集、邪魔俗風集などいふべきをや」などと慢罵をも蒙つたが、のち下河邊長流などの有力な支持者が現はれ、歌壇に相當な關心をもたれるに至つた。文章も亦異體のものが多く著書に「武用辨略」その他數種がある。武人としての勝俊は後世小澤蘆庵などに本書にあるが如く罵倒されたが

た。また内奏が頻繁に行はれて、朝令暮改の誹多く、政情は極めて不安定であつた。この時野心家である尊氏は新政に不満な諸將士の意を迎へて武家政治の再興を圖り、建武元年の末、公家方の首腦の護良親王との間に衝突が起り、終に親王は鎌倉に幽閉せられ、建武二年秋に關東に起つた北條氏殘黨の蜂起を機會として、尊氏は鎌倉に據つて叛旗を翻し、武家方は概ねこれに従つたので公武一統の中興の政は忽ちに崩れて、舊の如く公家武家對立の世と代るに至つた。

【逆に取り逆に守りて】 道理に反して取つたり守つたりして。

【毒を後世に流ししより】 後世に悪影響を及ぼして以來。

【干戈をさまらす】 カンクワをさまらす タテとホコの意から武器の意又戦争。戦争が引続き。

【舊典】 キウテン (一) 古文書、古書。(二) 古き典禮。ここは(一)。

【打殿く】 ウチタタク 「殿」は杖で他人の體をうつこと。

【物ほしうなる】 何か物が欲しくなる。ひもじくなる。

【株】 カブ 木の切株。

【からからと】 笑聲の擬聲。

【往ぬる年】 過ぎ去つてしまつた年。先年。

【靈山】 リヤウゼン 京都市東山區の東山にある一峯。

歌人として長嘯子は徳川初期轉換期の作家として重要な地位をしめてゐる。慶安二年歿、享年八十一。

【長嘯子、不滅の罪あり】 次に説明してある通り歌道に於ける不滅の罪をさす。

【わぬし】 吾主、對稱の代名詞、同等のものにいふ。

【豐太閤】 ホウタイカフ 木下氏後羽柴と改め從一位太政大臣關白となつて豊臣の姓を賜はつた。豊は豊臣の略、太閤は父が關白で退隠し、其の子も關白となりたるとき其の父を太閤と稱する。秀吉は朝鮮の役に先だち天正十九年十二月關白職をその姪秀次に譲り、太閤と稱した。

【外族】 グワイゾク 外戚。木下勝俊は北政所の兄弟木下家貞の子である。

【采地】 サイチ 官人の領地する地。「采」は官。官に因つて食む地。

【伏見の籠城】 フシミのロウジャウ 慶長庚子秋秀頼の命を受けて伏見城の松丸郭を守り鳥居元忠等が牙城を守つてゐた。大阪の兵が起ると勝俊は猶城中に在つて私かに思ふに、「余は秀頼と親戚である。而も今東西に難が起り東すれば親を離れ、西すれば則ち姻に叛く」と。心兩端を持して決しなかつた。城中皆之を危疑してゐたので元忠は使を出して言ふに「噂によると卿の弟秀秋が來つて城を圍むといふ。それは昆弟の親が内外にあるのである。」

衆の心も疑懼するであらう。どうか郭をおいて去つても
らひたい」と。勝俊は尙決しかねてゐたが、或人が勝俊
を殺して衆の心を固めよといつたのを聞き懼れて兵を卒

み夜京師にのがれた。時に小濱の留守兵も東軍に抗した
ので戦後封を奪はれるに至つた。

2 文の構成

- 第一節 初—一〇四頁終 蒲生君平小澤蘆庵を訪ひ、伴りて琴を學びたしと請ふ。
第二節 一〇五頁初—一〇五頁の八行 蘆庵襖越に謝絶す。
第三節 一〇五頁九行—一〇七頁八行 君平實情を語れば蘆庵感歎して宿を約す。
第四節 一〇七頁九行—一〇八頁三行 蘆庵心を盡くしてもてなす。
第五節 一〇八頁四行—一一一頁終 或夜の出来事と君平・蘆庵の心事の相通ぜること。

- 1 君平の夜更けて歸りたるを蘆庵なじる(一〇八頁四行—一〇行)
- 2 君平おそくなりたる理由を語る(一〇八頁一行—一一〇頁六行)
- 3 蘆庵わらひて己が經驗を物語る(一一〇頁七行—終)

3 文意

蒲生君平は山陵訪求の爲出京小澤蘆庵の人物を聞いて身を寄せようとしたが、頼みよる理由もないので、ついで琴の弟子になりたいと願つた。蘆庵は襖越に謝絶したので再び僕に實情を語れば蘆庵も面會を許し、更に直接その志をきいて感歎し宿を約し他事なくもてなした。以來蘆庵は國の爲に盡くす人のたすけとならうとして、自身風呂まで焚いて君平をもてなした。或夜のこと、君平が一時半頃になつて歸宅したので蘆庵はいぶかり、道草であらうと不満をつぶやいた。君平はこれ聞いて自らの遅くなつた理由、即ち尊氏の墓を見て奮慨し、之を打殿いて時を過し、酒を飲んで木株に熟睡した

ことを語つたところ、はからずも蘆庵自らも亦同様の經驗あり、兩人齊しく腹をかゝへて笑つた。

2 鑑賞批評

大義名分を明にせんとして一身を賭して山陵訪求の事に従ふ君平、尊王の心を抱きつゝ俗を捨て歌道の本壘をついて進む蘆庵、何れ劣らぬ熱血漢である。このお互に未知であつた二人の肝膽相照しつゝ、助けつゝ、助けられつゝ進んでゆく相を簡潔に叙し盡くしてゐる。未知の人が百年の知己の如くに助けつ頼りつする此の光景は全く俗を離れた人でなければ出来ることではない。そこには國を想ひ君を念ふ熱情の中にすべてを超越して融合する靈の交響がある。この一文の中からこのしらべを發見し味はふことが鑑賞批評の仕事となるであらう。

〔世をすねたる隠逸なりと、豫て傳へ聞きしかば、彼が助を借らばやとて〕

一人の知人もない京都に入つて、先づ助を借らうとした人は、古學を好み、萬葉風の歌人で、世をすねた隠逸といふ三條件を備へた岡崎觀荷堂主人蘆庵であつた。古學を好む點、古歌を學んでゐる點、「古」に心をつないでゐる點等は君平自身も同じ道をゆく者として共鳴を感じるであらうと思へるのである。然しここに面白いのは「世をすねたる隠逸」である事である。君平の相手とする者はどうせ俗人ではない。世の名利に心を勞しつゝ小ざかしい道に離礙としてゐる者ではない。世俗の利害得失を考へる者に不便を偲びつゝ山陵訪求などの出来ることではない。世に對して不満を抱き、白眼視してゐる隠逸であつてこそ、この胸底が理解して貰へると思つたのである。一〇六頁第一行に此の事を端的に言つてゐる。この目星のつけどころは誤つてはゐなかつた。

〔君平まづ伴りて云々〕 理解してもらへる事と自信しつゝも、さすがに遠慮がある。人情の動きがおもしろい。

〔いと高く「あな無益にも訪はるるものかな……」七〕

聞えよがしに聲高々と、「あな無益にも」といふあたり、まことにたゞこと歌を主張し、強く實行してゆく迫力を持つ、

世をすぬたる隱逸の面目が躍り出てゐる。「近頃打擡きて新に代へたり」といふに至つては蘆庵の世をすぬる丈のつらだましひが想像される。その歌の先生冷泉爲村に向つて「君の百年の後は御家の弟子にはあらざるべし」といつた氣魄もつかはれる。

〔君平、僕が云々といふをも待たず、更におし返して言ふ。〕

「云々といふをも待たず、更におし返して」これ等の表現は既に蘆庵の言をきき、「しまつた」と思ふ心「本心を言はねばならぬ」とあせる心をよく物語つてゐる。

〔許して對面せられなば、肝膽を吐き志願を告げて翁の助を借らんと欲す〕

尊い志願の陳述、謙遜と眞實の籠る詞、率直に物語られるまごころ、隱逸の歌人にしてこの詞に動かされなければ、それは全く没情漢であらう。果して次の蘆庵の詞がある。

〔對面せずばくやしきことあらん〕 既に君平に對して多大の期待をかけてゐる事がわかる。

〔やがて面をあはせけり〕「やがて」は「すぐに」であらう。おもしろい客人である。心はやりつゝいそぐと面會したてもあらう。

〔蘆庵も只管感歎して〕「只管」を深く味はひたい。初對面の人の話を聞いて宿をすら提供する蘆庵である。「しづかに訪求したまへ」の詞には涙ぐましい程の理解が感ぜられる。只管感歎したればこそである。

〔これらの事は只管に客を愛する故のみにあらず。云々〕 何といふ有難い言葉であらう。正直な心の告白であると同時に國事に勞する者の遠慮を取除かうとする誠意が深い理解となつてひびくのである。この詞を聞く君平はどんなに嬉しかつたであらう。想像するに餘がある。

〔蘆庵は寝ねす待ちてをり〕 あまりの誠心に「おや」と驚きの聲も洩れるであらう。「どうもすみませぬ」と腰をかどめて

詫びもしたであらう。

〔さていふやう〕 何といふ氣味の悪い豫告であらう。改つた口調まで想像される。

〔老人に物を思はせ給ふこと心得難し〕「心得難し」とはハツシと射貫いたやうな言葉である。「し」音の響きが鋭い。恐しい見幕である。此の時蘆庵は七十八歳である。

〔君平聞きて容を改め〕 先程から感じてゐた空氣が急に現實になつてさらけ出された。酔も一時にさめたであらう。容を改めた様子を思ふ。

〔年來の恨心頭に起りて堪へられず云々〕

何といふ長々とした罵言であらう。見る人もあらば全く狂人の沙汰としたであらう。國事を憂へて我を忘れる情熱の人の面目を想ひ見るべきであらう。

〔蘆庵ふきいだして、からからとうちわらひ〕

怒りをさへ顔面に現してゐた險惡な表情が次第にほぐれて遂に堪へ切れずに「ふきだし」爆笑したのである。空氣は一時に軟いだ。しかし君平には尙幾分の心配がある。が、次の言葉はこの一抹の不安をもすつかり拂拭してしまふ。

〔さてもさても、世の中には似たる馬鹿者もあるものかな〕

「さてもさても」はよく利いてゐる詞である。「馬鹿者」といふ言葉の中に世をすぬた者の面目がある。「世の利口者はそんな精力を勞らし、時を費し、金を費すやうな馬鹿氣た事はせぬ。國がどうであらうと、私の生活に關係なければそんな事に係つてはゐないのだ。」そんな考が心の底にあつて世をにらみ乍ら言つてゐる詞である。

〔語りもあへず、聞きも終へず、齊しく胸をかかへたりとぞ。〕 二人の爆笑を聞いて讀者も微笑を禁じ得ない。ここに於て一抹の不安もなくなつた。それどころではない。二人の理解は一層深まりを見せて行つた、羨望すべき交りが結ばれて

ゆく事も察せられるであらう。

三 備 考

1 指導研究

近世の文であるから、読みやうによつて、即ち朗讀法によつてはこのまゝで其の氣分を酌みとらせる事が出来るであらう。巧な範讀、巧みな口語譯とが特に望ましい文である。

君平の人物、庵庵の性格に加へて、かうした題材に心を惹かれる馬琴その人の心情も説明されたいと思ふ。

2 参 考

君平と蘆庵の逸事を次に記しておかう。

(イ) 蘆庵

嘗て冷泉爲村に師事した頃、師の手跡を贋書して破門せられた事がある。其の時彼はその使者に直接して深く罪を陳謝し、やがて奥に入つて短冊に次の一首を記して出した。

しるべせし和歌の浦風道絶えて身は捨舟の寄る方もなし

使者は歸つて、爲村に語れば、爲村は「彼才あり。いかでか永く我が下風に立つべき。後世名だたる歌人となるべし」と、窃にその才氣を惜しんだのであつた。

又一夜盜賊に見舞はれた。彼が點燈して見れば賊は既に逃げ去つてしまつた。然るに翌夜又入つたので薙刀を取つて向つた。賊は事の意外に驚いて走り去つた。この時、

あつそ海の巖ごごしみ越えかねてよる／＼歸る沖つ白波

と詠んだ。

彼は貧しかつた。洛東に住んだ或日、途中から駕籠を雇うて家に歸つたが、賃金が三文不足した。急いで隣家に借らうとしたが其の家にも無かつたので、その代にとて、

津の國の難波の三つのおしを無みこと浦かけてからせけるかな

と詠んでやつた。その歌は、集中俳諧歌の部に見えて居る。

平生は其の居間に長刀をかけ置き、「禁裏に事あれば提げて難に赴かむ」と言つて居た。その志の存する處を伺ひ知る事が出来よう。

或は某法親王から屢召されても、固辭して參らぬ事もあつた。法親王は強ひて召し給はず、「隱者なり、殊には老人なり、風雅の事に強ひて招かむは、禮を失ふに似たれば、來らぬも理なり。自らこそ尋ねべけれ」とて、太秦まで二里餘の路を訪はせ給うた。それから蘆庵も忝しとて、時々參り上つたと言ふ。

其の交友には、上田秋成、僧涌蓮、伴蒿蹊、香川景樹、橋千蔭、頼春水、入江昌燾等があつた。殊に景樹は弱年の頃から蘆庵と能く交つた。

(ロ) 君平

蟬の音の時雨れる頃君平は古河の旅籠に宿つた、その時の逸話である。商人達は寢苦しさの納涼に種々な話題が出る。丁度楠公論が持上つた。一は「勝味のない事を承知の上で澹川へ出陣した事、無用の討死をした事」をあげて不忠論をまくし立ててゐる。聽手も大分これに賛成して來た。讚美論者は衆寡敵せず堅息する。途端に大喝一聲暗中から躍り出して一同を睥睨したのは君平である。不忠論者が國賊呼ばはりされた事はいふまでもない。彼は遂に悲憤の涙を流してゐる。一同はその熱論に感じ入つたものの惡臭は彼等にいぶかしい思ひを起させた。君平は廁中にあつて楠公不忠論を耳にし、矢も楯も堪らず躍り出したものであつた。

文化十年七月五日數日の痲病を以て江戸駒込吉祥寺の門前なる修靜庵に君平は世を辭した。職官志の彫刻が進行しつゝある時、そしてまだ「九志」を書終らない中に。馳せ參じた瀧澤馬琴、平田篤胤、近藤重藏、高田與清、會澤安、石田孝甫、其の他知己門人は暗然

として涙を呑んだ。當時馬琴は名聲一世に高く「南總里見八犬傳」に思案をめぐらして居り、平田篤胤は赤貧に打ち勝つて「靈之眞柱」を出版した時であつた。

補材

君がためきその山道雲わけて又往ぬらむかきその山道

これは小澤蘆庵の歌集六帖詠草雜上に出てゐる。詞書に「下野國の蒲生君平は古陵のわきがたくなりゆくを歎き山陵志つくらむとてみやこへ上りこかしこ行きめぐりたるがわが家にもしばしありてまた國にかへりなむとするわかれに」とある。肝膽相てらした友との別れに於て蘆庵が如何に眞實を傾けてゐるかを知らぬ事によつて、本課の趣旨を一層深く示すことが出来ると思ふ。

【君がため】 陛下の御ために。

【きその山道】 君平は道を中仙道にとつたものと思はれる。

【又往ぬらむか】 又かへるのであらうか。「來る時もあの山道を通つて來たとの事であるが、又その山道、あの險阻

な道を通つて歸つて行くのであらうか。」の意。「又」に力がある。

【きその山道】 この句を第二句と終句とに置いた事によつて遠く険しい山道を想像しながら無限の同情と別離の哀寂との盛られた事がよまれる。

一七川 柳 抄

一 解 題

1 作者

一般民衆である。民衆の作を柄井川柳なる前句附の選者が點をなしてから、この種の作品を川柳と稱するに至つた。

2 出典

柳樽からとつた。柳樽とは「誹風柳樽」の略であつて明和二年に初編が出て以來、天保九年に最終百六十七編發行。川柳、狂句を掲載した冊子である。初編から二十二編までは、吳陵軒可有（號木編）が「初世川柳評前句附萬句合」の中から佳句を選抜編輯したものである。

柳樽といふ名稱については初編の序に「なかんづく當世の誹風の餘情をむすべる秀吟等あればいもせ川柳樽と題す」とあり、情を結ぶの縁語に妹背川、祝ふの意に柳樽としたものらしい。又、柳樽が結婚の式に用ひられたものであるところから、民衆的前句附と、一段高い貴族的な俳諧との結婚といふ意味である。

3 主眼及び採擇の趣旨

國文學史上、徳川時代に於て成立し、遊戯的な民衆詩として特殊の發達を遂げた川柳の特性を知らせようとする文藝的教材である。

二 解 釋

【川柳】 センリウ 短詩の一體。川柳の前身前句附の選者に柄井川柳といふ人があつて、この人の點したものを川柳點といつたのを略稱して川柳といふ。この前句の獨立したものが後の川柳であるから、名稱はそのまま残つてゐる。

川柳は内容や口調の上に各々特異な點はあるが、俳句と同様に何れも俗談平語を用ひて詠じた十七字の短詩である。俳句は俳諧の初句即ち發句の獨立したものであり、これは俳諧から前句附となり、その前句の獨立したものである。故に俳諧の附合と前句附の附合とを比較するに、その間殆ど判然たる區別を畫する事は出来ない。現に俳諧の長句即ち十七字句中には、後世川柳として傳へられてゐるものが幾つもある。但しこの二者の一般的な差異として次の諸點を擧げることが出来る。即ち「俳句には、や、かな、けり等の切字を用ひるのを原則としてゐるが、川柳には（ある特別の場合に變則として態と切字を用ひる事もあるが）切字を用ひないのを本體としてゐる。尤も「や」といふ切字は川柳に多く用ひられ、俳句に却つて少いといふやうな例外はある。又俳句には是非とも季節を詠み込むべき法則があるが、川柳にはかかる制限はない。而して川柳には人事を取扱ふものが多い。

川柳の前身たる前句附は、十四字の短句を出し、これに十七字の長句を附けて三十一文字の和歌と同様の形式となすもので、その起源に就いては、菊岡沾涼の「本朝世事談」には延寶年代とあり、曳尾庵の「我衣」には貞享年代とあり、太宰春臺の「獨語」には元祿の頃よりとあつて、説に多少の相違はあるが、要するにこれ等の説は前句附と銘打つて世に出たものの起源をいふので、名稱は兎も角として、その作品は明かに足利時代、山崎宗鑑の「犬筑波」頃からあつた。「犬筑波集」に

(前句) 切りたくもあり切りたくもなし

(附句) 盗人を捕へて見れば我が子なり

の如きは實際後の前句附と異なる所はない。江戸時代に於ても、元祿時代の「賣の市」の

(前句) 今やおそしと

(附句) 勝手には産湯わかして大欠び

などは明かに前句附の性質を發揮してゐる。

次に各句について解釋及び鑑賞をすゝめることとする。

○ 神代にもたまます工面は酒がいり

素盞鳴命の大蛇退治である。「どちらも好きで大蛇はしてやられ」これは酒色兩刀使ひで身を亡ぼした場面をとり出して現代をひやかしたものであるが、ここには酒の功德を述べた。「神代にも」の「も」に現代を匂はす力がある。「酒で買収は神代以來の事さ」の意。神話的物語を卑近な人情を以て解釋したところに滑稽感が感ぜられるのである。

【工面】 クメン (一)工夫面倒の略、工夫、才覺である。(二)金錢の都合。ここは(一)

○ 雷をまねて腹掛やつとさせ

三つ四つのいたづら盛り。夏の日を丸裸になつてかけ廻つて遊んでゐる。腹掛をさせぬと、腹が冷えるからと腹掛を持出したが、子供は裸好きのもの。イヤア〜と逃出す。乳母はしばらく追ひかけたが、やがてトンと坐り、驚いたやうな顔をして「オヤ、ゴロ〜ゴロ〜、オヤ雷様が鳴つてゐます。お、怖い。腹掛しないと、お臍を取られますよ。」子供はびつくりして乳母に寄り縋る。乳母は手早く腹掛をさせてしまふ。夏の日の一情景が活寫されてゐる。かみなりをまねる女

人は母でも乳母でも子守でもいゝ。必ず女人でさへあればいゝのである。連用止の輕快さが生きてゐる句である。「やつ」といふ副詞にもこまりさ加減がおもしろく出てゐる。

○本降になつて出て行く雨やどり

有名な句である。もう止むか、もう止むかと思つてゐても、仲々止まない。止まないどころか益々降つて来る。こりや見込はない、「ぬれる外よい智慧の出ぬ雨やどり」で走り出す。今迄に走つた方が餘程よかつた。本降になるのを待つてゐたやうなものだとの意である。この句は人生のある姿を象徴してゐるやうにも思はれて、兎に角傑作である。

○はげ頭よい分別をさすり出し

五六十歳にもなるはげ頭である。テカ／＼に光つた禿頭をさすり／＼語尾を長くし乍ら考へるのである。そしておもむろに、物の道理のわかつたやうな事を言ひ出すのである。まるで禿頭の中からもさすり出すやうに。人の好ささうな親爺さんが光る頭をさすつてゐる情景は輕い笑ひを誘ふ材料である。その上「さすり出す」と見た見方は諷した面もあつておもしろく、連用止になつてゐる點が又輕快である。

○眞白になつて浦島くやしがり

開けてはならぬといはれた玉手箱ではあるが。そこに何かの期待を以てあけるまではよかつた。しかし、しかしそれはやつぱりしてはならぬ事であつたのである。後悔先に立たず。もはや白髪のおぢいとなつてしまつた。くやしがること／＼のつびきならぬ所へ來てしまつて、さて後悔をする痛い人情であるが川柳子はいかにも滑稽にいつてのけた。「眞白になつ

て」といひ、終の中止形といひその感を表すに役立つてゐる。

○羽衣を見失ふまで口をあき

謡曲の羽衣を滑稽化した。謡曲では三保の松原の松にかゝつてゐる漁夫白龍が発見し家寶にしようとした處、天女が現れて天人の羽衣である由を物語り返却を願ふ。白龍は之を拒んだが天女の悲歎とその舞の約束との爲に返し與へた。そこで天女は羽衣をまとい霓裳羽衣の曲をなし、舞ひつゝ天に昇るといふ筋である。その終の曲は「さるほどに、時移つて、天の羽衣、浦風にたなびきたなびく、三保の松原浮島が雲の、愛鷹山や富士の高嶺、かすかになつて、天つ御空の、霞にまぎれて、失せにけり。」といふ地謡が、シテの舞にあはせて謡はれ、シテは橋懸の一の松邊でかすかなしぐさによつて富士の山を遙に見下して昇天する氣分を出すところ、名人藝のあらはれる所であり、觀者の息をこらす微妙な恍惚境である。この場合ワキである漁夫白龍はワキの座にのいてワキの正面むいて坐つてゐる。すべてが夢幻的な美しさ、非現實的な貴族的な能の趣を現實的、卑俗的民衆的に描きおろしたところに滑稽があり、おもしろさがある。

○粉のふいた子を抱いて出る夕涼

湯上りの子に、天花粉を打つて、それを抱いて涼みに出たのである。干柿がその身から粉をふいたやうに、子供の身から粉をふいたやうに見立てた所が妙。

○犬を見て猫は背中へ腹を立て

猫の怒つた時の様子を川柳的に寫生した。即ち、何を見て怒つたのもいゝのであるが、「犬」と猫とを對照させ、背中

を高く上げてうなる様子をいふに「背中へ腹を立て」と背中と腹を對照させた。對照法の妙を以て軽い滑稽を感じさせたものである。

○ 寢所をへし折つて置くひとり者

獨身者は物臭である。寢所を疊んでくれる者もなければ自ら取上げるだけの規帳面さもない。かしは餅の様に敷布團も掛布團も枕さへも一緒に折つておくのである。「へし折つて」といふ表現にその物臭さ加減が表はされて可笑しさを誘ふ。獨身生活のありさまも亦川柳子のねらひどころである。

○ 成程と云つて又見る遠眼鏡

初にのぞいて見たがどうも腑に落ちぬ。しかしまあわかつたやうなわからぬやうな氣持で見えておいて、眼を離すと説明者は又「かやうくに見えたでせう。あそこはかうでここはかうで」と詳しく説明をしてくれる。一度見てわかつてゐる筈だが説明をきくとよくわかつてゐない。「なるほど」と言つて又覗き込むのである。見なれない望遠鏡、それも遠眼鏡といつた時代である。人情の機微をうがつて情景を活寫した句である。「成程」「又見る」が眼であらう。

○ 佐野の馬戸塚の坂で二度倒れ

有名な謡曲「鉢の木」の川柳化である。「源左衛門そつと乗つてはそつと下り」といふ様なやせ馬である。「いざ鎌倉」といふのでかけつけて来たが戸塚では一度ならず二度まで倒れてしまつた。おんびろさんびろ海藻の行列といふ引け物の鎧を着て「源左衛門鎧をきると犬が吠え」といつたやうで馬の倒れる有様は滑稽すぎであはれである。戸塚は相模程谷、藤

澤間に位し、鎌倉繁榮の頃の材木町であるといふ。丘陵地をなし今は大した坂ではないが關東方面から鎌倉に入る者の第一に越ゆべき坂であり、古は相當の坂であつたらうと思はれる。

○ うたたねの顔へ一冊屋根にふき

ねころんでゐたがついうとくとして来た。一寸寢顔をかくす氣もあつたりして讀かけの本を顔に伏せて眠つてしまつてゐる。「屋根にふき」の表現が寫生的に生きてゐる。くつろいだ生活態度の中に見えるをかしさである。「顔へ」が「顔に」でないところに動作がもられてゐる。場所を示す「に」であればかたくなると同時に「屋根に」の「に」とも重複しておもしろくない。

○ 風呂敷をかぶつたあした蚊帳を出し

もうそろ／＼蚊が出て來るといふ初夏である。蚊帳を出さねばなるまいと思ひつゝも一日延ばしに延ばしてゐる。すると或夜、夜中蚊がしきりに出て顔をさす。うるさい。かゆい。といつて深夜に蚊帳をつる勇氣もない。間にあはせに風呂敷を持つて來てかぶる。手足を布團から出さぬやうに注意し乍ら、とう／＼夜が明けた。昨夜のつらさが身にしてみても今日はいよ／＼決心して蚊帳を出すのである。困らなければ腰を上げない人情の機微をねらつた句。「風呂敷をかぶつた」がおもしろい。

○ ああも似るものかと綱はくやしがり

渡邊の綱ともあらうものが、まさ／＼一杯だまされたのだから、さぞくやしかつたであらう。「伯母といふ二字だけ心緩

む綱」伯母といつて化けて來た鬼はまことよく似てゐたものと見える。「破風を睨んで瓦師を綱は呼び」破られた破風を睨まへてくやしがつた様子が思はれる。

○義貞の勢はあさりをふみつぶし

義貞の鎌倉へりも稻村ヶ崎の磯傳ひによつて要害を打破るより外はない。然し滿潮で行かれないから龍神に祈り太刀を捧げて、干潮を希つた。龍神御受納あつて忽ち潮は去つた。「それ」と同勢我先きにと進軍、土足にかけられた淺蜷のしかめ面たらない。大軍の襲來といつた大きな事件に對して淺蜷といつたやうな小さな物を持つて來たのが面白い。この歴史的一事件に對して忠を説くことも出来る。神を説き奇蹟を説くことも出来る。或は人馬の活動を描くことも出来る。いろいろな方面から見ると、川柳子は體をこめて軍勢の足もとを見るのである。

○通りぬけ無用で通りぬけが知れ

「通りぬけ無用」と書いた貼札がある。「あゝさうか」と思ふ。「では不便であるが通るまい」と思ふ。しかし考へて見ると通る人もあるのだなといふことがわかる。「他人も通るものなら一寸ごめんして自分も通らうか」そんな氣持も起つてくる。をかしたものである。逆効果をあらはす貼札の滑稽である。

○提灯が消えて座頭に手を引かれ

【座頭】ザトウ (一)盲人の剃髪して平家琵琶、箏など後には三味線、鼓弓などで歌曲をなし、又按摩、鍼治などを業とする者の稱。(二)歌曲を以て人の門戸に立ちて錢

を乞ふ者なども稱す。(三)轉じて盲目、又は盲人。こは盲目の按摩などであらう。

月もない夜提灯をつけて妻女であらうか盲人の手を引いてゆく。ところで一陣の風に提灯は消えた。座頭は一向に困らないのである。すん／＼道を歩いて行く。「一寸待つて下され、灯が消えました」などとあわてた眼明きの方で手を引かれてゆくのである。

○ぶちまけて二足逃げる炭俵

炭箱にでも移さうといふのであらう。ザーツと一氣にうつし込みはしたが、終になつて炭の粉は急に立ち迷ふ、思はず後へとびのくのである。思ひ切つて開けるところを「ぶちまけて」といひ、フツととびざるところを「二足逃げる」といつた表現は動作と心持とをよくうつし得てゐる。又逃げるのは炭俵を手を持つ人なのであるが、それを單に炭俵といつた所も面白い。

○押へればすすき離せばきりぎりす

【きりぎりす】蝻蝻。きりぎりす科に屬する直翅目の一種。體長三〇粒餘、觸角長く、雌は劍狀の長い産卵管をもつ。翅は短く尾端に達しない。色は綠色乃至褐色で、

前翅の中央には黒點列がある。本州より九州に普通で、雄は翅で鳴聲を發する鳴蟲の一種である。

野に出て薄にとまつて鳴いてゐる蝻蝻を發見した。途端につかまへようといふ慾望がおこる。そうつと偲びよつてバツと抑へたと思つた。と蝻蝻の姿はない。そこには薄がおさへられてゐるだけである。あゝあ、軽い落膽を感じ乍ら手を放すと、驚いた事に今手をはなしたそこからきりぎりすは跳び立つたではないか。かうした極く普通にある事ではあるが、微妙な點をとつて巧みよみこなしてゐる。

○きりぎりす背中に膝をしよつてゐる

蝨蜥の脚は長い。それを屈けてゐる様子はいかにも膝を背中にしよつてゐる様だとの意。

三 備 考

1 指導研究

滑稽や洒落を説明したり、解釋したりする程おもしろくないものはない。しかも引用説話やら慣用語句やらについて既習智識のない者にはこの面白くない作業をしなければならぬのである。故に解釋作業によつて妙味が深まるやうに、即ち長い説明を避けて、句のねらひどころを攫んで放り出す事が必要であらう。引用説話は生徒の既得智識を引出しつゝ指導する事はいふまでもない。

2 参 考

(イ)俳諧・川柳・狂句の差異を述べて参考とする。

川柳は俳諧の一層展開したもので、殊に檀林風の傳統に一飛躍を試みたものである。即ち俳句が、超脱的、高雅的、幽玄的、自然の寂を求めたのに對し、川柳は人事の最も俗なる穿ちであり、人の氣附かぬ裏面の告白であり、江戸人の生活乃至江戸の生活を寫した明るい、淡い、軽い調子を持った作品である。悲惨さや、深酷さ暗さはない。極めて朗らかな秋の空のやうな句調の上に盛られた滑稽感である。死や離別、生活難などを表現しても、決して暗さはない。極めて明るい。中には深酷さを感じさせるものもあるが、それも明るさを通じて一層深酷さを感じられるといふ妙な心的興奮を起させるものである。

醫者衆は辭世をほめてたゞれけり

泣くくもよい方を取る形見分け

人間自然の性情の中に發見される眞の姿を輕妙に淡々と表現したものである。この點あくどい狂句との相違點をなすものであらう。

その修辭的技巧を見ると俳句には季題があり、切字があつて含蓄深くどつしりと坐つてゐるが、川柳にはこれがない。そして連用止連體止の尻切蜻蛉式輕さがある。その表現法はスケッチ法を用ひ、省略法、引用法、對句法、對照法、倒置法、重語法、換稱法、明喩法、暗喩法、寫聲法、誇張法、擬人法、警句法、縁語法等が用ひられる。

(ロ)川柳の研究參考書としては次の如きものがある。

岩波講座日本文學「川柳」 岡田三面子

改造社日本文學講座 雜俳及川柳研究 阪井久良岐

大同館國文學研究 川柳の新研究 今井柳三

交蘭社 川柳と俳諧 前田雀郎

一八 板倉父子

新井白石

一 解題

1 作者

新井白石 アラキハクセキ 儒者。本名君美、初名瓊。字は在中・濟美。通稱與五郎・傳藏・勘解山。別號紫陽・錦屏山人・天爵堂。明暦三年(二三一七)二月、江戸柳原の藩邸に生まれた。父は正濟、上總國久留里(現在の千葉縣君津郡久留里町)の城主土屋利直の臣で、母は坂井氏の女であった。白石は幼にして穎悟、神童を以て稱せられた。延寶三年(十九)父が土屋家を辭して浪居し、彼も窮乏の裡に勉學した。天和二年の春、大老堀田正俊に仕へ、貞享元年(二十)木下順庵の門に入つた。元祿四年(三十)の秋、堀田家を辭し、淺草に書を講じて、口に糊すること二年除、同六年の暮、師順庵の推舉によつて甲府侯徳川綱豊(後の六代將軍家宣)の儒官となり、眷遇極めて厚かつた。寶永六年(五十)家宣が宗家を嗣ぐや、政務に參與して献替頗る多く、正徳元年一介の儒生を以て従五位下筑後守に叙任し、權勢一時朝野を壓した。翌二年家宣が薨じた後も、幼將軍家繼を輔けて改正・釐革の政を施した。朝鮮使節接待の改正、長崎貿易の制限、貨幣の改鑄等はその主なる功績である。享保元年吉宗が將軍職を繼ぐに及んで、意を失つて退隠し、讀書・著述に晩年を送つた。彼の學問は、歴史・地理・言語・故實、その他各方面に亘つて至らざるなく、一面詩に長じ、また國文に秀で、「藩翰譜」「折たく柴の記」などは、獨自の妙趣を具へて他の企及を許さない。その他國語學方面に於ても、語原・綴字法などの上に於て甚大な貢獻をなした。享保十年(二三八五)五月江戸千駄ヶ谷に歿した。享年六十九。明治四十年正四位を贈られ

た。著書には「折たく柴の記」の外「藩翰譜」「古史通」「讀史餘論」「東雅」「東音譜」「同文通考」「西洋紀聞」「采覽異言」「白石遺文」等があり、すべて新井白石全集に收めてある。

2 出典

「藩翰譜」卷五の「板倉」の中、「伊賀守勝重」の項から採録したものである。「藩翰譜」は徳川家宣の命によつて、慶長五年から延寶八年に至る八十一年間に於ける一萬石以上の諸侯その他の家傳を誌したものである。元祿十四年七月十一日起草、十月に脱稿、翌年二月十九日に上進した。十三卷二十冊で新井白石全集第一卷に收められてゐる。(新井白石全集全六卷、圖書刊行會發行)

3 主眼及び採擇の趣旨

人間の問題を題材とした篇である。わけても判官としての資質の偉れた父子を、一代の雄、新井白石の筆によつて傳へた文として、文化的教材であり、國民的教材である。

二 解釋

1 語釋

【板倉父子】 イタクラフシ 板倉勝重とその子重宗。

【板倉勝重】 イタクラカツゲ 字は甚平、又、四郎左衛門と稱し、後、伊賀守といつた。好重の第二子。天文十

四年(二二〇五)生。幼にして僧となり、玉庵和尚の門に入り宗哲と號して三河國中島村(現愛知縣碧海郡高岡

村中島)永安寺に住した。偶々父及び後を嗣いだ弟定重が戦歿したので、家康の計らひで還俗して家を嗣いだ。天正十四年駿府町奉行となり、十八年江戸城に移るに及び采邑千石を賜はり、江戸の町奉行としてまた小田原奉行・關東代官を兼ねた。慶長六年京都所司代に補せられ、

六千六百餘石の地を加へられた。八年從五位下伊賀守に
敘任し、與力三十騎・同心百人を預けられ、十四年また
九千八百六十石を加へられ、總べて一萬七千四百餘石を
領した。大阪の役が起るに及んで、籌策する所悉く機會
を得、大いに家康の臺慮に叶つたといふ。元和六年職を
子重宗に讓つて致仕し、堀河の邊に閑居した。九年從四
位下侍從に昇進し、寛永元年(二二八四)四月歿した。
享年八十。

【天正十六年、云々】 家康が駿府に移つたのは天正十四年
(二二四六)十二月四日である。徳川實紀の東照宮御實紀
卷三、天正十四年の條に「この師走に駿府の城に移らせ
給ふ。濱松には元龜二年より今年まで十六年が間おはし
ましぬ」とある。

【國府】 コフ・コクブ 昔、一國毎に置かれた國司の官衙。
轉じてその所在地。元々コクブであるが讀み癖でコウと
發音する。

【家人】 ケニン 家に仕ふる者。従者。家來。

【町奉行】 マチブギヤウ 「奉行」は武家時代の職名で、上
命を受けて事務を擔任した或一局部の長官。勘定奉行・
寺社奉行・町奉行等があつた。その中町奉行は老中の支
配下にあつて、江戸・京都・大阪及び駿府の四ヶ所に於
て、その行政・司法・警察を總攬し、特に町人を管轄し

て、その訴訟を聽斷したもの。

【罷り歸り】 (宿所に)歸つて。「罷る」は、(一)退出するの
謙語。(參るの對。)(二)轉じて「參る」「行く」の謙語。

(三)みまかる。死ぬ。(四)ある語の上に添へて謙遜又は
「む」強めを表す。

【妻にて候もの】 妻のことを婉曲に言ふ言ひ方。

【さもありなん】 さうもあるだらう。それもさうだらう。

【なん】は完了の助動詞「ぬ」の未然形に、未來の助動詞
「む」の添はつたもの。

【ほくそ笑みて】 にこ／＼とゑくぼを作つて笑つて。

【座になほり】 自分の座にきちんと坐つて。

【されば】 (感動)他の語を受けて答へる時に發する語。

【如何にも】 如何に思つても。どう考へても。

【叶ふべからざる旨】 出来ないといふ次第。

【御事】 オコト 親しんでいふ對稱代名詞。そなた。御身。

【あな】 切に思ふ時に發する聲。あゝ。あら。

【あさまし】 (一)淺はか。(二)意外にておどろく。(三)興
さむ。呆れかへる。(四)いやし、きたなし。こゝは(二)

【わたくし事】 自分一身に關する個人的な事、公事にあら
ざる事。次の「公にて」に對する。

【夫婦はかる】 夫婦して相談する。

【かゝる事や宜ふべき】 「や」は反語。そんなことを仰しや

る筋合のものでございませうか。さうではないでせう。

【堪へん堪へじは】 堪へるだらうか堪へないだらうかとい
ふことは。「ん」は推量。「じ」は打消の推量。

【みづから】 自ら。こゝでは、古へ身分のある女の用ひた
自稱代名詞。わらは。

【本朝】 ホンテウ 我が國の朝廷。轉じて、我が國、國朝。
こゝは後者。

【頭人】 トウニン (一)かしら。をさ。(二)鎌倉時代、引
附衆等の頭首。(三)室町時代、政所・評定所・侍所・地
方などの長官。こゝは(三)。

【内縁】 ナイエン (一)内々の縁故。身内であるといふ續
きあひ。内々の手づる。(二)法律上その他、表立つた手
續を履まない夫婦の縁。こゝは(一)。次に「親しき人」
と言ひかへられてゐる。

【おほやけならず】 「おほやけ」はこの場合、公平にして私
なきこと。

【賄賂】 ワイロ 「賄」も「賂」も共に「まひなひ」と訓
じ、利益を得んが爲にひそかに行ふ贈物をいふ。

【奉らん後は】 おうけしてからは。「奉る」は、(一)さゝげ
る。「奉呈」「奉納」。(二)いたゞく。うけたまはる。「奉
命」「奉職」。こゝでは(二)の意。

【執し給ふまじきか】 決して關係しませんか。

【參らせて候ことありとも】 贈つてくれることがあつて
も。「參らす」マキらす 「與へる」の謙語。さしあげる。
進上する。

【苞苴】 ハウシヨ (一)人に物品を贈る時菓などを束ねて
包むのを苞といひ、菓を下に敷くのを苴といふ。(二)人
におくるみやげもの。(三)まひなひに用ひるもの。賄賂。
こゝは(三)。

【されば】 (接続)さうであるから。それだから。

【畏らせ給へ】 おうけしなさい。

【畏る】 (一)かしこしと思ふ。恐れ入る。(二)御禮をの
べる。謝する。(三)わび入る。いひわけをする。(四)勘
當される。謹慎する。(五)正しく坐る。跪坐する。(六)
つゝしんで命をうける。うけたまはる。

【もぢりて】 ねぢつて。

【聞きもあへず】 聞き終りもせず。

【忘れ給へりな】 お忘れになつたな。

【此の定】 コのチャウ この通り。このやう。この分。
【怠狀】 タイジャウ (一)王朝時代、罪に服した罪人の謝
罪狀。伏狀。過狀。(二)おこたりぶみ。あやまり證文。
わび狀。(三)わび入ること。あやまること。こゝは(三)。

【御前】 ゴゼン 貴人の座前又は面前の敬稱。

【さこそあらめ】 さうだらう。「め」は「こそ」を受けた「む」

の已然形。

【職もとの如く】 やはりその町奉行即ち江戸町奉行となつて、の意。

【所司代】 ショシダイ 織豊時代以後、殊に江戸時代に、京都の警備・西國諸侯の監督、京都諸役人の事務を總攬し、五畿内・丹波・近江・播磨の訴訟を掌つたもの。

【上せらる】 ノボせらる 「せ」は使役、「らる」は尊敬の助動詞。江戸から京都へ上らせなされた。

【大御所】 オホゴシヨ 前の征夷大將軍の居所、又其の人の尊稱。こゝでは徳川家康をさす。家康は慶長八年二月征夷大將軍に任ぜられ、同十年には秀忠が代り、家康は大御所となつた。

【宣旨】 センジ 勅宣を傳宣することで、勅詔の表向なのに對して内輪向のものであつた。こゝでは家康を征夷大將軍に任ずるといふ宣旨をさす。

【拜賀】 ハイガ (一) 目上の人に祝儀を申し上げること。(二) 任官・敘任の時、御禮を申しあげること。こゝは(二)即ち家康が征夷大將軍に任ぜられた御禮の拜賀。

【豊臣家】 トヨトミケ こゝでは秀頼をさす。
【京近き程に】 キャウチカキホドに 豊臣秀頼は、秀吉在世當時は主として伏見に在つたが、秀吉の歿後慶長四年一月その遺命によつて大阪城に移つた。

元和元年に亘つて豊臣・徳川兩家の間に行はれた戦、即ち所謂大阪の陣をさす。「兵」はこゝでは、たゞかひ、いくさ、の意。

【再びまで起る】 慶長十九年の冬の陣と翌元和元年の夏の陣と。

【王城】 ワウジヤウ 帝王の居城。皇居。帝都。

【勝重かくてありければ……】 勝重が京都所司代にあつてその才能を發揮してゐたので……

【叡慮も殊に安かりけり】 「叡慮」は天皇の御心、宸襟。大阪に戦が起つても天皇は少しも御心配なさらなかつたことをいふ。

【板倉重宗】 イタクランゲムネ 初名重統。字は十三郎、後、五郎八、又、右衛門と改めた。勝重の長子。天正十四年生。秀忠の近習から立身して、慶長十年四月敘爵して周防守と稱し、小姓頭番頭となる。元和六年京都所司代に補し、職にあること三十餘年に及び、頼る民心を得た。九年從四位下侍從に敘任し、正保二年左少將に進み、從四位上に陞つた。承應三年七月老を以て職を辭し、明暦二年八月下總國關宿の城を賜はり、五萬石を領した。十二月歿。享年七十一。

【京職】 キャウシヨク 京都所司代の稱。

【擧げて數ふべからず】 「べから」は可能的助動詞。

【都鄙のうち】 トビのうち 都に於ても、地方に於ても。昔を偲ぶ者。豊臣氏の時代を懐しく、ひ、徳川氏の新しい時代に心よく思はぬ者。

【人の心も定らず】 人心が尙去就に迷ひ、徳川氏の勢力下に全く統一されるに至らぬこと。

【一人】 イチジン 天皇の御異稱。

【三公】 サンコウ 我が國に於ては、太政大臣・左大臣・右大臣の總稱。後には左大臣・右大臣・内大臣の總稱。

【九卿】 キウケイ 古昔、支那に於ける九種の高官。その職名は時代によつて變遷がある。それに相當する我が國の公卿。こゝでは三公と併せて廣く公卿をさす。

【諸衛】 ショエイ 六衛府の稱。王朝時代宮闕の禁衛を掌つた役所で、左右近衛府、左右衛門府、左右兵衛府の總稱。江戸時代には、京都所司代がその任に當つた。

【百司】 ヒヤクシ もゝのつかさ。多くの官署。百官。

【言ふばかりなき】 言葉に言ひつくされぬ。言ひ様がなす。

【要劇】 エウゲキ 重要で繁忙な(官職)。

【淹滯】 エンタイ 「延滯」とも書く。とゞこぼること。遲滯。停滯。

【能を稱す】 ノウをショウス 有能なことを褒める。

【大阪の兵】 オホサカのヘイ こゝでは、慶長十九年から

【決斷所】 ケツダンシヨ 「雜訴決斷所」の略。裁判所、法廷、といふほどの意。

【遙かに拜する事ありて】 「遙かに拜して」の意。何を拜するかは次に説明がある。

【茶臼】 チャウス 「茶磨」とも書く。葉茶を碾いて抹茶を作るのに用ひる石臼。

【明障子】 アカリシヤウジ 光線を通さない障子即ち襖に對して、明るい障子を明障子といふ。即ち現今の障子のこと。

【不審す】 フシンす 不審にすること。疑はしくあやしむべきことに思ふ意。

【靈驗】 レイケン (一) 神佛の不思議な感應。(二) 祈誓に對する不思議な效驗。こゝでは(二)の意。

【あらた】 「あらたか」ともいふ。神佛の靈驗の顯然として著しいこと。

【心に及ばん程は】 氣のつく程度は。氣のつく範圍のこと。は。

【たち所に命を召され候へ】 直ちに命をお取り下さい。次の「世に永らへさせ給ふな」と同じ。

【年頃】 トシゴロ (副) 數年この方。年來。

【思ひなしぬ】 思ひ量つてそれであると定めた。

【よき人】 こゝでは、立派な人、修養の積んだ人。

【如何にも】こゝでは、きはめて、いたつての意。

【憐がましき】あはれさうな。あはれつばい。

「がまし」(接尾)他の語に添へてこれを形容詞化し、似る、らしい、の意を表す。この「憐」は上の「憎」に對して可憐なことをいふ。

【かたましき】「かたまし」は心がねぢけてゐる。

【まげられたる所】無理にさせられた點。他人から強ひてさうさせられた點。

【色を以て聽く】顔色によつて被告人の言の眞偽を判斷す

る。

【生殺を掌る人】生殺與奪の權をもつてゐる人。

【まばゆく】こゝでは、威光の強さに壓せられて正視することの出来ない意。

【いぶせて】「いぶせし」(一)おぼつかなし。ゆかしい。いぶかしい。(二)氣が晴れない。うつたうしい。(三)きたなくて厭はしい。けがららしい。こゝは(二)で、心が恐れ萎縮して、の意。

2 文の構成

一、板倉勝重

- 1 町奉行に拔擢せられて妻に謀らうとした勝重(初―一四頁八行)
- 2 妻の覺悟を見とゞけて後拜受した勝重(一四頁八行―一七頁終)
- 3 後年、京都所司代として重責を果した勝重(一八頁初―終)

二、板倉重宗

- 1 よく職責を盡くして天下に稱せられた重宗(初―一九頁二行)
- 2 裁決に當つては、愛宕の神を拜し、明障子を隔て茶をひいて心を澄ました重宗(一九頁三行―終)

3 文意

板倉勝重父子が訴訟に當つて公明を失はぬ爲の周到の用意。

4 鑑賞批評

〔徳川殿笑はせ給ひて、「さもありません。罷り歸りて相謀れ。」と仰せ下さる〕――はじめ勝重は固く辭した。謹直な勝重の風貌はまだ現れない。ついである「妻にて候ものと謀りてこそ」といふ言葉によつてその樸直さが遺憾なく現れてゐる。この人柄を愛して、家康は笑つたのである。勝重の愛すべき性格を信頼し切つてゐる和やかさから發せられた笑である。

〔勝重物をいはずほくそ笑みて、衣裳ぬぎ捨て座になほり、〕――一代の面目ともいふべき重職に拔擢されるのであるから、勝重といへども嬉しくないことはない。この喜を妻に語り、且、妻の思ひ設けぬやうな教訓をしようとしてゐるので、思はず笑が浮かぶのである。短い句を重ねてこの場面を効果的に表現し得てゐる。

〔妻は大いに驚きて、「あなあさまし。私事ならば、夫婦はかるといふこともこそあれ、公にてかゝる事や宣ふべき〕――妻は「悦ぶべき事あり」と告げ知らされて大いに期待してゐる。歸つて來た夫の言葉でまづ非常な喜が來たことを知るのも束の間、折角の良い話に對して辭退しようとする夫の不可解な氣持に驚き、次に妻にはかるとして退出して來たと聞いては、「あさまし」と感ぜざるを得ないのである。「私事ならば」といふ語は誠に賢夫人たるもの考へ方であらう。それだけに、勝重は妻の覺悟を質さないわけにはゆかなかつたのである。

〔妻つくづくうち聞きて、「誠にたまふ所ことわりこそ侍れ。云々〕――心外千萬といふやうな妻の強い言葉に對して、勝重は「御身の心よることにて侍るぞ」と強く念を押し、「まづ心を静めてよく聞き給へ」とたしなめる。妻も「つくづくうち聞きて」ゐるうちに浅い考の及ばなかつた點を知ることが出來たのである。「みづからは如何なる誓をも立てなん」と言ふのを聞いて勝重は悦んだが、それでも妻の心の單純さに危げが見えるので更に色々「かたき誓」を立てさせた所に、人間をよく知つた勝重の人物が出てゐる。

〔さればこそ我が妻に謀らんと申ししは誤たざりけり。勝重が身の上の事如何なる不思議ありとも、さし出でて物云は